薔薇のマリア

Ⅸ.さよならの行き着く場所

Ao Jyumonji 十文字青

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

Ⅸ.さよならの行き着く場所

「ごめんなァ、ユリィ。服買ってやる気マンマンだったのによォ。金が足ンねーんだもん。やべーよ。オレ超かっこ悪ィ」

「しょんなの……気にしなくていいわ。もともと、買ってもらうちゅもりなんてないし」

「ふえ？　なんで？」

「だって、おかしいでしょう。理由もないのに、誰かに何か買ってもらうなんて」

「そーなん？　べっつにおかしかねーと思うけどなァ。つーか理由はあるし」

「どんな理由？」

「ユリィがソレじゃねーかわいー服着てるとこ、オレが見てーから」

“7S(セブンス・ゲイム)との七つの勝負”参加者(プレイヤ)決定！

わたくしどものご主人様主催の“7Sとの七つの勝負(セブンス・ゲイム)”におきましては、杖(エル)、双剣(サイアル)、大剣(ハイアル)、目(カル)、竜(ラル)、玉(ナル)、星(フル)の七名、それから鍵(アトル)の一名、計八名の参加者(プレイヤ)の皆様には、これから七つの勝負に挑んでいただきます。勝敗の条件及びルールにつきましては、各勝負によって若干あるいは大きく異なっておりまして、これは折々にご説明申しあげます。ただし、前もって皆様にお配りしております首飾り(チョーカー)、これにつきましては紛失なさいませんようお願い申しあげます。



双剣(サイアル) ピンパーネル Pimpernel



杖(エル) ベティ Betty



目(カル) マリアローズ Mariarose



大剣(ハイアル) 飛燕（フェイヤン） Fei Yang



玉(ナル) ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ Yog Floo-Yo Maid'orf Psychengren'Meiselch



竜(ラル) ユリカ白雪 Yurika Snow-white



鍵(アトル) アジアン Azian



星(フル) 荊王（ジンワン） Jin Wang



史上最悪のゲイム、スタート！



「爆条爆条MexesMexes雷來雷來礼礼」

ベティが前に差しむけた右手の指の先から、少し遅れてサフィニアの杖の先から、それぞれ幾条もの稲妻が放たれた！



薔薇のマリア

IX．さよならの行き着く場所

十文字　青



角川スニーカー文庫

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。



A BRAVE HEART OF RED ROSE Ⅸ
—The end of "farewell"—
Ao Jyumonji

First published 2008 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.



illustration : BUNBUN
design work : design CREST

A BRAVE HEART OF REDROSE

IX

CONTENTS

CONTENTS



A BRAVE HEART OF RED ROSE IX

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン
クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。

Mariarose
マリアローズ
主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Ruvy Bloom
ルヴィー・ブルーム
美白の魔術士。



Jin Wang
荊王(ジンワン)
クラン《王龍》の頭目。



Fei Yang
飛燕(フェイヤン)
クラン《S*K(シリアル・キラーズ)》の頭目。



Betty
ベティ
天才魔術士。魅惑の胸元。



Yog Floo-Yo Maid'orf Psychengren'Meiselch
ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ
神出鬼没。



Aczel
アクゼル
一つ眼のお使い。



Katari
カタリ
トラブル&ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル
元暗殺者(アッサシン)。



Tomatokun
トマトクン
クランZOOの園長(マスター)。



Korona
コロナ
お久しぶりです!



Yurika Snow-white
ユリカ白雪
最強伝説。



Safinia
サフィニア
魔術士。不幸。

and the others

Kay,Darierro etc.《LunchTime》
カイ、ダリエロ等《昼飯時》

Naji
ナジ

B･B,Otomi&Katsuwo
B･B、オトミ、カツヲ

Lenny
レニィ

and etc.

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"

モトローリィ
Motorolly
エルデイニオン
Eldeinion
ハッツフォー独立軍領
HUTZZFOR IAD
無限凍土
Frozen Avici
サンランド無統治王国
Sunland Unreign Kingdom
トレイン公国
The Principality of Trein
モルゲステン市
Molgsten City
キングダム・イズルハ
Kingdom Izuruha
不毛地帯
Waste Land
エルデン
Elden
大西洋
ケメック
Kemeck
顛聖廣
Ten Sei Gu
大陸北横断道
North Road
カリオサーク
Cario-Saak
ジェードリ
Jaderi
ファー・セルジナ王国
Far-Celjinna Kingdom
マトゥーヤ霊領
Matoeya Spiritual Land
鷗州
Ou-Syu
龍州
Ryu-Syu
ボンヌ・ソレーリ
Bonne Solee
大陸南横断道
South Road
熾帝国
Empire Shiki
中部諸国域
The Midlands
M.T.D.
Mother-Temple's Dominion
ラフレシア第三帝国
Rafflesia 3rd Empire
バクー大陸(暗黒大陸)
The Bakoon Continent
(The Blackened Continent)
ユニオン・カバナ自治領(ユニオン・カバナ)
The Self-governing dominion
of UNION KABANA (UNION KABANA)
大陸西縦断道
West Road
オークリッド首長国
Orcrid Sheikdom
大陸東縦断道
East Road
<赤道>
永遠大陸ルミナス・アルファ(α大陸)
Eternal Continent Luminous Alpha
(Continent)
グラー大陸
The Glur Continent
ラハン大陸
La Kan Continent

北斗門
第二王立銀行/金獅子公園
第11区
D11
マキシマムAM
ドラゴン・ストリート
第6区
D6
空中楼閣
D10
第10区
ラピッシュバレー
D13
第13区
第5区
トマトクン邸
ミラーヒル
第12区
D12
第一王立銀行/
鉄鎖の憩い場
モリー・リップス・
アサイラム
D1
東門
D5
PCMAキャンプ
西門
トワイライト・ドレッド
スターズ・ストリート
マーベラス・グッダー・ストリート
第1区
シャイニング
グローリーパレス
D9
第9区
オメガバンク
第2区
D4
D7
第4区
D2
ミケランジェロ
nebula
第7区
第3区
D3
D8
第8区
キャッスルオブ
インフィニティ邸
マクスペイン・ストリート
「梟里」
D14
南門

Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

Omenage 897 12th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

〝彷徨える魂区（RSW）〟

chapter.1

こころ揺れる

「……あの、さ。そろそろどいてくれない？」

　いつ言いだそう、どうやって切りだそうと考えている間に、ずいぶん時間がたってしまった。正直、そこまで気を遣つかってあげる義理なんかないわけだし、「そろそろどいてくれない？」より「さっさとどけ」のほうがむしろ妥だ当とうかもしれなくて、それどころか口で言うよりも先に突つき飛ばしてしまうべきだったのかもしれず、そうすることも考えたのだけれど、なんとなく、そう、なんとなくとしか言えない、できなかった。

　あいつはぴくりと頭を震ふるわせてしばらく黙だまっていた。催さい促そくするべきだ。怒おこってもいいくらいだ。どけって言ってるだろ。そう怒ど鳴なりつける権利が自分にはあるはずだ。それなのに、やっぱりできなかった。あいつがのろのろと顔を上げて、上うわ目め遣づかいの臆おく病びような視線を投げてよこし、すぐに目をそらして、ゆっくりと身体からだを起こすまで、ひたすらじっとしていた。らしくないな、なんて考えたりもした。この男らしくない。知ったことじゃないけどさ。

　本当に知ったことじゃない。

　何があったのか知らないけれど、べつに知りたくもない。

　あいつはベッドの隅すみっこに腰こしかける体勢になって、こっちに背中を向けている。顔をぬぐっているのか。それはそうだろう。ひどい顔、してたし。あれだけ泣いたんだから当然だけど。すごい泣き方だったし。もう、号泣、もしくは慟どう哭こくと言ってもいいくらいで。誰かのあんな泣き顔を見たのも、あんな泣き声を聞いたのも、生まれて初めてだ。ひょっとしたら、二度目はないかもしれない。あいつだって、たぶん次はもっと上手に泣くだろう。それくらい強きよう烈れつな、眩暈めまいがするような、胸が痛くなるような、息ができなくなるような、恰かつ好こうの悪い、きっと他ひ人とには見せるべきじゃない、とてつもなく無様な泣きっぷりだった。今から思い返しても、あまりにも無残で、こっちのほうこそ泣きたくなってくる。

　起きあがれない。

　すっごく疲つかれた。

　このベッドは自分のものだ。ここは自分の部屋だ。このまま眠ねむったっていいんだ。そうだ。いっそ寝ねてしまおう。あいつがそこにいるのに？　ダメだ。できない。眠れるわけがない。まずはあいつを追いださないと。安全を確保しないと。ちらりとあいつを見る。そういえば、服が違ちがう。色は同じ黒だけれど、前とは形の違う服だ。そんなどうでもいいことに気づいて、ため息をつきたくなって、なぜかこらえてしまい、自分に言い訳をして。だって、変だよ。あいつの背中。やけに小さく見える。憐あわれみさえ覚えてしまう自分自身に、戸と惑まどうしかなくて。

　息が苦しい。

　やだな。

　これ以上、この部屋に二人きりでいたくない。

　なんだか自分でもよくわからないけれど、間違ってしまいそうで。

　もう間違いかけているのかもしれない。

　軌き道どう修正しないといけない。

「買い物」

　身体を起こして、あえてあいつの隣となりに座った。

　自分では平静を装よそおっているつもりだが、うまくできているだろうか。

「行かなきゃいけないんだ。生活必ひつ需じゆ品とか。家、空けてたから、何もないしさ。だから、僕は出るけど」

　あいつはちらりとこっちを見て、うつむいてからうなずいた。自らの意思で首を縦に振ふったというよりも、急に関節から力が抜ぬけて、入れなおした結果、うなずく恰好になった、そんなかんじさえした。大だい丈じよう夫ぶかな。不安を打ち消すことができないまま、ベッドから離はなれて外がい套とうを身につけている間に、あいつも立ちあがった。ドアを開けると、亡もう者じやめいた足どりであいつが先に部屋を出た。地上百五十四メーテル。高層寺院ＧＭエンパシィの屋上に吹ふきすさぶ風はすでに冬の色しき彩さいを帯びている。今日は天気もよくない。黒ずんだ雲に覆おおわれてい

る空を背景にしたあいつの後ろ姿は、今にも吹き飛ばされてしまいそうで、ひどく心こころ許もとなかった。

　部屋を出ずにドアを閉める瞬しゆん間かん、迷いがなかったと言ったら嘘うそになる。

　鍵かぎを閉めたあと、しばらく動けなかった。

　うまく説明できなかった。自分は何をやろうとして、結局、何をしたのか。買い物はたしかに必要だ。今である必要はないが、いずれ、ごく近いうちに行かないといけない。でも、今、行くのだと告げて、あいつはうなずき、部屋の外に出た。自分は出なかった。まだ部屋にいる。うまくいった。まんまとあいつを追いだすことに成功した。そう自分に言い聞かせようとしても、なんだか釈しやく然ぜんとしない。あいつは何を思っているだろう。どう感じているだろう。ドアには覗のぞき窓がある。確かく認にんしてみればいい。あいつはまだそこにいるだろうか。たったそれだけのことが、なぜかできない。代わりに、ドアに耳をつけてみる。風の音しかしない。買い物。そうだ。買い物に行かないと。部屋の隅にうっちゃってあった背負い袋ぶくろを手にとると、まだ中身を整理していないせいで、かなり重い。とりあえず、軽くしよう。背負い袋を開けて、手当たり次し第だいに中身を出して、机の上に置いて、その中にあれを見つけてしまい、手が止まって、思考まで停止しかけ、はっとして、大きく息を吐はいた。

　何度も捨てようとしたけれど、そのたびに余計な重みのようなものが加わって、どんどん捨てづらくなってゆき、ついにはとても捨てられそうになくなった。

　この薔ば薇らを象かたどった小さくて精せい巧こうな細工物に罪があるわけじゃない、そんな理由で納なつ得とくしてしまえるのなら、どんなに楽だろう。

　そっと机に置いて目をつぶり、もう一度息をついた。

　ヤラ・ナイヤという職人にして錬れん金きん士しの作品らしい細工物は、ものすごく買い得だったこともあって、薔薇のものだけでなく、他ほかにも買ってきた。モリーには巻き貝。ベアトリーチェにはウミガメ。それらは土産みやげ用の包装を施ほどこされたままだ。近いうちに渡わたしに行かないといけない。モリーの手伝いをしながら医術式の修業に励はげんでいるベアトリーチェの近きん況

きようも気になるし、ついでにお茶でもして。モリーはどうか知らないけれど、ベアトリーチェはジェードリには行ったことがないと言っていたから、いろいろ話してあげたらきっと喜ぶだろう。それに、予定よりも滞たい在ざいが長くなったので、心配しているかもしれない。そう。二人には旅行のことを話してあった。他にジェードリ行きを知っているのは、きゅーくらいだろう。もしかしたら、あいつは街中を捜さがし回って、事務所やこの部屋を訪おとずれ、トマトクンの家にも行ったかもしれない。留守番のきゅーは、人間の言葉を理解することはできるものの、喋しやべることはできないから、行く先を聞きだすことはできなかったはずだ。どこかのタイミングで、あいつの脳のう裏りをアサイラムの名前がよぎったかもしれない。モリーは有名人だし、怪け我がをしたとき、アサイラムまであいつに連れていってもらったこともある。ただの医術士と患かん者じや以上の関係だということも知っているだろう。でも、大丈夫だ。あいつはアサイラムを訪れたりしない。理由がある。あいつは以前、ＳｍＣと手を組んだ。ＳｍＣは骨龍の媚妻メイルーと呉戒ウージエにアサイラムを襲おそわせた。モリーは一度、死んだ。殺された。もちろん、あいつが直接関かかわったわけじゃない。あいつは一いつ切さい関知していなかったかもしれない。とはいえ、間違いなくそういうことがあった。それは事実だ。あいつは多かれ少なかれ負い目を感じているだろう。アサイラムには行かないだろう。

　ぜんぶ計算ずくだったなんて、そんなことは言えないし、おそらく違ちがう。

　ただ、少なくとも今から思えば、あいつはやっぱりアサイラムには行けなかっただろう。

　気になっていることがあるんだ。

　ずっと、気になっている。

　あれがキミでなければ、助けたりしなかった。キミだからだ。キミだから……！―キミは気にしなくていい。ボクがやりたくてやったことだ。キミに責任はない。―だけど、ボクにも守らなければならないものがある。ボクを信じている馬ば鹿かな連中がいるんだ。放ほうり捨てて逃にげだすわけにはいかない。もう……これ以上はネ。―男には仲間がいてネ……何人も、何十人も。―男はしくじったんだ。―いつの間にか、四十八人。それが、一人いなくなって、一人抜け、また一人去って……男はヤケクソ気味に思ったもの

サ。最後にはどこまで減るだろう？　六人？　いや、あのときの六人のうち、二人、もう欠けた。

　どうして？

　なんできみは泣いていたのかな。

　あんな泣き方をするくらい、何が悲しかったの？

　今も悲しいの？

　それはいったい誰だれのせい？

　きみが口にした、あの名前は──、

　クラニィ、って誰……？

　目を開けて、軽くなった背負い袋を背負い、ドアの鍵を開けた。

　買い物に行こう。

　気分転てん換かんにもなりそうだ。

　ドアを開けた。

　あいつが立っていた。

　さっきと寸分違たがわぬ姿勢だった。

　もしずっと出てこなかったら、どうするつもりだったのだろう。

　たぶん、そこにいたんだろうな。

　きっと、いつまでも黙だまって突つっ立っていたに違いない。

　部屋を出てドアを閉め、鍵をかけた。

「僕は、行くけど。鉄てつ鎖さの憩いこい場に」

「会いたかった」

　あいつは振ふり返らなかった。

「キミに、会いたかった」

　風が強い。

　つめたい風だ。

「ボクは」

　もう少ししたら、白い雪がちらつく日もやってくるだろう。

「キミが好きだ」

「知ってるよ」

「キミが思うよりずっと、ボクはキミが好きだ」

「そう」

　ああ──、

　ぜんぶ終わりにしようと決めていたはずなんだけどな。

　さよならを言おうと思っていたのに。

　アジアン。

　僕はきみに会いたくなかった。

　でも、なぜかその言葉を口には出せないんだ。

　あの薔ば薇らの細工物を捨ててしまうことがどうしてもできなかったように、めちゃくちゃに絡からみあって僕ときみとをがんじがらめにしている糸を断たち切ることができない。

　可能なら、きみの存在ごときれいさっぱり忘れてしまいたい、そうできたらどれだけ楽だろう、できっこないとわかっているくせに、そんなことを夢想して、自じ嘲ちようするしかなくて、僕は気づかされる。

　この糸は僕を縛しばっているだけじゃない。

　支えてもいる。

今、ただちに切ってしまったら、僕はたぶんよろめいて、座りこんでしまう。

マリアローズは屋上の一角にある小屋に入り、中の梯はし子ごで三十五階に下りた。ワンフロアぶち抜ぬきの三十五階は、剣けん術じゆつの練習などでたまに使う以外は通り抜けるだけだ。三十五階から先は、途と中ちゆうの階で塞ふさがれてしまっている大きい階段ではなく、個人的に裏階段と呼んでいる小さな階段で一気に五階まで下りる。四階から一階までは坊ぼう主ずどもが寺院にしているし、五階でも今まで一度だけ僧そう服ふくを着た男の姿を見かけたことがあるから、ちょっと用心しないといけない。本当は裏階段で地階まで行くことができればいいのだが、残念ながら一階までしか下りられず、そのうえ出入口の扉とびらは合成骨材コンクリートか何かで塗ぬりかためられていて使えないので、別のルートを通る必要がある。フロアの隅すみにある筒つつ部屋だ。筒部屋とは、最上階から地階まで吹ふき抜けになっている狭せまい部屋のことで、この内ない壁へきに据すえつけられている梯子を伝って一番下まで行けば、あともう少しで地上に出られる。階段が封ふう鎖さされ、蜘く蛛もの巣と埃ほこりで荒あれ放題に荒れている地階の壁かべには、誰が空けたのか大きな穴が穿うがたれていて、そこから下水道に出てすぐの場所にある梯子を登れば、ようやく高層寺院ＧＭエンパシィの裏手の路地だ。我ながら、よくもこんな七しち面めん倒どうな手順を踏ふまないとたどりつけない、それでいて設備が整っている、なかなか居住性の高い場所を見つけることができたものだと思う。

第十三区の中通りを縫ぬうように歩き、第一区をかすめるようにして第五区に入った。

振り返ると、アジアンがいる。

ずっと無言だ。

何を考えているのかわからないが、ただひたすらついてくる。

だったら、きけばいいじゃないか。なんでついてくるわけ？　そう尋たずねればいい。簡単なことだ。難しくはないけれど、なんだか怖こわいんだ。口を開けば別の問いを発してしまいそうで、それはきかないほうがいいことのような気がしてならなくて、でも、確かめておかなければならないことのようにも思えて、どうすればいいのかわからない。ついてこないでよ、とアジアンを追い払はらう

ことさえできない。僕は変だ。かなりおかしい。かろうじて、考えれば考えるほど頭の中がごちゃごちゃになって身動きがとれなくなることだけは理解している。だから、できるだけ考えないようにしている。とくに問題はない。鉄鎖の憩い場までの道のりは身体からだが覚えている。だいぶ人通りが多くなってきた。道行く人々がやたらとチラチラこっちを見るので、外がい套とうの襟えりを引っぱりあげて顔を隠かくしてみたけれど、まるで効果がなかった。アジアンのせいか。そうしてその存在が意識の上に昇のぼってくると、心が乱れそうになる。いつかの僕は、鉄鎖の憩い場の公園でアジアンに買ってこさせたアイスクリームを平然と舐なめていた。それほど前のことじゃないのに、大昔の出来事のように感じられる。

　あれから何があって、何が変わり、それらがどんなふうに影えい響きようしあって、今、どうなっているのか。

　できることなら、もし分ぶん岐き点がはっきりしているのなら、戻もどりたい。

　戻ってやりなおしたい。

　そのとき僕はどの道を選ぶだろう。

　僕は何を望んでいるんだろう。

　第一王立銀行の窓口はすいていた。向こうに銀行員仕様の魔ま導どう兵へいが立っている鉄てつ格ごう子しの前に備えつけられた操作台の認にん証しよう板に親指を押しつけ、さらに据えつけのペンで署名すれば、指し紋もんと筆ひつ跡せきによって口座が特定され、台上部の表示板に残高が表示される。あとは、台下部のボタンを押して引き出しを指定し、金額を入力すれば、魔導兵が小窓を開けて合金製の皿にのせた硬こう貨かを渡わたしてくれるという寸法だ。

　硬貨を財布にしまって銀行から離はなれると、どこかそのへんで待っていたらしいアジアンが音もなくすっと近づいてきて、マリアローズの後ろに位置どった。

　まだついてくるつもりなのか。

「……それ、さ」

　足を止めて振ふり返るためには、一度、深呼吸をしなければなら

なかった。

「やめてくれないかな。せめて──」

　アジアンは無表情だった。

　その薄うす青あお色の目には何か映っているのだろうか。

「なんていうか、ちょっと怖いんだけど。何も喋しゃべらないで、ただ黙だまってついてこられるの」

「何か、話したほうがいいかな」

「そういう問題じゃあ……まあ、まったくないってわけでもないんだけど。なんか、息がつまるっていうか」

「まだ信じられないんだ」

　重苦しい空模様だ。風は吹いている。雲は動いている。それなのに、なぜだか何もかもが静止しているかのようだ。銀行の近くだから、周りに人がたくさんいる。いくらでもいる。彼らはそれぞれ勝手な方向に歩いている。二人かそれ以上で話をしている者もいるだろうし、ひとりごとを言っている者もいるかもしれないのに、何も聞こえない。

「キミがここにいることが。キミともう一度会えたことが。そもそも、キミと出会えたことが。まるで奇き跡せきだ。キミという人が、少なくともボクにとっては、奇跡そのものだ」

　ただ一人の声しか耳に入らない。

「キミを愛してる」

　どうしてだろう。

　なんできみはそんなにもまっすぐ僕の目を見て、自分の気持ちを誤解しようのないはっきりした言葉で伝えることができるんだろう。

　最初はふざけているのかと思った。からかわれているのに違ちがいないと。一ひと目め惚ぼれしたんだ、キミに。言い方は様々でも、そんなたわけたことを言ってくるクモソウ野フ郎オには飽あき

飽きしていた。もっと強ごう引いんに、言いよってくるどころか襲おそいかかってくる超最低ＳＵＣＫ野郎の魔の手から命からがら逃のがれたことも一度や二度ではなかった。不ふ愉ゆ快かいで不本意ながら、自分の容姿がそうした男どもを引きよせる原因の一つになっていることは自覚していた。だからといって彼らの心情を理解してやる義理はなかった。そんな連中は坊主や大ゴ脂ツ羽キ蟲ーと同じくらい大だい嫌きらいだった。どうせこいつも同じだろう。反へ吐どが出る。虫むし酸ずが走る。消えろ。いなくなれ。死んじゃえ。

　僕は数えきれないほどきみを罵ののしって、追い払おうとした。ずいぶんひどいことも言った。高層寺院の屋上から突つき落としたことさえあった。本当は気づいていた。きみは少し違う。おそらく、だいぶ違う。きみが本気を出せば、いや、出さなくても、力ずくで僕をどうにかしてしまうことなんて簡単なはずだった。それなのにきみがしたことといえば、エルデンの悪漢どもの所業と比べれば冗じよう談だんみたいな、犬がじゃれついてくるみたいな、その程度でしかなかった。いつか、トマトクンの家で眠ねむっていた僕の唇くちびるを奪うばうことすら、きみはたぶんためらって、結局、実行しなかった。認めざるをえない。きみは違う。僕はこんなことすら思っている。もし僕が心の底からきみを嫌って、もう絶対に、二度と僕の目の前に姿を現すなと言い渡したら、きみはいなくなる。少なくとも、僕の目の届く範はん囲いには入ってこない。それが僕の本心からの願いなら、きみはきっとそうする。僕はもう自分をごまかせない。口では何と言おうと、どういう態度をとろうと、今まで僕はきみを本当の本当に遠ざけようとはしていなかった。理由はわからない。僕がきみという人間に対してどんな感情を、気持ちを抱いだいているのか、誰だれかにはっきりと説明できる自信はない。そんなものはなかったのではないかとも思う。明確な動機が先にあって、行動があとに従ったのではなく、その時々にああして、こうして、今、こうなっていて、思い返せばそういうことなのかなと解かい釈しやくできなくもない。曖あい昧まいだ。あまりにも。だから、僕がきみのように素す直なおになるとしたら、こうとしか言えない。僕はきみをうざったいと感じたり、邪じや険けんにしたり、つれなくしたりしたけれど、二度と顔も見たくないとは思っていなかった。それ以上でもそれ以下でもない。いや、なかった、と言うべきかもしれない。

　僕は気づきかけている。もうほとんど気づいている。

　この推測が正しいかどうかはわからない。でも、あたっているかもしれない。そう考えると、僕の胸がフォークでめった刺ざしにされたように痛む。

　僕はたえられないかもしれない。立っていられなくなるかもしれない。息が止まってしまうかもしれない。

　きみが、僕のせいで、大切な何かを、誰かを、仲間を、もしかしたら友だちを、ひょっとしたらきみが口にしたクラニィという名の人を失ったのだとしたら、どうしよう。

　それがきみにとってどういう痛手か、今の僕には想像することができる。

　カタリが死んだとき、僕は壊こわれてしまいそうだった。あのピンパーネルが涙なみだをこぼした。トマトクンもひどくつらそうだった。最終的に、失いかけただけで、失わなかったからいい。もし結果が違っていたら？　考えたくもないけれど、考えることはできる。僕はカタリがいないという現実をしっかりと受け止めて、前に進むことができただろうか。受け止めるも何も、それは重みではない。喪そう失しつだ。背負って歩けばいいというものではない。たとえば雨の中、傘かさを差して歩く。傘が重くなるのなら、よろめきながらも必死に支えればいい。でも、傘に穴が空いたらどうか。ちゃんと傘を差していても、穴から雨が落ちてくる。雨は僕の心をぬらすだろう。僕の心はつめたくなって、いっそ凍こおりついて何もわからなくなってしまえばいいと思うのに、そうはならない。凍いてつく寸前のつめたさをずっと味わいつづけて、とうとう音を上げる。助けて。誰かあたためて。ほんの少しでいいから、ぬくもりを分けて欲しい。

　確かめるべきだ。

　いったい何があったのか、それだけはせめてはっきりさせておきたい。あやふやなままでは落ちつかない。そう思う。それなのに、揺ゆれている。迷っている。だから、目をそらす。僕はうつむいてしまう。

「買い物に行くんだろう」

　顔を上げた。

アジアンがこちらを見ている。

その口くち許もとが微かすかにゆるみ、ほんの少しだけ目が細められた。

「行こう。つきあうヨ」

返事ができずにいると、アジアンは右手を胸にあてて、音楽でも聴きいてうっとりしているかのような表情になり、左右に首を振ふってみせた。

「どこへでも。いつまでもネ。でも、勘かん違ちがいしないで欲しい。べつに何か魂こん胆たんがあるわけじゃないんだ。そんなものは誓ちかってないヨ？　本当サ。嘘うそじゃない。信じてくれ。ボクがマリア、キミに嘘をついたことが一度でもあったかい？　なかったはずサ。当然だヨ。誠実さ。それは心の奥底から愛して、愛して、愛しすぎている者に対するとき、人が必然的に身につけざるをえなくなる属性だ。その人の前で誠実でいられないのだとしたら、そもそもその愛は偽いつわりか、少なくとも瑕か疵しがあるに違いないのサ。ボクはどうか。極限愛ラヴ・マツクス。もちろんボクはキミを愛している。愛するキミに嘘なんかつけるはずがない。ボクがキミに語る言葉はすべて真実だ」

最初はこんなときに何を言ってるんだこいつはと呆あつ気けにとられて、だんだんと腹が立ってきた。自分は嘘をつかない。なぜなら愛している者には嘘をつけるはずがないから。自分はマリアローズを愛している。よって、自分はマリアローズに嘘をつかない。それっていわゆる循じゆん環かん論法ってやつじゃないか。くだらない。バカバカしい。本当にバカバカしすぎて、もう呆あきれるしかなくて──せっかく人が真ま面じ目めにいろいろ考えてたっていうのに、アホらしくなってきて、なんだか気が抜ぬけて、思わず笑ってしまった。

「やっと、キミの笑え顔がおを見ることができた」

アジアンがそっと息をついた。

やられた、と思った。

物の見事にやられてしまった。

アジアンが右手をのばしてきた。

頬ほおにふれそうになった。

もう少しだった。

危ないところだった。

マリアローズはアジアンの手を払はらいのけて、背中を向けた。

「──買い物！　行くから！　買わないといけないものがだいぶあるし、荷物持ちくらいなら、まあ、べつにさせてやらないこともないけど、おかしな真ま似ねしたら容よう赦しやしないからね。即そつ行こう退場だから」

「おかしな真似なんてしないサ。するわけがないだろう？　そもそも不可能だヨ。キミを愛する愛の騎き士したるボクが愛ゆえにすることは、何もかもすべてキミのためになるに決まっている。キミのためにならないことなどするはずがない。それが愛というものだからネ」

「なんでもかんでも愛愛愛愛言ってれば恰かつ好こうつくと思ってるならとんだ勘違いだから、考えなおすっていうかむしろそのぶっ壊れた頭をどうにかして治ち療りようしてもらったほうがいいよ。わりとかなり迷めい惑わくだしちょっとだけかわいそうだから、腕うでのいい医術士紹しよう介かいしてあげるけど？」

「ボクはきわめて正常だヨ。もしかしたら、燃え盛さかる愛の炎ほのおにあぶられて少しだけ目が眩くらんでいるかもしれないが、自分が何を見るべきで何を見ているかはちゃんと理解している。当然、それはキミだ。キミだけだ。マリア、ああ、マリア、マリア、マリア。マリアローズ。キミ以外にありえない」

「ねえ、気色悪くて気持ち悪くて気味が悪くてしょうがないから十二、三発殴なぐっていい？」

「愛の鞭むちというわけだネ？　かまわないヨ。いくらでも叩たたいてくれ。キミが望むのならボクのこの命を差しだすこともやぶさかでないんだ。そしてボクはキミの中で永遠に生きつづける。それも一つの愛の形だネ。いや、待てヨ、でも、そうしたらいったい誰だれがキミを守るんだ」

「自分の身は自分で守るからきみは安心してとっとと死んじゃってくれるかな？　そうしたら僕としてもすっごくすこやかに毎日を送

れそうな気がするんだよね」

「フッ」

「や、そうやってごまかそうとしても無む駄だだから」

「ごまかすつもりなんかないサ。ただボクは気づいてしまったんだ。いつもキミのことばかり考えている、キミを観察している、キミを知りつくしているボクだからこそ気づくことができたのかもしれないネ」

「少なくとも知りつくされては絶対ないんで、そこは訂てい正せいして。てゆうか、しろ」

「おかしいと思わないかい？」

　アジアンはマリアローズの要求をさっくり無視してその場でターンした。キレのある、華か麗れいといってもいい動作だったけれど、なんでターン。しかもどこからともなく一輪の真っ赤な薔ば薇らをとりだしてそのにおいをひと嗅かぎし、うっとりした表情を浮うかべてみせた。アホだ。こいつは救いがたい超ちよう弩ど級きゆうで天下一品のウルトラアホだ。

「マリア。ああ、マリア、考えてみて欲しい」

「……何をだよ」

「キミのことサ。キミ自身の反応、リアクションについてだヨ」

「反応をリアクションとか、わざわざ言いなおす意味がさっぱりわかんないんだけど」

「以前のキミなら──」

「ほんっとに会話が嚙かみあわないよね、きみとは。つくづく思うよ。相あい性しようとか巡めぐり合わせとか、そのあたりがものすっごく悪いんだなって」

「とんでもない。バッチリじゃないか。これ以上もこれ以外もないくらいだヨ。キミとボクとはまるで割り符ふのようだ。互たがいに失うわけにはゆかない、唯ゆい一いつ無二の存在同士なのサ」

「あーそーなんだーそれはぜーんぜん知らなかったなー」

「照れなくていいんだヨ？」

「即死しちゃえば？」

「そう、まさしくそこだヨ。ボクが指し摘てきしたいのはネ」

　アジアンは急にうさんくさい真顔になった。

「以前のキミなら、鋭するどくも甘いこの薔薇の刺とげのごとき言葉だけでなく、もうとっくに最低でも二、三発はボクをぶっていた。そうは思わないかい、マイスウィーテスト」

「……それは」

「にもかかわらず、今のキミはボクを突つき放そうとしない。肘ひじ打うちも、足を踏ふむこともしない。いったいどうしてかな？　その変化の原因は？」

「べつに、そんな……変化っていうか……」

「わかっているヨ、スウィートハート。隠かくさなくていい。ボクには見える。キミの心が。正直に言ってごらん。キミの中のボクが、しばらく会わないうちに大きく、抱かかえきれないほど大きく育って、ボクへの思いはもはや爆ばく発はつ寸前だ──という……こと……に、あれ？」

　ぼうっとしていた。

　違ちがう。

　うつむいて考えこんでいた。

　顔を上げた。

　アジアンと目があった。

　すぐに顔を背そむけた。

　やばい。

　何だろ、これ。

熱い。いきなり顔がすっごい熱を持って。耳までとかよく言うけれど、耳どころか目まで熱い。どうしちゃったんだろ、僕。わけがわからない。心臓が。ひょっとして、病気？　だとしたら、きっとかなり危険な病気だ。だって、倒たおれちゃいそうだ。なんかもう立っていられない。苦しい。どっどっどっどっどっどっ。何、この激しい音。飛びだしてきそうだ。心臓が、口から、こんにちはーって。や、こんにちはーじゃないから。それじゃすまないから。ダメだ。目め頭がしらのあたりがじんとする。涙なみだが出てきそうで、僕はひどくうろたえる。そりゃそうだ。当然だ。なんで泣かなきゃいけないんだよ。僕が、どうして。冗じよう談だんじゃない。これって誰のせい？　誰が悪い？　僕自身？　そんなわけがない。僕はちっとも悪くない。僕のせいなんかじゃ絶対ない。じゃあ、誰のせいだろう。そんなの決まってる。一人しかいない。そう。こいつだ。

拳こぶしをぎゅっと握にぎりしめて、やつをちらっと見た。

やつはおろおろと目を泳がせたり、手をのばそうとして引っこめたり、何か言おうとしてやめたりして、それから顔をのぞきこんでこようとした。

マリアローズの右拳はその顎あごをとらえた。

「──んなわけあるかぁっ……！」



　我ながら見事な渾こん身しんの一いち撃げき、美しいまでのアッパーカットだった。アジアンは、ぐげぇっ、とヒキガエルみたいな声をもらして吹ふっ飛んだ。その拍ひよう子しにアジアンが手放した薔薇がゆっくりと舞まい落ちてきたので、思わず手にとってしまった。それとほぼ同時だった。アジアンが地面に叩たたきつけられた。

拍はく手しゅが起こった。

「……え？」

見回すと、いつの間にかマリアローズとアジアンの周囲に人だかりができていた。誰だれが最初に手を叩きはじめたのか知らないが、今はもう一人や二人ではない。何人もが、もしかしたら何十人もが拍手している。なかには「Ｙｅａｈ！」だの「Ｏｈ！」だのと叫さけんだり口笛を吹いたりして、囃はやし立てているつもりらしい者もいた。何、これ。どうなっちゃってんの？

「フッ」

アジアンが身体からだを起こして前まえ髪がみを指先で払はらった。

「どうやら見せつけてしまったようだネ」

「や、見せつけてなんかないから！　他人に見せつけるようなものなんか、僕ときみの間にはないわけだし！」

「衆しゅう人じん環かん視しの中で盛大な痴ち話わ喧げん嘩かをしておきながらそんなことを言っても、説得力というものがまるでないヨ？」

「だーれがきみなんかと痴話喧嘩なんて──」

ふと後ろのほうで、誰かが、ずいぶんムキになって、とか何とか言いながら笑う声が聞こえた。すうっと胸の奥がつめたくなり、こめかみのあたりで何かがぷっちんと切れる音がした。馴な染じみのある感覚だ。これは間違いなく殺意だ。誰だ。今、たわけたことをぬかしたクモソウ野フ郎オは。後こう悔かいはしなくていい。懺ざん悔げの時間なんて与あたえてやらない。問答無用でとりあえずぶっ殺してやる。

マリアローズは振ふり返った。

最前列にいるわけでも、とくに目立つ容姿や恰かつ好こうをしているわけでもないのに、どういうわけかすぐにその男を見つけることができた。いや、正確に言えば、男があの声の主なのかどうか、それはわからなかった。ただ、男が拍手しながらあまりにもまっすぐこちらを見ているものだから、目にとまった。うまく説明する自

信はない、なんとなく、としか言いようがないけれど、きっとあの男に違いない、と思った。

　男は眼鏡めがねをかけていて、十人並みというか、どこにでもいそうな目鼻立ちで、体格にも特とく徴ちようらしき特徴はなく、服装まで地味だった。眼鏡をのぞけば、秩ちつ序じよの番人副長ヨハン・サンライズにも似た平へい凡ぼんな外見だが、あの冷血漢はおとなしくしていても猫ねこをかぶっているような、たとえて言えば仕込み杖づえのような、よくよく注意すれば感じとれる陰いん湿しつな鋭さのようなものを常に身にまとっている。苦手意識を持っているがゆえの偏へん見けんかもしれないけれど、やはり違うような気がしてならない。男はあまりにも平均的で、空気のようで、いるかいないかわからないほどで、それも一つの個性だと言いたいところだが、明らかにそうではなかった。

　どうしてこの場にいる者たちは誰も不思議に思わないのだろう。

　あの男は変だ。

　異質だ。

　どこがどうおかしいのか。

　わからない。

　もしかしたら、あと五秒か十秒じっとあの男を観察していたら、何がそう感じさせるのか判明したかもしれない。あるいは、気のせいにすぎなかったと結論づけることができたかもしれない。いずれにしても、そのための時間は与えられなかった。

　男が手を叩くのをやめて、右手の人差し指で眼鏡の位置を直した。

　アジアンがマリアローズの前にすっと進みでてきた。

「……ヨグ」

　それは男の名前なのか。

　だとしたら、アジアンはあの男のことを知っているのか。

「お帰りなさい、と言うべきでしょうか」

男は微かすかに首を傾かたむけてほんの少しだけ口くち許もとをゆるめてみせた。

「外に出ることができたみたいですね。待っていましたよ、頭領マスター」

頭領マスター。男はたしかにアジアンのことをそう呼んだ。

ということは、男は昼飯時ランチタイムの一味か。

「キミは――」

でも、アジアンの様子がなんだか変だ。うろたえている。動どう揺ようしている。そこまでゆかないとしても、声こわ音ねや表情に戸と惑まどいがにじんでいることは間違いない。いったい、どうして。同じクランの仲間同士なら、やあ、元気、みたいな気安い挨あい拶さつが適当というか普ふ通つうではないのか。まあ、そこはクランによって事情が違ちがうのかもしれないけれど、アジアンにヨグと呼ばれた男は、お帰りなさい、と言った。アジアンはマリアローズやＺＯＯの皆みなと同じように旅行にでも行っていたのか。それで、マリアローズの部屋の前で倒たおれていた。何だよ、それ。意味不明だ。ぜんぜん繋つながらない。だいたい、なんでアジアンはあんなところで倒れていたのだろう。アジアンときたら、身体の線は細いけれど、そうとうタフだ。しぶとさは大ゴ脂ツ羽キ蟲ー並みだ。実際、目を覚ましてからたいしてたっていない今も、頰ほおは若干こけているものの、すっかり元気そうにしている。邪じや魔まくさいほどに。仮に、飲まず食わずでマリアローズを待っていて、そのあげく意識を失ったのだとしたら、いくらなんでもすぐに立って歩いたりはできないだろう。きっとそうではないのだ。何か別の原因がある。たとえば、空からたらいが降ってきて、それがうまい具合にアジアンの頭に命中して、気絶したとか。たまたまバナナの皮が屋上にあって、見事にそれを踏ふんでずっこけて頭を打って、失神したとか。まあ、怪け我がをしているようには見えなかったけれど、とにかく何かがあった。あのトマトクンと互ご角かくに斬きり結んで、規格外の蜥蜴とかげ人〝超食漢スーパーイーター〟に軽々ととどめを刺さしてみせた、人格はアレだが、実力については疑う余地のない昼飯時ランチタイムの頭領マスター、虐殺人形カーネイジドールの異名をとるアジアンを昏こん倒とうさせるような何かが。

アジアンはわずかに眉まゆ根ねをよせた。

「じゃあ、あそこで会ったキミは、本物のキミだったのか」

「厳密に言えば違いますが、ええ、あたらずとも遠からずといったところです」

　男はちらりとマリアローズを見て、もう一度、眼鏡の位置を直した。

「アジアン。あなたを待っていました。僕だけではありません。みんなあなたを待っています、という言い方も本当は正確ではないのですが」

「ボクを……？」

「正直、僕も状じよう況きようを把は握あくしきれているわけではありませんから、どう説明すればいいか。ただ、由々しき事態であることは間違いないようです」

「どういうことだ。何が起こっている」

「八方手をつくして調べてみました。その結果、どうやら無事なのは、僕と、それから第十区の空中楼ろう閣かくに家があるベティだけのようでして」

　ヨグがそう言って肩かたをすくめた瞬しゆん間かん、アジアンの顔が、微び妙みようにではあったが、さっと青ざめた。落ちつかない気分だった。どうも話についてゆけないが、何かとんでもないことが起こっているらしい。ベティといえばサフィニアの姉弟で子しで、彼女も昼飯時ランチタイムだ。ヨグという男も、当然、アジアンもそうだ。昼飯時ランチタイムの人たちが何らかの災難に見み舞まわれているということか。だったら、ＺＯＯのマリアローズには関係ない、と割り切ってしまえるかというと、そういうわけにもゆかない。なんでかっていうと、そのあたりは自分でもうまく言えないんだけど。

「……いったい何が。みんなは──」

　アジアンは目を伏ふせて、そこで言葉をいったん切った、というよりもむしろ、声を失った、というかんじだった。マリアローズはアジアンとヨグを見比べておろおろしていた。てゆうか、なんで僕がおろおろしなきゃならないんだよ。たしかに、アジアンはだいぶショックを受けているみたいで、ちょっと、本当にほんのちょっと

だけ、かわいそうというか、気の毒に思わなくもないけれど。そこはやっぱり、こいつに対して僕がどういう感情を抱いだいているとか、そういうのは関係なくて、仲間、そう、仲間に何かあったら、つらいのはあたりまえだし、人としてそれは理解できるし、ただでさえ男にしては細いアジアンの身体からだが今にも折れてしまいそうで、もしこいつが自分で自分を支えられなくなって、立っていられなくなったら、そのとき僕はどうするだろう。どうするべきだろう。

　手をのばしかけた。

　アジアンの腕うでをつかもうとしたのかもしれない。

　すんでのところで思いとどまった。

　僕は、何を。

「繰くり返しになりますが」

　ヨグはそっと息をついた。

「僕にもよくわからないのです。現時点ではっきりしていることは、僕とベティ、そして、アジアン、あなたですね。昼飯時ランチタイムで健在な者はこの三人だということだけです」

「くどいぞ、ヨグ」

　アジアンが少し声を荒あららげて首を振ふった。

「それはボクもわかった。ボクが知りたいのは、そうじゃなくて」

「もしかしたら、あなたが手がかりになることを知っているのではないかと、僕は推測しているのですが」

「だから、そんなことは」

「行方ゆくえ不明です」

　冷え冷えとした風が吹ふいた。

　高層寺院の屋上ほどではないが、凍こおりつくような寒さを運んでくる北風だった。

　ヨグはアジアンの目を見すえた。

　奇き妙みようなほどまばたきをしない男だと、場違いなことをマリアローズは思った。

「どこを捜さがしても見つかりません。時間ごとに点呼をとったりしているわけではありませんから、確かく認にんしようがありませんが、ほとんど同時に、と言ってもいいでしょう。ある日突とつ然ぜん、みんないなくなってしまいました。忽こつ然ぜんと消えたのです」

Omenage XXX Xth revolution Xth day

不明

"unknown"

chapter.2

ずっとここにいるがいい

素す手で同士の場合もあるが、殺やりあう前にはたいてい得物を選ばされる。そんなとき、彼女は鈍どん器きを選せん択たくすることにしていた。鬼人オーガの刃は物ものは丈じよう夫ぶさだけが取り柄えで、重すぎるし、斬きれ味が悪い。手入れもよくないから、だいたい錆さびている。結局、斬るよりも叩たたきつけて相手を粉ふん砕さいするべく使うことになるのであれば、最初から刃物ではなく鈍器を選んだほうがいい。彼女はゴラグンデアという紫色の肌はだをした大きな鬼人オーガのお気に入りの奴ど隷れいで、連戦連勝の戦士だった。同じ奴隷の中にはメスだという理由で彼女を侮あなどる者もいたが、実際に谷の闘とう技ぎ場で対戦すれば考えが変わる前に何も考えられない死体になった。彼女が勝利するたびに、ゴラグンデアは塩焼きにした獣じゆう肉にくをくれた。奴隷たちには普ふ通つう、穀物を泥水で煮にたものか、砕くだいた獣じゆう骨こつと草を混ぜたものしか与あたえられないから、塩味のきいた獣肉はとんでもないご馳ち走そうだった。彼女は他ほかの奴隷に奪うばわれないように目を光らせながらそれを貪むさぼり食った。肉を食えば身体が強くなる。強くなれば敵を楽に殺せる。殺せば殺すだけ肉が食えるのだ。あいつを殺せば、また肉が。

鬼人オーガの谷の中心にある柵さくに囲まれたいびつな円い形の闘技場が、彼女が自らの命を、たぎる血潮を実感できる場所だ。柵の外側では大勢の、数えきれないほどの鬼人オーガが押しあいへしあいしていて、彼女や彼女の対戦相手に罵ば声せいらしきものを浴びせたり、興奮のあまり声を張りあげて叫さけんだり、足を踏ふみ鳴らしたり、隣となりの鬼人オーガを殴なぐりつけたり、闘技場の中に物を投げこんだりしている。向かいあっている二匹ひきの奴隷どもを煽あおり、焚たきつけ、けしかけようとしているのだろうが、そんなことをされなくても彼女はとっくにその気になっていた。あいつを殺す。この金属製の棒で殴り殺す。粉砕してやる。鬼人オーガどもが立てる音や声など、彼女の耳にはほとんど入っていない。彼女が得物として選んだ金属製の棒は先せん端たんが重くなっていて、握にぎりの部分に滑すべり止めのために皮を何重にも巻いてある。彼女は舌なめずりをした。この棒であいつの頭ず蓋がいを粉砕したら、どんなに気持ちいいだろう。そのときの手て応ごたえはこれまでの経験から想像できるが、直後の快感を頭の中で再現することは絶対にできない。あの快感を味わうためには殺すしかない。粉砕しなければならない。ただあいつを殺すだけでいい。

ためらってなどいない。あいつを殺す。何の問題もない。奴隷用の檻おりはこの谷にたくさんあって、顔を知っている奴隷も、知らない奴隷もいるが、闘技場に引きだされて対たい峙じすれば、何だって同じだ。殺りあうしかない。違ちがう。殺すのみだ。彼女は殺されると思ったことは一度もない。だからこそ今日まで生き残ってこられたのだろう。殺す。殺す。必ず粉砕してやる。どれだけ追いつめられても、その気持ちが萎なえたことはない。同じだ。今回だって同じはずだ。あいつを殺す。殺すんだ。粉砕するんだ。そして、勝利を。肉を。何より、快感を。

あいつだって同じ気持ちのはずだ。

そうだろう、と言うつもりで、彼女は棒を振ってみせた。

お前のことは知っているけどな。昔、同じ檻にいた。奴隷は自分の対戦以外、見ることはできないし、他の奴隷の戦績になど興味がなかったからよく知らないが、今日まで生き残っているということは勝ち抜ぬいてきたのだろう。あいつは他の奴隷に食い物を奪われた奴隷に自分の食い物を分けてやったり、複数で一匹ぴきの奴隷を袋ふくろ叩だたきにしている奴隷たちを止めたり、そんなわけのわからないことをするものだから、奴隷たちの間では変わり種と見なされていた。それで他の奴隷たちに狙ねらわれてボコボコにされたこともある。変なやつだった。それでも、奴隷である以上、何日かにいっぺんは闘技場で他の奴隷と殺しあわなければならない。あいつは勝ってきたのだろうし、弱くはないということだろう。あいつを殴ったり蹴けったりした奴隷たちはもうあらかたいない。連中は弱かった。彼女もそのうちの一人を手ずから粉砕した。ようするに、あいつはやつらよりも強かったということだ。強い者と強い者は、勝ちつづければいずれ闘技場で顔をあわせることになる。それがたまたま今日だった。それだけの話だ。

そうだろう、と言うつもりで、彼女は一歩前に踏みだした。

鬼人オーガどもの声がいっそう高まった。

うるさいやつらだ。

うるさい。

彼女は集中できていない自分に気づいた。うるさいなんて、おかしい。変だ。

あいつの様子もなんだかおかしい。顔をうつむけたまま、こちらを見ることもせず、ぜんぜん動こうとしないのはどういうわけだ。何か企たくらんでいるのか。それとも、あいつは戦いの前、いつもああなのか。そうなのかもしれない。だとしたら、彼女だけが普ふ段だんと違うということになる。まずい。戦いだ。勝つんだ。そうしたら肉を食える。その前にあの快感に身をひたすことができる。そう考えればいくらでも自分を奮い立たせることができるはずなのに、どうもうまくゆかない。あいつは彼女の食い物を狙ったことがない。だからか。まだ彼女がゴラグンデアに気に入られる前、もっと狭せまい檻にいたとき、あいつと隣となりあって寝ていた。あの檻には何しろ大勢の奴隷がつめこまれていたから、他の奴隷と少しもくっつかずに眠ねむることはとうていできなかった。奴隷たちは互たがいに殺しあう運命だ。メスなのに強い彼女は何度も寝込みを襲おそわれた。不意を打って強い奴隷の息の根を止めておけば、闘技場でそいつとあたらずにすむ。あるいは、ただの気晴らしかもしれない。次の日の朝、檻番の鬼人オーガが死体を見つけなければ、食い物が一匹分余ることになる。そのためかもしれない。とにかく彼女は何度も殺されかけた。最初はあいつのことも警けい戒かいしていたが、すぐにその心配はないと知った。あいつは彼女に夜よ討うちをかけようとした奴隷たちに荷か担たんするでもなく、見み逃のがすでもなく、それどころか連中を妨ぼう害がいした。彼女はあいつと二匹がかりで奴隷どもを撃げき退たいした。それ以来、べつに示しあわせたわけではないが、夜はあいつと交代で見張りをするようになった。本当に変なやつだった。ゴラグンデアに気に入られて広い檻に移されてからも、たまにあいつのことを思い出した。あいつはまだ食い物を誰かに分けたりしているのか。生きているのか。もう死んだか。

あいつは生きていた。

今日まで勝ち抜いてきて、とうとうこの闘技場で彼女と再会した。

ああ、もしかしたら、こうしてあいつと戦うために、数えきれないほどの奴ど隷れいたちを殺してきたのかもしれない。

そうではないと彼女は知っていた。彼女は敵を粉ふん砕さいすることでえられる快感のため、うまい食い物のため、そして何より、戦うしかないから戦ってきた。もし戦うことを拒きょ否ひすれば、そんなことをする奴隷は見たことがないが、鬼人オーガに殺されるだろう。鬼人オーガは死んだ奴隷を食くらう。奴隷は鬼人オーガた

ちが楽しむための道具であるだけでなく、食料でもある。奴隷は鬼人オーガではない。人間だ。彼女にも、鬼人オーガの谷に連れてこられる前、人間の街にいたときの記き憶おくがおぼろげにある。ほとんど、ここではないどこかにいた、という程度でしかないが、もっとはっきりと覚えている奴隷もいるし、鬼人オーガのそれとは違う、人間の言葉を話すことができる奴隷もいる。彼女も少しだけわかる。

　あいつに会うためだったんだ。

　そうではないと知っているのに、彼女は思う。

　あいつを殺すためだ。

　あいつの頭を粉々に粉砕したら、きっとものすごく気持ちいい。

　忘れることができないくらい、ひどく気持ちいいに違いない。

　だって、こんなにもあいつに会いたかったんだから、そうに決まっている。

「ＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｗ……！」

　彼女が雄お叫たけびをあげると、鬼人オーガたちがいっそう盛りあがった。鬼人オーガたちを煽るような真ま似ねをするなんて彼女らしくなかったが、今の彼女にはそうすることがどうしても必要だった。彼女は自分を追いこもうとしていた。鬼人オーガたちは血みどろの殺しあいが始まることを期待している。一刻も早くだ。ゴラグンデアもどこかにいて、彼女が相手を嬲なぶり殺すことを望んでいるだろう。もうじっとしているわけにはゆかない。早く動きださなければならない。彼女は、スッ、スッ、スッ、と三度息を吐はいた。それは彼女が相手を粉砕すべく走りだす前の儀ぎ式しきだった。あいつはオスで、身体からだも彼女よりだいぶ大きい。右手にぶら下げている分厚い鬼人オーガの刃は物ものをうまく扱あつかう自信があるのかもしれないが、彼女は刃物を持った敵を料理することに慣れている。

　でも、あいつはどうして、ぼけっと突つっ立っているんだ。

　彼女はかまわず駆かけだした。もう何も聞こえない。何もかもが手にとるようにわかる。世界は彼女のものになる。彼女の肉体が世

界そのものとなる。あいつはまだ刃物をだらりと下げたままだ。距きよ離りをつめた。すぐだった。もうこの棒を振ふり回せばあいつに当たる。彼女は、だが、さらに一歩踏ふみこんだ。それが致ち命めい傷しようを与あたえるコツだった。臆おく病びよう者はこの一歩が踏みだせないから、敵をのみこむような必殺の一撃を見み舞まうことができない。彼女は棒をぐっと胸むな元もとに引きよせるようにして腰こしを落とした。あいつはまだ動かないが、気は抜かなかった。彼女は棒を上からも下からも右からも左からも振らなかった。突きだした。彼女は相手の意表を突くすべを心得ていた。あいつも驚おどろいているだろう。まさかこうくるとは思っていなかっただろう。

　そのせいかどうか、彼女にはわからなかった。

　あいつはぴくりとも反応しなかった。

　あいつの胸と腹の間くらいの位置に彼女の棒がめりこんだ。

　あいつは、ぐえ、と低い声をもらして、そのままうずくまってしまいそうだった。

　なんだ、弱いじゃないか。

　あの狭い檻おりにいたときからずいぶんたった。何度も寒い冬がきて、暑い夏が訪おとずれた。その間、あいつも生きのびてきたのだから、もっと強いものだと思っていた。それなのに、こんなものか。期待はずれだ。がっかりだ。おかしいじゃないか。そんなはずがない。弱い奴隷は生き残れない。彼女のように強い奴隷だけが、奴隷を殺して命を繫つなぐことができる。あいつだって強いはずじゃないのか。

　いつもなら、彼女は体勢を崩くずした相手の肩かたや腕うでをすかさず殴おう打だして、まず得物を取り落とさせる。

　それが遅おくれた。

　あいつが顔を上げたとき、しまった、と思った。

　まだあいつは反撃する力を残しているだろう。彼女は焦あせって棒を振りあげた。そんなに大きく振りかぶらなくてもいいのに、いったい自分は何をやっているのか。まずいじゃないか。彼女はあいつの刃物を持つ右手が動くのを見た。その瞬しゆん間かん、悟さ

とった。やっぱり強い。斬きられる。一瞬だ。真っ二つにされる。初めてだった。死ぬ、と思った。殺される。

あいつは、でも、手を止めた。

間ま違ちがいなく彼女を斬ろうとしていた。

いや、そうではなくて、たぶん反応したのだ。

その機会があれば、自動的に相手を殺そうとする。それは彼女をふくめた強い奴隷たちの習性だった。それがあれば必ず生き残ることができるというわけではないが、それがなければまず殺される。あいつは強い。だからとっさに彼女を殺そうとした。殺せたはずだ。その手を止めた。どうして。

「あいたかった」

なんであいつはそんなことを。

彼女にはわからなかった。あいつは顔面の筋肉を弛し緩かんさせた。敗北を認めたかのようだった。それもおかしな話だ。あいつは彼女を殺すことができた。彼女は死を覚かく悟ごした。負けを認めなければならないのは彼女のほうだった。だとしたら、あいつの表情にはそれ以外の意味があるのかもしれない。そういえば、あいつは昔も何度かそんな顔をしてみせたことがあった。あれは何だったのだろう。これは何だ。彼女は自分が振り下ろしかけていた棒を静止させていることさえ自覚していなかった。もちろん、鬼人オーガたちの怒ど号ごうもほとんど聞こえていなかった。あいつが顔をゆがめた。その表情はわかった。苦しいのか。つらいのか。おそらく、そんなところだろう。あいつはもう一発棒を食らっている。痛いはずだ。でも、何か違うような気がする。理由はわからないが、違うような気がしてならない。

あいつはゆっくりと頭上まで刃物を持ちあげて、柄つかを両手で握にぎった。

それから、全身に力をみなぎらせた。

顔つきは変わらなかった。

苦しそうだった。

　そんな顔をしたまま、敵を殺すつもりか。

　敵。

　敵なんだ。

　自分はあいつの敵だ。

　頭の中で雷らい光こうのようなものが閃ひらめいて、彼女の身体が反応した。あいつの右腕を棒でぶん殴なぐった。それでもあいつは刃物を手放そうとしなかった。逆の腕にもう一発食くらわせた。ようやく刃物が落ちた。弱い。なんて弱いんだ。弱いじゃないか。もう大だい丈じよう夫ぶだ。殺せる。簡単だ。

　あいつの額のあたりに棒を叩たたきつけた。

　あいつは崩れ落ちるように倒たおれた。

「ＡＡｈｈ……！」

　目が眩くらんだ。

　彼女は悲鳴をあげていた。声だけではなかった。身体中が、とくに胸のあたりがおぞましい悲鳴を発していた。軋きしんで、ひどい音を立てて、彼女をひどく苦しめた。

「ＡＡＡＡａａａｈｈｈｈ！　ＡＡＡＡＡＡＡａａａａｈｈｈｈｈ……！」

　こんなはずじゃなかった。気持ちよくないじゃないか。どうして。なんでちっとも気持ちよくないんだ。あいつは仰あお向むけに倒れている。目はうつろで、両手両足を投げだして、唇くちびるはだらしなくゆるんでいた。ごぼ、ごぼ、と血やら唾だ液えきやらを吐きだしているし、胸も上下しているので、死んではいないが、もう死のうとしている。もしかして、息の根を止めていないからだろうか。だから気持ちよくないのか。彼女はまだ殺していない。十分に粉ふん砕さいしていない。そうかもしれない。そうに違いない。そうであって欲しい。そうでないとしたら、こんなことは初めてだし、彼女の手には負えない。彼女はあいつの顔の真ん中あたりに棒を叩きつけた。ああ、死んだ。これで完全に死んだ。でも、おかしい。痛い。この手で潰つぶしたのはあいつの顔だ。それなのに、自分の胸の真ん中あたりが痛い。彼女はふと思い出した。ゴラグンデ

アに連れられて、やつの屋や敷しきに行ったときのことだった。やつは鬼人オーガをたくさん集めて、そいつらの前で彼女と獰どう猛もうな四つ足の獣けものを戦わせた。そのあとでそいつらに食い物や飲み物を振ふる舞まった。彼女も獣肉の塩焼きを与あたえられた。鬼人オーガたちは死んだ奴ど隷れいを食っていた。首だけは生のままで、あとはこんがり焼かれていた。その生首を投げあったり、地面に叩きつけたりして、鬼人オーガたちは愉ゆ快かいそうに遊んでいた。今、彼女が殺した奴隷も同じような扱あつかいを受けるのだろうか。鬼人オーガたちに食われることは間違いない。そう思った瞬間、彼女はたまらなくなった。たえられない。なんだかよくわからないが、それはいやだ。彼女は棒を振り下ろした。何度も、何度も振り下ろした。そのたびに鬼人オーガたちが歓かん声せいをあげた。彼女はあいつの身体からだをすり潰すように粉砕することしか考えていなかった。鬼人オーガに食われないようにするためには、こうするしかない。

　檻に戻もどされると、ゴラグンデアが獣肉の塩焼きを持ってきた。いつもなら周りの奴隷たちを警けい戒かいしつつ、すぐさまかぶりつくところだが、その気になれなかった。腹は減っているのに、食欲はわかなかった。この肉を食べても、吐はきだしてしまうのではないかという予感があった。獣肉とは何の肉だろうと考えたりもした。何の肉であろうと、美味であることには変わりないと思った。そうすると、塩味のきいた肉と熱い肉にく汁じゆうの旨うま味みが思い出され、たちまちのうちに口の中が唾液であふれかえりそうになった。あふれる寸前に、彼女自身の手で原形をとどめないまでに破は壊かいした奴隷の姿がまざまざと脳のう裏りに蘇よみがえり、酸すっぱい胃液がこみあげてきた。そんなことを何度か繰くり返しているうちに、彼女は自分が何を恐おそれているのか理解した。

　獣肉だと思っていた。ゴラグンデアは鬼人オーガの言葉で彼女にそう伝えた。だがしかし、本当に獣肉だったのか。少なくともこの肉はあの奴隷ではない。彼女自身の手で執しつ拗ように粉こな微み塵じんにしたのだから、そうであるはずがない。だけど、同じだ、と彼女は思った。彼女は奴隷を殺して肉をえる。この肉が何であろうと、同じことだ。彼女は奴隷を食っているのだ。人間を殺して食らっているようなものだ。鬼人オーガは人間を好んで食らうが、鬼人オーガの肉は食わないという。人間である彼女は人間を食っている。そうして生きている。生きのびている。共食いをしている。彼女は、獣だ、と思った。自分は獣だ。共食いをする獣だ。鬼人オー

ガは身体が大きくて力こそ強いが、決して頭のいい生き物ではなく、人間よりも獣じみていることを彼女は知っている。鬼人オーガを見下すような態度をとって殺される奴隷もたまにいた。それでも、自分よりはたぶんマシだ。自分は鬼人オーガ以下だ。鬼人オーガにも劣おとる野や蛮ばんな獣だ。

　彼女が考え事をしていることを見み抜ぬいたのだろう。いつの間にかすぐそばまで忍しのび寄っていた奴隷が手をのばしてきて彼女から獣肉を奪うばおうとした。彼女の身体はとっさに動いた。その奴隷の顎あごを肘ひじで強打して怯ひるませ、喉のどに手刀を叩きこんだ。奴隷は地面を舐なめる羽目になったが、獣肉を狙ねらっているのはその奴隷だけではない。彼女は檻おりの中を見回して奴隷たちを威い圧あつし、本能に従って獣肉にかじりついた。歯は軋ぎしりをしたくなるくらい旨かった。全身に力がみなぎってきて、呼吸が荒あらくなり、この肉を他ほかの誰だれかにとられてたまるかと思った。絶対に、ひとかけらも渡わたさない。ぜんぶ自分で食うんだ。そんな自分が化物のように感じられてならなかった。谷には大勢の鬼人オーガがいるし、彼女はこれまでいろいろな獣や奴隷と殺やりあってもきたが、自分ほどの化物にはお目にかかったことがない。あいたかった。あいつはそう言い残して死んだ。殺された。殺した。彼女が殺したのだ。この肉はあいつの肉ではないかもしれない。でも、あいつの肉だ。彼女はそれを食らっている。旨い、旨い、と食らっている。あいたかった。そうだ。あいたかったんだ。彼女もあいたかった。どうしてあいつにあいたかったのか、いまだにわからないけれど。

　檻の中の夜は長い。虎こ視し眈たん々たんと夜よ討うちの機会を狙っている奴隷たちがたくさんいて、片時も油断することができない彼女は、いつのころからか横になって眠ねむる習慣を捨てていた。座ったまま目を閉じて、ごく短時間、頭を休ませ、すぐに目を開けて周囲をうかがう。それを繰り返す。身体を横たえるのは、鬼人オーガの見張りが檻のすぐ外にいる昼間だ。手て強ごわい奴隷が闘とう技ぎ場に連れてゆかれている間に、睡すい眠みんをとることもある。どちらにしても、彼女の夜は長い。

　今夜はとくに長く感じた。頭がまるで休まらない。あいつのことばかり考えてしまう。誰かが身動きする。夜や襲しゅうか。ただの寝ね返がえりだ。またあいつのことが頭をよぎる。気配を感じる。気のせいか。寝息。鼾いびき。本当に寝ているのか。彼女の心はささくれ立っていた。いつもなら何でもないと受け流してしまえる物

音や空気の流れさえも、今の彼女には鋭するどい棘とげだった。彼女は膝ひざを抱かかえて右手の親指の爪つめを嚙かんだ。じっとしていることができなかった。あいつのあの表情を思い出すごとに、何か忘れていることがあるのではないかと考えざるをえなかった。たしかに彼女はいろいろなことを忘れていた。正確に言えば、忘れかけていた。それは街の風景だったり、人間たちだったりした。そうした記き憶おくはどれも断だん片ぺん的で、ぼんやりしてもいて、あると思えばあるし、ないと思えばない、その程度のものでしかなかった。彼女は今までもふとしたときにそうしたものや人を思い出すことがあったが、それは何なのだろうと考えこんだりはしなかった。そんな余よ裕ゆうはなかったし、そんなことをする必要があるようにも感じなかった。敵を殺し、腹を満たし、生き抜ぬくために、それはむしろ邪じゃ魔まだった。彼女は自分を研とぎ澄すまさなければならなかった。彼女は得物に鈍どん器きを選ぶことが多かったが、彼女自身は鋭えい利りな刃は物ものだった。自分自身を一本の刃やいばとなすことで彼女は生命を勝ちとってきた。そもそも自分はどうしてここにいるのかということすら、彼女は考えなかった。そんなことに頭を悩なやませていると弱くなる。弱い奴隷は強い奴隷に殺される。ときには自分より弱い奴隷にさえ殺されてしまう。その現実を彼女は知っていたから、忘れようとしていたのだ。かつてあの街で人々に囲まれて暮らしていた自分は、野蛮な獣では決してなかったことを。

　長すぎる夜だった。

　彼女は音を立てずに立ちあがって、檻の格こう子しをつかんだ。

　気のせいだろうか。違ちがう。騒さわがしい。遠くだ。鬼人オーガが宴うたげでもしているのか。それはない。夜通し騒ぐことはあっても、夜中にいきなりどんちゃん騒ぎを始めることはないはずだ。だが、紛まぎれもない、あれは鬼人オーガの声だ。叫さけんでいる。鬼人オーガの言葉だ。ずいぶん遠いのでよく聞きとれないが、何かを呼んでいるようだ。仲間を呼びよせようとしているのか。そうではない。あれは助けを求めているのだ。

　奴ど隷れいたちの檻は谷の外れにある。中央の闘技場を挟はさんで、逆側のあたりか。谷の入口だ。揺ゆれている。あれは炎ほのおだ。何かが起こっている。それが何かはわからないが、明らかに何かが。彼女が知るかぎり、こんなことはいまだかつてない。異変を察知して、谷のそこかしこで鬼人オーガたちが目覚めはじめたようだ。入口方面に向かっているのか。敵ガランダだ、と叫ぶ鬼人オー

ガの声が聞こえた。人間マルグレダだ、という声も聞こえた。人間。人間の敵。どういう意味だろう。やがて奴隷たちも起きだして格子に押しよせてきた。攻せめてきたんだ、と年とし嵩かさの奴隷が呟つぶやいた。その奴隷は谷にきてからまだ日が浅かった。やせっぽちで、いつも檻の隅すみで震ふるえていて、闘技場に引っぱりだされれば呆あっ気けなく殺されるだろうことは目に見えていた。そういう奴隷はそれほど珍めずらしくない。鬼人オーガの奴隷になりきる前に、人間のまま死んでゆく奴隷だ。奴隷の中では蔑さげすまれ、食い物を奪われ、塵ごみのように扱あつかわれる存在だが、今は違った。奴隷たちはその奴隷になっていない年嵩の奴隷の声を聞いて、無視したり口を塞ふさごうとしたりするどころか、色めき立った。

　ぼくたちを助けにきたんだ、と年嵩の奴隷が叫ぶと、奴隷たちは鬼人オーガのような咆ほう哮こうをあげながら格子を叩たたきだした。人間の言葉で何か言う奴隷もいた。ほとんど聞きとれなかった。この檻だけではなかった。どの檻でも騒ぎが起こっていた。それにもかかわらず、奴隷たちを静かにさせようと檻に近づいてくる鬼人オーガはいなかった。それどころではないようだった。もはや疑う余地はなかった。戦いだ。いや、戦いくさだ。何ものかが鬼人オーガの谷を攻めている。鬼人オーガたちは応戦に必死で、奴隷にかまっている暇ひまなどないのだ。

　出られるぞ、ここから、と年嵩の奴隷が拳こぶしを振ふりあげた。帰れる。家に。会えるんだ、お父さんや、お母さんに、お姉ちゃんや、弟に、妹に、会えるんだ。

　奴隷たちも完全に興奮していた。鬼人オーガは押されているようだった。戦の気配はもう闘技場のあたりまで迫せまっている。鬼人オーガの声よりも、人間の声のほうが大きく聞こえるくらいだった。人間。そう、谷を攻めているのは人間たちだ。きっと大勢の人間だ。奴隷たちはあっという間に奴隷ではなくなっていた。人間に戻もどっていた。人間に戻ってしまえば、奴隷たちは子供でしかなかった。鬼人オーガたちは幼い人間をさらってきて奴隷にし、檻に閉じこめて、互たがいに殺しあいをさせ、死んだ奴隷を食くらう。奴隷は大人になることはできない。皆みな、その前に死ぬ。あの年嵩の奴隷も、他の奴隷に比べれば年がいっているというだけの話で、まだ大人ではない。お母さん、とか、ママ、とか、パパ、とか、父さん、とか、奴隷たちが口々に叫びだした。彼女は口をつぐんでいた。彼女は覚えていた。鬼人オーガたちは小さな街を、彼女

の村を襲おそって、幼い子供以外は皆殺しにして食ってしまった。父や母はもういない。彼女には帰る場所がないのだ。

　彼女と同じ境きよう遇ぐうの奴隷も、おそらく少なくはないだろう。だが、彼女が見たところでは、彼女のように落ちついて状じよう況きようをうかがっている奴隷はいなかった。彼女は醒さめていた。もし檻おりから出ることができて、鬼人オーガの谷とおさらばできたとしても、彼女が野や蛮ばんな獣けものであることには変わりがない。あいたかった。そう彼女に伝えて、彼女に殺されたあの奴隷のことが頭から離はなれなかった。今、闘とう技ぎ場に引きだされたら、自分は負けるかもしれない、と彼女は思った。今の自分は弱い。弱い自分は生き残れないだろう。人間たちはとうとう闘技場を突とつ破ぱしたようだ。鬼人オーガたちの家々に火が放たれていた。鬼人オーガの谷が燃えていた。奴隷たちは火が檻にも燃え移るのではないかと心配しはじめた。彼女にとってはどうでもよかった。彼女はただひたすら悔くいていた。あいつを殺さなければよかった。あいつはわざと殺されたんだ。あいつは殺されることを選んだ。あいたかった。同じ気持ちだったのに。でも、殺すしかなかった。殺されるか、殺すか。どちらかしかない。だとしたら、殺すしかないじゃないか。あいつも同じだった。だから、あいつは決めた。殺されることにした。殺したくなかったからか。ああ、自分だってあいつを殺したくなかったのに。殺すしかなかったから、殺しただけなのに。

　檻の周りには明かりがない。月明かりだけだ。

　ちらりと黒い人ひと影かげが見えたような気がした。

　人影。

　鬼人オーガではない。

　人間だ。

　そいつは速かった。夜の闇やみを貫つらぬく黒い光のようだった。あっという間だった。そいつは彼女が入っている檻の扉とびらに近づいて、手にした刃物を一いつ閃せんさせた。硬かたいものがぶった斬ぎられる音がして、奴隷たちが扉を押し開けた。人間はそいつだけではない模様だった。他ほかの人間たちが別の檻の扉を次々と開けた。ほらよ、しょうがねぇから助けてやる、せいぜい感謝しやがれ。さあ、急いで。押すなよ、怪け我がするぞ。そんな声

も聞こえた。奴隷たちは、だが、たぶんまるで聞いていなかった。とにかく先を争って檻を飛びだしていった。彼女はその場から動かなかった。自分の意志で動かなかったとも言えるし、動くことができなかったとも言える。彼女にはあてがなかった。檻を出て、鬼人オーガの谷から離れて、いったいどこへ行けばいいのか。もしあいつを殺していなければ、と埒らちもないことをぼんやりと考えたりもした。あいつは自分をどこかへ連れていってくれただろうか。ひとりきりでなければ、何か思いついただろうか。

「やれやれ、ものすごい勢いだな」

　人間の声を聞いて我に返った。

　その男は別の檻を開放したあとで、まだ彼女が残っている檻に近づいてきたようだ。

　彼女の檻の扉を開け放った男が、そうだネ、と微かすかに肩かたをすくめてみせた。

「鬼人オーガにとらわれていた子供たちよりも、こちらのほうに怪我人が出ていないか心配なくらいだヨ」

「ベティ、ローガン、ダリエロ。点呼でもとっといてくれ」

「なんで俺がてめぇに指図されなきゃならねぇんだよ、クラニィ」

「いちいちうるっさいわねぇ。それくらいぱっぱとやったらどうなのよ」

「黙だまりやがれ、ニセ乳女。俺は何も必要なときに必要なことをやらねぇとか我わが儘まま言ってるわけじゃねぇ。ただクラニィの野や郎ろうに命令されるのが気にくわねぇだけだ」

「はは……。でもさ、それって、一いつ般ぱん的には我が儘っていうんじゃないかな」

「言わねぇな。俺の辞書の内容は他の誰だれでもねぇ、俺が決める。ローガン、てめぇの加か齢れい臭しゅうくせぇちんけな意見なんざちっとも重要じゃねぇんだよ、この薄うすらハゲめ」

　何人いるのだろう。よくわからないが、人間たちは両手の指でも足りない人数で奴ど隷れいたちを檻から解放して、彼女がいる檻の

周りに集まってこようとしているらしい。彼女はぼんやりと闘技場のほうへ目をやった。大半の奴隷たちは闘技場に向かって走っていった。おそらく谷を出るつもりなのだろう。自分はどうするのか。彼女の中に答えはなかった。答えどころか何もなかった。彼女はからっぽになってしまっていた。

「キミは逃にげないのか」

　すぐ近くだった。いつの間に檻に入ってきたのだろう。たぶん、彼女の檻の扉を開けた男だ。男は黒い服を着ていた。髪かみの毛も黒くて、黒ずくめだった。檻の周りに明かりはなかったが、今や谷中の建物が燃えていた。彼女は男の顔を見た。白い顔だった。青い眼めをしていた。彼女の身体からだが震ふるえだした。

　どこかで見たことがあるような気がする。

　会ったことがあるのか。

　あいたかった。

　あの言葉が、声が、頭の中に響ひびいた。

　顔立ちや背せ恰かつ好こうに共通点はないが、似ている。目が同じ色だ。色だけではなく、眼まな差ざしがどことなく似ている。あいつはおかしな奴隷だった。あんな目で他の奴隷を見る奴隷は他にいなかった。鬼人オーガが鬼人オーガを見る目つきとも違ちがう、相手を出し抜ぬいてやろうとか、欺あざむこうとか、寝ね首くびを掻かこうとか、そういうことは一いつ切さい考えていないかのような、ひどく穏おだやかで、透すきとおった、それでいて底に何か沈しずんでいそうな目で、あいつは他の奴隷たちを見つめていた。あの目に似ている。

「おいで」

　男が手をのばしてきた。

　彼女も手をのばした。

　男は彼女の手を握にぎって檻の外へと導いた。

　檻から出ると、夜目にも鮮あざやかな白はく髪はつの男が彼女を見て顔をしかめ、鼻をつまんだ。

「何だ、その汚きたねぇ餓が鬼きは。つーか、マジでくせぇなんてもんじゃねぇぞ。どんだけ風ふ呂ろ入ってねぇんだ」

「一人だけ残っていた。放ほうっておくわけにもいかないしネ」

「何たわけたことぬかしてやがる。もともと俺らが金で請うけ負った仕事は夜や襲しゅうの先せん鋒ぽうだけだろうが。そんな塵ゴミ屑クズなんざほっぽっときゃあいいんだよ」

「いや。連れていく。文句があるかい」

「あるな。大ありだぜ」

「頭領マスターはボクだヨ、ダリエロ」

「都合のいいときだけ大将風吹ふかせるんじゃねぇ。殺やっちまうぞ、てめぇ」

「殺れるものなら殺ってみるといい」

「上等じゃねぇか」

「おい、そのへんにしておけ」

　別の男が頭を掻きながら割って入ってきた。

「まったくお前さんたちときたら、くだらんことで毎度毎度……レクリエーションみたいなものなのかもしれんし、いいんだがね。べつに。ただ、今は勘かん弁べんだ。頼たのむから、あとにしてくれ。見ろ。だいぶ火の手が回ってきてる。そろそろ谷から出ないとまずいぞ」

　白髪の男が舌打ちをして離はなれていった。彼女の手を引いている男は、あたりを見回してから割って入ってきた男にうなずいてみせ、他の人間たちに、よし、引き揚あげよう、と声をかけた。人間たちの行動は素す早ばやかった。皆みな、競きそいあうことなく、譲ゆずりあって流れを停てい滞たいさせることもなく、整然と、よどみなく、軽快に闘技場のほうへと駆かけていった。男がその最さい後こう尾びにつこうとして彼女の手を引っぱった。彼女は反射的に引っぱり返した。ためらいがあった。男は彼女を谷から連れだそうとしている。だけど、出てどうするんだ。行くところなんかない。強い奴隷だった彼女はもうここにはいなかった。彼女は自分が

何ものなのかわからなかった。

「どうしたの。ここにいたら焼け死ぬだけだヨ。逃げないと」

　男の顔を正視できなかった。彼女は人間の言葉を理解できたが、うまく話すことはできそうになかった。彼女はここにいたいと思っていた。ここにいたら、炎ほのおに巻かれて死ぬのかもしれない。それでもいい。死んでもいい、死にたいと考えたことはこれまで一度もなかったが、今の彼女は自分を終わらせてしまいたいと願っていた。彼女は疲つかれきっていたし、絶望していた。これ以上、何かをする気力はなかった。

「つかまって」

　不意に自分の体重を支えている感覚が失うせた。彼女は狼ろう狽ばいして、とっさに男の言うとおりにした。男の身体にしがみついた。彼女は男に抱かかえあげられていた。

　男は彼女を見下ろして口くち許もとをゆるめた。

　あの奴隷が顔面の筋肉を弛し緩かんさせてみせたときの顔つきに少し似ていた。

「ボクはアジアン」

　あじあん。

　アジアン。

　ああ――、

　あたしは知っている。

　この人を知っている。

「キミの名前は？」

「……なま、え」

　彼女は遠い記き憶おくをたぐりよせようとした。それは指先でふれるたびに消えてしまったり、崩くずれてしまったりして、あまりに脆もろく、頼たよりなかった。彼女は助けを求めてアジアンの目

をのぞきこんだ。そこに何か手がかりがあるのではないかと探さぐった。彼女は唇くちびるを動かしてみたが、声にならなかった。もう少しでたどりつきそうなのに、そこに行きつけなかった。予想もしていなかった出来事がきっかけになった。

　アジアンが着ている服の襟えりから何かが出てきた。それは黒かった。真っ黒で、丸っこかった。どうやら生き物のようだった。

　アジアンはその小動物をちらりと見て、ああ、これは、と少しだけ首を傾かたむけてみせた。

「ナジだヨ。懐なつかれてしまっているみたいでネ。勝手に服の中にもぐりこんでくるから困っているんだ」

「な、じ」

「そう。ナジ。キミは？」

「……か」

　あたしは。

　あたしの名前は。

「か……い」

「カァイ？」

　少し違うと彼女は思った。だけど、いいか。カァイ。それでいい。

　彼女がうなずくと、じゃあ、カァイ、しっかりつかまっていて、アジアンはそう言うなり走りだした。彼女はアジアンの背中に両手を回し、その胸に顔を押しつけて、じっとしていた。谷がどうなろうとしているのか、どうなったのか、気にならないわけではなかったが、一いつ切さい見なかった。自分の足で走っているわけでもないのに、動どう悸きがした。あたしを抱えているのに、どうしてアジアンはこんなに速く走れるんだろう。彼女はそんなことを考えて、アジアンは強いんだ、と結論づけた。あたしはアジアンに勝てるだろうか。無理かもしれない。あたしはもう弱い。あたしは強い奴ど隷れいじゃなくなってしまった。ひどく不安だった。ずっとこのままでいたいと思った。アジアンにくっついていたい。

　彼女はアジアンに抱えられたまま鬼人オーガの谷を出て、谷を襲おそった人間たちと一いつ緒しよに山地を抜ぬけ、平へい坦たんな森を何日か歩いた。その間、彼女はほとんどアジアンから離れなかった。アジアンが近くにいないと、心細くてたまらなかった。声をかけてきた人間のうち、クラニィと名乗る男からはあまり危険な感じを受けなかったが、他ほかはだいたい血のにおいがした。そうでない人間も、彼女を忌き避ひしているか、侮あなどっているようで、めったに近づいてこなかった。ダリエロという名の白はく髪はつの男は、彼女を指さして、つーかどうすんだよ、これ、と顔をゆがめてアジアンに言った。てめぇが拾いやがった塵ゴミ屑クズなんだからな。てめぇがどうにかしろよ。俺らは知らねぇぞ。アジアンが、少なくともキミみたいな外げ道どうに世話をさせたりはしないから、心配しなくていいヨ、と答えると、人間たちが愉ゆ快かいそうに騒さわいだ。やがて人間の街にたどりついた。

　アジアンが二匹ひきのメスを呼びよせて、この子を風ふ呂ろに入れてあげてくれないか、と頼たのんだ。一匹のメスはやたらと背が高く、もう一匹は小こ柄がらで肉づきがよかった。肉づきのいいメスは不満げだったが、背の高いメスが、う、うん、わかった、いいよね、ナツコちゃん、と肉づきのいいメスを見た。肉づきのいいメスはアジアンと彼女を見比べて、まぁ……アジアンの頼みだしぃ、いいけどぉ、一発やらせてくれるなら──と言ったところで、背の高いメスが何やら声を荒あららげ、肉づきのいいメスは、嘘うそ、嘘、冗じよう談だんだってぇ、キスだけでいいからぁ、とアジアンにしなだれかかろうとした。アジアンは肉づきのいいメスをかわして、じゃあ、頼んだヨ、とどこかへ行ってしまった。彼女はうろたえた。アジアンに見捨てられた。しゃがみこんでしまいそうになったが、背の高いメスに腕うでをつかまれた。肉づきのいいメスは彼女にさわりかけて、飛びのいた。てゆーかぁ、超ちようくせぇっ。背の高いメスが肉づきのいいメスを睨にらみつけた。だめだよ、ナツコちゃん、そういうこと言っちゃ。だってぇ、事実じゃん。事実だからいいっていうことにはならないよ。この子はずっと鬼人オーガにつかまってたんだから、しょうがないんだし、だから、お風呂に入れてあげるんだよ、あ、アジアンに、頼まれたんだから、ちゃんとしてあげないと。肉づきのいいメスは、わーかったってばぁ、と言いながら、彼女の腕をがばっとつかんで、背の高いメスと二匹がかりで彼女をどこかへ連れていった。ずいぶん高い建物だった。その中の一室で、彼女は服を脱ぬがされ、素裸はだかにされて、床ゆかがつめたい別の部屋で湯を浴びせられた。二匹のメスも半はん裸らになって、彼女の身体からだを布でごしごしこすった。彼女は

何度も逃にげようとしたが、そのたびにメスどもにつかまって押さえつけられた。

背の高いメスと肉づきのいいメスは同じ父親と母親から生まれたらしく、背の高いほうが姉のヴィクトリア、肉づきのいいほうが妹で、ナツコという名前だった。ナツコは、やばい、やばい、マジやばすぎ、と言いながら、丁てい寧ねいに彼女の肌はだから汚よごれや垢あかを落としていった。ヴィクトリアのほうは体格に似つかわしく力ちから業わざだった。正直、ヴィクトリアにこすられたところはたまに痛みさえ感じるほどだったが、耐たえられないほどではなかったし、途と中ちゆうからなんだか気持ちよくなってきた。頭にとろっとした液体をかけられて、頭皮や髪かみの毛をごしごしやられたときなどは半ばうっとりしてしまった。身体中、隅すみから隅まで、ものすごい時間をかけて丹たん念ねんに洗ってもらい、また自分でも見様見み真ま似ねで洗った。ナツコが、うわ、こいつすげぇ、真っ赤だよ、真っ赤、ゆであがりじゃん、これじゃあ、と彼女を指さして笑った。ヴィクトリアは、今は赤くなってるけど、すぐなおるから、と彼女の頭を撫なでた。てゆーかぁ、風ふ呂ろ場ばがやばいんですけど、あたしらもふくめて全体的に、すっげぇー汚れてるし、とナツコが自分の腰こしと胸を覆おおっている薄うすい布を脱いだ。姉さんもさぁ、めんどくさいから、もぉー一緒にシャワー浴びちゃおうよ。そうだね。ヴィクトリアもナツコと同じように全裸になった。その前に、洗せん濯たくしよっか。ナツコが部屋の脇わきにある据すえつけの大きな桶おけに湯をためて、真っ黒になった大量の布をその中に突つっこんだ。ナツコとヴィクトリアは布をもんだりこすったりしはじめた。彼女も手伝った。それから、桶をきれいにして湯をため、その中に浸つかった。あたたかかった。とてもあたたかかった。ナツコが彼女をまじまじと見て言った。けどさぁ、あんた、きれいにしてやった甲か斐いあったかも。かわいいよ。地味に。よかったねぇ。あんなとこから出られて。

風呂からあがると、ナツコとヴィクトリアに二人がかりで服を着せられた。肌の赤みはだんだんと消えてきた。何か色のついた液体が入った透とう明めいの容器を渡わたされて、飲め、と言われたのでそのとおりにしたら、つめたくて、味はほのかだったが、とてもおいしく感じた。一息ついて、身み繕づくろいをすませた二人に連れられ、また別の場所に足を運んだ。大勢の人間がいる街は、彼女にとって珍めずらしいものだらけで、それでいてなぜだか懐なつかしかった。彼女も鬼人オーガにさらわれる前は人間の街にいた。そのせいかもしれないと思った。行き交かう人間たちは、奴隷たちに

比べればたいがい無む警けい戒かいで無防備に見えたが、そうではない者もいた。危険なにおいのする人間とすれ違ちがうときは緊きん張ちようした。そんな彼女に気づいて、ナツコは笑い、ヴィクトリアは、そんな、怖こわがらなくても、大だい丈じよう夫ぶだよ、たぶん、と言った。まだ昼間だし、このあたりは、あんまり危なくないほうだから。彼女はヴィクトリアの言葉を信じるべきか判断がつかず、相手が自分にとって脅きよう威いになりうるかどうか見きわめる作業をやめることはできなかった。ただ、ヴィクトリアとナツコは自分を襲わないだろう。そのつもりがあるのなら、いくらでも機会はあった。それに、この二人なら、素す手ででも殺せる。恐おそれる必要はない。そう自分に言い聞かせている間に、二人の住居だったと思われる建物よりはだいぶ小さな別の建物にたどりついた。

不思議だった。

見覚えがある場所だった。

あたしはここにきたことがあるんだろうか。

そんなはず、ないのに。

建物に入ると、テーブルや椅い子すがたくさん置かれていて、人間も大勢いた。何とも説明できない、とにかく食欲を刺し激げきしてやまない香かおりがして、腹が鳴った。人間たちは何か食べたり飲んだりしながら話をしていた。ヴィクトリアとナツコが彼らに声をかけると、彼らも一言二言返してきた。彼女を見て、誰だれだそれ、と首を傾かしげる者もいた。頭とう髪はつが少し薄くなっている小太りの男が近づいてきて、やあ、きれいになったねえ、と手をのばしてきた。彼女はよけようとしたが、そのときにはもう頭をぽんぽんと軽く叩たたかれていた。そうだ、きみもおなかがすいているんじゃないの。好きなものを食べるといいよ。といっても、よくわからないかな。ナツコ、何か適当に選んであげて。ナツコは、はいはい、とうなずいてみせ、空いている椅子を見つけて彼女を座らせた。前にも左右にも後ろにも人間がいて、どうにも落ちつかない気分だった。ここにいる人間の全員か大半が谷を襲おそった者たちだということはすぐにわかったが、かといって安心できるわけではない。彼女はアジアンを捜した。アジアンは少し離はなれた場所にいた。椅子に座って、さっき彼女の頭に手を置いた男や丈たけの長い服を着た男と何か話していた。彼女の視線に気づいて、こちらを見たが、微かすかに口くち許もとをゆるめてみせただけで、すぐに

男たちに向きなおった。心許なくなって、彼女は下を向いた。席を離れていたヴィクトリアとナツコが戻もどってきて、テーブルの上に旨うまそうなにおいがするものを載のせたときは少し胸が躍おどったが、ここで食べるのか、と思うと、暗あん澹たんとした気分になった。一応、顔を知っているだけで、何をしてくるかわかったものではない人間たちに囲まれて、こんな旨そうなものを食うなんて。奪うばわれたらどうする。それとも、食い物だらけなので、大丈夫なのか。いや、油断はできない。

「どうしたの。食べなよぉ。いーんだよ、好きなだけ食べて。おなかすいてんでしょ。さっきぐーって鳴ってたし」

「そ、そうだよ。食べて。食べないと、大きくなれないし。でも、わたしみたいに大きくなっちゃったら、それはそれで、いやかもしれないけど……」

「まーたぁ。姉さんってばすぐそういうこと言うし。べつに気にすることないって。でっかくたって姉さんは十分かわいいし」

「そう言ってくれるのは、ナツコちゃんだけだよ……」

「んなことないってぇ。そぉーんなふぅに卑ひ屈くつになるから、余計さぁ──って」

　彼女はテーブルの上の骨付き肉に両手をのばして、持てるかぎり持った。ヴィクトリアとナツコは驚おどろいているようだが、彼女は二人が何やら喋しゃべっている間、ずっと考えて、迷っていたのだ。その結果、こうするしかないと決断した。彼女は骨付き肉を抱かかえるようにして椅子を立ち、広い部屋の隅のほうへと走った。人間たちが騒さわぎだしたが、かまわなかった。彼女にとって重要なことは、第一に安全の確保だった。第二に食欲を満たすことで、この二つは両立させなければ何の意味もない。彼女は部屋の角にうずくまり、人間たちをすべて視界に収められることを確かく認にんしてから骨付き肉にかぶりついた。見た目からしてただ焼いただけではないと思っていたが、いったいこれは何だ。刺激が強きよう烈れつすぎてくらくらしたが、同時に頭の芯しんがとろけそうになった。彼女は無我夢中で一本目を食べつくして、味がしみている骨を捨てずに二本目にとりかかろうとした。はっとしてあたりを見回した。見られている。奪う気か。くるのか。

　彼女は一番近くにいる人間に歯を剝むいてみせた。威い嚇かくが

効いたのか、そいつは目をそらしたが、こっちを見ている人間はまだたくさんいる。やはり狙ねらわれているのか。それでも、骨付き肉の魅み力りよくにはあらがえなかった。彼女は人間たちを睨にらみつけながら、二本目の骨付き肉に食くらいついた。旨くて気が遠くなりかけたが、我が慢まんした。この肉は誰にも渡わたさない。ぜんぶ平らげて、あたしは強くなる。強くなって、でも、どうするのか。彼女はもう奴ど隷れいではない。殺すべき奴隷はいない。腹は減っている。あたしは肉を食いたい。飽あきるまで食らいたい。それくらいしかない。行き場はない。帰る場所もない。あたしはいったい何なんだ。

　どうしてか、急に骨付き肉の味が薄うすくなったように感じた。

　アジアンが歩いて近づいてこようとしていることには気づいていた。あいつもか。あいつまであたしの肉を狙っているのか。アジアンは、だが、彼女のすぐ前で立ち止まり、しばらくの間じっとしていた。ただ黙だまって彼女が肉を食っている姿を眺ながめていた。何だ。なんでこいつは何もしないであたしを見ているんだ。隙すきをうかがっているのか。無む駄だだ。油断はしない。気は抜ぬかないが、早く食べてしまわないといけない。彼女は急ごうとした。突とつ然ぜんだった。

　アジアンがしゃがんで彼女の頰ほおに手をふれた。

「ここは大丈夫だヨ」

　彼女はまじまじとアジアンの顔を見た。

　薄青い眼めを見つめた。

「オトミさんの店で乱暴狼ろう藉ぜきを働く怖いもの知らずはそうそういないサ」

　彼女は何か答えた。どう返事をしたのか、自分でもよくわからなかった。ただ、大丈夫なんだ、と思った。そうか。大丈夫なんだ。誰もあたしの食い物を奪わないんだ。どういうわけか、疑いは抱いだかなかった。アジアンがそう言うのなら、そうに違ちがいない。彼女は骨付き肉をぞんぶんに味わって、たまに顔を上げると、アジアンがいた。アジアンの肩かたの上にはナジがいた。持ってきた骨付き肉をぜんぶ食べてしまうと、ヴィクトリアとナツコが他の食べ物も持ってきてくれた。どれもこれも旨かった。お箸はしとか、ス

プーンとか、フォークとかの使い方、教えてあげないと、だね、とヴィクトリアが言った。ほんと、せっかく貸してやった服がさぁ、汚よごれ放題じゃん、とナツコがため息をついた。彼女は気にせず食べた。何も考えず、満腹になるまで食べた。ふと思った。あたしはもう奴隷じゃない。あたしには帰る場所がない。だったら、どこに行ってもいいんだ。どこかへ。だけど、どこにも行きたくなんかない。

　顔を上げると、まだアジアンがそこにいた。

　彼女は口の周りを袖そでででぬぐった。

　何度もためらったあげく、やっと声を出すことができた。

「……あたし、ここにいても、いいか」

「もちろん」

　アジアンは屈かがみこんできて、彼女の唇くちびるの下から顎あごのあたりを指でなぞった。全身が震ふるえた。力が抜けて、勝手に息がもれた。アジアンにしがみつきたい。彼女はそうした。

「──ずっとここにいていいんだヨ。ずっと、ネ」

Omenage 897 12th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン第三区

"n'ebula,"

chapter.3

放置の不可能性

やたらと猫ねこが多いと思ったら、その建物の持ち主で、一階の定食屋の経営者にして料理人でもあるおばあさんが餌えさをやるもので、野の良ら猫ねこがどんどん集まってきて、半ば飼い猫化しているのだという。マリアローズは猫が好きなので、それはべつにいいのだが、なんで自分がここにいるのかという点については納なつ得とくできかねていた。なんだか大変なことになってるみたいだから、じゃあ、僕はこれで、と別れてもよかったはずだし、実際、そうしようとも考えたのだけれど、アジアンの動どう揺ようっぷりがひどくて、大だい丈じよう夫ぶかなこいつ、みたいについ思ってしまって、そこはほら、なんていうか、僕の人間的なすばらしさっていうか、困ってる人を見ると放ほうっておけない的な、だから、しょうがない。しょうがなかった。だって、じゃーねー、ばいばーい、とか、そんなかんじに振ふる舞まえるような雰ふん囲い気きじゃなかったし、僕としてもいろいろあって、仲間、そう、仲間っていうのがやばくて、そこは泣き所っていうか、無視できないっていうか、そこまで非情になれないっていうか、でも、やっぱり判断ミスったかな……。

ここでは何ですし、n'ebulaにでも、と言って歩きだしたヨグとかいう男のあとをなかなか追おうとしないアジアンの背中をつついて、行かなくていいの、とうながしてしまった。ああ、と力のない声で答えたアジアンの顔はまだ青ざめていた。足どりも、覚おぼ束つかないとまではゆかないものの、足に力が入りきっていないように見えて心こころ許もとなかった。アジアンは少し歩いて立ち止まり、振り返った。何か言おうとした、というよりは、何をどう言うべきかわからない、そんな表情だった。あのときはたぶんチャンスだった。あ、それじゃ、僕は買い物があるし。そう告げてアジアンに背中を向け、鉄てつ鎖さの憩いこい場の市場目指してダッシュすればよかった。

できなかった。

どうしてもできなかった、というほど考えに考え抜いたわけじゃない。

ふらっと足が前に出てしまった。歩きだして、アジアンに追いついてしまうと、もうしょうがないか、という気分になっていた。行こ、ほら。アジアンにそう声をかけたような記き憶おくもある。アジアンは少し呆ぼう然ぜんとしていて、ぜんぜんしゃっきりしてい

なかったから、ちょっと苛いら々いらして、てゆうか、ショックなのはわかるけど、きみ、頭領マスターなんじゃないの、昼飯時ランチタイムの。仲間が行方ゆくえ不明になっちゃったとか、かなりの緊きん急きゆう事態なわけだから、頭領マスターが一番しっかりしないといけないはずなのに、腑ふ抜ぬけてる場合じゃないのに、何なんだよ、そのざまは。

　やめて欲しい。

　見たくないんだよ。

　きみのそういう姿なんて、見たくない。

　見たくないなら、見なくてすむように、さっさと買い物にでも行けばよかったのにさ。

　僕ってば、いったい何やってるんだ。

　お昼と夕方の間という時間帯のせいもあって、定食屋n'ebulaはがらんとしている。マリアローズとアジアン、それからヨグ以外で客らしき者といえば、並べた椅い子すの座面の上で横になっている老人だけだ。なんだかやけに派手な着物を着た素敵ファンキーなご老体だが、ここは定食屋であって、昼ひる寝ねをするための店ではないと思われるので、やっぱり客とは言いがたいか。あとは、カウンターの向こうで椅子に座って腕うで組ぐみをしている浅黒い肌はだのおばあさんと、カウンター席に突つっ伏ぷして居い眠ねむりをしているらしいエプロン姿の若い男がいる。おばあさんはたぶん建物の持ち主にしてこの定食屋の女主人オトミさんで、男のほうは従業員だろう。

　それにしても、店に入ったときにおばあさんが低い声で、いらっしゃい、とむしろ威い圧あつするように言ったきり、水も出さないというのは客商売としてどうなのか。従業員にいたっては完全に熟じゆく睡すいしているようで、結局、ヨグが勝手にカウンターに入って三人分の水を持ってきてくれた。どうやらアジアンとヨグはこの店の常連客らしいので、放置気味の対応なのかもしれないが、マリアローズとしては一言もの申したい。常連だからこそ、手を抜ぬかず大切にするべきなのではないか、と。そんなことを考えてしまうのも、空気が重苦しくて、雰囲気が悪いせいで、しかも、自分がこんな状じよう況きよう下かに置かれていることに対して、しょうがない、程度の消極的な肯こう定てい感しか持つことができない

でいるわけだから、とにかくこの現実から目を背そむけたい。逃にげたい。もうほんとに勘かん弁べんしてよ。自分のせいなんだけど。

「最初に僕が異変に気づいたのは」

　マリアローズの左斜ななめ前の椅子に座っているヨグは、右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直して、水を飲むのかと思いきや、コップの上に掌てのひらで蓋ふたをした。いったい何のつもりだろう。どうもあやしい男だ。

「もう五日前になりますか。アジアン、あなたはご存じかもしれませんが、僕は鉄鎖の憩い場でよく散歩を楽しんでいます。あそこに一日いて、仲間を一人も見かけないということは、まあ、まずありません。変だなと思いました。しかも、それが三日もつづいた。それで、僕はここにきたのです。このn'ebulaにね。そちらの方、マリアローズさんは」

「……自己紹しよう介かいはまだしてないと思うけど」

「あなたは有名人ですから」

　ヨグは首を傾かたむけてコップから手を外した。マリアローズは目を疑った。

　水がない。

　そんなバカな。マリアローズをふくめて、まだ誰だれも水に口をつけていないが、ヨグのコップにもちゃんと水が入っていた。それが消えてしまった。いつ消えたのか。さっぱりわからないけれど、ヨグがコップに掌で蓋をしたときはまだあったと思う。魔ま術じゅつ、いや、手品か。ヨグはどんな手品を使ったのか。

「鉄鎖の憩い場で何度もお見かけしたことがありますしね。それに、そう、いつぞやは泉セン里リでも。覚えてらっしゃらないでしょうが、僕はあなたとお会いしたことがあるのですよ」

「ごめん。きみの言うとおり、ぜんぜん覚えてない」

「無理もありません。僕たちはわりとあなたを知っていますが、あなたは僕たちのことをほとんど知らないでしょう？」

「ヨグ」

　少し怖こわい声だった。こんな声も出すんだ。虐殺人形カーネイジドール。その異名が頭に浮うかんで、でも、以前にも聞いたことがあると思いあたった。

　一度しか言わない。よく聞け。その人から離はなれろ。さもないと全員殺す。

　マリアローズは自分の右斜め前の椅子に座っているアジアンの表情を横目でうかがった。アジアンはマリアローズを見なかった。ヨグのほうにも顔を向けていない。テーブルに目を落としていた。凍こおりついているかのような無表情だ。怒おこっているのか。そう見える。でも、たぶんヨグに腹を立てているのではない。当然、マリアローズに対してでもない。おそらくアジアンは、自分自身に憤いきどおっている。

「余計なことはいい。説明を」

「これはどうも申し訳ありません。すぐに話が脱だつ線せんしてしまうのは僕の悪い癖くせですね」

　ヨグはもう一度コップに掌で蓋をして、マリアローズを見た。

「そうだ、ここのことです。n'ebulaは昼飯時ランチタイムのたまり場でしてね。たまにみんなで食事をすることもありますし、上は家賃を払はらって借りていて、宴えん会かいを催もよおしたり、隠かくし芸大会をやったり、そんなふうに利用しているわけです。僕がここにきた理由は理解していただけましたか」

「だから──きみは鉄鎖の憩い場で仲間の姿をさっぱり見かけないからおかしいと思って、誰かと会える可能性がもっと高そうなここにきてみたっていうことでしょ」

「ええ。完かん璧ぺきです」

　ヨグは嬉うれしそうにうなずいてみせたが、この男は人を何だと思っているのだろう。完璧も糞くそもない。話を聞いていれば、それくらいのことは十歳の子供でもわかる。ひょっとして、マリアローズを虚こ仮けにしようとしているのか。むっとしながらもアジアンのことが気になって、またちらっと見てみたら、依い然ぜんとしてお面のような顔つきだった。ほんとに大だい丈じよう夫ぶか

な、こいつ。なんか、あんまり大丈夫じゃなさそうだけど。

「──というわけで、僕はオトミさんに尋たずねてみました。ご飯時だったのにもかかわらず、仲間は誰もいませんでしたから、答えは半ば予想していましたが、案の定でした。やはりみんなここにも姿を見せていなかった。おそらく三、四日前から誰もきていないのではないか、とのことでした。これはおかしい。僕は仲間を捜さがすことにしました。とりあえず、知っているかぎりのねぐらをあたってみたのですが、成果は──」

　ヨグはコップから手を外して肩かたをすくめてみせた。マリアローズはさらに自分の目に対する不信感を募つのらせる羽目になった。嘘うそ。そんなことって。でも、間ま違ちがいない。

　コップが水で満まん杯ぱいだ。

　今にもあふれそうなくらいだ。

「ありませんでした。誰かがいた形けい跡せきはあっても、残念ながら、それだけでした」

「一つ質問があるんだけど」

「何でしょう」

「その……さっきからやってる手品には何か意味があるわけ？　いちいち気が散ってしょうがないんだけど」

「あなたはすべての行こう為いに意味を求める派ですか。いえ、反問しているのではありませんよ。ただ、マリアローズさん、その問いに答える前に、あなたの誤解を解いておかなければならないでしょうね。僕は手品師ではありませんし、手品は使えません」

　ヨグは右手でコップを持った。

　それが、しかし、手品ではないとしたら、いったい何なのか。

　マリアローズはその瞬しゆん間かんではなく過程を目もく撃げきした。水が液体から固体に変わってゆく、ようするに氷へと変化してゆく場面をこんなふうに見たのは初めてだった。急速だった。コップの中の水はあっという間に凍ってしまった。

「ほら、よくありませんか。誰かと話をしていたり、何かを見物していたりする間、リズムをとるように足で軽く地面を蹴けったり、髪かみをしきりといじったり、手て許もとに紙屑があれば小さく折り畳たたんだり。それと一いつ緒しよですよ。以上があなたの質問への僕の回答です。納なつ得とくしていただけましたか」

「や……あんまり」

「そうですか。残念無念です」

「てゆうかさ、何なの、この人」

　マリアローズはアジアンに視線を送った。アジアンはマリアローズと目をあわせたが、明らかにいつもとは違う。なんとか表情をゆるめようとしているようだけれど、うまくゆかないみたいだ。

「ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ。昼飯時ランチタイムの一員だヨ」

　ちょっとだけ胸が苦しかった。でも、ちょっとだけだ。それに、ここでマリアローズが声につまったりしたら、アジアンのことだから、恰かつ好こうをつけて、無理をして、必死で取り繕つくろおうとするだろう。今は状じよう況きようが状況なわけだし、そんなふうに気を遣つかう必要なんか微み塵じんもないのに、そういうことをされるのは、かえって迷めい惑わくというか、心苦しいというか、つらいというか。だから、僕は僕らしく、エルデンを発たつ前みたいなかんじで、自然に、大いに不自然なのかもしれないけど、できるだけ普ふ段だんどおりを装よそおって振ふる舞まってあげたほうがいいんじゃないか、なんて考えている僕は、本当に不自然だし、ちっとも僕らしくない。

「……そういうことじゃなくて。それはわかってるし。だって変でしょ。魔術なら、普ふ通つうは呪じゆ文もんが必要なはずだし。触しよく媒ばいとかだって。もしかして、オーバリスト……？」

「さあ」

　アジアンは微かすかに首を横に振った。

「くわしいことはボクも知らない。自分から話さないかぎりはきかないことにしているしネ。それが昼飯時ウチのやり方だから」

「おかげでとても助かっています」

ヨグが一口飲んでみせた水はもう凍っていなかった。コップは結けつ露ろしていて、かなりつめたそうではあったが、どこからどう見ても水だった。

「自分は何ものであるか、ということよりも、自分は何を思い、何を欲ほつし、何を大切にしたいか、ということのほうが遥はるかに重要です。少なくとも、昼飯時うちではね──と、僕は考えているのですが、あっていますか、頭領マスター」

「ああ。そうだ。だから、ボクやヨグ、キミのことはどうでもいい。今、大事なことは、ボクらがどうしなければならないかだ」

「いいえ。アジアン、あなたのことはどうでもよくありません。先ほど鉄てつ鎖さの憩いこい場でも言いましたが、僕が思うに、あなたの身の上に起こったことは手がかりになりそうです」

「ボクの──」

アジアンは目を伏ふせて尖とがった顎あごを指でつまんだ。何かを思い出そうとしているのか。その逆に、思い出したくないことを忘れようとしているようにも見える。アジアンの細く形のいい眉まゆがひそめられて、唇くちびるの端はしがわずかに震ふるえた。

「まさか、やつが」

「やつ……？」

思わずきいてしまった。気になったというよりは心配だった。アジアンは怯おびえているように見えた。アジアンが恐おそれる相手なんているのか。てゆうか、心配って。何を、僕は。

「ルヴィー・ブルーム」

でも、やっぱりそうだ。絞しぼりだしたような声が震えていたし、視線も揺ゆれていた。アジアンはそのルヴィー・ブルームとかいう人物をかなり忌いみ嫌きらっているみたいだが、それと同じくらい、あるいはそれ以上に怖こわがっている。

「ルヴィー……うーん」

　ヨグがコップをテーブルに置いて頭をひねってみせた。

「どこかで聞いたことがあるような、ないような」

「あってもおかしくはないだろうネ。ルヴィー・ブルームは魔ま術じゆつ士しだ。世間一いつ般ぱんではそうとらえられている」

「名のある魔術士、ということですか。閃せん光こうの魔女マチルダや、超賢者メガセイジモーグのような」

「ボクは魔術にくわしいわけじゃないから、そうした評価については何とも言いようがない。そのあたりはベティのほうがよく知っているかもしれないネ。彼女は無事なんだろう」

「安否を確かく認にんするために空中楼ろう閣かくまで侵しん入にゆうするのはちょっと大変でした。あの中にいる者に手出しをするのは骨でしょうね。いや、魔術士なら別なのかな。ですが、何かのややこしい儀ぎ式しきの最中だったようで、部屋自体もすごく厳重に魔術で封ふう鎖さされていましたし、忙いそがしそうだったので、いることだけこそっと確認して帰ってきました」

「だったら、まだ家か」

「もしかしたら、そのおかげで無事だったのかもしれませんが」

「ボクは」

　アジアンはテーブルに両りよう肘ひじをついてマリアローズに目を向け、すぐに下を向いた。

「マリア、キミが突とつ然ぜん姿を消して、見つからないものだから、ずっと捜さがしていた。キミが行きそうなところは全部回ったと思う」

「……僕の行きそうなところとか、なんできみが知ってるんだよ」

「いつも遠くから見守っていたというかストーキングしていましたからねえ」

「─なっ……なんで」「どうして」「キミが」「きみが……！」

　ほとんどハモってしまう恰好になって、マリアローズはアジアン

と顔を見あわせ、二人で赤面して──てゆうか、アジアンが顔を赤らめるって、地味にかなり珍めずらしいような気がしてならないんだけど、そんなことはどうでもよくて、本当にどうしてヨグがそんなことを知っているんだろう。知っているというより、まるでその場面を見ていたかのような口ぶりじゃないか。ヨグは、ははは、と軽かろやかに笑って、僕は散歩が趣しゅ味みなんですよ、と右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直した。

「何のために散歩をするかといえばですね、それは人間観察のためです。いろいろな街に行きましたが、エルデンは群を抜ぬいておもしろいですね。興味深い人間がたくさんいます。その中でも一、二を争うくらい興味を引かれるのが、アジアン、僕にとってはあなたなのですよ。そういうわけで、僕は散歩がてら、たまにあなたを尾び行こうすることもあります。マリアローズさんのあとをつけるあなたのあとを僕がつけるという愉ゆ快かいな状況になったりもして」

　まいってしまいますね、とヨグはそれこそ愉快そうにしているが、何が愉快なもんか。もちろん、アジアンにストーキングされていたという事実も、わかっていたことではあるけれど、そうとう不快だ。でも、そのことを他ほかの誰だれかに知られていた、いや、それどころか見られていたとなると、さらに不愉快だ。なんだか恥はずかしいし。マリアローズは被ひ害がい者しやなわけで、恥ずかしがる必要はぜんぜんないのだが。

　それにしても、アジアンはヨグの尾行に気づいていなかったのか。アジアンも驚おどろいているので、どうやらそうらしい。このヨグ何たらかんたらとかいう長たらしい名前の男はやっぱり只ただ者ものじゃない。それから、自分自身でも言っていたとおり、すぐに話が脱だつ線せんするというか、脱線させるというか、そういう悪あく癖へきがあることも間ま違ちがいないようだ。

「──とにかく」

　アジアンは咳せき払ばらいと混じりあったようなため息をついた。

「いろいろ巡めぐった末に、ボクはマリアの家に行った。そのときにはもう、野菜野郎の家も大きな生き物をのぞいて無人だということはわかっていたし、第二王立銀行の円えん卓たくがある部屋にもしばらく人の出入りがないようだったから、クラン総出でエルデン

を離はなれているんじゃないかと考えてはいた。最後の確認のつもりだった。マリア、キミに信じて欲しいのは」

「何だよ」

「ボクにも自制心がある」

「……へえ」

「それについては僕も同意しますね」

　またヨグが微笑ほほえみを浮うかべて口を挟はさんできた。

「以前、いろいろあって、離れた場所からただ見ていることしかできなかった時期などは、本当に涙なみだぐましいくらい、ぐっとこらえにこらえていたように見受けられましたし」

「ヨグ。キミは少し黙だまっていてくれないか」

「そうしたほうがよいのであれば、そうします」

「それから、ボクのあとをつけるのは金輪際やめろ」

「えー」

　ヨグはいかにも不満げだったが、アジアンに本気感漂ただよう冷え冷えとした眼まな差ざしを向けられると、両手をあげて首を斜ななめに振ふってみせた。

「わかりました。今後、尾行はしないということにしておきます」

　はなはだ曖あい昧まいな誓せい約やくだった。普ふ段だんのマリアローズなら、すかさず強めのツッコミを入れていただろうが、しなかった。できなかった。それよりも、いろいろあって、というヨグの言葉が引っかかっていた。離れた場所からただ見ていることしかできなかった時期。マリアローズがＺＯＯに加盟してから、ＳｍＣがらみの事件が起こるまで、たしかにアジアンは目の前に姿を現さなかった。たまに気配を感じることはあっても、それだけだった。当時は新しい環かん境きように慣れるのに必死だったし、うるさいやつがいなくなってせいせいした、くらいにしか考えていなかったけれど──いろいろあって。そう。いろいろあったんだ。

　マリアローズはアジアンを一いち瞥べつしてからヨグの眼鏡顔を見た。この男はいろいろの内容について知っているのだろうか。行方ゆくえ不明だという昼飯時ランチタイムの人たちはどうなのだろう。あのとき、ベティがマリアローズに向けて言った。たまたま今回は土ど壇たん場ばで状じよう況きようがうまく転んだからよかったけど、いつかあなたとあたしたちを天てん秤びんにかけなきゃならなくなったら、あいつ、どうするのかしらね。ベティはたしか笑え顔がおだった。それでいて、視線に棘とげがあった。どうしてか、あの痛みを今でも覚えている。ようやくわかった。なんて鈍どん感かんなんだ。あまりにも気づくのが遅おそすぎる。

　あれは僕を責める目だった。

「マリア……？」

　顔をのぞきこんできたアジアンをまともに見ることができなかった。急に空気が薄うすくなりでもしたのか。息が苦しい。胃のあたりが外側から圧あつ迫ぱくされているかのようだ。ここは昼飯時ランチタイムのたまり場だという。ここは僕がいるべき場所じゃない。僕にはふさわしくない。違う。僕がここにふさわしくない。そう思えてならない。くるべきじゃなかったのに、きてしまった。今すぐ出ていったほうがいいのかもしれない。むしろ、そうするべきだ。マリアローズは立ちあがろうとしたが、膝ひざに力が入らなかった。無意識に水を飲んだ。ひどく喉のどが渇かわいていたからだ。ああ、みんなに会いたい。ＺＯＯのみんなに。みんなは僕を責めたりしないから。やさしくしてくれるから。みんなとなら楽しく笑えるから。初めてなんだ。仲間なんだ。友だちなんだ。大事なんだ。みんなに会いたい。でも、アジアンは、もしかしたら──、

　ねえ。

　その人は、きみの仲間だった？

　友だちだった？

　大切な人だった？

　きみは、その人を失った？

　その人は、死んでしまった？

　──クラニィ。

　きみの泣き顔が頭から離れないんだ。たぶん、しばらくは忘れられないと思うんだ。ひょっとしたら、一生忘れられないかもしれない。僕はかわいそうだって、思ったんだ。きみをかわいそうだって。子し爵しやくの家にいたときにさ。たまに、いたんだ。泣きたいけれど、泣けない子が。泣き方を忘れてしまっている子が。僕はだっこしてあげたんだ。一いつ緒しよに寝ねてあげたんだ。抱だきしめて、頭を撫なでて、泣いてもいいんだよ、って言ってあげたんだ。かわいそうで、放ほうっておけなかったんだ。お母さんみたいに、やさしくしてあげようと思ったんだ。あのころは自然とそうできたんだ。そうすることがあたりまえだったんだ。僕は何のためらいもなくやさしくなれたんだ。だって、かわいそうだったから。あの子たちは悪くなかった。僕も悪くなかった。強しいて言えば、僕たちは運が悪かった。それだけだった。僕たちはかわいそうだった。僕は他の子たちを慰なぐさめて、自分のことも慰めようとしていたんだ。しょうがなかったんだ。そうでもしないといられなかったんだ。だけど、今はどうかな。

　僕は本当に悪くないのかな。

　僕のせいじゃないのかな。

　そうじゃなければいいと、心の底から思う。

　僕がそう思っていることに、きみは気づいているのかな。

　だとしたら、きみのことだからきっと、ごまかそうとするだろう。

「マリア、もしかして──」

　僕のために。

「トイレかい？」

　そうきたか。

　マリアローズはアジアンの額をグーで殴なぐった。

「ちがーう！　誰だれがトイレだーっ！」

「──い、いや、何か、その……我が慢まんしているみたいに見えたからサ」

「もしそうだったらトイレくらい普ふ通つうに自発的に行くから！　子供じゃあるまいし！」

「場所がわからないとか、初めての場所だとそういうことは十分ありうるだろう？　それならボクがちゃんとエスコートして」

「もらわなくて結構！　不要！　てゆうか絶対不可！」

「遠えん慮りよしなくていいんだヨ？　ボクとキミとの仲じゃないか」

「あー。犬けん猿えんの仲だよねー」

「何を言っているんだ、マリア。ボクとキミは奇き縁えん、いいや、宿縁、そう━運命によって固く結ばれた、もはやいかなる手段によっても分かつことなどできはしない、お互たがいのために生を受けたかのような二人だヨ」

「あっそ。じゃ、今、その運命とかってやつを切っちゃうね。はい。絶縁」

　マリアローズは人差し指と中指の鋏はさみでアジアンとの間に存在するらしい目には見えない糸状のものを切断した。ところが、アジアンがすぐさまそれを結んでしまった。しかも、ほどくのにかなり苦労しそうな頑がん固こすぎる固結びだった。

「フッ。これで復縁だネ」

「戻もどすなっ！」

　即そく座ざに再度、確実にぶった切ってやろうと思ったが、くだらない。くだらなすぎる。不毛だ。それに、この視線。見回すと、カウンターの向こうのオトミさんがぽかんと口を開けてこちらを凝ぎよう視ししていた。さっきまでカウンターに突つっ伏ぷしていた従業員も、寝ね惚ぼけているというよりは呆あつ気けにとられているような表情で、とくにアジアンを見ている。派手な着物の老人も身体からだを起こしてはだけた胸や頭をボリボリ掻かいていた。ゴーグルをかけているので視線の行方ゆくえはわからないが、アジアンとマリアローズのやりとりを見物していたに違ちがいない。

「大将、あんた……なんだか、ずいぶんいつもとキャラが違うんじゃないかね」

　オトミさんが呟つぶやくようにそう言うと、従業員が、こく、こく、と何度もうなずいた。

　アジアンはくすくす笑っているヨグを一睨にらみして立ちあがり、自分の胸に手をあてた。

「誤解だヨ、オトミさん。ボクは変わってなんかいない。ただ、ボクは知ってしまったんだ。それについては、でも、オトミさんはよく知っているんじゃないかな。いつか話してくれただろう。亡くなられたご主人のことを」

　オトミさんが目を伏ふせて髪かみに挿さしてあるかんざしに手をふれた。瑠る璃り色いろのきれいなかんざしで、そう違い和わ感かんがあるわけではないけれど、若い女性がつけていてもおかしくない、華はなやかで垢あか抜ぬけているデザインだ。

「……あたしの旦だん那ながどうしたっていうんだい」

「正直、ボクはぴんとこなかった」

　アジアンは真顔だった。

「オトミさんとご主人の出会いから馴なれ初そめ、そして別れ──永遠の別れに至るまでの話を聞いても、ボクはただ、そういうことがあったんだ、という受け止め方しかできなかったんだ。どうしてか。その理由が今はわかる。オトミさんは知っていた。そして、ボクは知らなかった。だから、ボクはオトミさんが味わった喪そう失しつ感かんや、今もときおり襲おそってくる悲しみ、そうしたものをもたらすご主人とともに過ごした時間の尊さ、思い出のあたたかさに共感することができなかった。ボクはそれを知らなかったんだ」

　従業員が、あのぉ～、と手をあげた。チョコレートみたいな色の肌はだをしている。オークリッドあたりの出身なのかもしれない。

「一つきいてもいいっすかね～」

「何だい、カツヲくん」

「そのぉ～……それって何なんすかぁ～？」

　待ってました、とばかりだった。

　アジアンは胸の前で拳こぶしを握にぎりしめ、目を輝かがやかせた。

「愛だ」

　カツヲという名らしい従業員が、はぁ～、と感心五分呆あきれ九割五分といったかんじのため息をついた。それから三秒ほど妙みような沈ちん黙もくがつづいたが、突とつ然ぜん、老人がびっくりするくらいの大声で笑いだして、自分の頭を何度もぺしぺし叩たたいた。

「愛！　愛ときたか！　昼飯時ランチタイムの虐殺人形カーネイジドールがのお！」

「その名で呼ぶのはやめてくれないか、Ｂ□Ｂ。気に入っているわけじゃないのでネ」

「たといおぬしが気に入らぬでも、他ひ人とはおぬしにふさわしき名でおぬしを呼ぶものぞ。我わが輩はいがおぬしをどう呼ぼうと我輩の勝手じゃろうが」

「もちろん好きにするといいが、その結果どんな目に遭あっても文句は言えないヨ。ツケもろくに払はらわない居い候そうろう同然の常連客にはオトミさんもだいぶ迷めい惑わくしているようだしネ」

「金は腐くさるほどあるんじゃがの。持って歩くのが面めん倒どうでなあ。愛、か」

　老人はゴーグルをずらして目の周りを指で掻いた。かなりの高こう齢れいに見えるし、老眼矯きよう正せい用のゴーグルだと思っていたが、黒目が白はく濁だくしてほとんど白目と区別がつかない。白内障か。ずいぶん進行しているようだ。あれだと視力はないに等しくて、矯正しようがないだろう。



「我輩のごとき老木は口にした言葉さえも潤うるおいを失うしのうて枯かれ葉のように降り積もるのみじゃ。若いもんは羨うらやましいわい」

「ふん。エロジジイがよく言うよ」

　オトミさんが顔をしかめた。

「えらい別べつ嬪ぴんがあんたのとこに通ってきてるじゃないかね。何がいいのか知らないけど、あの女、どうもあんたに気があるみたいじゃないか。とっととツケを清算して、どこへなりとも行っちまいな」

「あれはたしかにいい女じゃがの。いくら旨うまい酒でも、きつすぎれば身体に毒じゃ。せめて、我輩があと五十若ければの」

「クァラナドの店からも請せい求きゅう書がきてるんだけどね。あんた宛あてのが、なんでかあたしの店にさ。それも、大量に。どれもこれも名前からしていかにもってかんじの店で、さすがのあたしも年とし甲が斐いもなく赤面しちまったよ」

　老人は、ふっ、と短く笑って並べた椅い子すから立ちあがった。

「男にはの。何歳いくつになろうと忘れられぬ、忘れてはならぬ浪ろう漫まんというものがあるんじゃ」

「何が浪漫だよ。あんたは色惚ぼけしてるだけさね」

「さあて、久方ぶりに銀行でも行ってこようかの」

「さっさと金を持ってきな。支し払はらいがすんだらもう二度とこなくていいからね」

　老人は答えずに店から出て行った。オトミさんが鼻先で笑ってみせた。

「あのジジイにはね。柄がらにもなく片思いしてる相手がいるのさ。もう何十年もね。叶かなわぬ恋こいってやつだ。馬ば鹿かな男だよ」

「なるほど」

　アジアンが腕うで組ぐみをして顎あごをつまんだ。

「それが男の浪漫……」

「や、あのさ、なんか納なつ得とくしてるとこ悪いんだけど、てゆうかぜんぜん悪くないと思うけど、話がそれまくってて何がなんだ

かわからなくなりつつあるよ？　いいの？　もっと大事で深刻な話してたんじゃなかったっけ？」

「はっ」

　アジアンはマリアローズに向きなおった。手を握られそうになったので、椅子を後ろに引いてよけなければならなかった。

「そうだ。マリア。キミへの愛について──」

「じゃなくて！　キミの仲間のことだろ！」

「いいや。順を追って説明しないといけない。ボクはキミの家に行った。キミがいないということを確かく認にんして、受け容いれるためだった。そこでキミの帰りを待とうと思ったことも否定はしないヨ。実際、丸一日以上、そこで過ごしたことも認めざるをえない。でも、キミが帰ってきたらそっと立ち去るつもりだった。そのことはどうか信じて欲しい。キミを待ち伏ぶせしてキミを抱だきしめてキミにそれ以上のことをしようなんて考えていなかった。誓ちかってもいい」

「言うだけなら、いくらでも言えるよね」

「ボクはキミに嘘うそはつかない。つけるはずがないだろう？　ボクはキミが帰ってきてくれさえすればそれでよかったんだ。本当サ。それなのに、あの男がボクを」

「……ルヴィー・ブルーム？」

「そうだ」

　アジアンの目が微かすかに揺ゆれた。眉み間けんに縦たて皺じわが刻まれている。アジアンは右手の親指を口のあたりに持ってゆこうとして、途と中ちゆうでやめた。さっきも感じたことだけれど、そんなにも恐おそろしい男なのか。どうやら名のある魔ま術じゆつ士しらしいが、世間一いつ般ぱんではそうとらえられている、とアジアンが言っていたので、それだけではないのだろう。そして当然、アジアンはその男を知っている。その男との間に何かあったのか。あったに違ちがいない。きっと、よほどのことが。

　もしかしたら、その男に対する恐きよう怖ふや嫌けん悪お、憎ぞう悪おなど、そうした感情が、ヨグ並みに話を脱だつ線せんさせま

くることをアジアンに強しいていたのかもしれない。

　できれば会いたくなかった。会わずにすむのなら、死ぬまで顔も見たくなかった。声も聞きたくなかった。思い出すことすらいやだった。マリアローズの推測が当たっているとはかぎらないが、もしそうだったとしたら、その気持ちは理解できる。忘れたい。記き憶おくの中から根こそぎ消し去りたい。洗おうとするのだ。こそげとってしまおうとする。それでも、きれいにはならない。痕こん跡せきをすべて取り除くことは不可能だ。それはもう自分の一部になっている。それ抜ぬきの自分などありえない。その忌いまわしい事実を突つきつけられて、立ちつくすしかない。

　たとえばマリアローズは、イシュタル・アガメムノ・ド・ゴードンという男の存在を、どうしても頭の中から追いだすことができないでいる。あきらめかけてさえいると言ってもいい。無理だ。何もかもなかったことにはできない。あの男がいなかったことにもできない。認めるしかないのかもしれない。受け容れて、消化して、自分を納得させる。いい経験をしたなんて口が裂さけても言えないけれど、あのことがあって今の僕がいる。そう思うしかないじゃないか。でも、たとえ相手がＺＯＯのみんなでも、口に出すことはできない。どんなことがあって、そのとき僕はどう思って、何をしようとして、どうしたか、くわしく話すことはもちろん、あの男の名前すら誰だれかに教える気にはなれない。秘密にしておきたい。明かす必要はないと思う。黙だまっていればわからないんだ。それでいいじゃないか。だって、口を開いて、その名を声に出して、その名を持つ男について語ろうとした瞬しゅん間かん、自分がどうなってしまうか、僕には想像できる。いや、できるような気がするだけだ。たぶん、実際はもっとひどいことになる。この先に落とし穴があります、落ちたら大おお怪け我がをしますと書かれた立て札が立っている道を好んで進もうとするバカはいない。誰だって引き返して違う道を探そうとするはずだ。

　アジアンも同じだったのかもしれない。

　だけれど、落とし穴があるとわかっていても、進まなければならない場合もある。

　他ほかに道がなければ、行くしかない。

　痛くても、さらなる痛みが待っているとしても、進む以外にない。

　なんだかこっちまで胸が苦しくて見ていられないけれど、見なきゃいけないと思った。

　アジアンはマリアローズの視線をしっかりと受け止めて、何かを覚かく悟ごしたようにほんの少しだけ顎を引いた。

「ボクは名を呼ばれて振ふり向いた。そこにあの男がいた。ルヴィー。ルヴィー・ブルーム。どうして今ごろになってボクのところに。とにかく、ボクはあの男に何かされたんだろう。それは間違いない。はっきりとは覚えていないけど、何か──そう、ナジ。黒くて丸い生き物が」

「黒い……？」

　心当たりがある。ありすぎると言ってもいいくらいだ。部屋の中で、死んでいた、と言っていいのか。いきなり床ゆかに何かが落ちる音がした。あの黒くて丸くて尻尾しつぽがある生き物は、たしかにそのときにはもう死んでいたようだ。状じよう況きようからすると、あの生き物はマリアローズの部屋のどこかにひそんでいて、何らかの原因で息絶え、その結果、床に落下した。そう考えるのが妥だ当とうだろう。

「そいつ、もしかして僕の部屋にいたやつかな」

「キミの部屋に、ナジが？」

「わかんないけど、たぶん。死んでたっぽいから、屋上から捨てちゃったんだけど。気持ち悪かったし」

「……あの生き物は、ボクの夢にも出てきた」

「夢……？　そういえば、言ってたよね。夢を見てたって。長い、夢を」

「おかしな夢だった。おそらく、あれは単なる夢じゃない」

　アジアンは険しい顔つきになってヨグに目をやった。

「あそこで会ったキミは──キミだけは、本物のキミだった」

「あたらずとも遠からずとお答えしたはずです」

　ヨグは右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直した。

「考えてもみてください。夢はたしかに現象ですが、それは完全に個人的なものです。たとえば何らかの方法で第三者の夢に影えい響きようを及およぼすことはできたとしても、その夢の中に入りこむことはできません。あたかも実際に存在するかのように感じる、解かい釈しやくされるものが夢であって、その逆ではないのです。ですが、今、申しあげたように、第三者の夢に影響を及ぼす方法がないわけではありません」

「キミはそれをしたのか」

「本意ではありませんでしたが、非常事態でしたし、やむをえませんでした。繰くり返しになりますが、僕は仲間を捜さがしていました。当然、その中にはアジアン、あなたもふくまれます。ようするに、僕はあなたを見つけたわけですよ。マリアローズさんの部屋の前で意識を失っていて、どうやっても目覚めないあなたをね」

「ちょっと待って」

　マリアローズは気持ちを落ちつけて、できるだけ冷静に割って入った。少なくとも、自分ではそのつもりだった。なんだかこめかみのあたりがぴくぴくしているように感じなくもないが、たぶん気のせいだろう。

「はい？　何でしょう」

「それって、きみまで僕の部屋の場所を知ってるって言ってるように思えて仕方ないんだけど、僕の受けとり方は間違ってるかな」

「偶ぐう然ぜんですよ。僕はただアジアンの尾び行こうをしていて、たまたまあなたの部屋の周りでうろうろしたり悶もん々もんとしたりする我らが頭領マスターの姿を目もく撃げきしてしまったことがあるだけです」

「……知らなかったヨ。キミは結構悪あく趣しゅ味みな男なんだネ」

「まあ、血かもしれませんね。ははは。親の顔を見たい、なんて言わないでくださいよ。とても他ひ人と様さまに紹しよう介かいできるような親ではありませんので」

　引っ越こししよう。

　マリアローズは固く心に誓ちかった。アクセスはきわめて悪いけれど、そのぶん安全だし、設備も整っていて広さも申し分ない、愛着もあるし、捨てるには惜おしい住居だが、もうダメだ。一度離はなれてみたら、階段だの梯はし子ごだのの上り下りは苦痛以外の何ものでもないことがあらためて実感できたし、そのあたりはまた慣れるとしても、何より重要な安全性がまったく確保されていないことがこのたび判明した。そんなところには住んでいられない。荷物の運びだしはＺＯＯのみんなに手伝ってもらうとして、新しい住すみ処かが見つかるまではトマトクンの家に居い候そうろうさせてもらえばいいわけだし。あの家には使っていない部屋がたくさんあって、バスルームも一つじゃないし。何だったら、家賃代わりに家事担当のきゅーを補ほ佐さしてもいい。マリアローズがいれば、サフィニアもきやすいかもしれないし。うん。そうしよう。決めた。

　決意が固まると、少しだけすっきりした。ついでに、頭の中もすっきりさせてしまいたい。何がなんだかわからなくてぐずぐずしているよりも、手に入れられるかぎりの情報をさっさと手に入れて、どうするかはそれから考えればいいんだ。マリアローズはヨグに顎あごをしゃくってみせた。

「──で、何？　僕の部屋の前でぶっ倒たおれてるアジアンを見つけて、それで？　きみはどうしたわけ？　ぱっぱと説明してくれる？」

「普ふ通つうの睡すい眠みんではないことはすぐにわかりましたからね」

　ヨグは手でコップに蓋ふたをした。あれは見ないようにしよう。話に集中できなくなる。

「様子を見て、それから、自分にできることをしました。それがうまくいったかどうかはわかりませんが、今、アジアンがここにいるということは、少なくとも最悪の結果はまぬがれたと言っても差し支つかえないはずです」

「キミは──」

　アジアンは何か言いかけて、というよりもたぶんヨグに何かを尋たずねようとしたのだろうが、その前に言葉をのみこんで首を横に

振ふった。

「いや、いい。キミがボクに対して何をしたのかは措おこう。でも、ボクに何かをして、そのまま放ほうっておいたのはなぜだ」

「え。いけませんでしたか。あなたにとってはそうしたほうがいいのではないかと判断したのですが。げんに、こうしてお二人でここまでいらっしゃっているわけですし」

　アジアンは眉まゆを微び妙みように動かしただけで、否定も肯こう定ていもしなかった。

　そうか。こいつか。こいつのせいか。あとでもう一度、ヨグの名前をきいておかなければならない。抹まつ殺さつリストに追加する名前はフルネームのほうがいいだろう。

「それで？　きみの話はそれで終わり？　終わりじゃないならてきぱき話してくれる？」

「まだ終わりではないので極力簡潔明めい瞭りように話すことにしますが、僕の見立てでは、アジアンの状態は致ち命めい的てきだとは思いませんでした。誰だれか、もしくは何かの力によって、自分自身の心のラビリンスにとらわれている。ちょっと詩的な表現ですかね。そうでもないですか。ともかく、誰か、あるいは何かは、そのままアジアンを放置したわけです。ちょっと変ですよね。おそらく意図的でしょう。そこで、安否を確かく認にんしなければならない仲間が他ほかにもまだいましたし、僕はアジアンが自力で心のラビリンスから脱だつ出しゆつするだろうと確信するに至った段階で離れることにしました。ちなみに、その黒い生き物とやらについては、僕は確認していません。見落としたのかな。どこか近くにひそんでいたと考えるのが妥だ当とうでしょうが」

「夢の中で、ボクはナジを握にぎりつぶした。そのあとのことは覚えていない。目が覚めると、マリアがいた」

「僕はアジアンが目覚める前に、そのナジとかってやつが部屋で死んでるのを見つけて、屋上から捨てた……」

「そして、お二人はついにお互たがいの気持ちを通じあわせ、めでたく結ばれた」

「そんなわけないでしょ？」

マリアローズは右手を持ちあげて左手で籠こ手てのスイッチを押した。我ながら無む駄だのない滑なめらかな動作で、そう簡単にはよけられないだろう素す晴ばらしいタイミングだった。もちろん、せっかく自制しようとしているのに、飛んで火に入る夏の虫のごとくアホなことをぬかしてマリアローズをブチキレさせたヨグが完かん璧ぺきなまでに一方的、全面的に悪いのだが、いくらなんでもこれは少々やりすぎかもしれないと思わないでもなかった。どうもあやしげで得体が知れないとはいえ、相手はアジアンやトマトクンやピンパーネルのように人間離ばなれしているわけではない。すでに神経毒が仕込まれた矢は籠手に据すえつけられた発射装置から放たれてしまったわけだから、もう手て遅おくれなのだが、そのはずだったのだが、何が幸いするかわからないものだ。

「……お──っと、これは……」

ヨグは眼鏡めがねを外した。

その眼鏡のブリッジの部分だった。

ちょうど真ん中あたりに細い矢が突つき刺さっている。

ヨグは興味深そうに矢を見つめているが、こころなしか顔色はすぐれなかった。

「何か、あれですか。やっぱり、毒なんかが塗ぬってあったりするわけですか」

「塗ってはないけどね。刺さったら注入されるような仕組みにはなってるね。よかったね。刺さらなくて」

「これからは撃うたれないように気をつけたほうがよさそうですね」

「僕がきみの立場ならそうするけどね」

「今後余計なことは言わないように心がけます。なかなか難しいですが」

「せいぜい努力すればいいんじゃないかな？」

少々ひやりとしたが、口は災わざわいの元だということを理解してもらえたようで何よりだった。あとはヨグの戯ざれ言ごとを聞い

てアジアンの大おお馬ば鹿か野や郎ろうが舞まいあがったり妄もう想そう大爆ばく発はつさせたりしてはいないかと若じやつ干かん心配だったが、杞き憂ゆうに終わった。アジアンはテーブルに肘ひじをついて両手を組みあわせ、眉をひそめるというよりは顔をしかめて下した唇くちびるの端はしを噛かんでいた。マリアローズの視線に気づくと、すまない、と言って表情をゆるめようとしたが、べつにそんなことしなくていいのに。そんなに器用じゃないくせに。うまくやることなんてできないくせに。無理ばっかりして。バカだ。こいつはバカだ。すっごいバカだ。

「──それで、その……ルヴィー・ブルームっていう人の仕し業わざなのかな。アジアンのことは、まあ、確定としても、昼飯時ランチタイムの他の人たちがいなくなったのも、ぜんぶ。こういう言い方するのは何だけど、一人とか二人ならともかく、これだけの人数がいっぺんにってことになると、偶ぐう然ぜんではないよね」

「でも、いったい何のために」

　アジアンは両手に力をこめた。

「あの男がやったのだとしたら、どうしてボクを殺すなり連れ去るなりしなかったんだ。あの男の狙ねらいはボクだ。それは間ま違ちがいない。ボク以外とは接点がないはずだしネ。それなのに、どうしてみんなを──いや、あの男のことだから……」

「あの、さ」

　きこうと思った。ルヴィー・ブルームとはどういう男なのか。アジアンとその男との関係は。きっと何か因いん縁ねんがあるのだろう。昔、何があったのか。でも、踏ふみこむのが怖こわい。そもそも踏みこむべきなのか。アジアンの瞳ひとみの色が、いつもより濃こく、暗く見える。顔全体が、それどころか全身がわずかに強こわ張ばっている。身構えているのか。まるで傷の手当てを待ち受ける怪け我が人みたいだ。それなのに、僕がやろうとしていることは手当てなんかじゃない。過去を詮せん索さくして、傷口に塩を塗りこもうとしている。できない。そんなこと、できるはずがない。

「僕も……や、その、ＺＯＯのみんなにも、手を貸してもらうっていうのはどうかな」

「え──」

アジアンは拍ひよう子し抜ぬけしたように目を少し見開いた。

「それは、でも……ボクのクランの問題だし、そんなわけには」

「クランの問題だっていうけど、無事が確認できてるのはきみとヨグ何たらとベティさんだけなんでしょ。三人だよ。たった三人。しかも、ベティさんは儀ぎ式しきだか何だかで十区にこもってるっていうし。魔ま術じゆつ士しじゃなきゃ入るの大変なんだよね、あそこって。実際、ヨグ何たらも苦労したって言ってなかった？　てゆうか、苦労して入れるようなものなのかっていう素そ朴ぼくな疑問もあるんだけど、まあ、それはいいとして、サフィニアだったら十区に住んでるし、師し匠しようが同じだったりもするし、連れん絡らくくらいつけられるかもしれないよ。情報収集ならうちの半魚人が得意だしさ。ああ見えて、わりと顔広いし。目と目の間も広いけどね」

「僕の意見を言ってもいいですか？」

　ヨグが眼鏡をかけなおして手をあげた。アジアンがうなずくと、ヨグは、ありがたくご厚意に甘えるべきです、と右手の人差し指で眼鏡の位置を直した。どうでもいいけれど、眼鏡のブリッヂに矢が刺さったままだ。抜ぬけばいいのに。

「正直、僕は不安で、心こころ許もとなくて、途と方ほうに暮れかけていました。今も同じです。そうは見えないかもしれませんが、それは僕がこうした感情に慣れていないからでしょう。ということにしておきます。まあ、ともかく、僕はどうしたらいいか考えて、自分にできることをやったつもりですが、事態が好転しているとは必ずしも言いがたい。アジアン、あなたが目を覚まして、こうして会うことができても、どうやら事件の首しゆ謀ぼう者らしい者が知れただけです。何か手を打ちたい。ですが、何も思いつかない。だとしたら、他ほかの視点を持ちこんで、別の方向から問題の解決を図るというのも、一つの手ではありませんか」

「言っていることはわかる──でも、ＺＯＯには……」

「何？　トマトクン？　どうせ最近寝ねてばっかだし、てゆうかさ……」

　たしかにあまりいい出会い方ではなかったし、何度か剣けんを交えてもいる二人だ。そんな相手に手助けしてもらうなんて気が進ま

ないのかもしれないし、僕だって仲よくしてもらいたいとか思ってるわけでもないけど、今、きみが最優先で考えないといけないのはそこじゃないんじゃないの？　違うよね？　ああ、なんかもう苛いら々いらする。頭を掻かきむしりたい。髪かみをぐっちゃぐちゃにしてしまいたい。なんで僕が苛つかなきゃならないんだよ。バカバカしい。

「べつに、昼飯時ランチタイムのためにＺＯＯが動くとか、そんな大おお袈げ裟さなことじゃないから。ただ、僕が仲間に事情を話して、都合が悪くなければ手伝ってもらう。それならいいでしょ」

「キミはそのつもりでも──」

「うるっさいなあ。こんなとこでごちゃごちゃぐちゃぐちゃやってる間に何かしたほうがいいってことくらいわかんないんだとしたら、とりあえず頭がどうかしてないかユリカに診みてもらったほうがいいかもね？　たぶん、ユリカは事務所にいると思うからさ。すぐに診しん察さつしてもらえるよ？　そうする？」

「い、いや……だけど、どうしてキミがそこまで」

　マリアローズは返事をせずに椅い子すから立ちあがり、オトミさんに一礼して店の出口へと向かった。ヨグはついてきているようだけれど、アジアンはまだぐずぐずしているみたいだから、振ふり返らずに、早く、行くよ、と声をかけた。状じよう況きようが状況だし、アジアンがテンパっていることはわかっているので、意地悪をするつもりはない。僕はそこまで非道じゃない。でも、答えられないことには答えようがない。僕にもわからないんだ。こうするのがいいことなのか。他にいいやり方はないのか。確かく認にんしないといけないこともあるような気がする。棚たな上あげにしてしまっていいのか。ぜんぜんわからない。ただ、一つだけはっきりしていることがある。僕は逆らえない。その気持ちには、どうしてもあらがうことができない。

　放ほうっておけない。

　それだけはあまりにも確かすぎて、打ち消すことなんて、とうていできなかった。

Omenage 897 12th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン第十一区

〝第二王立銀行前〟

chapter.4

向かいあって歩こう

「よっ」

　その男が第二王立銀行の扉とびらを守っている魔導兵にさわったりその周りを飛び回ったりしている姿はすでに目に入っていたから、何か声をかけられるのではないかと心構えはしていた。でも、偶ぐう然ぜんにしてはちょっとおかしいと思いながらも、やっぱり偶然だろうと考えていたし、開口一番そんな気安くて軽い調子の挨あい拶さつが出てくるとは予想していなかったので、びっくりしてしまった。その男の屈くつ託たくのない笑え顔がおを見た瞬しゅん間かん、なんだか胸がきゅうっとした自分にも驚おどろいた。そういえば、エルデンを離はなれていた間、何度か、といっても一度か二度、何かの折にその男の顔がちらっと頭をよぎった。あれは何だったのか。

「元気してたかよー。何テメーどっか行ってたん？　ツアー？　旅行？　観光？　もしかしてケッコー長旅だった？　いなかったよなァ。ここも何ッ回かきたんだけどよォ。いねーンだもん。ンで久々にきてみたらバッチシ会えたし。何、いつ帰ってきたん？」

「……今日、だけど」

「うっは。マジ？　マジッポ？　マジンガー？　やっべーそれビンゴじゃん。すごくね？」

「しょうね。しゅごい……偶ぐう然じえん」

「いっや。これグーゼンじゃねーって違ちがうって。あンな。オレの故郷？　つかフルサト？　にさァ、あンの。日常占うらない的なのが。オレもよく知ンねーけどこーゆーときはこーだとかこーゆーのってのはこーゆーこと示してるとかそんなの。オレさァ、じつは思ったわけ。今日はもしかしたら会えっかなーとか。そンできてみたの。したらバッチシじゃん？　そーゆーのはさァ、なァーんか縁えんがあるってことなんだってたしか。あーすげーキャハハハハ」

「偶ぐう然じえん、よ。ただの」

「ま、グーゼンっちゃーグーゼンか。けどよォそれがすっげーわけ。だってグーゼンってそんな可能性とか高ェーわけじゃねーじゃん？　そんでビッタリンコなんだから、これはナンッカあるよ

なーって話。まッ、ただの占いだけどね。なァ、遊ばね？」

　呆あつ気けにとられてしまい、しばらく何も言えないどころか、思考まで停止してしまった。だって、遊ぶ、なんて。遊ばない？　そんなふうに誘さそわれたことがないわけではない。でも、子供のころだ。生まれ育った村の子供たちは、十歳にもなれば大人の仕事を手伝わなければならなくて、その前にも少しずつ家のことをやらされる。幼い日、近所のおじいさんに読み書きや計算を教えてもらったあと、家に帰らず友だちと遊んだ。あとでこっぴどく叱しかられるとわかっていても、遊ぼう、と誘われると、その誘ゆう惑わくには勝てなかった。もうずいぶん昔の話だ。

　今だって、サフィニアやマリアローズと一いつ緒しよに買い物に行ったり、ご飯や甘いものを食べに行ったりすることはある。ただ、遊ぶ、とは言わない。買い物つきあって、とか、何か食べに行こうよ、とか、目的がはっきりしていて、寄り道することはあっても、それはあくまでついでだ。十分楽しいけれど、たぶん、あのころの、遊ぶ、とは少し違う。

「……荷にも物ちゆが、あるから。事務所に置いてこないと。お茶とか、食器とか、いろいろ買ってきたものがあって。置いてこないと、いけないから。しょのために、きたから」

「おー。じゃーサッサッサーっと置いてこよーぜ。そンで遊ぼーぜ。ガリガリ遊ぼーぜ。オレさァ、なーんか遊び足ンねーんだよ最近。ほらオレってこォー見えてボスじゃん？　闇やみ市いちとか仕切っちゃってるじゃん？　だからさァ、目とかつりあげてよォ、やるわけ。おっらァテメーなめたことぬかすとケツ八つに割っちまうぞ、とかね。ジンのやつにまかしちゃえみたいに思わなくもねーけど、オレも手下とかいるし、そーゆーわけにもいかねーんだよなァ」

「大変、なのね。でも、他人を脅おどしたりしゅるのは、よくないことだわ」

「ほえ？　そーなん？」

「しょうよ」

「けっどさァ。オレってナリがこーで、よーするにちっちぇーじゃん？　なンで、やるときはガッツンッとやンねーとさァ、軽く見ら

れンだよな。オレがバリバリ強ぇーってことが知れ渡わたれば、弱ぇー雑ざ魚こッピとかかかってこなくなるしよォ。オレァ強ェーヤツとやンのは大、大、大好きだけど、弱ェーヤツとやってもつっまんねーから却きやつ下かしたいわけさ。わかる？」

　思わずうなずいてしまった。強い相手と戦いたい、という気持ちについては、想像することはできるという程度でしかないが、子供みたいな外見でエルデンを歩いていると、不心得者たちがよからぬ企たくらみを隠かくしもせずに近寄ってくる、ときには襲おそいかかってくることはたしかだ。もちろん、大人でも油断すれば悪党バスターどもに狙ねらわれる羽目になるけれど、やはり子供のほうが危険にさらされやすい。弱い存在だからだ。

「この服さァ」

　男が自分の服の袖そでを引っぱってみせた。

「シリアルキラーってとこのなんだけど、すっげー粋ＣＯＯＬだとか思って気に入ってンだけどよォ。オレんとこの＊シリアル・キラーズってクランの名前もそっからとったの。ところがさァ、ケッコー流は行やってやがんの、エルデンで。これ着てるやついっぺーいて。わりと安いからガキんちょでも着てんの。したらさァ、周りのヤツがびびるわけ、アイツ＊かもしんねーとかゆって。オレ若じやつ干かん有名人だからさァ。ウチに入りてーとか言ってくるガキんちょもいっぺーいっけどね。根性なさげなヤツは入れてやンねーけど。そんでもオレらに憧あこがれてシリアルキラーの服着るわけ。そしたらなんか変なヤツにあんま襲われねーとかゆって。マジうけるよ。キャハハハ」

　どう返事をすればいいかわからなかった。どう返して、何を話せばいいのか。戸と惑まどっていると、持っていた荷物を奪うばわれて、手首を握にぎられた。仰ぎよう天てんして手を振ふり払はらおうとしたら、不思議そうな顔をされた。

「荷物、置きにいくんだろ？　早くしよーぜ。いっぱい遊ぼーぜ、ユリィ」

　飛燕フエイヤンは強ごう引いんというか、自分が無理やり事を運んでいるという意識がそもそもないようだった。この人は、相手にもちゃんと意志があるということさえわかっていないんじゃないかしら。自分がどうしたい。そのためにどうする。それしかないん

じゃないかしら。でも、ユリカの手首を握っている飛燕フエイヤンの手には、必要以上の力はこめられていなかった。気は急せいている様子だけれど、速く歩いたりもしない。それどころか、とくに注意を払わなくても歩調をあわせることができた。気にしないようにしているし、きっとみんなもあえて気を遣つかわないでくれているのだと思っているけれど、ＺＯＯの仲間たちと行動をともにしているときですら、たまにため息をついてしまいそうになるのに。ちゃんと身体からだを鍛きたえているし、体力がないほうではないはずだが、つらいのだ。いつもではなくて、ごくたまにだけれど、みんなと肩かたを並べて歩いていると、無理をしている自分に気づいて、暗い気持ちになってしまいそうになる。こんなふうに、肩かた肘ひじを張らなくても同じ速度で歩くことができたら、どんなにいいか。どうしようもないことなのに、ついそんなことを考えてしまって、ぐっとその思いをのみこみ、胸の奥のさらに奥のほうへと押し戻もどす。もう慣れたけれど。とっくにあきらめているけれど。たぶん、そのうち何とも思わなくなるだろうし。それまでたえればいいだけだから。一人で抱かかえていれば、何の問題もないんだから。

　でも、こんなふうに誰だれかと歩きたかった。

　同じ歩ほ幅はばで歩きたかった。

　無理をしないで歩きたかった。

　飛燕フエイヤンはユリカより背が高い。いかにもせっかちそうだし、普ふ通つうに歩いたら、ユリカよりも速いに決まっている。あわせてくれているのだろうか。そうとしか思えない。でも、きけなかった。どう尋たずねたらいいかわからなかった。そのうち事務所についてしまった。事務所には誰もいなかった。荷物を整理してから、二人分のお茶を淹いれた。ジェードリで買ってきた龍州産のハイアット茶を見ると、飛燕フエイヤンは、おおっ、なっつかしーなァ、と嬉うれしそうに目を細めた。コレよォ、オレのフルサトではさァ、砂糖ガバガバ入れて飲むヤツがいンの。あとトウガラシとかサンショウとかさァ。しょんなことしたら、香かおりが飛んでしまうじゃない。ユリカがそう言うと、飛燕フエイヤンは、そーなんだよなァわかってねーよなァ茶はそのまんまがベストだよなァ、とお茶に口をつけた途と端たん、あぢいいっ、と跳とびあがった。ユリィ、コレあっちいよ、オレ猫ねこ舌じただって知ってるくせによォ。しょんなこと、知るわけないでしょう。え？　言ってなかったっけ。聞いてないわよ。ありゃ。ンじゃー覚えといてくれよ。オ

レつめてーもんが好きだから。あっちーのは苦手なんだよ。ただでさえあっちーくてさァ。ダブルあっちーはさすがにつれーし。そういえば、飛燕フエイヤンは厚着だった。目が隠れそうなくらいフードを目ま深ぶかにかぶっているし、手て袋ぶくろも嵌はめたままだ。今の季節を考えればさほどおかしくはないが、暑いのなら脱ぬげばいいのに、そうしないということは、何か理由があるのだろうか。そんなことを考えていたら、飛燕フエイヤンが見つめ返してきた。何？　オレの顔面に何かついてる？　ユリカは慌あわてて顔を背そむけた。べ、べちゅに、何もちゅいてないわ。そ？　そンならいーんだけど。なァなァ、そろそろ遊びに行こーぜ。弾はじけよーぜ。フィーバーしよーぜ。遊ぶって、でも、何をするんだろう。

　何をするでもなかった。飛燕フエイヤンはユリカを外に連れだすと、この前何をしたとか、誰がどうしたとか、こんなことがあってどう思ったとか、たわいないことを話しながらぶらぶら歩いた。ユリカは道を覚えるのが得意ではなくて、知らない場所へ行くとすぐに迷ってしまうので、気がつくと自分がどこにいるのかよくわからなくなっていたけれど、途切れないお喋しやべりのせいで、不安を感じる余よ裕ゆうもなかった。それにしても、よくもまあこんなにバカバカしい話が次から次へと出てくるものだ。ようするに、日常の出来事について、感想を交えつつおもしろおかしく語っているだけで、たとえば、朝起きたら猛もう烈れつに炭酸の飲み物が飲みたくなって、冷蔵庫を開けたら麦ビ酒アしかなくて、しょうがなく飲んだら苦くてなんだか頭にきて、おかげでその日はずっと機き嫌げんが悪くて、それなのに寝ねて起きたらすっかり気分がよくなっていたとか、要点をまとめると、どう考えてもつまらないのに、どうしてそれなりに笑ってしまったり、印象に残る箇か所しよがあったりするのだろう。饒じよう舌ぜつな飛燕フエイヤンにつられて、ユリカも少しだが、ジェードリに行っていたことや、その街並み、風景について話した。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツがらみの事件には一いつ切さいふれなかった。海かァ、と飛燕フエイヤンはため息をついた。そーいゃーしばらく見てねーなァ海。龍州は海だらけだったし海渡って大陸きたけどよォ。海見てーなァ。今度行こーぜ海。今度……って、ジェードリは、しゅごく遠いのよ。気軽に行ける距きよ離りじゃないわ。いーじゃんよォベつにさァ遠くたって行けねーわけじゃねーし。だって実際ユリィ行ってきたんだろ？　オレも行きてーよ。行こーぜ海。泳ごーぜェ貝とかウニとかとろーぜェ砂で埋うめっこしよーぜェ。行、き、ま、しぇん。
えー、なんでェー？　どうしても。つっまんねーのォ。

いつの間にか第一区に入っていた。あッ、そーだオレさァ、と飛燕フエイヤンが思い出したように言いだした。せっかくエルデンにいるのに、シャイニンググローリーパレスをちゃんと見たことがないので、見物してみたいとのことだった。なんだか少しいやな予感がしたけれど、拒こばむ理由はなかったので、キング・グッダーが住まう城の近くまで行った。予感は物の見事に的中した。大勢の魔ま導どう兵へいに守られている城の表門を見た飛燕フエイヤンが、中に入りたいと騒さわぎだしたのだ。魔導兵たちはそれだけで反応した。

「うっはッ！　キャッハハハハッ！　やっべ！　逃にげっぞユリィ！」

「ちょ、ちょっと、何しゅ──」

「爆ばくＲＵＮイエエエエェェヤァァッ……！」

抵てい抗こうする間もなかった。飛燕フエイヤンはユリカを抱だきあげて走りだした。自分がいつもの自分ではないことにようやく気づいたのはそのときだった。極限クライマックス九手棍ナインボールがない。なくしたのではない。事務所に置いてきた。意識的に持ってこなかったわけではない。忘れていた。ずっと手ぶらで街を歩いていたのか。当然、そういうことになる。もちろん、たとえ素す手ででもそこらの悪党バスターには遅おくれをとらないつもりだけれど、腕うでが立つ者なんていくらでもいる。ユリカの場合、体格の面での圧あつ倒とう的な不利もある。トワニングがユリカに自身の極限九手棍を授さずけてくれたのは、戦せん闘とう者は現実主義者であらねばならないというメッセージだった。足りない部分があれば何かで補わなければならない。精神の力だけでは埋めがたい溝みぞはあるのだ。そのための武器を持たずに雑談などしながら街をぶらついていた。危機感なんて少しも抱いだかずに。

下ろして、と叫さけんでみた。

やァーだ、と飛燕フエイヤンが叫び返した。

ああ。

つめたい風は、もう冬のにおいがする。

そのうちエルデンに雪が降るだろう。

　雪は好きじゃない。

　いい思い出がないから。

　父が消えた日は雪が積もっていた。

　あの日も、雪。

　わたしは自分の名字さえも嫌きらい。

　でも、わたしは自分の名を捨ててしまったから、名字まで捨てるわけにはゆかない。

　わたしがなくなってしまいそうだから。

　それに、乗り越こえたくて。

　憎にくしみをずっと抱かかえつづけるのは、苦しいから。

　いつか慣れるだろうと。

　冬は、嫌い。

　冬のにおいがする風も、嫌い。

　大嫌いだったのに、今は少しだけ、気持ちいい。

　飛燕フエイヤンは結局、ユリカを抱えたまま第五区まで走った。もーいっか、と飛燕フエイヤンが歩きだしたので、しょろしょろ下ろして、と怒おこった表情と口調で言ってみたら、びっくりしたような表情でききき返された。

「え、何、やだった？　ユリィ、キレてんの？」

「……べちゅに、キレてないわ」

「うっそ、だって怒りんぼっぽい顔してたじゃん」

「してましぇん！」

「マジィ？」

「マジ！」

　ちょっぴり後こう悔かいした。飛燕フエイヤンはバカをつけてもいいくらい正直だ。本当に下ろして欲しいのなら、怒ったふりなんかせずに、自分が思ったとおりのことを思ったとおりに言えばよかった。でも、そうすることもできたはずなのに、しなかったのはなぜだろう。

　肩かたを並べて第五区を歩いた。さっきよりも飛燕フエイヤンの口数が少なくて気づまりだった。二人の間に沈ちん黙もくが訪おとずれるたびに、何か話さないといけないような、誰だれかに話せ話せとせっつかれているような気分になって、落ちつかなくて、焦あせって、余計に何も思い浮うかばなくなって、サフィニアやマリアやカタリと一いつ緒しよにいるほうがやっぱりずっと気楽だと痛感した。ＺＯＯのみんなといるときは、喋ることがなければ喋らないし、全員が黙だまりこんでいても気にならない。そのうちまた誰か何か話しだすだろうし、たとえ今日喧けん嘩かをしても明日仲直りすればいい。

　仲間とは違ちがう。

　あたりまえのことだけれど、じゃあ、どうしてわたしはこの人と二人きりでこんなところを歩いたりしているんだろう。

「──あ」

　飛燕フエイヤンが足を止めて手を打ちあわせた。

「服とか見にいかね？　つーかユリィは？　なんかさァ、いっつもその服着てっけど。他ほかの着てるとこ見たことねーんだけど。ユリィはどんなの好きなん？」

「どんなの、って……」

　ユリカは顔を伏ふせた。答えられないというよりも答えづらい質問だった。ユリカだって私服くらい持っているけれど、正直、どこのブランドの服が好きだとか、どういう服がいいと思うとか、説明できるほどのこだわりもなければ、知識もない。最低限の衣類を買い求める際は、デザインよりも動きやすさや丈じよう夫ぶさ、あとは価格で選ぶ。よく買い物につきあってくれるサフィニアやマリアローズがすすめてくれたものを、そのまま買うことも多い。どうせよくわからないのだ。自分にはそういったセンスが欠落しているに違いないとユリカは思っている。だから、サフィニアやマリアロー

ズは、さりげなくユリカに似合うものを教えてくれようとしているのだろう。そのことに気づいていながらも、ファッションには興味を持つことができないし、理解することもできそうにない。衛生に悪いので清潔さは保つべきだと思うけれど、自分を飾かざり立てることにはどうしても意義が見いだせない。

「……ないわ。好しゆきとか、嫌いとか。サしやイズがあえば、しょれで」

「ふーん。もったいねー。ユリィ、せっかくかわいーのによォ」

「かわぃ──って、わたしが？」

「いや、ユリィ目の前にしてユリィ以外のこと喋しやべらねーだろォフツー」

「しょれは、しょうだけど……」

　今、わたしの顔は真っ赤だろう。面と向かってそんなことを言われると、恥はずかしい。それだけじゃない。飛燕フエイヤンの眼まな差ざしや言葉はとてもとてもまっすぐだから、持ちあげたりおだてたりしているわけではないだろう。ほんの少しだけれど、嬉うれしい。褒ほめられて嬉しくないわけがない。だけれど、これはわたしじゃない。あなたが見ているわたしはわたしじゃない。わたしはもういない。どこにもいない。いないと思いたい。本当は、いる。ちゃんといる。

　このどす黒いものが、たぶんわたしだ。たまにどこからかしみだしてきて、集まり、固まって、渦うずを巻く。たちまちのうちにユリカの中を満たしてしまおうとするそれは、気持ちの悪い熱を持っていて、ねばねばしていて、どこまでも黒くて、何もかもをその色に染め抜ぬいてしまおうとする。それが外に噴ふきだす形はいろいろだ。怒いかりだったり、恨うらみだったり、妬ねたみだったり。とにかく、醜みにくくて、暗くて、熱い。わたしは笑ってごまかそうとする。でも、笑え顔がおはユリカのものだ。わたしの正体はこれだ。わたしは正論をぶって自分を正当化しようとする。でも、その声はユリカのものだ。わたしの正体はこれだ。真っ黒で、ぶよぶよしていて、のたうっていて、わたしは何もかもを汚けがそうとする。

「どした？」

飛燕フエイヤンが手をのばそうとしていったんやめ、手て袋ぶくろを外した。

頬ほおにふれた手は熱かった。

ユリカの内側にある熱と同じくらい、熱かった。

顔を上げると、飛燕フエイヤンが、へっ、と笑った。

「あっちーだろオレの手。オレさァ、変な病気なんだよね生まれつき。平熱が高ェーの。暴れすぎっともォーっと熱出てさァ。けどガキのころはやっぱ遊んだりしてーじゃん。そんで遊びまくってたら死にかけた死にかけた。心配かけてテメーなんか死ねってジーチャンに何回も言われたよ。ま、ジーチャンのほーが先におっ死ちんじまったけど。それはいーんだけどよォ、オレァあったまにきてさァ」

「……何が？」

「なんでオレだけこんななンかなァーって。オレよっかもっと弱っちーくてかっこ悪ィーヤツいっぱいいるわけじゃん。それなのに、こんなンなってんのオレだけじゃん。そりゃムッカリするって。ひでェー話とか思うって。ムッカムッカしてよォ強くなってやンぜーってかんじで修行したよ。しまくったよ。ムカつくヤツァオールボコッたね。ムタクソにやっつけたよ。龍州に園西香稜ユンシシヤンレンって町があンだけど、そこですっげーオレ有名だったよ。黒社会ヘイシーカイのボス何人もぶっ倒たおしてさァ。偉えらくなったよ。みーんなオレ見たら道あけたよ。マジクソビビられてたよ。たまに熱出るとキョーフだったけどね。狙ねらってたからさァ。いろーんな野や郎ろうがオレのこと」

飛燕フエイヤンの手はまだユリカの頬にふれたままだ。

熱い。

熱すぎて、涙なみだが出そうになる。

「今はちびーっとちゃうけどな」

飛燕フエイヤンは、にいっ、と唇くちびるをゆがめて目を細めた。

「ジンもいるしよォ。あいつ、変態だけど意外といいヤツなんだ。手下もよォ。オレにビビりまくってるヤツもいっけど、そんだけじゃーねーよ。オレに意見するヤツもいるよ。仕事しろとかうるせーヤツもいるしね。こないださァ、一回倒れたんだオレ。手下の前で。やっべオレ殺やられるとか思ったけど、運ばれてやんの。手下がみんなでオレのこと運んでんの。ベッドに寝ねかして医術士とか呼んでさァ。ユリィがいりゃーよかったんだけどな。まァ、どーやっても治んねーらしーけど。あれにゃーまいったね。龍州にいたときとはなーんかちゃうな。何がちゃうんかっつってもよっくわっかんねーけどちゃうね。まだ、やっぱ思うけどね。なーんでオレこんななンかなーって。たまーに暴れたくなったりすっけどね。したら暴れればいーし。暴れたらある程度すっきりするしね」

「どうして」

　飛燕フエイヤンの手の上に自分の手を重ねた。

　──どうして。

　わたし、そんなことをしたんだろう。

「……なんで、しょんな話を、わたしに」

「さァー」

　飛燕フエイヤンはユリカのほっぺたを軽くつねった。

　痛くはなかった。

　ちっとも痛くなんかなかった。

「なんとなくだよ」

　飛燕フエイヤンはユリカの指を、手を握にぎって、引っぱった。

「行こーぜ、服見に」

　うなずくことこそしなかったけれど、逆らいはしなかった。手を繋つないで歩いている飛燕フエイヤンと自分は、どういう関係に見えるだろう。兄と妹。そんなところだろうか。でも、妹は年とし恰かつ好こうのわりに女性用ナース医術士服・ユニを着て女性用ナース・医術士帽キヤツプをかぶっているから、なんだか変だと思われ

るかもしれない。普ふ段だんは外見の年ねん齢れいにふさわしい恰好をしたほうがいいのかもしれない。ただ、医術士はできるだけ医術士服を身につけて、自分が医術士だということがわかるようにしなければならない。少なくとも、ユリカが医術式を学んだナタリア・ヴィーのアーヘンホルド派にはそうした決まりがある。お笑い種ぐさだ。決まりなんて。この医術士服だって、アーヘンホルド派のものではない。鵺ヌエ流古式戦闘術のシンボルである赤いラインを入れた医術士服をわざわざ作ってもらって着ている。いろいろなものを捨てて、新しい何かを身にまとって、そうして生きているのに、引きずっているものも多すぎて、重かったはずの足どりが、今は軽い。

　鉄てつ鎖さの憩いこい場にほど近いカンダヴァストリートには、たくさんのブランドショップがひしめいている。古いお寺やお城のように荘そう厳ごんだったり、はっとさせられるくらいきらびやかだったり、そっけなく感じるほどすっきりしていたり、店構えはさまざまだけれど、どれも高級なお店だということは一いち目もく瞭りよう然ぜんだ。飛燕フエイヤンは、どこがいっかなー、と物色しているようだが、こんなお店にユリカを連れて入るつもりなのだろうか。おそるおそる尋たずねてみると、なんで？　ときき返された。こーゆーのは嫌きらいなん？　手下にくわしいヤツとかいてさァ。そいつがよく言ってンだけど、服とかって高いモンのほーが結局いーらしーよ。でも、とユリカは通りの両側に建ち並んでいるブランドショップを見回した。

「──どこも、しゅごく高しょうだし」

「あ、金？　金はへーキ。オレいっぱい持ってるし。オレ、ボスだし。儲もうかってンよ？」

　飛燕フエイヤンは呆あっ気けにとられているユリカを引っぱって、すぐ近くの店にずんずん入っていった。そこがまた、よりにもよって一番入ってはいけないような、ひときわ大きくて、豪ごう華かで、威い圧あつ的でさえあるお店だった。中に入ると、というよりも連れこまれると、磨みがき抜ぬかれて鏡のように光を反射する黒い石か何かでできた天てん井じようと壁かべと床ゆかにまず圧あつ倒とうされてしまった。あちこちにあしらわれた金や銀の飾かざりもきれいだった。その飾りを照らす照明も美しかった。店の奥のほうではヴァイオリンとピアノが演奏されていて、揃そろいの黒い服を着た店員たちはよくできた人形のようだった。一人の店員がすっと近づいてきて、いらっしゃいませ、と丁てい寧ねいに頭を下

げた。子供が何の用だ、と思っているような表情ではなかった。徹てつ底てい的な無表情だった。

「ユリィにあう服探してんだけどさァ。なァーんかいーのねー？」

「かしこまりました。見みつ繕くろわせていただきます。お客様、何かご希望などございますか」

「……え。あ、しょの、希望は……とくに」

「左様でございますか。それでは、こちらで少々お待ち下さい」

　店員の案内で、二人は店の真ん中あたりに置かれたやたらと座り心ごこ地ちのいいソファに座った。すぐに別の店員が飲み物やら菓か子しやらを持ってきて、サービスいーなァ、と飛燕フエイヤンは笑い、ありがとうございます、とやはり無表情で一礼した店員に、けどでもスマイルが足りてねーよ、と笑え顔がおの指導を始めた。店員は弱り果てていて気の毒だったけれど、おかげでユリカは少し緊きん張ちようがほぐれた。冷静に物事を考えられるようになると、途と端たんに居心地が悪くなってきた。とはいえ、今さら店を出るわけにもゆかなかった。間もなく最初の店員が戻もどってきて、ご用意ができました、どうぞこちらへ、とユリカを更こう衣い室に導いた。何やら衣服を渡わたされて着るように言われ、立派な更衣室の中で一人きりになったはいいけれど、見たこともない形で、どう着ればいいのか見当もつかなかった。迷った末に、更衣室の外に呼びかけた。あのう、着方がわからなくて。すかさず、お手伝いいたします、と女性の声がした。女性の店員は手て際ぎわよくユリカの着き替がえを手伝ってくれた。着終えると、とてもよくお似合いになってらっしゃいます、と微笑ほほえみかけてくれたので、鏡を見てみたら、会ったことのない女の子が立っていた。更衣室から出ると、飛燕フエイヤンが飛んできて、うおっ、と叫さけんだ。店員たちも無表情の仮面を脱ぬぎ捨てて、口々に褒ほめてくれた。穴があったら入りたい気分だった。



「やっべ。マジかわいって。ユリィ、すっげーよマジで。マジ超ちようすっげー」

「……しょ、しょうかしら」

「いやマジだから。ウルトラマジ。なァ、ユリィかわいーよ

なァ？」

　飛燕フエイヤンにそうきかれた店員たちは、皆みな、一様にうなずいた。他ほかのも着てみれって、と言われて、何着か試着させてもらった。ユリカの知識ではそれを何と呼んだらいいのかすらわからない服ばかりだったが、すべて好評だった。飛燕フエイヤンはともかく、他はお店の人だからお世辞に違ちがいないけれど、悪い気はしなかった。飛燕フエイヤンはユリカ以上に気をよくしていた。

「ンじゃ今着たヤツ、ゼーンブ買うからさ。いくら？」

「ありがとうございます」

　最初の店員が無表情に戻って頭を下げた。その間に他の店員が素す早ばやくユリカが試着した服をたたみながら何かを紙に書きとめ、最初の店員に渡した。

「お会計は──」

　それからしばらくしてユリカと飛燕フエイヤンは店を出た。飛燕フエイヤンは肩かたを落として、魂たましいを抜かれたような顔をしていた。まだ驚きよう愕がくがぬぐい去れないようで、ひどく落ちこんでもいるみたいだった。ユリカも驚おどろいていた。高いだろうと予想してはいたけれど、まさかあそこまでとは。入る前は確かく認にんできなかったが、流りゆう麗れいな字体で建物の脇わきに店の名前が刻まれていた。ユリカでも聞いたことくらいはあった。〝Guillaume〟。ギョームと読むらしい。ユリカが試着させてもらった衣類の総額は七千八百万ダラー。一千万ダラー以上するブラウスなんて誰が買うのだろう。

「……四百万は持ってんだけどよォ……。桁けたが一個ちゃうってどーゆーことよ……。恐おそるべしだよなァ、ギョーム。超怖ェー」

「着しぇてもらったの、コレクション用に作ちゆくったオートクチュールだから、余計に高いんだって……。他にはあうサしやイズじゆのがなかったみたい……」

「んー……」

　飛燕フエイヤンは足を止めてため息をつき、ユリカの両手を握にぎった。

「ごめんなァ、ユリィ。服買ってやる気マンマンだったのによォ。金が足ンねーんだもん。やべーよ。オレ超かっこ悪ィ」

「しょんなの」

　自然と笑みがこぼれた。

「気にしなくていいわ。もともと、買ってもらうちゅもりなんてないし」

「ふえ？　なんで？」

「だって、おかしいでしょう。理由もないのに、誰だれかに何か買ってもらうなんて」

「そーなん？　べっつにおかしかねーと思うけどなァ。つーか理由はあるし」

「どんな理由？」

「ユリィがソレじゃねーかわいー服着てるとこ、オレが見てーから」

　つーわけで、と飛燕フエイヤンはユリカの手を握ったまま後ろ向きで歩きだした。

「シリアルキラーの店行こーぜ。あそこなら顔きくから、いーのなかったら作らせるし」

　慣れかけているのだろうか。ユリカは拒こばまなかった。でも、しょんな歩き方しなくても、と言ったら、だってこーすりゃユリィの顔見て歩けるじゃん。けど、危ないわ。危なくねーって。オレはアレだから、後ろに目ェーついてっから。武術の達人だしね。もう。いやマジで。オレケッコー達人だよホント。毎日鍛きたえてっしさァ。アレじゃん。手ェ抜ぬくとすぐ落ちるじゃん。そのへんシビアだよなァ地味に。しょうね。あ、わかる？　わかるわよ。じゃー仲間だなァ。しょうね。ちゃうな。違うの？　ちゃうなァ。仲間ってかんじじゃーちょっとねーよなァ。ユリィは。じゃあ、何？　んー……何だろな？　何かしらね。何だろォーなァー……。

「──あ、そーいェーばさァ」

飛燕フエイヤンは話をそらそうとしたのだろうか。気のせいかもしれないけれど、そう思えた。

「ユリィが帰ってきたっつーことは、アイツもエルデンにいンだよな。あの──」

「誰？」

「赤い髪かみのヤツ。オレンジ色の目で」

「マリア？　ええ。一いつ緒しよに帰ってきたから、もちろんいるわ。しょれがどうかしたの？」

「いや、ムタクソ捜さがしまくってたなァーって思って」

「マリアを……？　誰が？」

飛燕フエイヤンは、ん、まあ、と斜ななめ上に視線を向けて、口をひん曲げた。

「ジンがね。荊王ジンワンってタッパあるヤツ。なんか歯がどーしたとかぶつぶつ言ってたけどなァ。アイツ、わりといいヤツだけど、マジクソ変態だかンなァ……」

Omenage 897 12th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

〝死にかけ雷電(ダイングサンダーボルト)〟

chapter.5

油断は大敵

　ベッドが一つ、ソファが一つ、ソファテーブルが一つ、ＥＭＵ印の小型冷蔵庫が一つ、それから小さめの棚たな、家具は以上だが、散乱している衣類の量が半はん端ぱではなく、なかには使用済みというか脱ぬぎっぱなしで洗っていないもの、しかも下着まであって、足を踏ふみ入れることさえためらわれる部屋だった。当貸し宿〝死にかけダイング雷電サンダーボルト〟の主人エレクトリック・マーダー氏の話によると、メツェルディという男はもう二年以上この部屋を借りているらしい。散らかし放題なので、たまに氏の奥さんであるエレクトラ・マーダーさんによって強制大おお掃そう除じが命じられることはあるものの、金払いがいいので追いだすまでには至っていないとのことだ。何しろエルデンですから、とボンデージファッションに身をつつんだ美人のエレクトラさんは嫣えん然ぜんと微笑ほほえんでみせた。ろくでもないお客様は大勢いらっしゃいますし、メツェルディさんはまだマシなほうです。ブタはブタでも調教できるブタですから。あら、わたくしとしたことが、お客様のことをブタだなんて。失礼。メツェルディさんは話せばわかるブタ野や郎ろうです。

　そのブタ野郎、いや、メツェルディは、何を隠かくそう昼飯時ランチタイムのメンバーだ。昼飯時ランチタイムといえば、現在、頭領マスターのアジアンとヨグ、それから〝垂れ目のベテイ・ザ・ドウベティルーピングアイズ〟以外は失しっ踪そうしている。つまり、ここは失踪者の部屋だ。どうしてマリアローズたちがそんな場所にいるのかというと、とりあえずマリアローズの意志できたわけではない。それではいったい誰が言いだしたのかといえば、今、一人で部屋の中を猛もう然ぜんと荒あらしまくっている、少なくとも荒らしているようにしか見えないアンポンタン半魚人だ。n'ebulaを出たあと動物園事務所でつかまえた、何の因果か釣つりあげてしまった脳みそ腐ふ乱らん半魚人が提案して、他ほかに何かアイディアがあるわけでもなかったから、誰も反対はしなかった。ちなみに、半魚人の提言はたしかこんなかんじだった。

「ほんだらもうアレしかないな。やっぱしこうゆうときはアレやろ。アレや。何や。ほれ、わかるやろ。ええと、その、アレや。家宅捜そう索さくや。な？　基本中の基本やで。ベーシカリィーや。ベーカリィーとはわけがちゃうねんで。せやろ？」

　最近、やたらと「アレ」が多い。半魚人の脳は間ま違ちがいなく朽くち果てようとしている。そんな死にかけ雷電ならぬ死にかけ半

魚の意見を採用するのもどうかと思わないでもなかったが、失踪者の部屋を調べること自体には一定の意義があるだろう。ただ、エレクトラさんに鍵かぎを開けてもらってびっくり、どこから手をつければいいのやら。迷っている間に半魚人が特とつ攻こうして、そこらじゅうに散らばっている衣類を手にとったり、眺ながめたり、においを嗅かいで顔をしかめたり、放ほうり投げたり、棚を開け閉めしたり、ベッドの寝ね心ごこ地ちを確かめたりしはじめた。半魚人につづこうとする者は誰もいなかった。だから、それじゃただ荒らしてるだけだってば。

「ずううぅぅぅぅおおおぉぉぉりゃあああああぁぁぁぁぁごおおおおおぉぉぉぉぉ……！」

「……ピンパーネル。お願いだからあのバカを止めて」

「はイ」

　音もなく部屋に駆かけこんでいったピンパーネルの飛び膝ひざ蹴げりを後頭部に食くらった半魚人は、ぐげっ、と呻うめいて衣類の山と化したベッドに頭から突つっこんだ。ちなみに、ピンパーネルはカタリやサフィニアと一緒に動物園事務所にいたので、事情を話してきてもらったのだが、半魚人のドアホウは土下座をして頼たのまれても連れてくるべきではなかった。後こう悔かい先に立たずと言うけれど、今からでもスマキにして道みち端ばたに遺い棄きしてしまったほうがいいかもしれない。せめてユリカがいれば、もう少しカタリの手た綱づなを締しめる作業も楽になるのだが、ジェードリで買ったお茶やらカップとソーサーやらは事務所にあって、なぜか極限クライマックス九手棍ナインボールまで置いてあったので、一度は顔を出したに違いないけれど、姿は見あたらなかった。散歩にでも出かけたのか、カタリたちが事務所にきたときにはもういなかったとのことだ。ユリカは大人だから心配しなくてもいいと思うが、やっぱり少し気になる。気にはなるけれど、ユリカはしっかり者なので取り越こし苦労だろうし、まずは目の前の状じよう況きようをどうにかしないといけない。

　マリアローズは廊ろう下かでぽかんとしているアジアンとヨグ、それから鞭むちらしきもので自分の肩かたをぺしぺし叩たたいているエレクトラさんを一いち瞥べつして、こわごわと部屋の中に入った。なんとも言えない、むっとするようなにおいがした。たえきれずに窓を開けると、涼すずしいというよりつめたいくらいの風が吹ふきこんできて、少しだけましになった。それにしても、だ。

「……これじゃあ、手がかりがあったとしても、探すのは骨だね」

「でしょう？」

　ヨグがひょいひょい跳とんで衣類をよけながらマリアローズについてきた。アジアンもようやく部屋に入ってきたが、エレクトラさんはドアの外から動かない。騒さわぎを聞きつけて貸し宿の他の客たちが集まってこようとしているみたいで、何でもないとか近づくと承知しないとか聞きわけのないブタには容よう赦しやしないとか、鞭を振ふりながら野次馬どもに説明してくれているようだ。いや、説明というよりも調教というべきか。まあ、どっちでもいいのだが、貸し宿を称しようしつつ実態はそういうお店なのかな、ここ。べつにいいけど。

「僕がこの部屋を訪ねたときもですね、この有様でして」

　ヨグは右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直して肩をすくめた。

「部屋の鍵はかかっていましたが、窓は施せ錠じようされておらず、メツェルディはいませんでした。それから、鍵はテーブルの上ですね。そこにありました。状況からすると、メツェルディはこの部屋から何ものかによって連れ去られた。そう考えるのが妥だ当とうなのではないでしょうか」

「ふーん。鍵が──って、鍵がかかってたのに、きみはどうやって入ったわけ？　エレクトラさんに開けてもらったの？」

「ノックはしたのですが、返事がなかったものですから」

「それってぜんぜん答えになってないよね」

「いずれにしても、心の扉とびらを開いてもらうほどには困難な作業ではないと思いませんか」

　つまり、ヨグは何らかの方法で外側から解錠してこの部屋に侵しん入にゆうし、メツェルディの不在を確かく認にんしたということか。信用できないというか、信用してはいけない男のようだ。

　ともかく、部屋の鍵らしきものはたしかにソファテーブルの上にあった。招き猫ねこのキーホルダーがついている。結構かわいいけれど、そんなことはどうでもよくて、普ふ通つう、部屋を空けると

きは鍵を持って出るだろうし、出入口のドアは施錠されたままだったわけだから、ヨグの言うとおり、メツェルディはここにいたのだ。窓の鍵がかかっていなかったということは、やはりそこから出た、あるいは連れだされたのだろう。死にかけダイング雷電サンダーボルトは三階建てで、この部屋は三階だ。べらぼうな高さではない。窓から外を見てみると、隣となりの建物の屋根がすぐに下にあった。通りには面していないから、人目にもつきづらい。路地も人が通れるくらいの幅はばはある。これだけの材料ではヨグと同じ推理しかできそうにない。あとは、何か盗ぬすまれたものはないか、とか。争った形けい跡せきはないか、とか。調べられるとしたら、その程度だろうか。

「たとえば、お金とかは──」

「ゼニはあったで」

　衣類の山から這はいだしてきたカタリが、一本のジーンズを手にとり、逆さまにして振った。尻しりポケットからじゃらじゃらと床ゆかに落ちたのは紛まぎれもなく硬こう貨かだった。一万ダラーＧＭ合金貨も何枚か交じっているので、ちょっと小銭をポケットに突っこんでおいただけ、というかんじではない。おそらく、財布を持たない主義なのだろう。ヨグの証言がマリアローズの推測を裏付けた。

「それはメツェルディがいつも穿はいていたジーンズですね。彼がポケットから金を出す場面を何度か目にしたことがあります。確実ではありませんが、外出するとしたら、それを穿いて出るのではないでしょうか」

「物もの盗とりじゃなさそうだね。まあ、もともとその可能性は薄うすいんだろうけど。誰だれかに襲おそわれて抵てい抗こうしたとか、そういう跡あとは──」

「もちろん、わしもソレを探しとったんや」

　カタリはベッドの縁ふちに腰こしかけて分別魚顔で腕うで組ぐみをした。

「こう、相手が何かを落としていきよったりとかな。物ぶつ騒そうな話やけど、血けつ痕こんとかな。ようあるやろ。小説なんかで」

「……へえ。そんな小説とか、読むんだ。魚以上人間未満なくせに」

「わしを何やと思とるんや。こう見えてな。わしは結構な読書家なんやで。推理小説とかな。よう寝ねられん夜はひもとくわけや。ソッコーやで。一ページもかからん。行単位でハバグッドスリープっちゅうかんじや」

「それってろくに読んでないんじゃないの」

「そうともゆうけどな？」

「そうとしか言わないよ」

　普ふ段だんなら罵ば声せいの一つや二つ浴びせるところなのだが、ため息しか出てこない。カタリも肩すかしを食ったような顔をしているけれど、こんなときに鬼おにツッコミを期待されても困る。

「……すまん。そのう……もうちょい真ま面じ目めにやるわ」

「できればそうしてくれる？　煮にたり焼いたり燻いぶられたりしないうちに」

　マリアローズはもう一度ため息をついて、ベルトの小物入れから時計を出した。そろそろ十八時か。サフィニアには同じく第十区に住んでいるベティを呼びに行ってもらった。二人とは二十一時に動物園事務所で落ちあうことになっている。あと三時間。それまでの間に何かつかむことができるだろうか。どうもあまり見込みはなさそうだが、何もしないよりはましだろう。というよりも、そう思わないとやっていられない。

　マリアローズは部屋の中を見回した。だいぶカタリに荒あらされたはずだけれど、正直、第一印象とあまり変わらない。もともとかなり汚きたなかったし、見るにたえないほどごちゃごちゃしていて、どこに何があるのか、住んでいる本人はわかっているのかもしれないが、他人には絶対にわからない、そんな部屋だった。ピンパーネルやヨグもカタリと手分けして本格的に捜そう索さくを開始しようとしているものの、成果が上がるかどうか。はっきり言って、望み薄だろう。でも、決めつけはよくないし、ちょっとしたきっかけで事態が動くことだってある。何が原因でろくでもない目

に遭あうかわからないし、何が幸いするかもわからない。それが人生だ。

　とりあえず、カタリたちはベッド周辺に手をつけているので、ソファのあたりでも調べてみようか。そう思い、ソファの背もたれにかけてあったＴシャツを手にとると、胸のあたりに染しみがついていた。一目でわかった。コーヒーだ。徒労感が襲ってきて、またもやため息をついてしまった。いけない。マリアローズは頭を振って、ちらりとアジアンを見た。

　アジアンは顔をうつむけて立ちつくしていた。きみも黙だまってないで、何かして、と叱しかりつける気分にはなれなかった。こいつって、こんなに細かったっけ。小さかったっけ。たしかに体格がいいほうでは決してない、男にしては華きや奢しやな身体からだつきといってもいいくらいだろうが、たとえばトマトクンと並んで立ったとき、背せ丈たけや肩かた幅はばや胸むな板いたの厚さは圧あつ倒とう的に劣おとっていても、不思議とそこまで小さくは見えなかった。少なくとも存在感は拮きつ抗こうしていた。いつもではないにせよ、そこにいるだけで、只ただ者ものじゃない、危険だ、道を譲ゆずるべきだと思わせるような、他を圧してやまないような雰ふん囲い気きを漂ただよわせていた。そんなやつが、どうして僕の前ではあんなふうなんだろう。何度も抱いだいた疑問だった。結論は出なかった。正確に言えば、その時々で変わった。ふざけているんじゃないかとか。からかっているに違ちがいないとか。二重人格なんじゃないかとか。ただ頭がおかしいだけなんじゃないかとか。それでも、いざとなれば、虐殺人形カーネイジドールの異名どおり、眉まゆ一つ動かさずに、抜ぬく手も見せず、一ひと滴しずくの返り血も浴びずに、立ちふさがるものの命を絶ってみせる。間違いなくその力があるのだということは、目が節穴でないかぎり、見ただけでわかるはずだ。におい、と言ってもいいかもしれない。トマトクンやピンパーネルにもそれはある。そのにおいを感じとると、マリアローズのような弱者は自然と足がすくんでしまう。絶対に勝てない。敵対するな。逃にげろ。さもないと、殺される。食うか、食われるか、ではない。食われるか、なんとかして食われないようにするか。そこには決定的な差があった。あとはそれを認めて受け容いれるかどうかだった。たとえ受け容れなくても、あるものはある。そのはずだった。それなのに、変だ。ものすごく、変だ。

　今のアジアンでは虫も殺せないだろう。強い風が吹ふいたら飛ばされてしまうだろう。どうにか立っているけれど、ひどくつらそう

だ。自分の体重を支えているだけでやっとなのではないか。きっとそれ以上の重みには耐たえられないだろう。ずいぶんと苦しそうだ。

　アジアンの唇くちびるが動いた。

　声は聞こえなかった。

　でも、何か言った。

　おそらく、こんなことを。

　ボクノ、セイデ。

　マリアローズはＴシャツをソファの背もたれに戻もどして、アジアンに歩みよった。

　肩にふれると、ようやくアジアンは顔を上げた。

　見知らぬ場所に迷いこんでしまい、もうかなり長い間、帰り道を見つけようと歩き回っているけれど、一向に見つかる気配がなくて、あきらめたわけではない、でも、どうすればいいかわからない、そんな表情だった。

「ね」

「……ああ」

「メツェルディってさ。どんな人なの」

「どんな──」

　薄うす青あお色の瞳ひとみが戸と惑まどいに揺ゆれた。

「……どんなと言われても。メツェルディは、仲間で。昼飯時ランチタイムの。顔に傷がある。自分でつけたもので、わざと消さないらしい。行くところがないと言っていた。親も知らないし、兄弟もいない。屑くず街がいで育って、気がつくといつも一人で。そのせいか、他人とはどうもうまくやれないと言っていた」

「そう。なんで昼飯時ランチタイムに？」

「たいした経けい緯いじゃないヨ。ボクらのことを快く思っていな

いクランはたくさんあって、メツェルディはもともとそのうちのどれかの下っ端ぱだったらしい。でも、そのクランではいい扱あつかいを受けていなかったようで、何を思ったか、何がきっかけだったのかは知らないけど、ボクらの周りをうろつくようになった。だからといって、話しかけてくるわけでもない。それほど近くにも寄ってこない。ただ少し離はなれた場所でボクらをじっと見ていた。だから、ある日、ボクから声をかけた。素す直なおじゃない男で、一度目は逃げてしまった。三度目でようやく一いつ緒しよに酒を飲んだ」

「じゃあ、きみが入れてあげたんだ」

「入れてあげたとは思っていない。そうじゃなくて──」

「大事な仲間、なんだよね」

「もちろんだ」

「歯、食いしばって」

「え？」

　それなりに手加減はしたつもりだった。

　アジアンの左ひだり頬ほおを平手でぶった。

　素手ではなかったから、いい音はしなかったけれど、部屋の中が静まりかえった。

　アジアンは目を瞠みはって自分の左頬をさわった。

「……え？」

「え、じゃないでしょ？　何ぼんやりしてるわけ？　仲間なんでしょ？　メツェルディって人だけじゃなくて、きみにとってはみんな大事な人なんでしょ？　それなのに、何やってるんだよ？　聞こえないと思った？　ボクノセイデ、とか呟つぶやいちゃったりしてさ。それで何か解決するの？　しないよね？　そんなのわかりきってるよね？　いくら何でもわかんないってことはないでしょ？　だいたい、よくわかんないけどさ、もしきみのせいなら、余計にきみがどうにかしないといけないんじゃないの？　きみがやらないで誰がやるわけ？　僕？　カタリ？　ピンパーネル？　ヨグ？　違ちが

うんじゃない？　誰だれよりもきみでしょ？　てことは、呆ほうけてる場合じゃないよね？　ね、聞いてる？　僕の話？　聞こえてるよね？　だったら、しっかりしてよ。てゆうか、しっかりしろ。いい？　オッケー？　わかった？」

「わ」

　アジアンはこくこくっとうなずいた。

「わかった」

「そ。よかった」

　マリアローズはアジアンに背中を向けて、ソファとその周辺の捜そう索さくを再開しようとしたのだが、まるで手につかなかった。何が、よかった、だ。よくない。ぜんぜんよくない。偉えらそうに。あんなことを言える立場じゃないのに。仲間。大事な仲間。そりゃあ、わかるよ。たしかにわかるんだよ？　今の僕には、仲間がいるっていうのはどういうことか、自分なりにちゃんとわかってるつもりだし、その仲間のために何かする、したいっていう気持ちもわかるし、大切な仲間に何かあったときにはすごくショックで、それが自分のせいかもしれないとしたら、つらい、とってもつらい、やりきれない、その苦しさだってわかる。そういうときは、でも、受け止めて、前に進まないといけないと思う。たとえ無む駄だでも、何かしないといけない。したほうがいい。だから、僕が言ったことは、たぶん間違ってはいない。少なくとも、おかしなことは言っていない。ただ、僕が言っちゃダメだ。僕が言うべきじゃない。僕にはその権利がない。資格がない。だって、そうじゃないか。確かめたわけじゃないけれど、ひょっとしたら、僕のせいでアジアンは何か大切なものを、もしかしたら大事な仲間を失ったかもしれないんだ。その僕が、いったいどのツラ下げてあんなことを。臆おく面めんもなく、恥はじを恥とも思わないで、ほっぺた引っぱたいたりなんかして、よくもあんなことができたものだ。

　きつい。

　きついよ。

　なんでこんなことをやってるんだろう。どうして我が慢まんしなきゃいけないんだろう。

罪つみ滅ほろぼしでもしているつもり？　がんばるから、帳消しにして欲しいって？

いいじゃないか。べつに帳消しになんかしてもらわなくたっていい。だいたい、知ったことじゃないんだ。アジアンの身の上に何があろうと。その仲間がどうなろうと。それがたとえ僕のせいでも。どうでもいい。関係ない。僕が悪いのかもしれない、でも、それがどうした。こっちだって今まで途と方ほうもない迷めい惑わくをこうむってきたんだ。僕ってひどいかな？　いいよ。ひどくてもいい。どう思われてもかまわない。平気だ。僕にはＺＯＯのみんながいるし。モリーだっている。ベアトリーチェもいる。仲間がいる。友だちがいる。お金も生きてゆけるくらいは十分稼かせげる。大変なこともあるけれど、楽しいこともいっぱいある。乗り越こえないといけない壁かべが目の前に現れたときも、上から引っぱりあげてもらったり、後ろから押しあげてもらったりできる。少し前まで想像もできなかった。毎日が充じゆう実じつしている。日々の生活を維い持じするだけで一いつ杯ぱい一杯だったころとは天と地ほどの差がある。正直、当時はたまにモリーと会うことが精神安定剤ざいだった。モリーと話をしている間だけ、ほっとできた。それに、認めたくはないけれど、アジアンにつきまとわれるのも、うざったいと思ってはいたものの、満まん更ざらでもない部分もあった。誰とも口をきかないで、黙もく々もくとアンダーグラウンドに潜もぐっているだけの暮らしは、やっぱりストレスがたまる。アジアンに文句を言ったり罵ののしったりあしらったりすると、少しだけ胸がすっとした。アジアンもまた、僕の中に鬱うつ憤ぷんがたまっているときにかぎって現れて、大おお袈げ裟さきわまりない身み振ぶり手振りを交えて、わざとらしくてバカバカしい台詞せりふを吐はいて、僕は呆あきれて、ついには怒おこって、うっさい、もういいかげんにしてよ、消えろ、死んじゃえ、そんな乱暴な言葉を叩たたきつけて、アジアンが去ったあとは、妙みようにすっきりしていて。

今日は超最低ＳＵＣＫだったけど、明日は今日より少しでもましな日だといいな。

そんなふうに思うことができた。

偶ぐう然ぜんだ。

偶然に決まっている。

いくらいつもストーキングしていたからって、僕の心の中までわ

かるはずがない。

　全部わかるサ。

　嘘うそだ。わかるもんか。

　だったら、キミはＺＯＯにいるべきだ。キミだって彼らのことが好きなんだろう？

　うるさい。うるさいんだよ。

　反対してたくせに。クランなんか入るなって言ってたじゃないか。それなのに、どうしてあんなことを。

　ボクはキミが拒きよ否ひしようと、たとえキミがボクを憎にくもうと、何度でも、何度でも、その機会があれば必ず救うヨ。

　嫌きらわれてもいいっていうの？　憎まれても？　僕はやだよ。耐たえられない。もし自分が誰かを好きなら、その相手にも好いてもらいたい。憎しみは痛いんだ。とても痛い。僕はあの館やかたで、子し爵しやくに飼われていた子供たちをいとおしんだ。そのお返しに彼らが僕に向けてきたのは、やさしい気持ちなんかじゃなくて、恐きよう怖ふや嫌けん悪おで研とぎ澄すました眼まな差ざしや言葉の刃やいばだった。聡そう明めいな目をしたローメオでさえも、最さい期ごの瞬しゆん間かん、驚きよう愕がくと恨うらみの視線で僕の胸を貫つらぬいた。

　きみは怖こわくないの？　嫌われることが怖くないの？　嘲あざけられたり、軽けい蔑べつされたりすることが怖くないの？　なんで怖くないの？　どうして？

　わからない。

　僕にはわからない。

　振ふり返ると、僕が歩いてきた道はひどくでこぼこしていて、鋭するどく尖とがった小石も転がっていて、たまに僕はそれを踏ふんでしまって、血を流して、そのたびに悲鳴をあげて、泣き叫さけんで、もう歩けないと思って、しゃがみこんで、ようやく立ちあがって、二度と小石は踏むまいと下を向いて歩いて、自分がどこにいるのかわからなくなって、やっぱり前を向かないと、あたりを見回さないといけないと思って、顔を上げて、また小石を踏んでしまっ

て、血と涙なみだを流して、そんなことばかり繰くり返して、今もやっぱり、痛い目になんか遭あいたくないと思っている。

　ああ、ダメだ。こんなことをぐちゃぐちゃ考えていても仕方ない。答えなんてどうせ出ない。すぐには出せない。今は目の前のことに集中しろ。ごまかそうとしているだけかもしれないけれど、それでもいい。今がよければそれでいい。面めん倒どうなことは後回しだ。先延ばしにしているうちに、うまい具合に問題が解決されるかもしれないわけだし。何もしなくていいのなら、それに越したことはない。ずるいかな。ずるいかもね。いいよ。それで。僕はずるい。認めてもいい。こんなわけのわからない気持ちを追い払はらえるのなら、それでいい。

　マリアローズはソファテーブルの上の灰皿に目を落として、顔をしかめた。すごい量の吸すい殻がらだ。この部屋に染しみついている不快なにおいには、ヤニ臭くささもふくまれている。

　骸がい骨こつを象かたどった銀色の灰皿はテーブルの真ん中あたり、招き猫ねこのキーホルダーがついた部屋の鍵かぎは端はしのほうに置かれている。鍵は少し力を加えただけで床ゆかに落ちてしまいそうだ。テーブルの上は、煙草たばこや燐寸マッチの箱、空のコップや酒さか瓶びん、クァラナドあたりの店のものとおぼしきチラシやら割引券やらに埋うめつくされているので、鍵の置き場所はそこと決めているのかもしれない。テーブルだけでなく、床にも散らばっているチラシなどは何かの参考になるだろうか。そうとは思えない。煙草や酒瓶やコップも論外だ。役には立たないだろう。

　マリアローズはぼんやりとチラシや割引券を手にとって、何気なく大きさが同じくらいのもの同士を集めてまとめた。紙が堆たい積せきしている場所もあったので、その下から何か出てこないだろうか。ふとそう思ってから、自分がしていることを理解するような有様だった。そっか。下、ね。下。下、か。下……？

「ちょっと……これって、もしかして」

　マリアローズはもう一度灰皿を見た。

　どうして気づかなかったのだろう。

　あからさまにあやしいのに。

　三分の一ほど灰皿の下した敷じきになっている、というよりも、灰皿が文ぶん鎮ちんがわりになっていると表現したほうが正しいかもしれない。

　紙だ。

　大きな紙を手で破って小さくしたような、掌てのひら大の白い紙切れだ。

　マリアローズが灰皿の下から紙切れを抜ぬきとると、カタリとピンパーネル、ヨグとアジアンがそれぞれの作業を中断して集まってきた。

　アジアンがマリアローズの手て許もとをのぞきこんで、息をのんだ。

「──この、筆ひつ跡せきは……」

「知ってるの？」

　マリアローズは紙切れをアジアンに渡わたした。紙切れには黒いインクか何かで字が書かれていた。共通語ではなかった。きっと上ハ古イ高ロ位メ語ンだろう。上ハ古イ高ロ位メ語ンはとてつもなく複雑な言語で、文字の種類も表音文字、表意文字をふくめてたくさんあるし、文法にいたっては変へん幻げん自じ在ざいというか、普ふ通つうの現代人にとってはただのめちゃくちゃとしか思えないような代しろ物ものだ。もっとも、昔、日常的に上ハ古イ高ロ位メ語ンを使っていた人たちにとっても、それは同じだったらしい。そのため、話し言葉とでもいうべき平易な上ハ古イ高ロ位メ語ンがあった。マリアローズは物好きな言語学者でも、必要に迫せまられてある程度、上ハ古イ高ロ位メ語ンを習得しなければならない魔ま術じゅつ士しでもないので、くわしいことは知らないが、その話し言葉と上ハ古イ高ロ位メ語ンの一部を組みあわせたものが共通語の原型になっているのだという。だから、共通語にはその話し言葉の名残なごりがあるし、基本的な文字と発音の仕方さえ知っていれば、読むだけならそう難しくはない。

　紙切れにはこう書かれていた。

　u-d'on'hafto

　luk'abaufor-me.

アジアンは大きく息を吐はいて、紙切れを握にぎりつぶそうとしたが、寸前でやめた。

「……ルヴィー・ブルームだ。間ま違ちがいない」

「なんて……書いてあるの？」

「わたしを捜さがし回る必要はありません、ですかね。直訳ですが」

答えたのはヨグだった。意味までわかるのか。

アジアンは微かすかにうなずいて、紙切れをヨグに手て渡わたしした。もう一秒たりともさわっていたくない、とでも言いたげな態度だった。

「でも、どういう意味なんだ。捜すな、じゃなくて、捜さなくてもいい……？」

「せやなあ」

カタリが顎あごをゴシゴシこすりながら首をひねった。悪い予感がした。というよりも、確信があった。半魚人のことだから、ろくでもないことを言うに決まっている。見れば、カタリの背後に立っているピンパーネルが手刀を振りあげて、ツッコミの準備はすっかり整っているとマリアローズに目で訴うつたえていた。頼たのもしいことだけれど、マリアローズは一応、まだ、と目で返事をしておいた。もうちょっと待って。半魚人が建設的な意見を述べる可能性も、百万分の一くらいはないわけじゃないかもしれないから。

「わしを捜し回る必要はあらへん。その心はぁぁ……！」

「その心は？」

「ずばァァァリィィッ！」

カタリは凶きよう悪あくな魚みたいな表情を作って、ゲッハッハッハッハッハッと大笑いしてみせた。何かを気どっているつもりなのだろうか。人食い魚か。それとも、ひょっとしてルヴィー・ブルームか。どんな人物なのか知らないので、マリアローズとしては判定しようがないのだが、たぶん、ぜんぜん、まったく似ていないと思う。なんとなく。

「なぁーにを捜しとんのやボケェッ！　ここや、ここ！　ここやでえっ！　わしはここにおるっちゅうねん！　捜す必要なんかちぃーっともあらへんやろがあああぁぁ……！」

「へー。で、ここってどこ？　どうもそれらしい人は見あたらないっぽいんだけど」

「え、ええっとぉ、そっ、それはやなあ、た、たとえば、ほれ、そこや……！」

　カタリは開け放たれたままのドアのほうを指さした。マリアローズはピンパーネルに指令を下す用意をしながら、とりあえずカタリが示した方向に顔を向けてみた。自分では確かく認にんするすべはないが、たぶん目が点になったのではないかと思う。まだ点のままかもしれない。なんでここに。街中ですれ違うならともかく、どうしてこんな場所に。あんなやつが。

「あ、もしやと思いましたが、やはりでした……！」

　そいつは部屋と廊ろう下かの間に立ちふさがっているエレクトラさんの腰こしの横から無理やり気味に顔を出していた。そのすぐ後ろにいる若い男のことも一応知っている。まさか、悪い予感がこういう形で的中するなんて思ってもみなかった。こっちか。あの子はいつぞやの、とアジアンが小声で呟つぶやいた。そういえば、アジアンとも面識があるんだ。すみれ色の髪かみ。同じ色の目。時代遅おくれの魔術士衣。三角帽ぼう子し。ちんちくりん。そう。やつだよ。

　コロナだよ。

「ど、どうも！　マリアさん！　お久しぶりです！　お元気でしたでございますれば！　コロ、あ、わたしは、それなりに元気いっぱいです！」

「……あ、そー……それはよかったねー……」

「あら、お知りあいでしたか？」

　エレクトラさんが身体からだをずらしてコロナを通した。余計なことを、と抗こう議ぎする気力もなかった。それに、エレクトラさんは鞭むちとか持ってるし。ちょっと怖こわいし。でも、いや違います知りあいなんかじゃありません見知らぬ赤の他人です無関係で

す本当です、くらいのことは言ってみてもよかったかもしれない。もう手て遅おくれだけど。

　コロナがころころ転がるようにして部屋に入ってくると、たしかレニィとかいったっけ、コロナの保護者然とした不ふ機き嫌げんそうな顔の若い男もついてきた。レニィは、よう、と低い声で挨あい拶さつらしきものをしてみせたが、いかにも不本意きわまりないといった様子だ。少しかちんときた。こっちだって嬉うれしくも何ともない。だいたい、久しぶりといっても、前に会ってから一年どころか半年もたっていないのに、この男、でかくなってない？　背はそんなにぐんとのびたわけじゃないだろうけど、逞たくましくなって、顔つきもなんだかちょっとだけ大人っぽくなったような。成長期ってやつ？　いいねえ。そうやって鍛きたえれば鍛えただけ目に見える成果が出る人は。僕なんかどれだけ筋トレしても休みなくアンダーグラウンドに潜もぐってもいっぱい食べてもさっぱりなのに。むしろ体重を維い持じするのが大変なくらいなのに。

「何やってんだ、あんたら。こんなとこで」

「さあね。僕らが何やってようときみたちには関係ないんじゃない」

「まあな。一応きいてみただけで、俺も興味はねえよ」

「ふうん。で、きみらはどうしてこんなとこにいるわけ」

「べつに、俺らがどこにいようと俺らの勝手だろ。あんたに教える義理はねえ」

「そうだね。僕も興味はないけど一応きいてみただけだから気にしないで」

「──あ、あのっ！」

　コロナがマリアローズとレニィの間にずさっと飛びこんできた。

「いきなり火花を散らすのはっ！　意味不明ですし！　で、できればもっと、なごやかに！　久しぶりですし！　ここは一つ二つ、コロナに免めんじてですね……」

「お前に免じて何かが許されるなんてことは一つもねえ」

「あったら見てみたいもんだよね。絶対ないと思うけど」

「あう、みょ、妙みようなところでお二人の意見が一いつ致ちしてしまいましたようで……で、でも！　災わざわい転じて福となすといいますか、初めての共同作業で、これにて一件落着ですねっ！　これが噂うわさに聞く、終わりよければすべてよし、でしょうか！」

「たいしてよくはないけどね……」

　少々大人げない態度だったことは認めざるをえない。そうだ。背が何だ。筋肉がどうした。筋肉がたくさんつくと髭ひげみたいになっちゃうんだ。それはやだ。いやすぎる。

「──それで、あらためて一応きいとくけど、なんできみたちがここに？　もしかして、この貸し宿で部屋でも借りてるの？」

「すごいっ！　一発正解です！　コロナ、いえ、わたしたちは、この死にかけダイング雷電サンダーボルトさんでずっと部屋をお借りしていまして、エレクトリックさんも、エレクトラさんも、とてもいい方々ですし、同宿の皆みなさんもエレクトラさんのご威い光こうによりまして、すごく統治されています！　料金もリーズナブリ、え？　違いますかっ？　り、りーずなぶる？　ぶる、ですねっ！　とにかくお安いですし、お料理もおいしいですし、たまにエレクトラさんの鞭が飛んできますけども、変に騒さわいだりしなければ大だい丈じよう夫ぶですし、本当に自信を持っておすすめできるいい宿です！」

「へー……そうなんだ……」

　なんだか頭が痛くなってきた。なんでコロナにこの宿のアピールポイントを聞かせられないといけないのか。アジアン以下、やかましさとウザさではコロナにそう引けをとらないはずの半魚人まで呆あつ気けにとられちゃってるし。ルヴィー・ブルームの自筆と思われるメッセージが書かれた紙切れを発見して、緊きん張ちよう感かんが高まっていたはずなのに、すっかり白けているというよりも、何がなんだかわからなくなってしまっている。ペースだ。これがコロナのペースなんだ。最初に会ったときもそうだった。コロナのノリになんとなくつきあってしまって、えらい目に遭あった。同じ過あやまちを繰くり返してはならない。今度は間ま違ちがえない。そのためにはどうすればいいか。簡単だ。接せつ触しよくを最小限に

とどめる。どっか行っちゃえ、しっしっ、みたいに追い払はらったら角が立つかもしれないので、さりげなく、エレガントに。

　マリアローズは咳せき払ばらいを一つしてから、澄すまし顔でアジアン、ヨグ、ピンパーネルと半魚人を順々に見た。

「じゃあ、そろそろ次の場所に行こっか？　手がかりになりそうなものは見つけたわけだし、他ほかにもあるんでしょ？　調べてみないといけないとこは」

「そうですね。僕は賛成です」

「せやなあ。ここはもうええわ。きったないし、飽あきたしな」

　ピンパーネルは無言でカタリを一いち瞥べつしてうなずき、アジアンも首を縦に振ふろうとした。全員の同意をとりつけてから、表面上は名残なごりを惜おしみつつコロナとレニィにさよならを告げて、エレクトラさんに協力を感謝し、死にかけダイング雷電サンダーボルトをあとにする。以上がマリアローズの計画の全ぜん貌ぼうだった。それを邪じや魔ましやがった。

「──はっ……！」

　コロナめ。疫やく病びよう神がみめ。ちんまりインチキ魔ま術じゆつ士しめ。

　かつてメリクル迷宮に松たい明まつなんぞ持ちこんだオオボケおとぼけ娘むすめのくせに、なんでこういうときにかぎって鋭するどいんだ。

「コロナ、ぴきーんときてしまいました……！　さては事件ですね！　大事件のにおいがします！　マリアさんっ！　何か困っていることがあるなら、是ぜ非ひおっしゃってください！　微び力りよくではありますが、コロ、あ、わたしも力をお貸しします！　こう見えて、最近、推理小説をよく読んでいまして！　僭せん越えつながら、必ずやお役に立てるものと……！」

　すかさずレニィがコロナの頭を小こ突づいた。

「んなわけねえだろ。お前が読んだのは推理小説っつーか子供探たん偵てい団とかそんなやつじゃねえか。しかも、たった二冊だぞ」

「コロナ、ご本を読むのは苦手なんです！　だから、二冊でも大変でしたもの！」

「お前、仮にも魔術士が本読めねえとか、恥はずかしくねえのかよ……」

「文字を目で追っていると、どうしても眠ねむたくなってしまいまして。で、でも、お勉強はちゃんとしないと折せつ檻かんされましたので、必死に起きていました。そのイメージがありまして、苦手だったんですけど、このごろようやくご本のおもしろさに目覚めはじめたところです！」

「や、間に合ってるから」

　マリアローズは笑え顔がおを作って手を前に突きだした。声こわ音ねが少しつめたかっただろうか。言い方もややきつかったかもしれない。いけない、いけない。ここは穏おん便びんに事を運ばないと。コロナなんて何のかの言ってまだどう見てもガキだし、ガキをいじめてもしょうがないし、怒おこっても疲つかれるだけだし、腹を立てるだけ損だし、時間を無む駄だに消費したくもない。

「ちょっとその、いろいろあるしさ。事情が。急がないといけないし。気持ちはありがたいんだけど、うん、その気持ちだけありがたく受けとっておくからさ。ありがとね。でも、僕らのためには指一本動かさなくていいから。てゆうか、動かさないでくれる？　今は立てこんでて正直きみにつきあってる余よ裕ゆうがないんで、また今度ね？　じゃ、そういうことで。僕らは行くから。さすがにないと思うけど、追いかけてこないでね？　はい。ばいばーい」

　マリアローズはにこやかに手を振りながら部屋の出口へと向かった。エレクトラさんには、どうもありがとうございます、と丁てい重ちようにお礼を言っておいた。あとはもうボロが出ないうちにさっさと立ち去ったほうがいい。もう若じやつ干かん出ているような気もしないではないが、かすり傷を無理やり抉えぐって傷口を広げてしまうことはないだろう。ちらりと振り返ってみたら、みんなしっかりついてきているし、レニィは、気にくわねえ、とでも言いたげな顔つきで、コロナはなんだか残念そうだが、追ってくる様子はない。どうやら、うまくいったようだ。これでいい。あのままコロナのペースに乗せられていたら、何かの間違いであの二人が首を突っこんでくるような事態になっていなかったともかぎらない。それはダメだ。絶対にまずい。現実に昼飯時ランチタイムの人たちが

大勢失しつ踪そうしているわけで、しかも、ルヴィー・ブルームとやらに連れ去られたことはほぼ間違いないわけだから、この先どんな危険が待ち受けているかわかったものじゃない。関係というほどの関係はないコロナだのレニィだのを巻きこむわけにはゆかない――と、もしコロナやレニィが食い下がってきたら、そう説明するつもりだったけれど、本当の理由は違う。あいつはやばい。コロナ。あいつは役に立つどころか邪魔になる。おそらく、本人にそんなつもりはないのだろうが、結果的に周りの足を引っぱって、全員道連れにするのかと思いきや、自分だけは無事で、あれれれ？　みなさん、どうなされたのでしょう、何があったのやら、コロナにはさっぱりわかりませんです、とか言って、それから平身低頭して謝るかもしれないが、謝るくらいなら最初からやるな。とはいえ、自覚がなさそうだから、自分ではどうしようもないのかもしれない。そういうやつが一番タチが悪い。関かかわらないのが一番いい。

　階段を下りて一階の食堂を通り抜ぬけ、死にかけダイング雷電サンダーボルトの外に出た瞬しゆん間かん、ため息がもれた。

　ちょっとしたピンチを切り抜けて、気がゆるんだのかもしれない。

　マリアローズは軽く伸のびをした。

　気配なんて感じなかった。

　口を塞ふさがれた。

　違う。

　いきなり口の中に何かが侵しん入にゆうしてきた。

　何、これ。

　もしかして、人間の指……？

　何がなんだかわからなくて、振り向きながら声を出そうとしたら、何者かの手で目め隠かくしをされて、身体からだを持ちあげられた。次の瞬間には移動していた。すごい速度だった。僕、運ばれようとしてる？　てゆうか、運ばれてる？　声が聞こえた。

「マリア……？」

　アジアンだ。死にかけダイング雷電サンダーボルトを出て、僕がいないことに気づいたのか。そう。僕はもうそこにはいない。ここなんだ。どこかわからないけど、そこじゃなくて、そこから離はなれつつある。そのことを知らせるために、呼ぼうとした。アジアン。できなかった。首か。首筋だ。血流。脳への。血。止め。ああ、ダメ……僕、は──ここ……。

Omenage 897 12th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

〝朽ちかけた木造建築〟

chapter.6

大切な人

「──今度は、"whu-besaid-me-wud'say-tha."ね」

　これで三つの部屋を回った。どの部屋でも黒い字で上ハ古イ高ロ位メ語ンの短い文章が書かれた紙切れを見つけた。本に挟はさまれていたり、脱ぬぎ捨てられた衣服のポケットに入っていたり、棚たなの上にあったり、いずれもとくに目立つ場所に置かれていたわけではないけれど、隠かくしてあったというかんじではない。あるとわかっていて探すのであれば、たいして苦労せずに見つけられる。あるとわかっていなければ、気づかないかもしれない。紙の材質は同じようだが、大きさや形はそれぞれ違ちがう。手でちぎったものらしい。黒字の文章については、筆ひつ跡せきからするとすべて同一人物が書いたもので、文面は一枚一枚異なっている。

"u-d'idn-ran'awey, ai-let'u-go."

"u-mey'nat-wory'abau-enithin."

"whu-besaid-me-wud'sey-tha."

〝あなたは逃にげたのではない、わたしが逃がしたのだ。〟

〝何も心配しなくていい。〟

〝わたし以外の誰だれがそんなことを言うだろう。〟

「そろそろ時間だわ。とりあえず、その動物園事務所とかってところに行きましょう。あとは合流してからね。あっちも何か情報を持ってるかもしれないし」

「……はい」

　サフィニアはベティに従って黴かびくさい部屋をあとにした。第十一区の外れにあるこの二階建ての木造建築は、いかにも古びていて蜘く蛛もの巣や蔦つただらけだし、人間よりも虫や鼠ねずみや鳥の棲すみ家かにふさわしいように見える。それでいて、一階に三つ、二階に二つある部屋にはそれぞれ一人ずつ住人がいて、互たがいに干かん渉しようせず、ひっそりと生活しているようだ。〝嵐のストーミー〟ラギィもその中の一人だったようで、ベティが言うには、調子がいい日は外に出てさんざん暴れ回り、よくない日は部屋の隅すみに座りこんで飲み食いもせずにじっとしている、そんな女

性らしい。ずいぶん変わった人だという感想をサフィニアは抱いだいたけれど、昼飯時うちではまあ普ふ通つうよ、とベティは軽く肩かたをすくめてみせた。普通っていうより、いろんなやつがいすぎて、誰がおかしいとか変だとか、考えるのも馬ば鹿か馬鹿しくなるのよね。ベティは普ふ段だんどおりだった。空中楼ろう閣かくにあるベティの家を訪ねて、なんとか結界に干渉して連れん絡らくをとり、出てきてもらって事情を説明しても、うろたえたりはしなかった。でも、サフィニアにはわかった。ベティは平静だけれど、何も感じていないわけではない。取り乱しても意味がないからそうしないだけだ。

　ベティはそういう人だ。お姉様がとくに才能を評価していたお気に入りの妹たちソロレルの中でも、ベティほど気さくで親しみやすく、人格者にさえ見えて、それなのにとてつもなく恐おそろしい人はいなかった。ベティの前では、誰もが観察されて分ぶん析せきされて把は握あくされてしまうことを覚かく悟ごしなければならなかった。たとえば誰かにやさしくするとき、そうされた相手が何を感じ、どう思い、また、どのように勘かんぐり、今後の行動にどんな影えい響きようを及およぼすか、不確定要素は何か、ベティはそこまで瞬時に理解してしまう。誰も、お姉様のことさえ信じず、おのれさえも自分の外に置いて冷れい徹てつな目で凝ぎよう視しして、自分自身が魔ま術じゆつ士しであること、人であることがどういうことか、知っているのではない、どの程度知っているか、しっかりとわきまえている。頭脳の明めい晰せきさはもちろん、お姉様をも唸うならせた独創性、不ふ屈くつの精神力、どれも尊敬に値あたいする、いや、それ以上だったけれど、サフィニアは正直、ベティが怖こわかった。好き嫌きらいでいえば、間違いなく好きだった。にもかかわらず、この人を信用してはならないとサフィニアの中の何かが命じていた。その理由がサフィニアにはわからなかった。ぼんやりとだが、今ようやくわかった。信用できない、ではなく、信用してはならない。おそらく、サフィニア自身の中の何かがそうさせていたのではなかった。ベティだ。あのころのベティは、いくら親切にしてみせても、どれほど気づかってみせても、ある場所で線を引いて、そこから先は何があろうと踏ふみこませまいとしていた。やさしい言葉で励はげまされても、苦しいときに抱きしめられて慰なぐさめられても、あたたかさとつめたさを同時に感じた。ここまではしてあげる。でも、これ以上はない。絶対に。それがベティのメッセージだった。サフィニアはそれを受けとっていたのだ。

　ベティはやっぱりすごい魔術士だと思う。あの結界。幾いく重えにも張り巡めぐらされた何種類もの魔術的な障しよう壁へきは、お姉様の結界よりも複雑だった。お姉様ならきっと、強度に問題があるので小細工を弄ろうしているだけでしょう、などと罵ののしるだろうが、生きた伝説ともいうべき閃せん光こうの魔女と比ひ較かくすれば、どんな魔術士も霞かすんで見えるに決まっている。それに、お姉様とて不死に至ったわけではないのだから、その肉体はいつか必ず朽くちて滅ほろびるのだ。ベティがお姉様を超こえる可能性はある。十分あるだろう。

　相変わらず、ベティはすごい魔術士だ。

　でも、変わった。

　それも、だいぶ変わった。

　第二王立銀行へ向かうベティの足どりは少し速い。

　早歩きをしなければついてゆけないくらいだ。

「……大切な、人が……できたんですね」

「はあ？」

　ベティは振ふり返りかけてやめ、足を止めずに癖くせのある髪かみの毛を手で引っかき回した。

「いきなり、何？　変なこと言う子ね」

「……変なこと、でしょうか……」

「あなたこそいるんじゃないの。大切な人」

「はい」

　今度は二人して立ち止まった。

　ベティは振り向いてサフィニアをじっと見た。

　近くに灯あかりというほどの灯りはなくても、エルデンの夜をつつむ闇やみは浅い。

　ベティは似合わない表情を浮うかべていた。

　訝いぶかしそうな、不思議そうな顔つきは、だが、すぐに作り物としてはあまりにも上出来すぎる微笑ほほえみにとってかわられた。

「そう。いるんだ。大切な人」

「います」

「大勢、とか言わないでしょうね」

「すごく、とても、大切で……どうしようもないほど、そばにいたい人は……一人、です。でも、他ほかにも……大切な人は、います。たくさん。おかしいでしょうか……」

「べつにおかしくはないんじゃない？」

　ベティはサフィニアに背中を向ける間ま際ぎわ、ため息をついて、そうね、と呟つぶやいた。

「いるわよ。あたしにも」

　何もかもが規格外のお姉様をのぞけば、誰よりも魔術士らしい人だと思っていた。何度生まれ変わっても魔術士になるだろう。魔術士以外にはなりえないだろう。その意味では、ベティを人として見たことはなかった。ベティはサフィニアの兄弟で子しというか姉弟子で、妹たちソロレルの一人で、恐れ敬うべき魔術士で、追うべき背中で、いつか追い越こすべき先行者だった。

　あたりまえのことだけれど、ベティも人なんだ。

　魔術士であることと人であることは、必ずしも矛む盾じゅんするわけじゃないんだ。

　サフィニアはベティの後ろを歩きながら、あの紙切れについて考えた。昼飯時ランチタイムの頭領マスターアジアンとヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒとかいう男の人をともなって事務所に現れたマリアローズに、昼飯時ランチタイムの人たちが行方ゆくえ不明だから、捜さがす手伝いをして欲しい、と頼たのまれたときはとにかくびっくりしたし、納なつ得とくする前に状じよう況きように流されて引き受けてしまったというのが正直なところだけれど、今は少し違ちがう。自分にできることがあるのなら、手を貸そうと思う。まずはベティを呼びに行く。これは達成で

きた。待ち合わせの刻限まで余よ裕ゆうがあったので、ただ待っているだけでは時間が無む駄だになるし、何軒けんか知っている家を回ってみようと言いだしたのはベティだ。提案を受けて、まず闇やみ市いちとメタルフォレストの境界にある掘ほっ立て小屋に行った。その一帯は色とりどりの塗と料りようによる落書きとはとても言えない芸術的な絵に溢あふれていて、それらはすべて昼飯時ランチタイムの〝巨きよ匠しよう〟ボンドという男の人が描えがいたのだという。その小屋に一冊だけあった本に、例の紙切れが挟はさまれていたのをベティが見つけた。それから次に行ったのが第十二区のとある豪ごう邸ていで、どんな人が住んでいるのかとサフィニアがきいたら、口くち髭ひげを生やした女よ、というのがベティの返事だった。ジャン・スタンバック。名前も男性風で、髭を生やしているのに、女性なのか。よくわからないが、とにかくリビングのソファに脱ぬぎ捨てられていたジャケットのポケットに紙切れが入っていたのを、これはサフィニアが発見した。そして最後は〝嵐のストーミー〟ラギィの家で、紙切れは朽ちかけた棚たなの上に置かれていた。

三軒回って一枚ならともかく、三軒で三枚となると、偶ぐう然ぜんとは考えづらい。何らかの目的で、何ものかが置いていったのだろう。三軒の共通点は、失しつ踪そう者の家であるということだ。仮に失踪した者たちが残していったのだとしたら、紙切れに書かれた文字の筆ひつ跡せきが同一であるはずがない、と言い切ることまではできないし、絶対に同一人物が書いたものだと断言することは難しいけれど、それよりもっと受け容いれやすい答えがある。

失踪者は連れ去られた。

彼らを連れ去った人物あるいは集団、または組織こそが同一で、紙切れはその何ものかが置いていった。

いったい何のために？

たとえば、すべて同じ文面だったとしたら、その文章の意味は別としても、これは自分がしたことだと表明するため、誇こ示じするための行こう為いだと考えるのが自然だ。強ごう盗とう団が盗ぬすみに入った家に自分たちの名を記したカードを残していったり、クラン同士の抗こう争そうで、敵対クランの構成員を殺害したうえ、壁かべや地面に自分たちのクランの名や恨うらみがましい言葉を書き残していったり、といったこともたまにあるらしい。魔ま術じゅつ士しの世界でも、魔術原理主義者という厄やつ介かいな連中がい

て、無名の魔術士が魔術師マギを名乗ると、だいたいそうした手合いに付け狙ねらわれる。本当の力を知っている身からするとくだらない所業としか思えないが、彼らは自分たちの正当性を信じているので、よってたかって魔術師マギを殺し、処しよ刑けい完かん了りよう宣言書付きの遺体を街頭にさらしたりするわけだ。サフィニアが魔術士のままでいるのは余計な面めん倒どうをさけるためでもある。

　でも、あの紙切れに書かれていた文章はばらばらだ。上八古イ高ロ位メ語ンではあるけれど、魔術で使われるような一種、二種の文体ではない、四種に分類される普遍ジエネラル口語体コロキアルで、習得している者は現代でもかなり多い。魔術士だと日常的に用いている者も結構いる。あなたは逃にげたのではない、わたしが逃がしたのだ。何も心配しなくていい。わたし以外の誰だれがそんなことを言うだろう。文章の内容は、誰かに何かを伝えようとしているともとれるが、三つめは微び妙みようだ。主体はあくまで「わたし」で、それが昼飯時ランチタイムの人たちを連れ去った何ものかだと仮定すると、「あなた」は誰のことだろう。サフィニアはまだそこまでくわしい話は聞いていない。マリアローズが早口で説明してくれたのは、昼飯時ランチタイムの人たちが失踪したということと、無事なのはアジアンとヨグ、それからベティだけだということくらいだ。もっと情報が欲しい。マリアローズたちも同じことを思っているかもしれない。あの紙切れが手がかりになるだろうか。正直、よくわからないけれど、そうなればいいと思う。

　仲間。

　大切な人を失うのはつらい。

　結果的には蘇そ生せい式が間に合ったけれど、宿で一人、皆みなの帰りを待っている間は生きた心ここ地ちがしなかった。信じてはいた。それでも心は揺ゆれて、千々に乱れた。カタリさんが生き返らなかったらどうしよう。本当に死んでしまったらどうすればいいだろう。また誰か犠ぎ牲せい者が出たらどうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしようもない。いやだ。絶対にいやだ。でも、どうしようもない。いっそのこと自分が死んでしまいたかった。消えてしまいたかった。

　それは文字どおり失うことなのだ。

　大切な人がいなくなると、自分の中の何かがごっそり削けずりと

られて、完全に消え失うせてしまうのだ。

　失ったものはとりもどせない。他ほかのもので埋うめあわせることはできるかもしれないけれど、同じものはどこを探しても見つからない。流星に打たれて死んだ父と母は還かえらない。親切にしてくれた叔お父じ夫妻も戻もどらない。サフィニアはそのことをよくわかっていた。だから何も、誰のことも、自分自身をふくめて、大切に思うことはなくなった。お姉様に魔術の才能を見いだされて拾われてからだった。自分のような者を認めてくれた。アーデット・ヨリコ・ジューテンベール永久幸運イクス＝ザナスという名前まで与あたえてくれた。毎日大がかりな厄やく払ばらいをしてくれた。くじけそうになると叱しかってくれた。わたくしがあなたを信じているというのに、あなたがあなたを信じないとはどういうことかしら。それはつまり、このわたくしが間違っているということをあなたは言いたいの。サフィニア。アーデット。ヨリコ。すべてわたくしがあなたのために考えてあげた名前なのに、それもすべて無駄だというの。あなたは何様のつもりなの。わたくしは神様よ。神を超えるものよ。あなたはただ黙だまって信じなさい。神を超えるわたくしが信じるものを信じればいいのよ。つまりあなたを。サフィニア。アーデット。ヨリコ。わたくしはあなたを愛しているわ。あなたが大好きだわ。こたえたかった。何としても。叶かなわなかったけれど、お姉様は大事なことを教えてくれた。信じること。大切に思うこと。そして、失うこと。お姉様に追放された日、わたし、大切なお姉様を失ったんだ。お姉様もわたしを失ったんだ。

「……そういえば、あの、文章……」

　何だろう。

　何かが引っかかった。

　ベティが顔を半分だけ振ふり向かせた。

「文章がどうかしたの」

「……いえ……少し、おかしなところが……」

　そうだ。口にしてみてからわかった。あの文章はおかしい。お姉様だ。いつだったか、お姉様に教えていただいた。添そい寝ねをさせていただいたときだ。

「あの文章……ぜんぶ、小文字でしたよね……？」

「そうだったと思うけど。あ──」

　ベティは立ち止まって顎あごをつまみ、ぷっくりした唇くちびるを舌先で舐なめた。

「変ね。普遍ジエネラル口語体コロキアルで書かれたものはそんなにたくさん読んだことがあるわけじゃないけど、あたしが記き憶おくしてる範はん囲いでは、すべて文頭が大文字だったわ」

「……違ちがうんです」

「違う？」

「……はい。お姉様に……教えていただいたことがあります。現存している普遍ジエネラル口語体コロキアルで書かれたものは……大半か、そのほとんどが写本……もしくは魔導王時代終しゆう焉えん前の、比ひ較かく的てき新しいもので……普遍ジエネラル口語体コロキアルがさかんに使われていた、もっと古い時代には……」

「ぜんぶ小文字で書いてた……？」

「……少なくとも、お姉様は……そうおっしゃっていました」

「普遍ジエネラル口語体コロキアルで書かれた書物なんて、魔ま術じゆつには関係ない代しろ物ものだから──なんて、言い訳にすぎないわね。古い時代の知識をあさって真理を追究するのも魔道の目標の一つだわ。魔導士ウイザードを名乗っていながら、そんなことも知らないなんて」

　ベティは唇を噛かんで靴くつの踵かかとで地面を蹴けりつけた。本気で悔くやしがっているようだ。自分よりもずっと大人で魔術士らしい人だと思っていたベティのそんな姿は、なんだか少しかわいらしくて、ちょっぴり可お笑かしかった。表情に出ないように我が慢まんしたつもりだが、ベティに睨にらまれた。

「何よ？」

「……いいえ……何でも……ですが、お姉様が添い寝のときに……誇ほこらしげに教えてくださったくらいなので……あまり知られていないことなのでは、と……」

「まあ、それはそうかもしれないわね」

「……トモヨなら、もしかしたら、知っているかもしれませんが……」

「あの女は単なる雑学王だから」

　サフィニアの知るかぎり、お姉様の許もとにいたころのベティが唯ゆい一いつ、あからさまに嫌きらっていたのがトモヨだった。トモヨもまた、ベティとうまくやろうとしているようには見えなかったから、お互たがい様といえばお互い様なのだろう。天才で、しかも努力家でもあるベティと、才さい気き煥かん発ぱつでありながら怠たい惰だな、少なくともそう装よそおっていたトモヨとは、まさしく水と油だった。

「──でも、それって、あの文章を書いた誰だれかは、正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルを知っている、つまり、お姉様並みの知識量を誇る魔術士か、言語学の研究家ということよね。それにしたって妙みようだわ。普遍ジエネラル口語体コロキアルは今でもまともな魔術士の間では通用する。それが古い時代の正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルとはいくらか違うとしてもね。会話や記述に何の不都合もない、完かん璧ぺきな言語として成立してるのよ。今さら正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルであの文章を書いた理由、それは何？」

「……その前に、わざと、書いたか……そう書くのが自然、だったのか……」

「サフィニア、そこに疑問を持つのは道理としては正しいわ。でもね。もし、あの文章を書いた誰かさんにとってそう書くのが自然だったとしたら、それが何を意味するか、あなた、わかってる？」

「たとえば……たまたま、正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルを日常的に使う環かん境きようで……生まれ育ったとか」

「ありえないとは言えない。ただ、そんな環境があるなんて、あたしは聞いたことがないわね。それこそ、トモヨあたりだったら心当たりがあるかもしれないわけだし、その可能性は考こう慮りよに入れておかないといけないけど、まずは自分が把は握あくしている範囲の中で考えるべきよ」

「……だとしたら……その誰かは……たまたま、じゃなくて……正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルを日常的に使う環境で、生まれ育った……？」

「そうね。ああ、そういえば、最近こんな話を聞いたの。にわかには信じがたいけど、実績を考えれば否定はできない。あの超賢者メガセイジモーグがついに肉体を捨てて、光幽体プラスマル・ボデイとやらで生きてるそうよ。そして、これからも生きつづける。永遠にね」

「……不死性イモータリテイ……人が……死を乗り越えた……？」

「かの魔導王さえもなしえなかった偉業いぎようを、現代の魔術士がやってのけたなんてね。この目で確かく認にんしたわけじゃないから、事実かどうかわからないけど、本当だとしたらお姉様は歯は噛がみして悔しがってる──と思う？」

「え……？」

「あたしはね。そうは思わないのよ」

「……どうして、ですか……？　お姉様は、とてつもなく負けず嫌いで……魔導王にも、対たい抗こう心を燃やしてらしたくらいですし……」

「あたしが空間転位の術式を編みだしたときもひどかったわね。お姉様のヒステリー。殺されなくてよかったってかんじで。でもね。それとこれとは違うわ。自分の肉体を空間転位させる魔術は、誰も成功させたことがなかった。少なくとも、記録上はね。そのために第三脳を形成する方法も、あたしの独創よ。だから、お姉様はあたしに嫉しつ妬とした。不死性イモータリテイは違うのよ。確実ではないけど、あたしはそう睨んでる」

「……違う……って……まさか……ですが、魔導王もできなかったことで……わたしは、この目で失敗例も見ました」

「前に教えてくれたレディ・麟霊リンレイのケースね」

「……はい」

「そりゃあ、失敗した者もいるでしょうよ。でも、本当に成功例が

皆かい無むだと思う？」

　一いつ瞬しゅん、思考が停止してしまった。

　今までかつて、不死性イモータリテイを獲かく得とくした者は一人としていない。魔術士の世界において、それは定説だった。つまり、この世に生を受けた者は皆みな、死ぬということだ。あまりにあたりまえすぎる。だからこそ、その真理を超ちよう越えつしよう、破は壊かいしよう、その外にある者となろうとして、幾いく多たの魔術士が数千数万の手段を考えだし、試みて、無残な屍しかばねをさらしてきた。一人の例外もないはずだった。ないと言われている。なぜならば、我こそは不死であると宣言した者はいても、その不死を証明した者はいないからだ。お姉様にしても、件くだんのモーグにしても、すでに二百年以上は生きているはずだが、たとえばその倍の四百年の時を地上で過ごしてきたと主張する者がいるだろうか。いない。聞いたことがない。そう。あくまで聞いたことがないだけだ。だが、不在の証明はじつに難しい。不死者が間ま違ちがいなくいないと証明するためには、地上の人間すべてを調べて、その全員が不死ではないことを明らかにしなければならないのだ。ということは、サフィニアをふくめた大半の人間は、不死者などいないと知っているわけではない。不死者はいないだろうと思っているにすぎない。理り屈くつとしてはそういうことになる。

「肉体を捨てて、他ほかの何かで自分の存在を確保する。あたしもその方法については検討したことがあるわ。それにしたって、考えうる材料はたくさんある。あたしが想像もつかないやり方だって無数にあるはずよ。はっきり言うわ。不死者はいる。あたしはそう思う」

「……キング・グッダー……？」

「あら」

　ベティは目を瞠みはって唇くちびるを舐なめた。

「奇き遇ぐうね。あたしもあの王様はあやしいと思ってるわ。根こん拠きよは薄はく弱じやくだけど。同じ名の人間がもう九百年近くこの国を治めていて、代だい替がわりしてるとは言うけど、誰がそれを確かめたのかしら。少なくとも、あたしは知らないわ。めったに城から出てこないから当然だけど、キング・グッダーはこのエルデェイニオンにサンランド無統治王国の建国を宣言してから、ずっ

と王で、キング・グッダーなのよ。仮にこのままの形でこの国が永続したとしたら、考えようによっては、これだって不死の一形態と言えなくもないわよね」

「……わたしは……ただ、ふと……思いついただけなので……よくわかりませんが……」

「閃ひらめいたってわけ？　それも怖こわい話ね。そういう部分があるから、あなたは危険なのよ」

「危険……？　わたしが、ですか……？」

「自覚がないから、余計始末に負えないわ」

　ベティは肩かたをすくめてみせ、軽くため息をついた。

「──とにかく、不死性イモータリテイの獲得は見果てぬ夢なんかじゃなくて、いつかたどりつける高みなんじゃないかとあたしは考えてるわけ。もちろん、ある程度、具体的にね。魔ま術じゆつ士しとしては若い、若すぎるあたしでもそうなんだから、お姉様はもっとそこに近づいてるのかもしれない。それどころか、もう手に入れちゃってたとしても、あたしはべつに驚おどろかないわ。もともと殺しても死ななそうな人ではあったしね」

「お姉様が……？」

「あくまで、そうかもしれないってこと。でも、たとえば、正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルを使っていたような時代の人間が今も生きていて、そいつがあの文章を書いたなんて言ったら、普ふ通つうは笑い飛ばされて終わりでしょうけど、ありえなくはない、とあたしは思うわ。あまり考えたくはないけどね。もしそんなのがいるとしたら、とんでもないやつに決まってるから」

「……そう……ですね……」

　サフィニアは曖あい昧まいにうなずくことしかできなかった。なんだかとんでもないことになりそうで、暗あん澹たんとした気分にならざるをえない。同時に、あらためて自分の未熟さを思い知らされて、ひどく打ちのめされていた。歩きはじめたベティの背中がものすごく遠く感じる。追いつこうとして走っても、ベティの速度はそれ以上だ。一向に距きょ離りが縮まらない。離はなされる一方だ。お姉様の後ろ姿なんて、もう見えない。追いかけようにも、ど

こへ向かって進めばいいのかさえわからない。

　努力だ。努力が足りない。知識が足りない。技術が足りない。何もかもが足りない。ベティは何の儀ぎ式しきをしていたのだろう。あの結界。知りたい。でも、教えて欲しいと頼たのんだところで、答えてはくれないだろう。当然だ。ベティはサフィニアの師し匠しようではない。お姉様に捨てられた身だ。サフィニアはもう師を持たない。自分でやるしかない。自分で考えるしかない。壁かべがあるのなら、自分で壊こわすしかない。何かを見つけたいのなら、自分で探すしかない。力。力が欲しい。もっと大きな力が。力があれば。自分がもっと強ければ。災さい厄やくすらはねのけるほどの力があれば。それを、わたしは手に入れないと。

　結局、わたしは魔術士なんだ。

　でも、大切な人たちを守りたいと思う。

　守れるようになりたい。

　そして、いつまでもあの人のそばにいたい。

　わたしは贅ぜい沢たくですか。

　第二王立銀行にたどりつくころには二十一時が迫せまっていた。銀行の中に入るときは、さすがのベティも少しだけ怯ひるんで、ちょっとおもしろかったので笑いそうになってしまい、またむっとされた。エスカレーターで二階に上がり、事務所の前までくると、ドアに釘くぎで打ちつけてある木製の札を見て、ここね、とベティはサフィニアを振ふり返った。

「まあ、ここねも何も、間違えようがないけど。しかし、ひどいわね。この札」

「……そう、ですか……？　力強くて……個性的で……いい字だと、思いますが……」

「字？　あたしは、王立銀行のドアに堂々とそんな札を打ちつけちゃうのが、ひどいっていうかすごいって意味で言ったんだけど」

「……あ……そ……いうことですか……そ、それは、わたしも、同感です……」

「誰だれが書いたの？　この字」

　ベティは札を指でなぞりながら首を傾かしげてみせた。何の含ふくみもない、額面どおりの質問にすぎないというような表情をしているけれど、絶対にわざとだ。見え見えなのだから、こちらもしれっと返事をすればいいのに、どうしてもできない。顔が熱い。ものすごく熱い。

「……し、知りません……誰かです……ＺＯＯの、誰か……」

「へえ。もしかしたら、あの男かしらね。背が高くて、あなたのとこの園長マスターの」

「ど、どっ、どっ……ど、ど……どうしてっ……そ、そう……思うん、ですか……」

「なんとなくよ。いかにもこういう字、書きそうな男じゃない」

「そ……そう、でしょう……か……」

「印象だけどね。でも、あの男、腕うではかなり立つみたいだし、顔もいいし、悪くないわ」

「……ベティの趣しゅ味みとは……違ちがうような、気が……」

「そう？　そんなことないと思うけど。ただ、名前がね。ひどすぎるわよね。あれは」

「ひっ、ひ、ひ、ひっ、ひっ、ひどくなんか、ありません……！　あっ、あれはあれで、味わい深いというか……なっ、慣れると、親しみもわいてきて、ほっ、他には、絶対、ない名前ですし……だから――」

「大切な人、ね」

　ベティは含み笑いをしてドアのノブに手をかけた。からかわれたのだろうか。意地悪な人だ。でも、たとえ表面的であっても親切でやさしくしてくれた妹たちソロレル時代のベティより、今のほうが好感が持てる。ベティの大切な人は誰なのだろう。サフィニアと同じように、おそらく仲間は皆みな、それぞれ大切なのだろうけれど、なかでも特別な相手がいるのではないか。尋たずねたら、ベティは教えてくれるだろうか。きっと言わない。口が裂さけても、

たとえお姉様に問いつめられても、ベティは口を割らないだろう。でも、だとしたら、思いは叶かなうのだろうか。

「どうしたの？」

「……いいえ」

「そう」

　ベティがドアを開けた。わたしが気にかけるようなことじゃない。お笑い種ぐさだ。逆ならともかく、わたしがベティのことを心配するなんて。それに、そんなことを考えている場合じゃないんだから。サフィニアは一つ息をついてからベティにつづいて事務所に入り、目にした光景をどう理解していいかわからず、呆ぼう然ぜんとして立ちつくしてしまった。

　子供だ。

　最初に思ったことはそれだった。

　実際、子供が子供を抱かかえているように見えたので、それ以外の感想は抱いだきようがなかった。抱えられているほうの子供がユリカだということは、少ししてから気づいた。なぜすぐにわからなかったかというと、服装のせいだ。ユリカはたいてい医術士服を着ているし、それ以外の服は、サフィニアや、このごろはマリアローズが選んであげることが多い。サフィニアにしろ、マリアローズにしろ、かわいいかんじのものが好きなので、ああいった、ハードめだけれどハードすぎない、かっこいい系の衣服を身につけたユリカは見たことがなかった。あれはシリアルキラーか。それほどくわしいわけではないサフィニアでも知っている。エルデンの若者の間で流行している有名なブランドだ。でも、どうしてそんな服を。ユリカは持っていなかったはずだ。ということは買ったのか。というか、ユリカを抱えている子供は？　子供……？

「──オ？」

　子供が振り返った。

　知っている顔だった。

　子供のように見えるけれど、子供ではない。

それどころか、泉里での戦いでＳｍＣが壊かい滅めつしたあと、闇やみ市いちを手中に収めた龍州連合の片割れ、＊シリアル・キラーズの頭目マスターだ。

＊といえば、最初はＳｍＣの味方だったわけで、どうしてそうなったのかさっぱりわからないが、なぜかユリカのことを気に入っているようで、だから、二人がーいつ緒しよにいることはそんなにものすごく不思議だったり不自然だったりするわけではないけれど、やっぱり予想外というか、非日常的というか、とにかく驚おどろいた。

だって、ユリカは目を閉じている。

眠ねむっているようだ。

たしかに、ユリカはわりとどこでも寝ねられる人で、寝つきもいいし、疲つかれがたまっていると、いきなりこてんと寝入ってしまうこともある。ただし、危険がなければ、という条件つきだ。ここは事務所だから、その意味では安全な場所かもしれないけれど、＊の頭目マスターの腕の中ということになると、どうだろう。いや、そういう問題だけではなくて、だっこだ。お姫ひめ様さまだっこされている。ユリカは女で、＊の頭目マスターは男だ。それなのにというべきか、それゆえになのか、ユリカがお姫様だっこされてしまっている。

くらくらしてきた。

「えー、と……」

ベティがサフィニアを見て首を傾かしげてみせた。いいの、あれ、とでも言いたげな表情だ。いいのかどうか、サフィニアにもわからない。そもそも何がいいのか悪いのか。

「あ……の……そ、の……」

「アノソノ？」

飛燕フエイヤンはきょとんとしている。どうして動どう揺ようしている様子が微み塵じんもないのか。ひょっとして、うろたえているサフィニアがおかしいのだろうか。狼ろう狽ばいするような状じよう況きようではないということなのか。どう考えてもそうは思えないけれど、そのあたりもふくめて何か言わないといけない。黙だ

まっているわけにはゆかない。何か。何か言わないと。

「こ……こっ、こんばんは……」

「おうッ、コンバンワ！」

　飛燕フエイヤンは顔全体で笑ってみせた。突つきつけたようなすがすがしい笑え顔がおだけれど、何か違う。間違っている。他ほかの誰だれかではない。自分だ。自分が間違っている。そうじゃない。挨あい拶さつをしてどうする。もう一度、ユリカの様子をうかがってみた。眠っている。男の人の腕の中で。どんな気持ちなのだろう。たとえば、自分だったら。何を。いったい何を。そんなことを妄もう想そうしている場合じゃない。ユリカだ。ユリカの頬ほおが──ちょっぴり、赤い。なぜだろう。それに、よく見ると、目は閉じているけれど、眠っているにしては顔面の筋肉が弛し緩かんしていないような。

「……も、しかして……ユリカ、起きてる……？」

　サフィニアがそう声をかけた瞬しゅん間かん、ユリカの口くち許もとが微かすかに震ふるえた。

　飛燕フエイヤンがユリカの顔をのぞきこんだ。

　ほんの少しだけれど、ユリカの瞼まぶたがぴくぴくしている。

　そのまままたっぷり五秒は経過した。

「……ん……んん……」

　ユリカがゆっくりと目を開けた。今、目が覚めた、寝ぼけまなこであたりを見回した、自分がどうなっているのか、最初はよくわからなかったけれども、すぐに気づいた、あっ、と声をもらして、ちょ、ちょっと、何？　お、下ろして、と飛燕フエイヤンの胸を手で押した。一連の行動は、でも、ユリカには申し訳ないけれど、ものすごくわざとらしかった。あの五秒間で急いで考え、組み立てて、そのとおりに実行したようにしか見えなかった。

「……あ──ちょ……しょの……こ、これは、ちゅまり、えっと……」

　飛燕フエイヤンの腕うでから半ば強ごう引いんに下りたユリカ

は、真っ赤な顔を隠かくそうとでもしているのか、前まえ髪がみを両手でさかんに引っぱってうつむき、サフィニアの目を見ようとしなかった。

「あ、遊びしゅぎて……疲ちゆかれたみたいで、りょ、旅行から帰ってきたばかりだったし、ちゅい、眠っちゃって……しょれで……」

「ケッコー遊んだよなァ。オレ久しぶりかも。こんなに遊んだの」

「しょ、しょうね……」

「つーかデートじゃね？　デートっぽかったよなァ？」

「ち、違いましゅ！　しょんなこと言ってなかったでしょう！　ただ遊ぶとしか！」

「デートって遊ぶ以外に何かすんの？　オレよく知らねーんだけど」

「わ、わたしだって知らないわよ、しょんなの！」

「じゃーべっつにデートってことでもよくね？」

「じぇんじぇんよくないでしょう！」

「そッかなァ」

「しょうでしゅ！」

「そーんな怒いかんなって、ユリィ」

「ユ、リ、カ！」

「えー何で？　今日はずーっとユリィでオッケェーだったじゃん」

「しょ、しょれは――」

「ユーリーカッ！」

　飛燕フエイヤンはユリカの肩かたに手を回してキャハハハと笑った。

「これでいーんだろ、ユリィ」

「もう、何でもいいわよ！　好しゆきにしゅれば！」

　ユリカは飛燕フエイヤンの手を払はらいのけてそっぽを向いた。喧けん嘩かするほど仲がいいという月並みな言葉がサフィニアの頭に浮うかんだ。そもそも喧嘩までいっていないか。ユリカがデートなんて。

　たぶん、さっきとはまったく違ちがう原因でくらくらしてきた。デート。ユリカがデート。ケッコー遊んだと飛燕フエイヤンが言っていた。ユリカも否定しなかった。遊んだ。二人は何をしていたのだろう。もしかして、あの服。シリアルキラー。飛燕フエイヤンの服もシリアルキラーだ。ユリカは飛燕フエイヤンに選んでもらったのだろうか。買ってもらったりしたのだろうか。こっちまで顔が熱くなってきた。頭がぼうっとする。ユリカ。ユリカが。うわあ。ユリカが。

「しょの、だから、ね」

　ユリカは上うわ目め遣づかいでようやくサフィニアと目をあわせてくれた。

　なんだか、すごくかわいかった。

「──いったんここにきて、荷物を置いて、出るときに……しょの、極限クライマツクス九手棍ナインボールを忘わしゆれたから、しょれで、とりにこないといけなくて。送ってもらって。お礼のちゅもりで、お茶を淹いれて、話をしてる間に眠ねむくなってきて……寝ねちゃったんだと……思うんだけど」

「そーそォ。最初はうとうとーってかんじだったんだけどよォ。そのうちガン寝しはじめたから、寝かしてやったほーがいっかなァーとか思ってさァ。椅い子す何個か並べて、奥のほーに毛布とかあったからさァ。それ敷しいて、そこまで運ぼうとしてたわけ」

「しょれで……目が覚めたら、ああいうふうになってたから、ほ、ほんとに寝てたのよ？　寝てたのはほんとで、でも、ちょっと、どうしたらいいか迷って」

「あ……そう、だったんだ……なるほど……」

「も、もう大だい丈じよう夫ぶだから」

　何が大丈夫なのか、サフィニアにはよくわからなかったし、ユリカもよくわかっていないのではないかという疑いをぬぐい去ることはできなかった。ただ、ユリカが飛燕フエイヤンに何かおかしなことをされていたわけではないようだし、ケッコー遊んだくらいだから、やはり二人は仲よしなのだろう。相手が相手だけに少々心配だし、仲間、というよりも、友だちをとられる、という言い方もおかしいけれど、とにかくそんなかんじがして、複雑な気持ちもないではないが、今はそれどころではない。寝入ってしまうほど疲つかれているみたいだから、手伝ってもらうかどうかは別としても、ユリカにも説明だけはしておくべきだろう。

「……ユリカ、こちらは……わたしの、姉弟で子しで……」

「昼飯時ランチタイムの人ね」

　サフィニアの態度から何か察したのかもしれない。ユリカは大人の顔つきになってベティに向きなおった。

「以い前じえん、泉セン里リでお会いしたときは一瞬だったけど、お話はサフィニアからいろいろ聞かしぇていただいてましゅ」

「あたしもあなたのことはサフィニアから聞いてるわ」

　ベティもついさっきまで啞あ然ぜんとしていたことなどおくびにも出さなかった。

「よろしく、ユリカさん。ベティよ」

「ユリカでいいわ。よろしく」

「ちなみに、オレァ飛燕フエイヤン。これでも闇やみ市いちの頭だかんな。そこんとこヨロシク！」

「……ちょっと、飛燕フエイヤン」

「＊の頭目マスターでしょう。知ってるわよ」

「うっそマジで？　なんでなんで？」

「ちょっとした有名人じゃない。ＳｍＣが壊かい滅めつしたあとに

闇市をかすめとった手口はたいしたものだわ」

「何？　褒ほめられてンのオレ？　まァーどーでもいっかァ。ところでよォ、なんでテメーその乳めっちゃムリクリ寄せて上げてんの？」

「今のは聞かなかったことにしてあげる。でも、一度だけよ？」

　大人じゃない。ぜんぜん大人じゃないところもベティには昔からあった。それだけは決して言ってはいけないのだ。もしかしたら、ベティがトモヨを嫌きらいなのは、そのせいではないのか。そう思ってしまうくらい、ベティは自分のその部分に話題が及およぶことをいやがっていた。それなら目立たないようにしておけばいいのに、どうしてあんな無む駄だなことを――なんて言ったりしたら、おそらく、いや必ずひどい目に遭あう。飛燕フエイヤンは頭の後ろで手を組んで訝いぶかしそうにしているが、ただならぬ雰ふん囲い気き、というよりベティがみなぎらせている冷気にも似た怒ど気きを感じているのかもしれない。表情がやや硬かたい。

「……れ？　オレなーんかやべーこと言った？」

「しょ、しょうね。謝ったほうがいいと思うわ。ちゃんと。心から」

「オレもなーんかそんな気が……わ、悪わりィ」

「いいのよ。誰だれだって過あやまちは犯おかすわ。同じ間違いを繰くり返す馬ば鹿かは救えないけどね」

　ベティは微笑ほほえんでみせたけれど、目はまったく笑っていなかった。銀行内は温度調節の装置が働いているので、季節を問わず暑くも寒くもないはずなのに、肌はだ寒ざむい。明らかにさっきまでより室温が下がっている。

　ともあれ、飛燕フエイヤンが謝罪してくれたことで、危機はひとまず回かい避ひされたようだし、いいかげん本題に入らないといけない。サフィニアは時計をちらりと見た。もう二十一時をすぎている。きっちりしているマリアローズが自分で指定した時間に遅おくれるなんて珍めずらしいけれど、事態が事態だけにいろいろあるのかもしれない。少し気になったが、心配するほどのことではないだろう。サフィニアはユリカに事情を話そうと口を開きかけたが、思

いとどまった。果たしてこれは飛燕フエイヤンに聞かせていい話なのか。判断がつかず、ベティを見た。もともと昼飯時ランチタイムに降りかかった災難なのだから、そのあたりの是ぜ非ひについてはサフィニアよりもベティが決めたほうがいいだろう。ベティもサフィニアの視線の意味をすぐにくみとったらしく、腕うで組ぐみをしてわずかに眉まゆをひそめた。考えこんでいるようだ。結論は、出なかったのではなく出せなかった。その前に事務所のドアがものすごい勢いで開いた。

「──た、大変や……！」

　バタバタと事務所に駆かけこんできたのは、姿を見るまでもなかった。よく通る大声と騒さわがしい足音だけでも特定できる。

「……カタリさん」

「おっ、サフィニア、おるな、そちらさんは昼飯時ランチタイムのベティはんやな、わしはカタリや、何やえらい別べつ嬪ぴんはんやないか、よろしゅうたのんます、どや、今度茶ァでもしばかへんか、ちゅうてな、ええて今はそんなんなあ？　ゆうとる場合ちゃうで、実際、おおっ、ユリカもおるやん、ちゅうか何やねんそのカッコ、いやいや、そうやない、似に合おとる似合とる、そんなんもな、結構ええと思うで、ちゅうかな、ユリカはアレやろ、何着ても似合うでほんまに、いや、お世辞とかおべっかとかな、そんなんちゃうて、せやけどな、ユリカもアレやで、もちーっとおしゃれとかしてもええんちゃうかなあとかな、思わんでもないで、わし的にはな──て、何やお前じぶん、飛燕フエイヤン、なんでお前じぶんがここにおんねん、ちゅうか、おそろやん！　お前じぶんとユリカ！　シリアルキラーやん！　何やソレ！　どないなっとんのじゃおお！　どういうことやねん！　も、も、も、も、もももも、もしかして、そそそそそそそういうことなんか……？　嘘うそやろ？　それはアレやろ、ないやろ、ああ、あらへんあらへんあってたまるかいボケェェッ！　そんなんわしと髭ひげが許さへんでえ！　髭は今ジェードリやけどなあ、わしが髭の分までなあ！　ちゅうか髭がおらん間にユリカに変な虫がついてまいよったらわしが髭にマッスル抹まつ殺さつされてまうわ！　マッスルエクスキューションやで、わしなんか一いつ瞬しゅんでミートやで、ホンマ！　そうでなくたってなあ、わし的にもな！　あかん！　あかんあかんあかん、あかんでえ！　あかん！　天と地と人が認めても、わしがよう認めん！　まずはオトモダチから始めてやな、それから十年は様子見なあかん！　話はそれからや！　道は険しいんじゃダァホ！　漢おと

こなら！　漢ならァ！　やってみせんかい……！　そんくらいの根こん性じようもないんやったらなあ、端ハナッから──」

「はいはい、そこまでにしてください」

「がぼぐっ……！」

　カタリの後頭部を拳こぶしで殴おう打だして黙だまらせたのは、昼飯時ランチタイムのヨグだった。カタリにつづいて事務所に入ってきて、しばらくは黙って耳を傾かたむけていたのだが、とうとう我が慢まんできなくなったらしい。ただ、眼鏡めがねのせいで表情が読みとりづらいとはいえ、腹を立てているようには見えない。むしろ、にこやかだ。それでいて、かなり強きよう烈れつな一いち撃げきを見み舞まったのだろう。カタリは後ろ頭を抱かかえて涙なみ目だめでうずくまっている。どうもちぐはぐというか、不自然というか、しっくりこない、異様とまでは言えないが、不思議な雰囲気の男だ。

　ベティが一歩前に出て首を少し傾けてみせた。

「Hiyas.」

「やあ、ベティ」

「あなたでしょう。あたしの結界に悪戯いたずらしたのは。ちょっと手が離はなせなくて見み逃のがしたけど」

「悪戯だなんてとんでもない。ちょっと中をのぞかせてもらっただけですよ。あれ以上何かしたら、僕もただではすまなかったと思いますし」

「いろいろ問いつめたいこともあるけど、あとにするわ」

「そうしていただけるとありがたいです」

　ヨグはカタリを一いち瞥べつしてから、右手の人差し指で眼鏡の位置を直した。

「──じつは、またもや不測の事態が発生してしまいまして」

「せ、せや……！」

　カタリが飛び起きて叫さけんだ。

「マリアローズが！　マリアローズがいなくなってもうたんや……！」

Omenage 897 12th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン

“unknown”

chapter.7

伝説の日

　椅い子すに座らされている。それは間ま違ちがいない。椅子の脚あしは四本だ。木製らしい。背もたれも同じだ。座面は布張りで、硬かたくもなくやわらかくもない。ごく普ふ通つうの椅子だ。

　背もたれの後ろで、両手首をまとめて紐ひもできつく結ばれている。少しだけ肩かたが痛いけれど、感覚はちゃんとあるので、血流が阻そ害がいされたり神経が圧あつ迫ぱくされたりはしていないようだ。両足首は椅子の脚に結びつけられていて、腰こしも紐で背もたれに固定されているから、膝ひざを左右に動かすことくらいしかできない。全身を激しく揺ゆすれば、自分の身体からだごと椅子を倒たおすことはできそうだが、そんなことをしてもきっと痛い思いをするだけだろう。

　黒い布か何かで目め隠かくしをされているせいで、ここが明るいのか暗いのかさえよくわからない。たぶん、真っ暗ではないと思う。何がしかの明かりはあるだろう。外ではない。目隠しのみならず猿さる轡ぐつわも嚙かまされているけれど、においを嗅かぐことはできる。室内だ。湿しめっぽくて、黴かびくさく、少し埃ほこりっぽい。床ゆかは硬い。おそらく合成骨材コンクリートだ。地下だろうか。

　猿轡を嚙まされているなりに、何度か声を出してみた。自分一人なのか、それとも他ほかにも誰だれかいるのか確かめたかった。返事はなかったけれど、なんとなくだが、気配がする。自分の前方に、向かいあうようにして、誰かいるのではないか。いるなら、身動きするだけでもいいから、反応して欲しい。ダメか。どうして。なんで僕はこんなところに。

　時間はそれほどたっていないはずだ。少なくとも、目が覚めてからは一時間、それ以下かもしれない。どれくらいの間、気を失っていたのか。わからない。でも、そんなに長い時間ではないような気がする。

　それにしても、誰だろう。誰がこんなことを。僕をつかまえて、監かん禁きんして、何のつもりなんだ。もしかして、これもルヴィー・ブルームの仕し業わざなのか……？　そうだとしたら、何のために？　僕は昼飯時ランチタイムじゃないのに。僕は関係ないのに。いや、アジアンに協力しようとしていたわけだから、無関係とは言いきれないか。だけど、もしそうなら、これってものすごく

やばい状じよう況きようなんじゃ……？

　あたりまえだ。

　やばくないわけがない。

　そうとうまずい。

　僕、死ぬのかな。

　こんなふうにわけもわからないまま死ぬのはかなりやだな。

　わけがわかっててもやだけど。

　なんか、現実感がわかないや。

　どうしてだろう。

　おかしいな。

　絶体絶命のピンチじゃないの？　これって。

　それなのに、どういうわけか、そんなかんじがしない。

　もう一度、声を出してみた。

　そこに誰かいるの、いるんでしょ、と言ったつもりだけれど、猿轡のせいでちゃんとした言葉にならなかった。

　答えはやはりなかったものの、確信した。

　いる。

　僕は一人じゃない。

　その人はなぜここにいるのだろう。同じようにとらわれているのか。椅子に縛しばりつけられているのだろうか。声や物音は聞こえない。痛がったり、苦しんだりはしていないようだ。意識はあるのか。あるのだとしたら、どうして黙だまっているのだろう。

　そういえば、前にもこんなことがあった。

　あのときはベアトリーチェと一いつ緒しよだった。

　そう――、

　そんなこともあったっけ。

「どこへ行っていた」

　そして、この声。

　この声を、あのときも聞いた。

　腹の底から空気を吐はきだすような低い声だった。

「答えなくていい。そのざまでは答えられまい。それに、どうでもいいことだ。お前はここにいる。俺のすぐそばに」

　荊王ジンワン。

　そっちか。

　完全に意表を突つかれた。それは考えなかった。荊王ジンワン。あの変態が。でも、そうだ。考えてみれば、死にかけダイング雷電サンダーボルトを出た直後、いきなり口を塞ふさがれたのではなく、口の中に指を突っこまれた。思い返してみれば、たしかにあの指はマリアローズの歯をまさぐっていた。狙ねらっていた。狙いまくっていた。抜ぬこうとしていた。抜かれそうだった。ただ、あの場で凶きよう行こうに及およぶ余よ裕ゆうはなかったのか、マリアローズを失神させて連れ去った。ここに連れてきて、椅子に縛りつけた。そういうことか。

　だとしたら、歯は。無事だろうか。猿轡のせいで、舌で隅すみ々ずみまでしっかりと確かく認にんすることはできないけれど、痛みはないので、抜かれてはいないと思う。正確に言えば、まだ抜かれてはいない。

　これからだ。

「時間はある。いくらでも」

　――や、きみはそうかもしれないけど。

　こっちはそうでもないんだけど。

　僕にだって都合ってものがあるんだけど。

「昔話でもするか」

　いらないです。

　聞きたくないよ。変態の昔話なんて、これっぽっちも聞きたくない。

　拒きよ否ひしようにもできないけどさ。

「俺や飛燕フエイヤンは知ってのとおり龍州から大陸に渡わたってきた。正確に言えば、追いだされた。長らく群ぐん雄ゆう割かつ拠きよの時代がつづいていて光こうも陰いんも入り乱れていたから、俺たちのような黒社会ヘイシーカイに属するハヤ九ク三ザ者にも生きる場所は十分にあったが、齋家キ・チアという連中が龍州を統一してからすべては変わった。齋家キ・チアは黒社会ヘイシーカイ撲ぼく滅めつを掲かかげてハヤ九ク三ザ狩がりを始めた。もともとは職を持たない浮ふ民みんや田畑を捨てて逃にげてきた遁とん民みん、国から見捨てられた棄き民みん、捨て子や人買いから逃げた餓が鬼きどもが寄り集まってできた裏街を齋家キ・チアは潰つぶした。そんなことをしても、浮民や遁民はいなくならない。貧しければ子を捨てる親もいる。親が死んでも子は生きてゆかねばならない。黒社会ヘイシーカイがなくなったら、そういうやつらはどうすればいい。ただ死ねというのか。そんなことを考えることもあるが、どうでもいい。俺たちは逃げる道を選んだ。逃げて生きのびる道を探すことにした。エルデン。ここはいい街だ。俺たちにとっては楽園みたいな場所だ」

　それがどうしたっていうんだ。知ったことじゃない。エルデンがどうかは別としても、ここは楽園どころか地じ獄ごくみたいだ。

「俺たちの生き方は単純だ。金が欲しい。権力が欲しい。命令されたくない。服従するよりは屈くつ服ぷくさせたい。欲を満たしたい。黒社会ヘイシーカイにも最低限の礼れい儀ぎとされるものはあったし、義理を通さないやつは信用されなかったが、いざとなれば背中から刺さした者勝ちだということは皆みな知っていた。ここの流りゆう儀ぎと同じだ。何もかも全部ひっくるめたものが力だとするなら、力のある者が必ず勝つ。力のない者は力のある者の後ろに従って踏ふみ潰されないように生きるしかない。それなりにおもしろおかしく生きてゆけばいい。卑ひ屈くつな目で、機き嫌げん伺

うかがいばかりして、へらへら笑って、たまに自分より弱い者をいたぶって、他人から見れば反へ吐どが出る生き様だろうと、そいつが納なつ得とくしているなら文句を言う筋合いじゃない。俺の手下にもそんなやつはいくらでもいる。腐くさるほどいる。多少は使えるやつもいる。まるで使えないやつもいる。俺はやつらのようには生きられないが、やつらの生き方を否定しようとは思わない。ただ虫むし酸ずが走るだけだ。人を使うときには好き嫌きらいは二の次だが、好きになれないやつを切り捨てるとき、俺はためらわないだろう。むしろすすんで使い捨てにするだろう。昔、馬ば鹿かな女がいた」

　途と中ちゆうはほとんど聞いていなかった。自分をさらった男の人生哲てつ学がくになんか興味がない。ただ、なんでそんなことを話すのか不可解ではあった。あげくの果てに、いきなり話題が飛んで、昔、馬鹿な女がいたとか、そんなの知らないって。本当に知ったことじゃないんだってば。そりゃあ賢かしこい女の人もいればお馬鹿さんな女の人だっているだろうし。あたりまえだし。

「━愚おろかな女だった。反はん抗こう的だったから、とてつもなく痛い方法で歯を抜いてやった。それでも言うなりにはならなかった。無ぶ愛あい想そな女だった。自じ業ごう自得で土間に莫ご蓙ざを敷しいただけの部屋で客をとる羽目になって、病持ちになった。美しい女だったが、最悪な━この街にふさわしい言い方をするなら、あの女の生しよう涯がいは超最低ＳＵＣＫだった。女として、人としての幸せにことごとく、とことんまで見放され、路ろ傍ぼうの小石のように踏まれて、蹴け飛とばされ、塵ごみのように死んだ。それでもずっと空を睨にらみつけていた。いつかここから這はい上がる。そのために這いつくばっても生きのびる。そんな目をした女だった。観念するまでは。死期を悟さとって、女の心はとうとう折れた。女は死んだ」

　息を吐く音がした。

　ため息だろうか。

「俺が殺した」

　鳥とり肌はだが立った。

　殺した。殺したのか。まあ、マリアローズも悪名高いサンランド無統治王国首都エルデンの住人なので、目の前にいる男が何人殺し

ていようと、それだけで驚おどろいたり怯おびえたりするような繊せん細さいな神経は持ちあわせていない。女の儚はかない人生やそのむごい最さい期ごは同情に値あたいすると思うが、クァラナドあたりに行けば似たような話がごろごろ転がっているだろう。でも、荊王ジンワンはどうしてその女を手にかけたのか。女は病に冒おかされていた。死期を悟ったということは死病だったのだろう。放ほうっておけばそのうち死ぬ女を、なぜわざわざ殺したりしたのか。

「力がなければ、力がないなりの生き方をするしかない」

　足音が聞こえた。

　近づいてこようとしているのか。

　そうらしい。

　二歩、三歩。

　荊王ジンワンはおそらく、もうすぐそばにいる。

「高望みという言葉があるだろう。龍州にもこんな諺ことわざがある。虫這チヨンジ地不エデブジ見空エンコン。地を這う虫は空を見ない。空を飛ぶ虫がいることを知らなければ、地を這いずり回るだけで満足できる。あの女は地を這う虫だった。最初から羽がなかったとは言うまい。美しい女だった。羽はあったが、むしられて、どうやっても飛べなかった。それなのにいつか空を飛びたいと願っていた。俺はそのことを知っていた。あの女も知っていたかもしれない。だったら、なぜだ。不思議だった。今もわからない」

　目め隠かくしを外された。

　色眼鏡サングラスをかけて髪かみの毛を逆立てている背の高い男が目の前に立っていた。

　合成骨材コンクリート剝むきだしの薄うす暗ぐらい部屋だ。明かりは床ゆかにランプが一つ置いてあるだけで、天てん井じようの半永久灯は壊こわれている。壁かべ際ぎわのソファは傷いたんでいるというか瑕きずだらけだ。その脇わきでひっくり返っているテーブルも脚あしが一本折れていて、使えそうにない。他ほかにも家具の残ざん骸がいが散乱している。何ものかに荒あらされたのか。少なくとも、今、誰だれかが住んでいる部屋には見えない。

「ここは」

　荊王ジンワンは部屋の中を見回すように顔を動かした。

「ＳｍＣの隠かくれ家がの一つだった。連中は泉セン里リで壊かい滅めつしたが、全滅したわけじゃない。残党はいた。連中の後あと釜がまに座る恰かつ好こうで闇やみ市いちを手中に収めた俺たちにとって、生き残りは禍か根こん以外の何ものでもない。ＳｍＣの刺青いれずみがある者は殺す。一人残らずだ。もっとも、俺たちと同じことを考えているやつは他にもいるようだが」

　ＳｍＣの名前なんてもう聞きたくない。マリアローズが顔を伏ふせると、荊王ジンワンが手をのばしてきた。悪お寒かんがして、とっさに頭ず突つきでも食くらわせてやろうと思ったけれど、この体勢では無理だ。何か。何か手はないか。考えている間に、荊王ジンワンは猿さる轡ぐつわを解いて、マリアローズの頬ほおにふれようとした。反射的に頭を振ふって手を払はらいのけ、色眼鏡サングラスをねめつけてやった。ちょっと挑ちよう戦せん的すぎたか。一いつ瞬しゆん後には冷静になってちょっと後こう悔かいしかけたが、意外にも荊王ジンワンはあっさり引き下がった。

「俺が何もしなければ」

　荊王ジンワンがまだ手に持っている猿轡を見つめているらしいことが気になった。何、それ、いったいどうするつもり……？

「舌を嚙かみ切るような真ま似ねはしないだろう。お前なら」

「……するわけないだろ、そんなこと」

「その目だ」

　荊王ジンワンは右手で猿轡を握にぎりしめて左手で色眼鏡サングラスを外した。

　変態のくせに、切れ長の目は妙みように澄すんでいる。

「人間の歯以外にここまで惹ひかれるのは二度目だ。信じないだろうが、俺はもう、お前の歯を抜ぬきたいとはそれほど思っていない」

「それほど、ね」

「お前が望まないなら、俺は我が慢まんできる」

「望むわけないでしょ」

「そうか。そうだな」

「当然だよ。てゆうか、こんなふうに僕を拉ら致ちしてさ。縛しばりつけて、監かん禁きんして。信じるとか信じないとかそれ以前の問題だと思うんだけど。僕が言ってること、間ま違ちがってるかな？　ぜんっぜん間違ってないよね？　そもそも何？　何のつもり？　どういうこと？　説明して欲しいんだけど。何から何まで。や、べつにいらないよ。こんなことで時間食ってる場合じゃないんだよね。いろいろあってさ。僕にも。さっさと解放してくれないかな。冗じよう談だんじゃないんだよ。こんなの。頭にくる。ほんっとに頭にくるよ。人のこと、何だと思ってるわけ？　なんかよくわかんないけど話し相手が欲しいならさ、ちゃんと手順を踏ふんで友だちとか作ればよくない？　僕ときみって、そういう間あいだ柄がらじゃないよね？　最初はむしろ敵だったしさ。正直、恨うらみもあるんだけどね。それはまあいいよ。水に流すかどうかはともかく、今はおいといていいけど、打ち明け話とかされるような関係じゃないよね？　違う？　違わないでしょ？」



「……違わない」

「だよね。やっぱり。よかったよ。僕の勘かん違ちがいじゃなくて。あー。あー。なんかこう、口とか若じやつ干かん痛いけど、いいや。や、よくないよ。いいわけないよ。何だよ、これ。この恰好。どうして僕が縛られなきゃいけないのさ？　ねえ？　なん

で？」

「それは……逃にげられないために」

「そりゃ逃げるよ。いきなりつかまったら逃げようとするよ。誰だって。僕じゃなくたってそうだよ。きみだってそうじゃない？」

「そう……だな」

「だいたい、何？　きみの目的は？　何がしたいわけ？　僕をつかまえて、どうするつもりなの？　そこのところがよくわかんないんで、はっきり言ってくれる？　てゆうか言え」

「目的は」

　荊王ジンワンは目を伏せた。明らかに動どう揺ようしている。マリアローズは畳たたみかけた。

「目的は？」

「……俺も、どうしようというあては、とくに」

「ないの？」

「ない」

「目的もなく僕を誘ゆう拐かいしたって？　それ、本気で言ってる？」

「ああ。本気だ」

　声こわ音ねはほとんど変化していないが、荊王ジンワンはマリアローズと目をあわせようとしない。ただ単に気まずいのか。自分でも自分のことがわからず戸と惑まどっているのか。いずれにせよ、物理的には完全に不利というか、挽ばん回かいできる可能性はかぎりなくゼロに近いが、心理的にはこちらに有利な風向きになりつつある。それにしても、荊王ジンワンが手に握りしめている猿轡が気になって仕方ない。なんでそんなもの、いつまでもやたらと大事そうに持ってるんだよ……。

「荊王ジンワン」

あえて名前を呼んでやった。

荊王ジンワンはびくりとしてマリアローズを見た。

マリアローズはゆっくりと息を吸いこんで、静かに吐はきだした。

「ふざけるな」

できるだけ感情をこめずに言ってみた。視線はそらしていない。荊王ジンワンを睨にらみつけたままだ。これは賭かけだった。のるかそるかだ。成功すれば、荊王ジンワンを意のままに操あやつることはできないとしても、要求を聞き入れさせることくらいはできるだろう。失敗すれば、ちょっと考えたくないような目に遭あわされるかもしれない。正直、それはさけたい。絶対にやだ。でも、もう仕し掛かけてしまった。今さら後あと戻もどりはできない。こうなったら腹を据すえるしかないし、実際、頭にきてもいる。こんなことまでしておいて、どうしようというあては、とくにない？　目的がないだって？　じゃあ、なんとなくってこと？　ふざけるな。納なっ得とくできるか。納得できたって許さないけれど、それにしたってあんまりだ。そのふざけた所業は万ばん死しに値あたいする。

「今すぐ紐ひもをほどいて、僕を解放してくれる？　てゆうか、しろ」

「……いや、それは」

「それは、じゃないよ。僕に口答えする気？　何の権利があって？　何様のつもり？」

「俺は、べつに」

「べつに、何？　何様でもないって？　あっそ。だったら僕がきみに命令する。僕を解放しろ。今すぐ。ただちに。ちなみに、僕はマリアローズ様だから」

「……様？」

「そう。様。知らなかったの？　じゃあ覚えておけば？　僕はマリアローズ様。なんか勘違いしてるみたいだけど、はっきり言って、きみごときがつかまえたりさらったり縛りつけたり閉じこめたりし

ていい存在じゃぜんぜんないから。そんなに安くないし、軽くもないんだよ。まあ、でも、きみはさっき言ってたよね。何もしなければ舌を嚙かみ切ったりはしないだろうって。たしかにそのとおりだよ。何もしなければ、僕はそんなことしないよ。何もしなければね。何かしようとしたら、僕は舌でも何でも嚙み切る。躊ちゆう躇ちよなんかしない。他人に好き勝手されるくらいなら、死んだほうがましだ。僕を、このマリアローズ様を舐なめるな」

　荊王ジンワンの顔が微かすかに引きつった。額に脂あぶら汗あせか冷や汗か、とにかく汗がにじんでいる。猿さる轡ぐつわを握にぎりしめている手にはそうとう力が入っているようだ。この反応をどう受け止めるべきか。もしかして、キレかけてる？　それとも、いけそうなのか？　わからないけれど、もう一押ししてみるしかない。いや、押しながらも引く。これが勝負の一手だ。

「──まったく、この僕にきみごときがこんなことをするなんて、本当なら絶対に許さないし一生かけて償つぐなってもらうところだけどね」

　マリアローズは首をわずかに傾かたむけて両りよう眼めをすぼめた。

「人間、誰だれだって間違うことはあるし、歩いてればつまずくことだってある。今回だけだよ。僕を今すぐ即そつ刻こく可か及きゆう的てき速すみやかに解放したら、今回だけは水に流してやる。なかったことにしてやるよ。解放しないなら、僕はありとあらゆる手段を使って抵てい抗こうする。きみが喜ぶような結末だけには何がなんでもさせない。たとえ僕がどうなってもね」

　声が震ふるえるようなことがあってはならない。表情も変えてはならない。弱気になってはいけない。たしかに見下ろされている。椅い子すに縛しばりつけられて、ほとんど身動きがとれない。抵抗といったって何ができるのか。舌を嚙んで自害してやるなんて本気で思っているわけでもない。死にたくない。こんなところで犬死にするのはごめんだ。それでも自分に言い聞かせないといけない。僕は優位に立っている。気持ちの上ではこっちが荊王ジンワンを見下ろしている。威い圧あつしている。屈くつ服ぷくさせようとしている。荊王ジンワンはもう陥かん落らく寸前だ。油断はしない。最後の瞬しゆん間かんまで気を抜ぬいたりしない。僕はマリアローズ様だ。僕の言うことを聞け。僕に従え。さもないと、そうしてくれないと──とっても、ものすごく、困るんだから。

「俺は」

　荊王ジンワンは言いよどんで色眼鏡サングラスをかけ、奥歯を噛みあわせた。

「……お前を」

　何？　お前を？　何だよ？　どうするつもり？　さっさと言ってよ。落ちつかないじゃないか。怖こわいってば。心臓が破は裂れつしちゃいそうだよ。でも、顔色を変えるわけにはゆかないし。たえろ。たえるんだ。我が慢まんだ。がんばれ、僕。根こん性じようだ。気合いを見せろ。

「お前を」

　だから、何？　何だって？　早く。早く言ってよ。はーやーくー。

　もう限界だ。

　ダメだ。

　限界なんか超こえてしまえ。思いっきり超ちよう越えつしろ。だって、超えないと。

　やばいんだもん。

「──お前を……見つけて」

　それで？　何？　さっさと、ぱっぱとつづきを。

「お前は虐殺人形カーネイジドールや他ほかの何人かと一いつ緒しよにいた。偶ぐう然ぜん、見かけた。偶然……かどうか。俺はお前を捜さがしていた。お前をふくめたＺＯＯの連中が根こそぎエルデンからいなくなったことはわかっていた。お前を忘れるいい機会だと考えもした。おかしい。明らかに変だ。こんな気持ちになったことは……一度もない。お前がいないと思うと、余計に……目を閉じると、お前の顔が、お前の目ばかりが浮うかんだ。俺の頭がおかしくなったのかもしれない。平静じゃないことだけはたしかだ。お前を見つけて、あとをつけた。お前が貸し宿から出てきた。一人だった。気がつくと、俺は……俺は、我を忘れた。こんなことは初めてだ」

　荊王ジンワンは呟つぶやくようにそこまで言うと、いったん口をつぐんだ。

　この男は色眼鏡サングラスで何を隠かくそうとしているのだろう。

　どうでもいい。関係ない。そんなこと、べつに知りたくもない。

　ただ、なぜだかマリアローズの中から憤いきどおりや苛いら立だちはほとんど消えていた。

　妙みように静かな気持ちだ。

　荊王ジンワンは唇くちびるの端はしを軽く嚙んでから顎あごを引いた。

　色眼鏡サングラスの上から目がのぞいた。

　熱っぽい眼まな差ざしだった。

「俺はお前が欲しい」

「あげないよ」

　きっぱりと拒きよ絶ぜつするような口調にはならなかった。マリアローズは淡たん々たんと事実を述べただけだった。

「僕は僕のものだ。誰にもあげたりするもんか」

「そうか」

　荊王ジンワンは色眼鏡サングラスを指で押しあげる寸前に目をつぶった。

「……そうだろうな」

「うん」

「それでも俺は、お前がいい」

　はい？

　と、思わずきき返してしまいそうになった。だって、微び妙みよ

うに噛かみあってないし。当然のことながら自分自身を誰かにあげたりはしないって言ったのに、それでもお前がいい？　何それ、いったいどういう意味？　何をしようってわけ？　近づいてきたりして。てゆうか、めちゃくちゃ近いんだけど。近すぎなんですけど。ひょっとして、あれ……？　さっきの台詞せりふって、それでも俺は、何としてでもお前を手に入れるとか、そういうこと？　その宣言？　嘘うそ？　マジで？　だとしたら、僕、しくじった？　やりすぎちゃった？　今度はこっちが冷や汗をかく番だった。表情はたぶん変わっていない。というか、凍こおりついてしまったかのように眉まゆを動かすことさえできない。荊王ジンワンは身体からだを屈かがめた。迫せまってくる。きゃあ。やめて。助けて。叫さけびたかったが、声なんか出なかった。荊王ジンワンの顔が。うわ。どうしよう。近い。至近距きょ離りだ。くる。やばい。もう。ぶつか――らなかった。

　それた。

　荊王ジンワンの頭はマリアローズの右耳のすぐそばにある。

　お香のようなにおいが微かすかにした。

　どうやら背もたれの後ろに手をのばして、紐ひもをとこうとしているらしい。

　作業はすぐに終わった。

　荊王ジンワンはそれからしゃがみこんで足首や腰こしの紐もほどいた。

　ひとまずほっとしたけれど、マリアローズは見み逃のがさなかった。

　こいつ、紐をほどく前にあの猿さる轡ぐつわをしっかりズボンのポケットに入れやがった。

「水に流してくれとは言わない」

　荊王ジンワンはさっと立ちあがってマリアローズから離はなれ、顔だけ振ふり向かせた。

「だが、反省している。すまなかった」

反省？　だから何？　謝ればそれですむとでも思ってるわけ？　そんなわけないでしょ？　だいたい、本当に心の底から真しん剣けんに本気で純じゆん粋すいにすまない申し訳ないごめんなさいと思ってるんだとしたら、それなりの示し方っていうか形っていうか、べっつに金よこせとは言わないけど、一いつ般ぱん的に誰だれしもが納なつ得とくするんじゃないかと思われるような謝罪の方法っていうのを考えてそれをするべきじゃない？　何でもいいんだけど、相手に伝わるような、わかりやすい、たとえば賠ばい償しょう金とか、お金じゃなくてもいいけどね？　まあ、それに類するようなものがあるわけでしょ？　ついでに反省文とかこのようなことは二度といたしません的な宣せん誓せい書とか、もちろん署名入りで、できれば血判付きで、そういうものもあわせて提出するとか、常識的に考えてホントのホントに反省してるっていうなら、最低でもそれくらいはするべきじゃない？　僕なんかはそう思うけど？

　言いたかった。言い募つのりたかった。言って言って言いまくって、けちょんけちょんにしてやりたかったけれど、歯を食いしばってぐっとこらえた。冷静に。冷静になれ、僕。せっかくこの危機から脱だつすることができそうなんだ。ここまでこぎつけたんだ。下手な真ま似ねをしてぶち壊こわすわけにはゆかない。わかっている。わかってはいるけれど、これだけは譲ゆずれない。

　マリアローズは椅子から立ちあがった。ほんの少し違い和わ感かんがあるものの、痛かったり痺しびれていたりするところはない。普ふ通つうに歩けそうだ。問題ない。マリアローズは大おお股またで荊王ジンワンに歩みよって、やつのズボンの尻しりポケットに手を突つっこんで猿轡を抜ぬきとった。

「いらないよね、こんなものは？」

　わざと満面に笑えみをたたえて言ってやったら、荊王ジンワンは、あ、ああ、とうなずくのもそこそこに顔を背そむけてしまった。気のせいだろうか。荊王ジンワンの頰ほおが赤らんでいたような。まあ、どうでもいいことではある。回収した猿轡は、部屋の隅すみに置いてあった背負い袋ぶくろの中に突っこんだ。ここを出てから確実に処分すればいい。あとは背負い袋とひとまとめにされていた偽にせ劫ごう火かや籠こ手てなどを手早く装着すれば、準備完かん了りようだ。

「言っておくが、お前の持ち物には手をつけていない」

荊王ジンワンがランプを持って部屋のドアを開けた。マリアローズに釈しやく明めいしているのか。それでいて、こっちを見ようとしない。べつに見られたくないのでいいのだが、なんだか挙動不ふ審しんだ。

「そういう趣しゅ味みはない」

「……だと思いたいけどね」

「俺はお前の付属物には興味がない。お前だけだ」

気持ち悪いです。すごくいやです。やめてくれない？　てゆうか、二度とそんな台詞を吐はいたりできないようにその口縫ぬいあわせてやろうか？　ダメだ。こらえろ。まだだ。身の安全を確保できてからにしよう。今は我が慢まんだ。我慢の子だ。くっそう。超最低ＳＵＣＫ。覚えてろ。

マリアローズは必死に一生懸けん命めい死にものぐるいで自分を抑おさえて、抑えつけて、荊王ジンワンに従って部屋を出た。明かりは荊王ジンワンが持っているランプだけだが、さほど長くない、狭せまい廊ろう下かなので、様子はだいたい把は握あくできた。一方の突きあたりにある上りの階段は崩ほう壊かいしていて、逆側の突きあたりの壁かべには穴が空いている。おそらくここは何らかの建物の地階で、あの穴は下水道にでも繋つながっているのだろう。マリアローズが住居にしている高層寺院の地階と少し似ているが、じつはエルデンでは、根気よく探せばこのような場所は結構ある。聞いたところによると、人目を忍しのんで暮らせるようなねぐらを見つけて売る商売なんていうものもあるらしい。引っ越こし予定の僕の住まいもお金になったりするのかな。あそこを知っている人はほとんどいないし。検討してみる価値はありそうだけれど、今、考えることじゃない。

前を行く荊王ジンワンから二メーテルは距離をとることにした。変態がうつったら困るどころの騒さわぎではないので、それ以上近づく気にはなれなかった。穴をくぐると、案の定、下水道に出て、そこから右に曲がり、左に曲がって、五十メーテルほど歩いただろうか。ようやく梯はし子ごがあった。荊王ジンワンは、ここだ、とだけ言って梯子を登っていった。蓋ふたを開ける音がしたので、梯子に近づいて上を見たら、もう荊王ジンワンの姿はなかった。地上に出た瞬しゅん間かん、何かされたりしないかな。不安はあったが、思いきって梯子に手をかけた。登りきると、そこは暗い路地裏

で、荊王ジンワンは少し離れた場所で待っていた。なんだか犬みたいな男だ。変態だけど。

「一つきいてもいいか」

「……何だよ」

「お前は何をしていたんだ」

「何って」

「虐殺人形カーネイジドールと一いつ緒しよにいた。遊んでいるという雰ふん囲い気きじゃなかった」

「それは……ちょっと、いろいろあってさ」

「言いたくないか」

「言いたいとか言いたくないとか、そういうんじゃないんだけど──」

　なんで僕がこいつと普通に会話しなきゃならないんだよ。

　マリアローズはため息をついて前まえ髪がみを手で払はらいのけた。

「関係ないだろ。きみには」

「そうでもない」

　どうして、と尋たずねそうになって、慌あわてて思いなおした。無視だ。こういう手合いは無視するのが一番いい。下手にかまうと、つけあがって絡からんでくる。アジアンだってそうだった。いくらつきまとってきても相手にしないで、口もきかず、目もあわせなければよかったんだ。そうしたいのは山々だったけれど、できなかった。そうもゆかなかった。だって──危ないところを助けてもらったりもしたしさ。あいつのおかげで何度か命拾いしたのは事実だし。あいつがいなかったら、僕はとっくに死んじゃってたかもしれないわけだし。べつに、でも、それは、あいつにかぎった話じゃなくて。ＺＯＯのみんなだって同じだし。モリーにもたくさん怪け我がを治してもらったし。そもそもお父さんとお母さんがいなければ僕は生まれてこなかったし。

　ため息をついて、頭を振り、歩きだそうとしたら、荊王ジンワンが先に路地の出口へと向かって足を進めはじめた。追いかけて、追い抜いてやりたい気分にもなりかけたけれど、好きにさせることにした。マリアローズはやはり荊王ジンワンの二メーテル後ろを歩いた。路地から出ると、街灯のある道で、見たところ貸し宿がたくさんある第四区内のようだ。もしかしたら、死にかけダイング雷電サンダーボルトからもさほど離はなれていないのかもしれない。なんとなくだが、見覚えのある風景だ。昼間かもしれないけれど、一度や二度、このあたりを通りかかったことがあるような気もする。これなら道案内は必要ないだろう。一人でも知っている道に出られそうだ。

　時計を見ると、もう二十二時近くだった。まずは動物園事務所に向かうべきか。もっとも、待ち合わせの時間を一時間も過ぎている。マリアローズ失しつ踪そうという事態を受けて、皆みながどう動いているのかもわからない。うまく合流できるだろうか。まったく、ただでさえ面めん倒どうなことになってるっていうのに、さらに引っかき回してくれた荊王ジンワンにはいつかきっちり罪を償つぐなってもらわないといけない。その機会は、でも、意外と早くやってきた、と言っていいのかどうか。

「──ッ……！」

　荊王ジンワンはマリアローズをちらりと見て、おそらく何か声を発しようとしたが、とてもそんな余よ裕ゆうはないことに気づいて、何も言わずに飛びのいた。正直、その瞬間は何が起こったのかさっぱりわからなかったが、マリアローズもつられて後退した。何？　何が？　落ちてきた？　そうだ。落下してきた。上からだ。落ちてきたんだから、あたりまえだ。何か黒いものが。いや、もうわかっている。それが何か。というか、それが誰だれか。

　たぶん、そいつはそのへんの三階建てか四階建ての屋上から飛び降りるというよりも荊王ジンワンめがけて急降下してきたのだろう。

　今、着地点にしゃがみこんでいるそいつは、だが、足だの膝ひざだのが痛くてうずくまっているわけではないようだ。

　その証しよう拠こに、そいつはすぐに立ちあがった。

　右手には短たん剣けんをぶら下げている。

表情らしきものは浮うかべていない。完かん璧ぺきな無表情だ。

つめたい。

こんなにつめたい目をした人間が存在していること自体が驚おどろきだ。

その両りよう眼めに射い貫ぬかれた者は震ふるえあがる前に凍こおりつく。

虐殺人形カーネイジドール。

「答えろ」

声まで氷の槍やりのようだった。

「どうしてキミがボクのマリアと一緒にいる」

誰がきみのだ、と抗こう議ぎして訂てい正せいを求めたい。でも、できない。指一本動かせない。やばい。何がやばいのか、とっさにはわからないくらいやばい。怖こわい。殺意。いや、それよりもっと無残で、残ざん酷こくで、暴力的で、決定的で、徹てつ底てい的な意志のかたまりのようなものが、しかも、どこまでもつめたい、真冬の北風よりも遥はるかにつめたい何かがこの一帯を満たしている。

誤解しようがない。

ここはもう虐殺地帯カーネイジゾーンだ。

マリアローズと荊王ジンワンと、それからもちろん虐殺人形カーネイジドール自身は、その中にいる。

身じろぎ一つできない。

できるものならやってみればいいが、その結果どうなるか、想像するだに恐おそろしい。

マリアローズは大だい丈じよう夫ぶだ。アジアンはマリアローズに危害を加えたりしない。その理由がない。そう思う。頭では理解している。それでもダメだ。身体からだが言うことを聞いてくれない。

　マリアローズですらそんな有様なのだから、その殺気以上の殺気を直接突つきつけられ、もっとすさまじく容よう赦しやのない強きよう烈れつな脅きよう威いにさらされているだろう荊王ジンワンは、失禁くらいしてもおかしくないだろう。

　たいした根こん性じようだ。

　褒ほめたり感心したりする気持ちにはなれないけれど、よくも口を開けるものだ。

「お前の、ではないだろう」

　荊王ジンワンは腰こしの後ろに手を回した。得物でも抜ぬこうとしているのか。

「直接、本人の口からきいた。自分は自分のもので、誰にもくれてやる気はないそうだ」

「きいたことに答えろ」

「なんで俺がお前の質問に答えないとならない」

「いいから答えろ」

「断る」

「そう。じゃあ」

　アジアンが駆かけだした。

　そう思った。

　いない。

　見えない。

　どこにもいない。

　違ちがう。

　いた。

　上だ。

「答えたくなるようにしてやるヨ」

　いったいぜんたい、重力のやつはどうなっちゃってるんだ。怠なまけているのか。たまたま休きゆう憩けいしているのか。目の錯さつ覚かくか、気のせいかもしれないが、アジアンは空中で静止したように見えた。そこから蹴けりを繰くりだした。右足の回し蹴りだった。これを、でも、荊王ジンワンは、驚くべきことにと言うべきだろう、両りよう腕うでを交差させて受け止めた。いや、腕だけじゃない。何か持っている。何だろう。あれは。

　とにかく荊王ジンワンはアジアンの蹴りを防いだ。

　たしかに防いだのだ。

　それなのに、次の瞬しゆん間かん、荊王ジンワンは吹ふっ飛ばされていた。

　レンズが割れて、フレームもひしゃげた色眼鏡サングラスが地面に落ちた。

　逆の足だ。

　荊王ジンワンの横っ面つらを蹴飛ばしたのはアジアンの左足だった。

　はっきりとは見えなかった、というか、正直ぜんぜん見えなかったが、どうやらアジアンは空中二連脚とでもいうような技わざを荊王ジンワンにお見み舞まいしたようだ。

　荊王ジンワンは倒たおれこむというよりも地面に頭から突っこんで、だが、横向きにでんぐり返しをする要領ですぐに立ちあがった。

　その右手には二本の棒を鎖くさりで繋つなげた武器、双節棍を、左手には縦棒とそれより短めの横棒とを組みあわせた珍めずらしい得物を持っている。形からすると、十字棍とでも呼べばいいのだろうか。さっきアジアンの蹴りを受け止めたときに荊王ジンワンが使ったのはあれだ。

「やるつもりかい、このボクと」

　アジアンは唇くちびるの片かた端はしを少しだけつりあげてみせ

た。笑っているようにはとても見えない。冷れい笑しようですらない。ああ、でも、こんなことを感じるなんて、僕はどうかしちゃってるのかもしれないけど、きっとそうに違いないけど──なんてきれいなんだ。もともと見み目め形かたちだけはとびきり無む駄だにやたらといい男だとは思っていたし、その点については誰だれも否定しようがないだろうが、見る者を恐れさせ、萎い縮しゆくさせるような恐ろしいまでの美しさを感じたことはなかった。初めてだった。

　血が凍こおりそうだ。

　もしかしたら、すでに凍りはじめているかもしれない。

「身の程ほど知らずだネ」

　増長しているようには見えない。相手を嘲あざけっているわけでもなさそうだ。アジアンはただ宣告している。自分は強者である。自分の目の前にいる者は弱者である。強者は弱者を打ち倒す。それはあまりに単純で簡単で明確すぎて、もし僕だったらあらがうことができるだろうかと考えることさえしたくない。無理だ。無理に決まっている。

　荊王ジンワンだって同じだろう。あの男も闇やみ市いちをとりしきっている龍州連合の長だし、力なき者がそんな地位を保てるとは思えないし、アジアンの初撃を防いでみせたくらいだから、それなりに腕は立つのだろうが、格が違う。自分自身の技量だの力量だのはともかく、ＺＯＯに入って以来、マリアローズはとんでもない人間だの化物だのをたくさん見てきた。だから、わかる。肌はだで感じるのだ。世の中には、どうにもならない、絶対に埋うめられない差というものが厳然として存在する。たとえば、正体不明の何ものかの力を借りたとはいえ、トマトクンは神すら殺した。サフィニアの魔ま術じゆつは、巨きよ大だいすぎて圧あつ倒とう的すぎておぞましすぎる、町どころか国すらのみこんでしまいそうなサリア・ベルを滅めつした。そんなことは、マリアローズのような一いつ般ぱん人には逆立ちしたってできっこない。マリアローズと比べれば、体格的にもそれ以外の素質でも遥はるかに恵めぐまれているだろう荊王ジンワンにしても結局、同じだ。大半の人間はこちら側にいる。トマトクンたちはあちら側の住人だ。そして、アジアンもあちら側にいるのだ。

　荊王ジンワンだって底そこ抜ぬけのバカではないはずだ。という

か、それくらいのことはバカでもわかるはずだ。それとも、承知のうえで退かないのか。

「強いやつとやるのは、そう苦手でもない」

　だとしたら、半魚人級のバカだ。

　荊王ジンワンは下がるどころか半歩前に出た。

「得意というほどじゃないが」

「すぐ苦手になるヨ」

　アジアンが走りだして、また消えた。

　どこだろう。上？　いない。違う。荊王ジンワンの横か？　足音がしたような。でも、いない。いないわけがないのに。ただ、荊王ジンワンは動かない。アジアンを探そうと首を振ふることさえしていない。どうして。いや──動いた。前だ。前に出た。しかも、双節棍や十字棍を振り回すでもなく、ただ見えない何かに体当たりでも食くらわすように前方へ飛びだしていった。実際、体当たりになった。は？　なんで？　目を疑ったが、とにかく荊王ジンワンが抱だきつくようにしてアジアンに突つっこむ恰かつ好こうになった。アジアンは荊王ジンワンに押し倒された。そう見えたのだが、錯覚だったのか。そんなことはない。アジアンはすかさず荊王ジンワンの顎あごに肘ひじ打うちを食らわせ、その上体が反った隙すきに短たん剣けんを突きだした。荊王ジンワンはたまらず飛び起きて逃のがれ、その間にアジアンが距きょ離りをとったのだ。ほとんど一瞬の攻こう防ぼうだった。何かが起こったということすら信じられない。だいたい、あれは何だったのか。荊王ジンワンにはアジアンが見えたのか。種明かしはアジアンがしてくれた。

「そうか」

　アジアンの顔つきがほんの少しだけ変わった。

「山を張ったんだネ」

「速すぎて、どうせろくに見えないからな」

　荊王ジンワンは一度口を大きく開けてから閉じた。アジアンに殴なぐられたところは赤くなっているが、骨折のような大おお怪け我

がはしていないようだ。

「博ばく打ちは嫌きらいだが、得意だ」

「それでも百発百中とまではいかないだろう」

「何十回か勝ちつづけたことはある。勝っている間に次の手を考えればいい」

「もう考えているんじゃないのか」

　アジアンは音を立てずにすっと前進した。それとほぼ同時か、わずかに早かったようにも見えた。荊王ジンワンも双節棍を振り回しながら前に出た。アジアンが荊王ジンワンを迎むかえ撃つ形になったが、すごい速度で、さまざまな角度から、独特の軌き道どうを描えがいて襲おそいかかってゆく双節棍が、アジアンにはかすりもしない。体重というものがあることをまったく感じさせないあの身のこなしは何だ。非常識だ。人間じゃない。ピンパーネルもとてつもない身体からだの使い方をするけれど、また種類が違ちがう。ピンパーネルは腕うでと足が二本ずつあって両手足の指は五本ずつで首があって頭があって、とにもかくにもそうした人間の身体で想像しうる極限の動きをする。アジアンは別だ。人間の筋肉で、骨格で、あれは不可能なのではないか。何か別種の生き物なのではないか。

　数秒の間、荊王ジンワンの双節棍をよけることだけに専念していたアジアンが攻せめに転じた。

　横よこ薙なぎに振り回された双節棍の下をくぐって低い体勢で右方向に側転し、そこからさらに身を低くして荊王ジンワンの左足めがけて足あし払ばらいをかけたが、これはよけられた。マリアローズの目でもなんとか追える程度の反はん撃げきだったから、当然だろう。ということは、本気じゃないんだ。アジアンは少し後退した荊王ジンワンに詰つめよった。無造作といってもいいような近づき方だった。アジアンが突きだした泣き叫ぶスクリーミング・短剣ダガーも、荊王ジンワンの十字棍にたやすく受け止められた。あの十字棍という武器は、もしかしたら防ぼう御ぎょに主眼が置かれているのかもしれない。今、気づいたのだが、縦棒と横棒が交差している部分に小さな鉤かぎのようなものがついている。あれをうまく使えば相手の得物を引っかけることができそうだ。荊王ジンワンはそうしようとした。できなかった。アジアンが出したときと同じようにすっと短剣を引いたからだ。読んでいたのか。

「キミの浅はかな考えが通用するか、やってみるといい」

「━ッ……！」

　荊王ジンワンは、しかし、誘さそいに乗らず素す早ばやく二歩下がった。そう、あれは間違いなく誘いだった。アジアンは見せつけたのだ。自分はこんなにキミの懐ふところに入ることができる。それを阻そ止ししようとしたキミがやろうとしていることも見み抜ぬいている。その気になれば、キミを出し抜くことなど簡単だ。あえて言葉にすればそんなところだろうか。口で言われるのならともかく、行動でそれを示されてしまったら、普ふ通つうは焦あせる。もしくは逆上するか。荊王ジンワンはそのいずれでもなかった。明白な実力差を認めたうえで、仕切り直すことを選んだ。

「フッ」

　アジアンが微笑ほほえんだ。

　たしかに笑った。

「冷静だネ。言うだけのことはある」

「気のせいかもしれないが、楽しそうだな。俺にはそんな余よ裕ゆうはない」

「楽しくなんかないサ」

　アジアンは一歩で荊王ジンワンの目の前まで移動して、そこで止まった。

「━まだ、ネ」

　また誘いだ。今度は荊王ジンワンも乗ったが、真正面から打ちこむことはしなかった。円を描くように左斜ななめ前方へ身体を捌さばきつつ、左手の十字棍を防御に残しながら、右手の双節棍を立てつづけにアジアンめがけて振るった。アジアンはこれをよけなかった。すべて弾はじいた。短剣の柄つか頭がしらだ。泣き叫ぶスクリーミング・短剣ダガーの柄頭にはいくつもの顔を象かたどった気色の悪い飾かざりがついている。アジアンはなんと、その部分で双節棍をカンカン弾き返した。そのたびに、あの顔が啞ー唖ーと呻うめいた。気持ち悪い呻き声はどんどん高まっていった。啞ー唖ー。啞ー唖ー。啞ー唖ー。なんだかもう聞いているだけで気分が悪く

なってくる。アジアンは平然としているが、荊王ジンワンは双節棍がまったく通用しないこともあって、たまらないだろうと思いきや、これがそうでもなさそうだった。荊王ジンワンは黙もく々もくと双節棍を振り回しつづけている。虚きよ勢せいか。それとも、何か秘策でもあるのか。いずれにしても、汗あせはだいぶかいているが、追いつめられているような表情ではない。

いったい何なんだ、こいつら。

アジアンはアジアンで、決めようと思えば決められるはずなのに、執しつ拗ようように双節棍をカンカンカンカン弾きつづける作業に集中しているし。

荊王ジンワンにしても、いくらがんばったってアジアンみたいな化物じみた相手にかなうわけがないんだから、さっさと降参でも何でもしちゃえばいいのに。

マリアローズには理解できない。べつに理解したいとも思わない。てゆうか、そもそも、これって何？　何やってるわけ？　こいつら、何のために戦っちゃってるの？　戦う必要があるのかな？　や、いいけどね。好きにすれば。楽しそうだしね。うん。ほんと楽しそうだよ。ようするに、好きでやってるんでしょ？　アジアンなんか、あのときもそうだったしね。泉セン里リでトマトクンとやりあったときも。トマトクンもだったけど、めっちゃ楽しそうだったし。二人の世界ってかんじで。さすがにあれは止めたけど。状じよう況きようが状況だったし。でも、考えてみたら、これってどう？　アジアンと荊王ジンワンだよ？　知ったことじゃなくない？　勝手にやってればいいよね？　いつまでも、好きなだけ、永遠に。実際、止めないと、とか、もうやめて、とか、ぜんぜん思わないし。二人も僕のことなんて見向きもしないし。その余裕がないのかもしれないけど、完全に蚊か帳やの外だし。いいんだよ？　それは。かまわないよ？　アジアンはちょっと考えたほうがいいんじゃないかと思うけどね？　こんなアホなことやってる場合じゃないよね？　馬ば鹿かじゃないの？　てゆうか、啞ー唖ー啞ー唖ーうっさいんだけど？　頭が痛いんですけど？　もういっそ帰っちゃいたいんですけど？　帰っていい？　いいよね……？

迷ったのが運の尽つきだった。

さっさとこの場を去ればよかった。

　そうしていれば、馬鹿一号、馬鹿二号に加えて、さらなる馬鹿の登場劇にまでつきあわなくてすんだのに。

「だあああああああああああらあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　声が聞こえてきた。大声だった。近づいてくる。どこから、と考える必要もないくらいだった。後ろだ。それは間ま違ちがいないけれど、振ふり返って確かめる気にはなれなかった。なんとなくこの先の展開は予想がついたし、どうにでもなれという気分だった。とりあえず僕を巻きこむのだけはやめて欲しい。僕は関係ない。マリアローズは横歩きで道の脇わきへと移動しようとした。そのすぐ横を何かが猛もう速度で駆かけ抜けていった。何かもクソもミソもシソもニーソもシーソーもへったくれもない。案の定、馬鹿三号だ。馬鹿一号と馬鹿二号がどちらからともなく飛び離はなれた。その直後だった。

「──きやあああああああはあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　一いつ瞬しゆん前まで馬鹿一号と馬鹿二号がゴチャゴチャバカスカやりあっていた場所に突つっこんだ馬鹿三号が、地面に拳こぶしをズッガゴオオオオォォォォォォォォンと打ち下ろした。

　アホだ。

　まったく馬鹿馬鹿しいとしか言いようがないパンチの威い力りよくだ。

　地面の舗ほ装そうが半径一メーテル程度の円状に剝はがれ飛んで無残に陥かん没ぼつしていた。

　馬鹿三号は目ま深ぶかにかぶったフードの奥で猫ねこっぽい目を輝かがやかせて両の拳を打ちあわせた。

「なァんだよテメーらおッもしれそォーなことしてんじゃんオレ抜ぬきでよォ？　そこはオレも交ぜろよトーゼンよォ。やろーぜバトろーぜバトバトしよーぜ熱血しよーぜバトロングでバトリングでバトラッシュしよーぜ……！」

「キミは──」

「言葉ァいらねェ！　拳で語れェッ……！」

　馬鹿三号は問答無用で馬鹿一号に躍おどりかかっていった。マリアローズよりも背が低いくせに、むしろその小ささを強みにしてしまうのが馬鹿三号のすごさだ。低い位置から繰くりだされる馬鹿三号の絶え間ない突きと蹴けりは、あっという間に馬鹿一号を三メーテルほども後退させた。しかも、馬鹿三号はそこからいきなり回転しながらの跳ちよう躍やくを多用する蹴り技わざ主体の戦法へと切りかえた。さしもの馬鹿一号もよけるだけでは対応しきれなくなったのか、空中の馬鹿三号を狙ねらって回し蹴りを放った。馬鹿三号も馬鹿一号に高速回転蹴りをぶちこもうとしていた。どちらが遅おそかったとか早かったとか、マリアローズにはわからなかった。同時に見えた。おそらくどんぴしゃだった。馬鹿と馬鹿の右足同士がものすごい音を立ててかちあった。

「──くっ……！」

「だあァッ……！」

　馬鹿一号はなんとかその場に踏ふみとどまったが、足場がなく身体からだも小さい馬鹿三号は、吹ふっ飛ばされて馬鹿二号に受け止められた。

「おッ、サンキュ。ジン」

「……いや」

「けどちょっとヨッケーなお世話ギミギミだぜ」

「だろうな。すまない。とっさに身体が動いた」

「いーってことよ」

　馬鹿三号は馬鹿二号の肩かたを叩たたいて離れると、フードをはねあげた。

「あいつすっげェーなァ。虐殺人形カーネイジドール。今でも強ェーけど実際もっともっとまだまだ強ェーぞ。ぜんッぜん本気出してねー。やっべ。嬉うれしくてたっまんねー。ジン、二人でやろーぜ。オレとテメー二人がかりならアイツ本気にさせれンぞタブン」

「本気にはさせないほうがいいと思うが」

「何、ジン、テメー怖ェーの？」

「ああ」

「キャハ。じつはオレも。けどよォこれ超こえたらまた強くなれンべ。そォーやって強くなンだよ。人ってのはさァ。一いつ緒しよに乗り越こえよーぜジン。ドキドキしよーぜワクワクしよーぜフィーバーしよーぜ。たっのしーぞォ」

　馬鹿二号は答えなかったが、双節棍と十字棍を握にぎる手に力をこめたところを見ると、やめるつもりはないらしい。馬鹿一号も、まあ、馬鹿二号と馬鹿三号がかかってこようとしているのだから隙すきを作るような真ま似ねはできないのかもしれないが、待ちかまえている態勢だ。

「心配しまシタ。よかっタ」

　突とつ然ぜん、後ろから声をかけられてびっくりしたけれど、驚おどろきはすぐに安あん堵どに変わった。いつの間に、と思わないでもないが、気配を察知させずにマリアローズの背後まで近づくことなど、彼にとっては朝飯前だろう。本当の本当に、今日一番ほっとしていた。泣いてしまいたいくらいだった。いや、これくらいで泣いたりはしないけれど、マリアローズは心の底から思った。ああ、やっぱり仲間っていいなあ。

「ごめん、ピンパーネル。捜さがしてくれてたんだよね、僕のこと。僕は見てのとおり大だい丈じよう夫ぶだから。ちょっと、なんか、その……変なのに絡からまれて」

「変なノ……」

　ピンパーネルは馬鹿二号と馬鹿三号を見て、ほんの少しだけ眉まゆをひそめた。そうか。だからか。それでピンパーネルはマリアローズの後ろから出ようとしないのだろう。隠かくれているというほどではないが、あっちはあっちで立てこんでいるし、たしかにここで静かにしていれば気づかれないかもしれない。かもしれなかった、と言うべきか。

「ンじゃ行っくぞオラアアアアアアアアアア
アァァァァァァァァァァァァァーッ……！」

馬鹿三号が駆けだした。

馬鹿一号めがけて、ではなかった。

こっちだ。

こっちに向かってくる。

「――ミスター・ピンパァァァ……！」

どうやら、しっかり気づかれていたらしい。

マリアローズは突つき飛ばされた。ピンパーネルだ。ピンパーネルがマリアローズをどかせて前に出た。

「テメーも交ざれよそォーんなとこにいねェーでよォ！　バトるンだよバトバトすンだよ朝から晩までバトレードだよバトるおおおおおぉぉぉぉぉぜぇぇぇぇぇい……ッ！」

馬鹿三号の突とつ進しんは、だが、途と中ちゆうで止まった。ピンパーネルが守勢に回らず、自分から攻せめていったからだ。馬鹿の突進力はすごい。その勢いがピークに達する前に叩いたほうがいい。まさに戦せん闘とうのプロフェッショナルらしい合理的でたぶん正しい判断なのだろうが、馬鹿三号の受けとり方は違ちがっていた。しょうがない。馬鹿なんだもの。

「キャハッ！　キャハハハ……！　ミスター・ピンパァァー！　テメーもやる気マンマンってか！　いいぞいいぞォすっげえ鬼おにすげェ！　ジン！　そっちはしばらく頼たのまァ……！」

馬鹿三号にそう要よう請せいされたからなのかどうか知らないが、馬鹿二号も双節棍を振ふり回して馬鹿一号に襲おそいかかった。馬鹿一号は事の成り行きにやや呆ぼう然ぜんとしていたようなので、好機と言えば好機だったのかもしれない。馬鹿一号もこうなったら売られた喧けん嘩かは当然買うといったかんじで、馬鹿二号の懐ふところにすっと潜もぐりこんで顎あごに掌底を食くらわせた。その左手に双節棍の鎖くさりが巻きついた。馬鹿一号はかまわず左ひだり腕うでを引いた。馬鹿二号がふらつきそうになって、双節棍を手放し、十字棍で馬鹿一号に打ちかかった。馬鹿一号は双節棍で十字棍を弾はじいてみせた。

「おもしろい武器じゃないか。少し使ってみるとするヨ」

「意外と扱あつかいが難しい。火遊びのつもりで火傷やけどしないように気をつけることだ……！」

「ピンパァァァ……！　やるなァ！　やっぱテメーもヤヴェェッ！　キャハッ！」

「………………！」

「おー」

　聞き覚えのありすぎる声が聞こえても、そっちに顔を向ける気力すらなかった。なんだかもう、ものすっごく疲つかれている。何しろ、いろいろなことがありすぎた。そんなことはできないとわかってはいるけれど、一度すべてきれいさっぱり忘れてしまいたい。現実なんて嫌きらいだ。何もかも消えてしまえ。いや、消えるわけないけど。知ってるけどさ。

　マリアローズはがんばって顔を上げた。

「何やおもろいことになっとるなあ。ちゅうかアレ荊王ジンワンやん。なんであいつがおるん？　それはそれとして、マリアローズ、お前じぶん無事なんか──って、めちゃくちゃ平気そうやな」

「……まあ、ね」

「そらよかったわ。ホンマ。安心したで。いやあ、それにしてもすごいなあ」

　マリアローズのそばまで小走りにやってきた半魚人は、馬鹿ども（一名除く）の戦いが気になって仕方ない様子だ。しょうがない。こいつも馬鹿なんだもの。ただ、半魚人のあとを追うようにして、サフィニアともう一人、ベティがきてくれたおかげで、マリアローズは絶望せずにすんだ。その後ろのヨグはどうでもよかった。どうもあの男は好きになれない。

「マリア……よかった……突然、いなくなったって、カタリさんが……でも、何もなかったみたいで……」

「なーんにもなかったって言うと、ちょっと語ご弊へいがあるかもしれないけどね……」

「……え？」

「や、何でもないよ。うん。僕はぜんぜん大丈夫だから」

　一歩間違っていたら、歯を抜ぬかれちゃってたかもしれません、なんて、サフィニアにはとても言えない。気絶させられて連れ去られて縛しばられていたというだけでも、結構ひどい目に遭あったと言えないこともないような気もするが、結果的にはこうして無事、自由になれたわけだし。危機的な局面はすでに乗りきったはずなのに、今もわりと危険を感じていたりする。

「ど、どうも」

「Hiyas.」

　ベティは微笑ほほえみさえ浮うかべて挨あい拶さつをしてくれた。それが余計におっかない。目め尻じりが下がっている、いわゆる垂れ目なので、どちらかといえばやさしげで、おっとりしていて、それから服装やメイクのせいもあって色っぽく見える人なのだが、なんでこんなに怖こわいのだろう。やっぱり眼まな差ざしか。ただ、目つきではない。視線自体がつめたいというか、痛いというか、とにかく思わず謝ってしまいたくなるような、そんな気分にさせられる。でも、謝ったくらいでは許してもらえないのではないか。じゃあ、どうすればいいわけ……？　当然、ベティは答えてくれず、馬鹿ども（一名除く）の戦いに目を移して肩かたをすくめた。

「で、何なの、あれ」

「ずいぶんにぎやかですね」

　ヨグは含ふくみ笑いをした。

「止めるべきか止めざるべきか、迷うところではあります」

「……や、止められるものなら止めたほうがいいとは思うけどね。僕は遠えん慮りょしたいけど。てゆうか、無理だし」

「しょうがないわね、あいつも」

　ベティはため息をついてみせたけれど、心底から呆あきれ果てているというかんじではなかった。しょうがないと言いつつも、しょうがなくないと思っているように感じられた。そうか。そうなんだ。この人、あいつが好きなんだ。なんとなくだった。明確な根こ

ん拠きよがあるわけではないし、あたっているかどうかわからないけれど、でも、だとしたら、それってつまり━━あいつは常つね日ひ頃ごろ宣言しているとおり、考えるのもいやだけど、僕のことを好きなわけで、僕を好きなあいつをベティが好きだっていうことは、ようするに━━どういうこと……？

「何？」

　ベティに睨にらまれた。

　目つきは変わっていないが、眼光の鋭するどさが違う。違いすぎる。喉のど元もとに剃かみ刀そりでも突きつけられているかのようだ。こ、殺される。

「な、何でも……」

　ないです、と言ってしまいそうになった。それはあまりにも卑ひ屈くつすぎると思ってなんとかこらえたけれど、果たしてその判断が正しかったのかどうか。丁てい寧ねいに釈しやく明めいして謝罪したほうがよかったのではないか。怖いよ。怖すぎだよ。ＺＯＯに入る前、気の迷いで昼飯時ランチタイムに入れてくれとアジアンに頼たのんだことがあった。断られたが、よかった。もしアジアンが首を縦に振ふっていたら。恐おそろしい。無理だ。耐たえられない。マリアローズは馬鹿ども（一名除く）に視線を転じて額の汗あせをぬぐった。もう寒いくらいなのに、汗なんて。とりあえずベティのことは忘れよう。気にしないようにしよう。気にしても仕方ないし。僕にはどうしようもないわけだし。そもそも僕のせいじゃないんだし。僕じゃなくて、あいつが、あの野や郎ろうが、あの超最低ＳＵＣＫ野郎が勝手に。てゆうか、ホントに何やってるんだよ。まったく。馬鹿じゃないの？　馬鹿なんだろうけど。あーだんだん腹が立ってきた。だいたいぜんぶあいつのせいなんだから。フッ！　思ったよりやるじゃないか！　とか言ってる場合じゃないから。荊王ジンワンもそんな全力で馬鹿の相手してるってことは馬鹿以外の何ものでもないわけだし。飛燕フエイヤンなんかもうおまえは小こ猿ざるかってかんじでやかましすぎ。キャハハハキャハハハうっさいっての。頭に響ひびくんだよね、その声。ピンパーネルにしてみたらいい迷めい惑わくだよ。なまじ強いもんだから、無視するわけにもいかないし、余計に大迷惑で、かわいそうなくらいだよ。無む駄だに強いってのも困りものだよね。手出しできないし。見てるしかないし。うっかり見物モードに入っちゃうと、わ、すごい、とか感心しそうになったりするし。どうにかしてよ、もう。誰

だれか。頼むよ。お願いだから。そんな願いを叶かなえてくれる誰かが駆かけつけてくれるなんて、思っていたわけでもないんだけれど。

　彼女はやってきた。

　砂すな埃ぼこりを巻きあげながら駆けてきた。

「……おお！　あれは……！」

　カタリが魚眼を見開いて彼女を指さした。なぜかいつもの医術士服を着ていなかったけれど、体格や手に持っている極限クライマックス九手棍ナインボールのおかげで、すぐに彼女だとわかった。

「途と中ちゅうではぐれてもうたんやけども、ようやっと……！」

「……ユリカ……！」

　サフィニアが手を振ったが、ユリカはこっちを見ていないようだ。ヨグが右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直した。ベティが、あの子、と呟つぶやいた。

「殺気が……」

「へ？」

　マリアローズが間ま抜ぬけ面づらで間の抜けた声をもらした直後だった。ユリカは飛燕フエイヤンとピンパーネルの間に割って入りはしなかった。ユリカがやったことはもっとシンプルだった。飛燕フエイヤンの後頭部を極限九手棍でぶん殴なぐり、さすがにユリカに対しては無む警けい戒かいだったのだろうピンパーネルに足あし払ばらいをかけて転ばせ、それから荊王ジンワンの腰こしを一ひと突つきし、さらに呆あつ気けにとられているアジアンの頭頂部にゴンと一発きついのを見み舞まった。

「いいかげんにしなしゃい！　人が道に迷ってる間に喧けん嘩かなんかして！　いい大人が、恥はじゅかしくないの！」



　ものすごく恥ずかしいと思う。しかも、ユリカ一人にあっさり制圧されて、恥ずかしさは倍、さらに倍だろう。四人ともしゃがみこんだり這はいつくばったりしてユリカを見上げ、ぐうの音も出ないというかんじだ。

　ただ、他ほかの馬鹿と同列に扱あつかわれるのはちょっと、い

や、かなり気の毒な者が一人だけいる。

　ピンパーネルの眉まゆがハの字になっていた。

　あんなに情けない表情をするピンパーネルを見たのは、これが初めてだ。

「……あ・ノ……ワタシ・は……」

「喧嘩両成しえい敗ばいよ」

　ユリカは左手を腰に当てて胸を張り、極限九手棍の石いし突づきで地面を突いた。

「文句がある？」

「……イ・え……すみまセン……」

　ピンパーネルは悄しよう然ぜんとうなだれた。巻きこまれただけのピンパーネルのそんな姿をまざまざと見せつけられれば、他の者も謝らざるをえないだろう。実際、飛燕フエイヤンを始め、アジアンも、荊王ジンワンまで、次々とそれぞれの言葉でおのれの非を認め、ユリカに対してこれを詫わびた。完全に降こう伏ふくして屈くつ服ぷくした。

　ＺＯＯと昼飯時ランチタイムと龍州連合において、長く語り継つがれることになるユリカ・白雪（スノーホワイト）最強伝説はこうして生まれた。

　その決定的な瞬しゆん間かんを、マリアローズは目もく撃げきしたのだった。

Omenage 897 12th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

〝トマトクン邸〟

chapter.8

ぶざまでも

壊こわれてしまうよ。

とうていもたない。

この身体では。

まったく無茶をする。

その無茶とやらのせいなのか。

重い。

まるですべての関節が錆さびついてしまっているかのようだ。血の流れがよくない。頭が動けと指令を出して筋肉が応じるまで苛いらつくほど時間がかかる。一度ねじ切られてユリカに繋つないでもらった左ひだり腕うでが、自分のものではないかのように感じられて仕方ない。意のままに動かすことはできても、違い和わ感かんがある。馴な染じんでいない。これは違ちがう。俺のものじゃない。眠ねむりは浅く、深い。いつも目の前に靄もやがかかっている。俺はここにいるのか。

いる。たしかに俺はここにいる。

見下ろせば俺の足あし許もとには大量の死が。山と積まれた死し骸がいと屍しかばねと骸むくろと死体と亡なき骸がらが。

俺はここにいる。大量の死の上に立っている。

初めて手にした武器の感かん触しょくなどもう覚えていない。ただ殺そうとしたことだけは記き憶おくにある。なんでこうなった？　どうして？　いい。どうでもいい。殺せ。敵を殺せ。殺して生き残れ。未熟な刃やいばで敵を殺して味わったのは安あん堵どと解放感と、たぶん恐きよう怖ふだった。俺は殺した。次は殺されるかもしれない。殺されてたまるか。なんて単純な帰結だろう。殺される前に殺す。安堵を、解放を求めて、恐怖から逃のがれるために、殺す。いくらなんでも、やりすぎだよ、と言う者がいる。甘い考えだ。悪い人もいれば、いい人もいるんだ、と言うやつがいる。そうか。じゃあ、どうやってそれを見分ける。教えろ。教えてくれ。どうせお前たちは何も知らない。自分の手で殺さないとわからない。わからないやつに何を言ったところで無む駄だだ。殺して奪

うばったものは食えないだと？　じゃあ食うな。知ったことか。勝手に飢うえ死にでも何でもすればいい。俺は死にたくない。ごめんだ。あんなふうに、俺が殺したように殺されるなんて冗じよう談だんじゃない。それくらいだったら殺してやる。いくらでも殺す。殺して、生き残る。それがここの掟おきてだ。信じるな。背中を向けるな。目を離はなすな。食えよ。俺が奪いとった。俺のものだ。食え。死にたいのか。馬鹿な連中だ。食わないと弱るぞ。弱ったら殺されておしまいだ。どうしてそれがわからない。こんなに簡単なことが。いいんだよ、もう。そこまでして生きていたくないよ。そうか。ごめんなさい。なんで謝る。ごめんなさい。ごめんなさい。

　裏切って、ごめんなさい。

「……謝るなよ」

　目を開けようとした。

　瞼まぶたがえらく重い。

「昔のことだ。大昔の……」

　あいつらの顔や声さえ、もうろくに覚えちゃいない。

　居間のソファの上で寝ていたようだ。毛布がかかっている。きゅーがかけてくれたのだろう。風ふ呂ろに入った。なんとかジーンズを穿はき、Ｔシャツを着て、ソファに寝転がった。そのまま寝入ってしまったのか。それでか。

　悪お寒かんがする。

　腰こしや肩かた、膝ひざや肘ひじが、締しめあげられているかのように痛い。

　喉のどの奥がひりひりする。

　笑うしかなかった。

　この不調は、症しよう状じようは、おそらく風か邪ぜというやつだ。

　そうとうガタがきているのか。酷こく使ししすぎたのかもしれない。身体が休息を要求している。むしろ脅きよう迫はくしているの

かもしれない。このままでは壊れてしまうぞ。知ったことか、とかつての自分なら吐はき捨てただろう。そう言いながらも必死にしがみついてきた。何のために。どうして。わからなかった。いくら探しても、何もなかった。今は違う。理由がある。

　ゆっくりと身体を起こすと、目の前にコップが差しだされた。人間みたいな手先の器用さがあるようにはどうも見えないのだが、たいていの家事はそつなくこなしているので、今さら驚おどろくようなことでもない。きゅーだった。

「すまんな」

　コップを受けとって一息で水を飲み干してみたが、喉のひりつきは消えない。首から肩のあたりがやたらと張っていて、きゅーにコップを返そうとして腕うでを上げる、たったそれだけのことが億おつ劫くうだった。

「きゅう？」

「……ああ。どうやら風邪みたいだ」

「くう」

　きゅーの肉球のような感触の指が額にふれた。

　やけにつめたく感じた。

「きゅう！」

「大だい丈じよう夫ぶだ。風邪くらい誰だれでもひくさ」

「きゅう！　きゅう！」

　きゅーはぶるぶると首を横に振ふると、彼の手からコップを奪いとってそこにいるように身み振ぶりで示した。

「くう！　きゅう！」

「わかったよ。ここでじっとしていればいいんだろう」

「きゅう！」

「ああ」

「きゅうきゅう！」

　きゅーは小走りでキッチンへ向かった。シンクに空のコップを置いて、上着やら毛布やらを持ってくるつもりらしいが、彼自身が寝しん室しつへ行ってベッドで横になったほうがいいような気もする。そうは思うのだが、身体からだは拒きょ否ひしていた。動きたくない。立って、歩く。考えただけで気が遠くなる。情けない。呆あきれて物も言えない。何も言いたくない。口を開いて無駄な力を使えば、そのぶん回復が遅おくれるだろう。

　ふたたびソファに身体を倒たおして、閉じた瞼の上に手の甲こうをのせた。

　吐く息が熱い。

　もしかして、限界なのか。

　違ちがう。そうじゃない。あの男に、男と呼んでいいのかわからないが、とにかくあいつの言ったとおりだ。無茶をしすぎた。あんな大きな力を使いこなせるような器うつわじゃない。無理をした反動だ。自制するべきか。できるのか。いずれ始まる。黙だまっていても連中は動きだす。関かかわらずにいられるか。できない。これは偶ぐう然ぜんだ、りりぃ、冗談でも何でもない、本当なんだ。何の因果かこうなってしまった。ただ、腹を決めたのは他ほかの誰でもない、自分だ。それは認める。だから、逃にげるつもりも隠かくれるつもりもない。もう引き返せない。わかっている。

　この身体でどこまでやれるだろう。

　守りたいものをどこまで守れるだろう。

　いや。

　守れなかった。

　今の俺では守れない。

　力が足りない。

　絶望的なまでに。

　虫けら同然だ。

このままでは。

俺はいつか戻もどらなければならないのかもしれない。

あの場所へ。

獄ごくの獄。

ジェイルネイル。

ソオル。

貴様は見み透すかしているのか。

友人だ、なんて、笑わせてくれる。

貴様も結局のところは管理者だ。貴様は俺を利用して何をするつもりだ。

それでもあいつらを守るためなら、俺は──、

「……む……！」

いきなりスイッチが入ったようなかんじだった。入れられた、と言ったほうが正しいか。毛布を頭からひっかぶってソファから床ゆかに転がり落ちると、鼓こ膜まくが破れそうな尖とがった音とともに衝しよう撃げきがきた。硝子ガラスだ。無む駄だにでかい窓硝子が割れたらしい。ついでに居間の半永久灯も吹ふっ飛んだようだ。飛び起きようとして、実際そうしたが、やはり鈍にぶい。鈍すぎる。本調子ではないどころか、頭の中でこうなるだろうとイメージした動きの半分以下だ。もどかしいなんてものじゃないが、苛いらついたところでマシになるわけでもない。きゅーが居間に引き返してきて、全身の毛を逆立てて黄金色に輝かがやかせた。ＧＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨ……！　普ふ段だんはおとなしいやつだが、やるときはやる。今の俺よりはきゅーのほうが遥はるかに頼たよりになるんじゃないか。自じ嘲ちよう気味にそんなことも思わないではないが、盛大にぶち割られた窓の外に立っている男の正体には心当たりがあった。きゅーに任せるわけにはゆかない。

「いい。きゅー。下がってろ」

「ＧＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＲＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵ……」

「悪いが、お前じゃあどうにもならん相手だ」

「ＧＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

「お前に怪け我がでもさせたら、お前の友だちに顔向けができん」

「まるで」

　その男の声を聞くのはじつに久しぶりだった。

　正直、記き憶おくにあるかと問われれば、かなりあやしいと答えるしかない。

　顔形には覚えがある。

　男の顔には忘れがたい特とく徴ちようがあるからだ。

「きみならばどうにかなる相手だと言わんばかりの口ぶりだね。大量の死の上に立つ者よ。絵に描かいたような傲ごう岸がん不ふ遜そんは相変わらずだ」

「結構謙けん虚きよに生きてるつもりだが」

「違う生き方をしているとでも言うつもりかい。生まれ変わったかのように」

「人は変わるもんだぞ」

「変わりはしないよ。たとえ変わったとしても揺ゆらぎの範はん囲い内だ」

「お前とは意見があいそうにないな」

「多少の意見の相そう違いなど乗り越こえられるものだよ。利害さえ一いつ致ちすれば、ね」

「べつに乗り越えたくもない」

「聞いたよ」

　昔からそうだったが、男は白い服を着ている。服だけではない。体毛も白いし、肌はだも抜ぬけるように白い。爪つめや唇くちびるは艶つやのない黒で、暗くら闇やみのようなその色が白の中に沈しずんで見える。それだけでも十分印象的だが、もっと異様なのはやつの目だ。

　白目が黒く、真しん紅くの虹こう彩さいと黒い瞳どう孔こうの境目が金色に輝いている。

　厄の眼エグザスト。

　あるいは、破滅眼ジグズレヴ。

　人妖モオルドの異名をとって恐おそれられてもいた。

　だが、今はたしかこう呼ばれているはずだ。

　魔人アモン。

「見つけたのだね」

　やつは唇の両りよう端たんをつりあげてみせた。

「きみは最高だ。大量の死の上に立つ者よ。知っていたかい。私は昔からきみのことが大好きなのだよ」

「迷めい惑わくだ」

　たしかに変わっていない。いやらしい笑い方だ。

　反へ吐どが出る。

「俺は貴様らの計画とやらにつきあう気はない。貴様らの薄うす汚ぎたない面つらを拝むのもごめんだ」

「だったらどうしてきみはここにいるのだい」

「何……？」

「このエルデンに。グッダーがつくった街に。なぜ戻ってきたのだい。この街はきみの墓標でもあったというのに。自分自身の墓参りでもするつもりだったのかい。あくまで私たちと無む縁えんでいたかったのであれば、なぜ戻ってきたりしたのだい」

　とっさには答えられなかった。理由らしきものがないわけではない。ただ、本当に、間ま違ちがいなくそのために、それだけのためにこの地を目指したのかといえば、おそらく違う。はっきりしたあてなどなかった。何もかもを失って、何かを見つけるためにさまよった。その途と中ちゆうで立ちよった場所のうちの一つだった。少し羽を休めるだけのつもりだった。そうならなかったのは、やはり何かが俺を縛しばっているのか。いろいろな連中がよってたかって廻まわしている運命の輪とやらの中に、俺もいるのか。

「俺がいなければ貴様らが動かんと言うのなら、そうしたかもしれんがな」

「きみは停てい滞たいを望むのかい」

「停滞させてるのは貴様らじゃないのか」

「次元が違う話だよ。もっと高い視点から物事を視みて語ろう」

「自分が高い場所にいるつもりか」

「高低は上下を意味するのではないよ。ただ違うというだけのことだ」

「それなら俺も貴様らとは違う。一いつ緒しよにするな」

「そうはゆかない」

　魔人アモンはゆっくりと割れた窓から居間に入ってきた。

「きみがこうして生きているかぎりはね。私たちにはきみが必要なのだよ」

「うちは土足禁止だぞ」

「これは失礼」

　くぐもった声が聞こえた。魔人アモンが発したのではなかった。いや、正しくは、魔人アモンの口から発せられた声ではなかった、と言うべきだろう。おそらく、呪じゆ文もんの詠えい唱しようだ。魔人アモンの身体からだがほんの少しだけ浮うきあがった。魔ま術じゆつか。魔人アモンは、くっ、と喉のどを鳴らした。あれで笑っているつもりなのか。

「便利な友がいてくれるのでね。とても助かっているのだよ」

「友だと」

「ご存じのとおり、残念ながら私は魔術がろくに使えない。才能がないのでね。それはきみも同じだからきっと理解してもらえると思うのだが、我々のような者たちはいろいろと工夫しないといけないだろう」

「俺の知るかぎり、貴様が友と呼ぶ人間は一人しかいない」

「私の知るかぎりにおいても一人しかいないね」

「貴様、いったい何を」

「神を喰くらうよりは遥はるかにやさしい道を選んでいるつもりだよ」

　魔人アモンはソファの背もたれに腰こしを下ろして足を組んだ。

　やつは手をのばせば届く距きょ離りにいる。

　それなのに、殺やれる気がしない。

「──もっとも、今のきみは見る影かげもない。何があったのだい。何がきみを変えてしまったのかな。そもそもきみはどこにいて、どうやって帰ってきたのだい。興味があるよ。とてもね」

「貴様に話して聞かせてやる義理はない」

「昔むかし馴な染じみだろう」

「記き憶おく違いじゃないのか。それとも言葉の意味を勘違いしてるのか。俺は貴様を知っているし、知っていたが、ただそれだけだ」

「きみはいつもそうだったね。誰だれとも馴れあわず、一人だった。人は変わらないと私は言ったが、きみは本当に、ずいぶん変わってしまったのだね」

「何が言いたい」

「クランＺＯＯ、か」

　魔人アモンの口からその言葉が発せられた瞬しゅん間かん、身体が勝手に動いた。左手で魔人アモンの胸むなぐらをつかんで、きつく握にぎり固めた右みぎ拳こぶしをその顔面に叩たたきこまなかったのは、そんなことをしたところで無む駄だだとわかっていたからだ。頭で理解していたのではない。身体がそう感じていた。見る影もない、か。たしかにそのとおりだ。あの剣けんやら鎧よろいやらの性能に助けられているだけで、今の俺は呆あきれるほど無力だ。皮肉なものじゃないか。天も地も悪魔も神さえも、立ち塞ふさがるものがあれば何であろうと打ち砕くだいた。欲しいものがあれば必ず手に入れた。不可能なことなどないと思っていた。傲ごう岸がん不ふ遜そん。まさしくそうだったのかもしれないが、実際、恐れられ、忌いみ嫌きらわれ、あるいは畏おそれられ、へつらわれていた、他者をそうさせるだけの力はあったのだろうあのころの自分には、守りたいものも守るべきものもなかった。その力を失った今になって、ようやく見つけた。おかげでじれったくて、もどかしくて、歯がゆくて、仕方ない。

「二度とその名を口にするな」

「きみを怒おこらせると怖こわいことは知っているよ。だが──」

　魔人アモンの手が彼の手をつかんだ。つめたいなんてものじゃない。氷のような手だ。

「そう熱くならなくてもいいだろう。本気になるなよ。そんな価値はない。私にとっても、きみにとってもね。きみとてそれくらいわかっているはずだよ」

「黙だまれ」

「せいぜい愉たのしもうじゃないか」

「貴様も同じだな。ＳＩＸと変わらん」

「あの屑くず虫むしと一緒にされるのは不本意だね」

「失うせろ」

「そう言うのなら手を放してくれないか」

　お望みどおり放してやったと言いたいところだが、むしろこちらの手が無事だったことを感謝するべきかもしれない。素す手での俺

はこんなにもちっぽけなのか。わかっていたことではあるが、あらためて自分のだらしなさを実感させられると、もう笑うしかない。

「何をしにきたんだ、貴様は」

「挨あい拶さつだよ。久しぶりだろう。それに、伝えておかねばならないこともあってね」

「何だ」

「監かん視し態勢は整った」

　魔人アモンはソファの背もたれからふわりと浮きあがった。

「万ばん全ぜんだよ。何があっても対応できる。これもきみのおかげだ」

「……わざわざそんなことを」

「一応耳に入れておくべきだと思ってね。さすがに関係ないとは言えないだろう」

　舌打ちをしたくなったが、その気力もなくなった。結局、俺は逃のがれられないのか。だいたい逃れるつもりが本当にあったのか。何とかなるさ。そのときはそのときだ。そんな考えだったんだとしたら、どうしようもなく浅はかだ。長い時間をかけて準備を進めている連中に対たい抗こうするには、何をしたらいいか。どうするべきか。俺に策はあるのか。俺が何か手を打ったところで、やつらはそれを見み越こした上で俺を囲いこもうとするか、追いこもうとするんだろうが。だったらどうする。俺はどうすればいい。

　魔人アモンは空中を歩いて窓の外に出た。

　関係ないとは言えない。

　そのとおりだ。

　よくできた偽いつわりより真実のほうが何倍も深く胸に突つき刺ささる。

「ああ、それからもう一つ。これは警告だが」

　魔人アモンは振ふり返って唇くちびるの両りよう端たんをつりあげた。

「私の愉しみを邪じや魔ましようなどとは考えないことだ。もっとも──」

　深く、とてつもなく、深く。

「今のきみではそもそも無理だろうがね」

　厳然たる事実は心臓に達するほど深く突き刺さり、簡単には抜ぬけないだろう。

　魔人アモンは夜の闇やみに溶とけこむように音もなく消えた。

　あの男が何を企たくらんでいるのか知らないが、どうせろくでもないことに決まっている。それに関かかわるな、絡からんでくるなというのが、とどのつまりは警告の意味なのだろう。なんで聞き入れないとならない。知ったことか。そうは思うのだが、どうも奮い立たない。それどころか、立ちくらみがする有様だ。きゅーが近づいてきて、身体からだを支えてくれようとした。なんとか立っていられそうなので、気持ちだけ受けとっておいたが、なんて様ざまだ。

　ゆっくりと息を吐はきだすと、喉のどや口の中がやけに熱かった。

　ぶち割られた窓から十二巡月の風が吹ふきこんでくるせいだと思いたいが、寒気やら頭痛やら関節痛やらの原因は、明らかにカゼはカゼでも風か邪ぜのほうだ。

「あの野や郎ろう……」

　鼻をすすりながら硝子ガラスの破は片へんを見下ろしていても、威い勢せいのいい罵ののしり言葉の一つさえ浮うかんでこなかった。

「誰が掃そう除じすると思ってるんだ」

「きゅう」

「……いや。俺もやるぞ。きゅーだけに押しつけるのは、いくらな

んでもな」

「くう。きゅう」

　きゅーは首を横に振りながら胸を叩いてみせ、お前はさっさと寝ねろとばかりに居間の出口を指さした。その頼たのもしい姿を目にして、そうか、と思わずうなずいてしまった。どうやら重じゅう症しようらしい。本当に、まったく、なんて様ざまだ。

Omenage 897 12th revolution 4th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

“彷徨える魂区(RSW)”

chapter.9

いやじゃなくてやだ

現在、高層寺院と呼ばれている高層建築群は、キング・グッダーがサンランド無統治王国建国を宣言してから間もなく、魔ま導どう王おう時代の技術がまだ残っていたころに建てられたのだという。築およそ九百年だ。それがいまだに健在で、給水設備や湯ゆ沸わかし器まで生きているのだからすごい。今となってはもう手入れしたり修しゆう繕ぜんしたりできる者もいないらしいので、壊こわれたらおしまいだけれど、途と方ほうもない耐たい久きゆう性だ。おかげでマリアローズは今日も熱いシャワーを浴びて一日の汚よごれを落とすことができたわけで、魔導王時代万ばん歳ざいといったかんじだが、どうもすっきりしない。というか、ぜんぜんだ。落ちつかない。ものすっごく疲つかれていて全身がクソだるいし、ありえないくらい眠ねむいのに。

寝ね間ま着き姿でベッドに腰こしかけ、タオルで軽く叩たたくようにして髪かみの毛の水気をとっていても、自然と目がドアのほうへ向いてしまう。

外にあいつがいる。

べつにこっちが頼んだわけじゃない。それどころか、帰れ、どっか行け、いなくなれ、消えろと何度も言って追い払はらおうとした。状じよう況きようが状況だから、高層寺院まで付き添そわれたというか護送されたのは仕方ない。実際、マリアローズは一度さらわれてしまったわけだし。相手が別の変態だったから、なんとか事なきをえたけれど、心配されてもやむをえないとは思う。結局、あれから紙切れ探しのための組み分けをして、翌日の朝十一時に動物園事務所集合ということになり、マリアローズとピンパーネルとあのバカの三人で、日をまたいで三時まで第四区と第五区、それから第六区にある昼飯時ランチタイムメンバーのねぐらを調べた。ほとんどあっさり見つけることができたので、ストレスはなかったが、歩きどおしでとにかく疲れた。身体がへろへろだったから、はい解散、じゃあまた明日、と一人で夜道を帰るのはたしかにやばかったかもしれない。ピンパーネルに送ってもらってもよかったのだけれど、あのバカが、いやボクが、ここは是ぜ非ひともボクが、是が非でもボクが、と強きよう硬こうに主張した。反論するなんて口下手なピンパーネルには無理だし、マリアローズも疲ひ労ろうに勝てず、あーじゃあもういいよ、とつい根負けしてしまった。高層寺院ＧＭエンパシィの近くまでのつもりだったのに、あのとんでもバカは、いいやあと少し、いやもう少し、と言いながら屋上までついて

きた。あげくの果てに、朝まで見張り番をすると言いだした。いいかげんにしてよ。そんなのいらないって。かえって迷めい惑わくだから。ありがた特大超迷惑ってやつだよ。なんでわかんないかな。マリアローズがいくら拒きょ絶ぜつしようとしても、あのウルトラバカは頑がんとして譲ゆずらなかった。じゃあ勝手にすれば、と部屋に入ってドアを閉めて鍵かぎをかけた。あれから一時間はたった。

　ドアをノックするでもない。

　他ほかの物音も聞こえない。

　外はだいぶ寒いはずだし、普ふ通つうのバカなら帰ってしまっていてもおかしくないけれど、あいつはただのバカじゃない。超弩ど級きゅうだ。ミラクルなバカだ。

　気配はしなくても、わかる。

　あのドアの向こうで、あいつは本当に見張り番をしている。

　そんなことされて、寝られるわけないじゃないか。

　眠くて仕方ないけどさ。

　上うわ瞼まぶたと下瞼がくっついちゃいそうだけど。

　明日もある。旅の疲れもあって、ただでさえ体調万全とは言いがたい。少しでも長く睡すい眠みんをとったほうがいい。そんなのわかりきってるんだけどさ。

「はー……」

　ため息というよりも声がもれた。

　ベッドに寝ね転ころがってみた。やっぱり眠い。すごく眠い。掛かけ布ぶ団とんにくるまると、すぐに意識が遠のきかけた。あ。なんか寝られそう。明かりを消さないと。部屋の明かりは天てん井じょうから吊つるしてあるＥＭＵ印の半永久灯で、紐ひもがスイッチになっている。消すためには布団から出ないといけない。やだな。めんどくさい。このまま寝ちゃおうか。いやいや。明かりをつけたままだと、きっと途中で目が覚める。布団から顔を出すと、ドアが目に入った。

目をそらした。

考えるな。考えちゃいけない。今、一番大事なのは寝ることだ。ぐっすり眠ることなんだ。他は二の次だ。三の次だ。知らない。どうでもいい。いない。誰だれもいない。そういうことにしておこう。しておこう？　違ちがう。そうなんだ。いない。絶対いない。いるはずがない。僕は一人だ。大だい丈じょう夫ぶだ。大丈夫？　あの生き物は。あの黒い生き物。ナジとかいったっけ。あいつはどこから入ってきたんだろう。少なくともこの部屋の中にいたことは確かだ。まさか、もういないよね？　大丈夫――だよね？　大丈夫、だと思うけど。百パーセント確実に安全だとは言えない。わかってるんだ。そのことを、僕も、あのバカもわかってる。だからだ。それで、あのバカは。

「……んぅー……あぁぁぁっ！」

布団をはねのけて飛び起きてしまった。

もういったい何だっていうんだ。あのバカ。こんなに眠たいっていうのに邪じゃ魔まをして。そんなつもりはないとか言うかもしれないけど、つもりがあるとかないとか関係ないんだ。こっちがどう思うかなんだから。ああ、でも、どうしよう。どうすればいい？　どうしたい？　わからない。ぜんぜんわからない。ただ、このままでは眠れそうにない。ダメだ。ダメっていったって。クソ。畜生シット。超最低ＳＵＣＫだ。頭がどうかなっちゃいそうだ。具合が悪い。頭が痛い。吐はき気がする。なんで？　なんで僕がこんな目に遭あわないといけないわけ？　僕が何かした？　ああ、もう。ダメだ。本当に、ダメだ。これじゃあ。

寝ね間ま着きの上に厚手でフードがついた前開きのトレーナーを着て、きっちりファスナーを閉めて、靴くつ下したを穿はいた。マリアローズの部屋は土足禁止ではないけれど、ブーツは玄げん関かんで脱ぬぐことにしている。サンダルをつっかけてドアに向かって歩いてゆく間も、解かい錠じようしてノブに手をかけてからも、迷いなんかこれっぽっちもなかったと言ったら嘘うそになるだろう。正直、ドアを開けるまで逡しゆん巡じゆんの連続だった。やっぱりやめようと何度も思った。でも、もう遅おそい。鍵を開けてしまった。しょうがない。そうやってどうにか自分を納なつ得とくさせて、一気にドアを開けた。

寒いって。

風、強すぎ。

眠ねむ気けなんて一いつ瞬しゅんのうちに吹ふっ飛んでしまった。

あいつは背中を向けて立っていた。

バカだ。

ほんとに見張ってる。警けい戒かいしてるんだ。いつなんどき何が起こってもすぐさま対処できるように、気持ちを張りつめさせている。少しも油断していない。後ろ姿を見ただけでわかる。ひしひしと伝わってくる。

「眠れないのかい」

あいつは振ふり向きもしなかった。

「安心していいヨ。キミの眠りを妨さまたげるものは何もない。ボクがここにいるかぎりネ」

「入って」

てゆうか、きみがそこにいるかぎり僕の眠りが妨げられまくるわけなんだけど、そのあたりを懇こん切せつ丁てい寧ねいに説明するのも面めん倒どうだった。

あいつはようやく振り返ってバカ面づらをさらした。

「……え？」

「何度も言わせないでよ。入れって言ってるの」

「いや、でも、それは」

「いいから入れ。寒いんだから」

「だけど──」

ああもうしつこい。頭にきて、やつの腕うでを引っつかんで強ごう引いんに部屋の中へ引っぱりこんだ。すぐにドアを閉めて鍵をかけて部屋の奥の収納ボックスから予備の毛布を二枚とりだしてバカに向けて放って紐を引っぱって半永久灯を消してサンダルを脱いで

ベッドに突とつ進しんして布団の中にもぐりこんだ。心臓がばっくばっくいっている。何だよこれ。なんでこんなことに。じっとしていても、動どう悸きが収まらない。あのバカはどうしているだろう。音がしない。動いていないのか。気にしてしまうのがいやで、布団をぐぐっと引っぱり上げて身体からだを丸めた。これで遮しやおん効果はバッチリだ。さあ、寝よう。寝れるか！　や、でも、眠らないと。気を静めて。深呼吸をして。く、苦しい。なんか。布団かぶってるせい？　あんまり得意じゃないんだよね。閉所恐きょう怖ふ症しようってほどじゃないんだけどさ。でも、もし寝ちゃったら、寝顔とか見られるのはやだし。冗じよう談だんじゃないし。そんなの。もしっていうか、寝ないといけないんだけど。

「……い、一応、言っとくけど。あたりまえのことだから、わかってると思うけど」

　布団から少しだけ顔を出してみた。

「変なことしたら、ただじゃおかないから」

「ああ」

　ぼんやりとだけれど、真っ暗な部屋の中に突つっ立っているあいつの姿が見えた。

「わかってる。何もしないヨ」

「……なら、いいけど」

　いいんだろうか。あのバカのロクデナシの変態の言葉を信じていいのか。信じられるのか。少なくともちょっと前までなら、信じていいはずがない、信じたりしたら大変なことになると思ったはずだ。何？　じゃあ今は違うわけ？　違う──ような気がする。違うんだ。へえ。そうなんだ。嘘。なんで？　変だ。考えてみたら、そんなのおかしい。きっと疲つかれてるせいだ。判断力が低下してるっていうかもう狂くるってる。ちょっといろんなことがあったくらいで、もしかして意外と信用できるやつなのかも、とか、そんなの早計すぎる。たぶん、早とちり以外の何ものでもない。絶対、後こう悔かいする。だから、冷静に。落ちついて。客観的に。公正に。できうるかぎり正しい物の見方をするように心がけないと。そう、公平に。

「そこに……ソファとかあるし。一人用だけど。座ってもいいから。寝ねるなら、そのへんに寝ればいいし。寝ね心ごこ地ちはよくないだろうけど、我が慢まんしてよね。外よりはマシでしょ。寒いんだからさ。バカじゃないの」

「ボクは平気なのに」

　あいつはソファに腰こしを下ろしたようだ。

「寒いとか暑いとか、あまり感じないんだ。三日か四日くらいなら、眠らなくてもとくに問題ない」

「……きみがよくても、僕はよくないんだよ」

「キミが……？」

「うっさいなもう。何でもいいだろ。僕は寝るから。邪じや魔ましないでよね」

　大きく息を吐はいてから、布団をかぶろうとした。

「マリア」

「……何だよ」

「ありがとう」

「な＄＋％＝＊♯￥……！」

　自分が何を言ったのかわからなかったし、何を言おうとしたのかも定かではなかった。とりあえず人間の言葉にはなっていなかったと思う。マリアローズは布団の中に退たい避ひして目をつぶって歯を食いしばった。やなんだよ。そういうの。お礼とか言われたり。気持ち悪いし。ジンマシン出るってば。あーやだやだ。死んじゃうよ。死なないけど。瀕ひん死しだよ。やってられないっての。たいしたことはしてないんだから。何もしてないんだから。やめて欲しい。こんなときにかぎって真ま面じ目めな口調でさ。怖こわいんだよ。何企たくらんでるんだよ。

「おやすみ」

　布団越ごしにあいつの声が聞こえた。

口の中で、おやすみ、と呟つぶやいてみた。

眠ねむれないだろうなぁ。

眠れるはずがない。

だって、こんなに緊きん張ちようしてるし。くつろげるわけがないし。

でも、布団の中はあったかくって。

おかしい。

寝息が聞こえる。

誰だれのだろう。

ひょっとして、僕の……？

そう、みたいだ。

あれ……。

気持ちいいや。

すごく、気持ちよくて。

意識を無理やり繫つなぎ止めておくのがバカらしくなった。

あとはもう急な坂を滑すべり落ちるように急転直下だった。

どうやら僕は眠ってしまったようだ。

目が覚めてから、自分が結構ぐっすり眠っていたらしいことにびっくりした。布団から顔を出していなかったので、やたらと蒸し暑かったけれど、少しだけ安心した。どうして安心しないといけないのか。そうだ。あいつを部屋に入れたんだった。でも、相変わらず物音は聞こえない。静かだ。あいつはまだいるんだろうか。布団にくるまっていても、もう外が明るくなっていることはわかる。しかも、朝方というかんじではない。今、何時だろう。目覚ましをかけておくべきだったのに、すっかり忘れていた。集合時間に遅おくれるわけにはゆかない。時間は守らないと気がすまないタチだ。ぐずぐずしてはいられない。起きないと。

　覚かく悟ごを決めて布団の中からそろそろと顔を出してみた。

　あいつはソファに座っていた。

　目を閉じている。

　寝ているのか、と思った瞬しゅん間かん、目を開けてこっちを見た。

「おはよう」

　思わず首を引っこめてしまった。だって、なんだか恥はずかしくて。起きがけに微笑ほほえまれるなんて、慣れてないし。あのバカ、顔だけはやたらめったらきれいだし。だいたい、自分の部屋に他ほかの誰かがいるなんて、すごく変だし。ありえないし。血迷ったとしか思えない。なんであいつを入れたりしたんだろう。致ち命めい的てきな判断ミスだ。本当に、致命的だ。や、そんなことないでしょ？　挽ばん回かい可能だよ。うん。そうじゃなきゃ困る。大だい丈じよう夫ぶだ、これくらい。平然としていればいいんだ。ここは僕の部屋なんだし。僕のテリトリーなわけだし。

「お、おはよ」

　ちょっとどもってしまったけれど、マリアローズはできるだけ平静を装よそおって上半身を起こした。不意に寝ね癖ぐせがついていないか気になり、慌あわてて両手で頭を押さえようとして、や、待て、待て、落ちつけ、と深呼吸をした。なんてことはない。トレーナーを着たまま寝たわけだから、フードだ。フードで隠かくしてしまえばいい。そう思いたってフードをかぶり、紐ひもをきゅっと締しめてみたのだが、本当にこれでいいのだろうか。どうもおかしなことをしているような気がして仕方ないけれど、ま、いっか。

　机の上の置き時計に目をやると、まだ九時半ごろだった。寝たのは五時前くらいだろうか。約四時間半。十分な睡すい眠みん時間とは言えないが、これくらい寝ておけば、眠くて眠くて死にそう、みたいな状態になることはまずない。状じよう況きようが異常だったのにもかかわらず、なぜか熟じゆく睡すいできたようで、頭もすっきりしているし、満足すべきだろう。もっとも、寝不足でぼんやりしていれば、あんな物の存在を思い出さずにすんだかもしれない。

　小さな薔ば薇らの細工物だ。

机の上に置きっぱなしにしてあったんだ。

やばい。

いや、そんなことはない。大丈夫だ。あいつは知らないんだから。もしあの細工物に気づいていたとしても、べつにどうということはない。でも、知らないって何を？　何。何って。僕もわかんないけど、なんていうかその、なんでも──なんでもない。ぜんぜん、なんでも。

あいつを、それから机のほうを見ないようにして、布団から出て手早くベッドを整えた。手を止めずに話をしてみせる余よ裕ゆうまであるのだと自分に言い聞かせるために、さして興味もない、どうでもいいようなことをきいてみたりした。

「寝なかったの」

「何もしていないヨ」

「そんなこときいてないだろ」

「平へい穏おん無事だった。何かが起こりそうな気配さえ感じなかったヨ」

「だから大丈夫だって言ったのにさ」

「でも、キミが一人きりだったら違ちがっていたかもしれないしネ」

「どうだか」

「その可能性が少しでもあるのなら、むしろボクが安心できない。だから、キミのためじゃないのサ。ボク自身のためにしたことだ」

「そもそもべつに感謝とかしてないから。てゆうか、迷めい惑わくだし。明らかに」

「すまない」

「謝ってすむなら何とやらってね。よく言うでしょ」

「言葉だけでは足りないかな」

「いいよ。きみなんかに違う形で謝られたって、僕に得があるわけじゃないし」

「何でもするヨ。それをキミが望むのなら」

じゃあ、今すぐここから出ていって、二度と僕の前に現れないで。

いつもならそう言うところだ。本気にしろ、半分冗じよう談だんにしろ、今までは間違いなくそうだった。それなのに、どうして何も言えないんだろう。言葉が出てこないんだろう。なんで僕は下した唇くちびるをきゅっと嚙かんだりしてるんだろう。どうしてこんなに胸が苦しいんだろう。

「着き替がえとかするから、外に出てて」

あいつは何か言いたそうに口を動かしかけたけれど、結局、無言でうなずいて立ちあがり、部屋から出ていった。

一人きりになると、妙みように部屋が広く感じられた。

使わなかったのだろう二枚の毛布は、丁てい寧ねいに折り畳たたまれて机と組になっている椅い子すの背もたれにかけてある。

ドアを施せ錠じようしようとして、やめた。

どうせあいつは招き入れられないかぎり入ってこないだろうし、外にあいつがいれば不ふ審しん者が侵しん入にゆうしてくることもないはずだ。

机の上に置いてあった薔薇の細工物をそっと手にとって、抽斗ひきだしにしまった。

まず顔を洗って歯を磨みがこう。それから身み支じ度たくをして、カーテンを開けよう。昨日は食料品を買ってくるどころの騒さわぎではなかったから、家には非常用の保存食しかない。事務所へ行く前にどこかで腹ごしらえをしたほうがいいだろう。あいつも何か食べたりするのかな。そりゃ食べるだろうけどさ。あいつと一いつ緒しよに朝ご飯か。

やだな。

なぜだかそんなにいやじゃない。

Omenage 897 12th revolution 4th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区
〝トマトクン邸〟

chapter.10

魔道とは

　大丈夫。べつにおかしくない。十一時に事務所集合で、ちょっと準備が早くすんでしまったから、立ちよってみた。ピンパーネルもくるはずだし、それなら一緒に行けばいいわけだし、それから、昨日は話に出なかったけれど、やっぱりこういうときはあの人がいてくれれば頼たよりになるはずだから、声をかけてみたほうがいいと思う。昼飯時ランチタイムの、とくにアジアンという人とは一度剣けんを交えたりもしているので、いろいろと複雑なのかもしれないけれど、きっとあの人はあまり気にしていない。心が広いというか、懐ふところが深い、大きな人だ。おそらく、なるほど、そうか、そういうことなら、とすすんで力を貸してくれるだろう。形としてはアジアン本人ではなくてマリアの頼たのみだし。マリアにかぎらず、仲間の頼みを断るような人ではない。仲間でなくても、困った人がいればつい手をさしのべてしまう。放ほうっておけない。見過ごせない。そういう人だ。どちらにしても、一応、耳には入れておいたほうがいいと思う。それだけだ。そのためにきた。不自然ではないはずだ。大丈夫。絶対、大丈夫。

　サフィニアは深呼吸をして階段をのぼり、いかにも頑がん丈じょうそうな鋲びょう付きの門の前まできた。あの人の家というより邸てい宅たくは五メーテル以上ある合成骨材コンクリート製の土台の上にあって、敷しき地ち全体がやはり鋲付きの高くて分厚い塀へいで囲まれている。ちょっとした要よう塞さいだ。門を開けるにも、呼び鈴りんを押して内側から開けてもらうか、十桁けたの暗証番号を入力したうえで鍵かぎを使わないといけない。サフィニアは残念ながら鍵を持っていないので、呼び鈴を押そうとしたら、門の上から白くて大きな生き物がひょっこり顔を出した。

「……あ、きゅー」

「きゅう」

「お、おはよう……え、と……開けて……？」

「くう」

　きゅーが顔を引っこめると、すぐに門が開いた。くわしいことはわからないけれど、きゅーはとても嗅きゆう覚かくや聴ちよう覚かくが鋭するどいようで、建物の中にいても家に近づいてくる者の気配を察知することができるらしい。人見知りが激しいから、見知ら

ぬ他人がくると奥に引っこんでしまうことも少なくないけれど、サフィニアのようによく知っている者なら出で迎むかえてくれる。
きゅーに先導される恰かつ好こうで前庭の舗ほ装そうされた道を歩きながら、サフィニアは胸の高鳴りを抑おさえられずにいた。あの人と初めて出会ってからもう何年たっただろう。いまだに顔を見るだけで心しん拍ぱく数すうが上がる。それどころか、顔を見られるのだと思うだけで動どう悸きが激しくなる。この調子だと、これ以上なんて無理かもしれない。これ以上？　これ以上って、たとえばどういう……？

　と、隣となりに……座ったりとか。

　い、一緒に……ご、ご飯を食べたりとか。

　し、しかも……ふ、ふ、ふっ二人きりで、とか。

　で、できれば……じ、じ、じじじっ自分が作ったお弁当を、とか。

　あの人はきっと、うまいな、と言ってくれるだろう。

　わりと、何でも食べる人だし。好みはうるさくないし。こ、これでも、ひそかに……お料理の腕うで前まえには自信があるし。それは、でも、センスとかそういうのは関係なくて、お姉様のところで鍛きたえられたからで。お姉様に、まずい、と言われたら大変なことになるから、みんな必死だった。お姉様に褒ほめてもらいたいという気持ちも当然あった。お姉様に評価されたい。認めてもらいたい。それはお腹なかがすいたから何か食べたいとか、水を飲みたいとか、眠ねむりたいとか、そうした本能に根ざしている欲求と同等か、もしかしたらそれ以上だった。あたりまえだ。お姉様に無価値と見なされれば、容よう赦しやなく捨てられるか、使い捨ての実験道具にされる。拒こばむことはできない。お姉様に逆らっても無む駄だだということは、太陽が昇のぼって沈しずむことと同じくらい確定的な事実というより真実だ。それに、がんばって期待にこたえれば、お姉様はやさしい。這はってでもついてゆけば、先へ先へと導いてくれる。そして何より、お姉様はわたしたちを必要としている。お姉様は一人では眠れない。常に誰だれかがそばにいないとすぐに癇かん癪しやくを起こす。わたしたちがお姉様をお守りしてさしあげないといけない。わたしたちはそのためにふさわしい存在であらねばならない。そうありたい。それはわたしたちの願いで、本ほん望もうだ。

　でも、あの人は違ちがう。

　わたしなんか、いなくてもいい。

　あの人は大きくて、強くて、逞たくましくて、かっこよくて、頼もしくて、信用できて、とにかくすごくて、直視できないくらいまぶしくて、まぶしすぎて、まるで太陽みたいで、凶星の下もとに生まれたわたしは、本当は闇やみの中でしか生きられないはずなのに、あの人のおかげでこうしてお日様の下で笑うことすらできる。すばらしい仲間がいる。大切な友だちもいる。すべて、何もかも、あの人のおかげだ。

　わたしはあの人が好きなんだろうか。

　好きだ。

　大好きだ。

　でも、胸が張り裂さけてしまいそうなくらいあの人のことが好きだけれど、この気持ちはなんだか違うような気がする。

　わたしは地上にいて、あの人は空の上で輝かがやいている。

　手をのばしても、絶対に届かない。

　かろうじてそのあたたかさを感じるだけで。

　それだけでも十分で。

　ただ、せめて、手を。

　て、て、てててて っ手を……つないだり……なんか、できたら……いいなぁ……とか。

「……わっ、わわわ、わっわたし……ったら、な、なっ何を……」

　立ち止まってしまった。ダメだ。妄もう想そうが止まらない。止まらないのに、止まるなんて。いけない。混乱している。きゅーも足を止めて振ふり返り、どうしたの、みたいなかんじで首を傾かしげている。なんでもないから、と言いたい。言わないといけない。きゅーは人間の言葉を話すことはできないけれど、理解することはできる。でも、どういうわけかあの人は、きゅーが発するきゅうと

かくうとか、そういう声を聞くだけで、何を伝えたがっているのかわかるみたいだ。すごい。よくわからないけれど、すごすぎる。今は、だけれど、そんなことはどうでもよくて。よくないけれど。落ちつかないと。熱い。顔が。扇あおがないと。もう暑くはない季節なのに。汗あせが。ダメだ。呼吸が。もっと深く呼吸をしないと。すー。はー。鼻から吸って、口から吐はいて。他ほかのことを考えて。気持ちを落ちつけて。

「……だ、だいじょう……ぶ、だから。ほ、ほんとに」

「きゅう」

　そう、それならいいけど、というかんじで、きゅーが前に向きなおった。まだ頭が少しふらふらしているし、足あし許もとも若じゃつ干かんおぼつかないけれど、大丈夫だ。大丈夫だと信じたい。しっかりしないと。サフィニアは自分にそう言い聞かせて顔を上げた。

「……あ……え？」

　一いつ瞬しゅん、見間違いかと思った。

　何度かまばたきをしてみた目に映る光景に変化はなかった。

　あそこは居間だ。

　前庭に面している居間の大きな窓に嵌はめこまれているはずの硝子ガラスがない。サッシはあるので、硝子だけ割れてしまったのか。一枚か二枚なら、何かの拍ひよう子しでそういうこともありうるだろうが、ぜんぶとなると変だ。何かあったのか。きゅーの様子はふだんと変わらないようだけれど、胸むな騒さわぎがした。玄げん関かんで靴くつを脱ぬいでスリッパを履はき、通された居間とつづきのダイニングにはピンパーネルがいた。テーブルの椅い子すに座って、果か汁じゆう飲料か何かを飲んでいたようだ。

「おはよ・ございマス」

「……おはよう」

　サフィニアはピンパーネルに挨あい拶さつを返すのもそこそこに居間を見回した。見たところ、とくに散らかっているわけでもなく、おかしなところはない。窓硝子がないことを除けば。おかげで

風通しがよすぎて、少し肌はだ寒ざむい。きゅーは、くう、とピンパーネルの向かいの椅子を示してみせ、お茶を出すから、とでも言いたげだけれど、そんな気分にはなれなかった。

「あの……どうしたんですか……？　窓が……」

「ワタシ・わからなイ」

　ピンパーネルは微かすかに眉まゆをひそめて窓のほうを見た。

「昨日……今日？　帰ってきたラ・もう・なってまシタ」

「じゃあ……ピンパーネルが、いない間に……」

「はイ。きゅー・片づけタ」

「……いったい、何が……」

　サフィニアが眉をひそめて口を押さえると、きゅーが窓のほうを指さして、きゅう、と言い、それからいきなり怖こわい顔になって、ぎゃう、がうがう、と少し大きい声を出しながら両手を広げてばたばた足を踏み鳴らした。どうやら説明しようとしてくれているようだ。きゅーは居間のドアに向かって走ってゆき、そこで立ち止まって振り返り、ぎゃう、ぎゃうがう。今度はソファのところまで駆かけていって、きゃう、がうぐぁう。さらに窓の近くで、がう、ぎゃうがう。戻もどってきて首を傾げ、きゅう？　それだけはかろうじて理解できた。おそらく、わかった？　とサフィニアにきいたのだと思う。

「……え……と……な、なんとなく……」

「くう……」

　きゅーは肩かたを落として悲しげな声をもらした。賢かしこい子だから、自分の言ったことがほとんど通じなかったと察したのだろう。サフィニアとしても、あんなにがんばってくれたのにちゃんとわかってあげられなくて、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。ただ、何事もなかったわけではないらしいということだけは伝わってきた。何かが起こって、けれども、大事には至らず、窓硝子が割れたくらいですんだ。たぶん、そういうことなのだろう。

「……あの……」

いずれにせよ、もっとくわしく事情を知る方法はある。昨日から今日にかけてこの家にいたのはきゅーだけではないはずだ。

「……と、トマトクンは……？」

他意はない。とにかく会いたいとか、ちらっとでもいいから顔を見たいとか、声を聞きたいとか、そんなことはまったく思っていない、わけではないけれど、用事もあるし、だいたいここはトマトクンの家だし、彼の名前を出してもおかしくはないはずだ。むしろ、出さないほうが不自然だろう。ピンパーネルやきゅーも、不ふ審しんがったりあやしんだりする様子はなかった。何も変なことはしていないのだから、当然だ。もっとも、最近のトマトクンはいつも眠ねむそうにしていて、帰りの馬車の中では日中も昼ひる寝ねばかりしていたので、まだ起きていない、との答えが返ってくるだろうと予想していたのだけれど、物の見事に外れた。

「きゅう、くう」

「かぜ・みたいデス」

「……かぜ……？」

最初はぴんとこなかった。かぜ、といえば風か邪ぜに違ちがいないが、その風邪とトマトクンがどうしても結びつかなかったからだ。

トマトクンは丈じよう夫ぶな人で、常人ならとても意識を保っていられないような重傷を負っても、ほとんど痛がりもしない。疲つかれたとか、つらいとか、弱音を吐はくこともまずないし、病気で寝こむトマトクンの姿なんて想像もできない。考えてみれば、そんなトマトクンだって風邪を引くことくらいあってもおかしくはないのだけれど、やっぱり意外だった。かなり意表を突つかれた。風邪。風邪なんて。でも、ただの風邪なのだろうか。だって、トマトクンなのに。

「……大丈夫……なんですか……？」

「熱・ありマス。結構、高イ・熱」

「きゅう」

「え……高いって……ど、どれくらい……？」

「くう！」

　きゅーが両手をあわせてから勢いよく縦に広げてみせた。体温を表そうとしているようだ。さすがに正確な数値はわからないけれど、かなりの高熱なのだろう。三十八度くらいか。平熱が低いサフィニアならふらふらして歩くこともままならない体温だ。それとも、三十九度。幻げん覚かくが見えたり幻げん聴ちようが聞こえたりしてもおかしくない。もしかして、四十度。ダメだ。そんな体温を思い浮うかべただけで死にそうになる。あのトマトクンが。いや、トマトクンのことだから、サフィニアみたいに虚きよ弱じやくではないはずだけれど、そうは言っても楽ではないだろう。きっと苦しいはずだ。ふだん風邪を引かない人だから、慣れていないぶん余計につらいかもしれない。ものすごくつらいに違いない。それに、病気をすると、妙みように心細くなったりもする。風邪。もちろん奇き病びようでも大病でもないし、養生していればだいたい治ってしまうし、大おお袈げ裟さに騒さわぐ必要はないのかもしれないけれど、思いのほか厄やつ介かいな病気で、医術式でもまず治せないらしい。風邪は万病のもと、という言葉もある。風邪だと思っていたら、ぜんぜん違う病気だった、などということも時としてあるようだ。甘く見てはいけない。だんだん心配になってきた。というか、とてつもなく気がかりだ。もしただの風邪じゃなかったら。ただの風邪だとしても。

　ピンパーネルがコップの果か汁じゆう飲料を飲み干して椅い子すから立ちあがった。

「様子・見ますカ」

「……よ、よう……す？」

「はイ」

「え……え、え、え……え……？　で、でも……ぐ、ぐっ具合が、悪いなら……かえって、迷めい惑わく……っていうか……」

「ワタシ・もう家出マス。そのこと・言いに行きマス。ついでデス」

「つ、つ、つっついで……？　つ、ついで、なら……」

「行きまショウ」

頭がぼわぼわする。顔が熱い。耳たぶまで熱い。鼻の奥のあたりも熱い。膝ひざがかくかくする。床ゆかを踏んでいる感かん触しょくがしない。視野が狭せばまっている。これではどちらが病気かわからない。歩きだしたピンパーネルの後ろをついてゆくだけで精せい一いつ杯ぱいだ。今にも転んでしまいそうで、杖つえにしがみつかないとまともには歩けない。どうしよう。風邪なんて。大丈夫だろうか。あの人はどんな状態なんだろう。風邪を引いて、熱を出して、弱っているあの人は。な、何を。何を。何を。な、な、な、何を考えているんだろう。わたしったら、何を。

まずい。息ができない。呼吸が。

心臓が。

潰つぶれてしまう。

ピンパーネルがトマトクンの部屋のドアをノックした瞬しゅん間かん、本当に心臓がどうかなってしまいそうになった。

声が聞こえた。

くぐもった声だった。

聞き間違えるはずがない。

あの人の声だ。

「入りマス」

ピンパーネルがドアを開けた。

カーテンが閉めきられていて、部屋の中は薄うす暗ぐらかった。

あの人はベッドにいた。

身体からだを横向きにして寝ている。

ゆっくりと顔だけこちらに向けて、何か言ったようだけれど、聞きとれなかった。

それどころではなかった。

肩かたが。

胸が。

裸はだかだ。

どうしよう。

服を着ていないみたいだ。少なくとも上は。もしかして、下も……？

「ワタシ・用事ありマス。家・空けマス。気・つけてくださサイ。お大事ニ」

「……む。ああ」

トマトクンはのっそりと身体を起こした。両手で目を覆おおいそうになって、危あやうく杖を取り落としかけた。布団がずり落ちて、肩や胸どころか、お腹なかまであらわになったからだ。すごい腹筋。そうじゃなくて、そんなことはどうでもよくて、かなりだるそうだ。髪かみも乱れているし、目もしょぼしょぼしている。いかにも熱があるといったかんじだ。

「用事……ふむ。珍めずらしいな。ピンプ、お前が用事なんて……何かあったのか」

「イえ。たいシタこと・ナイ」

「そうか。それならいいが」

トマトクンは軽く頭を振ふって目をこすった。それからもう一度ピンパーネルを見て何か言いかけ、ようやくその後ろにいるサフィニアに気づいたようだった。

「……お。サフィニアもいたのか。どうした。朝っぱらから」

「あ……お……お、おっおはよう……ござい、ます……」

「おはよう」

「わ、わたしは……その……ちょっと……え、と……」

昼飯時ランチタイムの件を話すべきだろうか。どうやらピンパーネルはあえて伏ふせているようだ。おそらくあからさまに体調が悪

そうなトマトクンに気苦労をかけまいという心配りだろう。その判断は正しいとサフィニアも思う。でも、じゃあ、わたしは何のためにここへ……？

「か」

　眩暈めまいがした。

　わたし、何を言おうとしているんだろう。

　くじけそうになった。

　今ならまだ取り消せる。

　か、しか言っていないし。

　不意に、ユリカとマリアが肩を並べて拳こぶしを握にぎりしめている姿が脳のう裏りに浮うかんだ。

　二人は何か叫さけんでいた。

　声は聞こえなかったけれど、唇くちびるの動きでわかった。

　が、

　ん、

　ば、

　て。

　がんばって。

　そうだ。

　負けちゃダメだ。

　がんばれ、わたし。

「──か……か、か、か、かっ……」

　臆おく病びようなわたしに、勇気をください。

　すぐうつむいてしまいそうになるわたしに、前を向いて一歩踏ふみだすための力を、少しだけでいいから分けてください。

　サフィニアは、すうっ、と息を吸いこんで正面からトマトクンを見すえた。

「看病、します……！」

　言った。

　言っちゃった。

　叫んでしまった。

　トマトクンは片かた眉まゆをつりあげて頭を掻かいた。

「……いや、大丈夫だぞ。看病とかな。そんな、大おお袈げ裟さな……」

「い、いいえ！　や、やっぱり……か、かっ風か邪ぜは、引きはじめが肝かん心じんと、言いますし！　安静第一だし……！　そこは、危機管理が……あ、安全第一で、だから……え、え、えっ栄養のバランスも、大事だし！　食事が、一番重要で……！　ほ、他ほかにも、いろいろ！　わたしにできることなら、な、な、なななななっ何でも……！　べ、べつに変な意味じゃなくて！　たとえ変な、意味でも……！　な、何でもします！　誓ちかいます！　邪じゃ魔まにはならないです！」

「ああ、いや……邪魔になると思ってるわけじゃないんだが……」

「な、なりませんから！　ぜっ、ぜっ、絶対、絶対に……！」

「せっかくだが、食欲も、そんなにな……」

「お、おっお粥かゆ！　お粥とかなら、どうですか……！　た、食べないと、無理をしてでも！　食べないと、よくなりませんから！　ほ、ほ、本当に……！」

「……そういうものか」

「そ、そそそそそそそっそういう、ものです……！　ほらっ！　わかってないじゃ、ないですか！　ぜんぜん……！　ダメですよ！

治るものも、治らないです……！」

「うむ……まいったな……」

「ま、まいったな、じゃないですよ……！　と、ととと、とととと、とっトマトクン一人の、身体からだじゃないんですから……！」

「そうなのか？」

「そっそうです！　ね！　ぴ、ピンパーネルも……そう、思いますよね！」

　唐とう突とつに話を振られてびっくりしたのかもしれない。ピンパーネルは目を見開いてわずかにのけぞった。

「エ……と……」

「だ、だだだ、だって、そ、そうじゃないですか……と、とっトマトクンは、ＺＯＯの、園長マスターだし……わ、わたしの……」

「ワタシ・の……？」

「わ、わっわたし……わたし……わたし、の……わたし……」

　何を。わたしは何を言おうとしているんだろう。

　こんなときに、こんなところで言うようなことじゃない。

　もしふさわしい瞬しゅん間かんと場所があったとしても、言えるはず、ない。

「……わたし──たちの、園長マスター、だし……」

「はイ」

　結果的に同じことを二度繰くり返してしまったのに、ピンパーネルはそっと微笑ほほえんでくれた。

「ワタシ・行きマス。あっちは・大丈夫」

　迂う闊かつにも先約があることを思い出したのはそのときだった。そうだ。十一時。事務所に行かないといけないのに。マリアに

頼たのまれたというだけじゃない。昼飯時ランチタイムはベティが所属しているクランでもある。ベティの仲間が大勢行方ゆくえ不明で、大変な目に遭あっているかもしれないのに、ちゃんと行くことになっていたのに、行かなくていいのか。でも、もう言ってしまった。力強く宣言してしまった。今さら引っこみはつかない。後あと戻もどりしたくもない。それに、トマトクンのことが心配なのは本当だ。トマトクンが風邪を引くなんて異常事態なのだ。ちゃんとよくなってもらわないと困る。困るなんてものじゃない。もしトマトクンがよくなるためにこの命が必要だというのなら、喜んで捧ささげる。トマトクンがいない世界なんて考えられない。そんな世界に意味はない。だから、ごめんなさい。ベティ。マリア。それに、ユリカ。カタリさん。ピンパーネルも。わたしはここに残ります。きっとマリアやユリカはわかってくれると思う。ベティはどうだろう。たとえわかってもらえなくても、いい。もしかしたら後こう悔かいするかもしれないけれど、それでもわたしはこの道を選びます。

「……何か、あったら……教えてください」

「はイ」

　ピンパーネルはうなずいてサフィニアの肩かたを軽く叩たたいた。服越しなので手のぬくもりを感じたわけではないものの、あたたかい手つきだった。ピンパーネルはいつもながら言葉少なだけれど、すべてわかったうえで励はげましてくれているように感じられた。心強いし、ありがたいし、嬉うれしかった。一方で、恥はずかしくもある。とりもなおさずそれは、自分の気持ちがピンパーネルに見み抜ぬかれていることを意味するからだ。わたしって、そんなに見えすいてるの……？

　だとしたら、まったく気づいている様子がないこの人はどれだけ鈍にぶいんだろう。

　ピンパーネルが行ってしまうと、いつまでも開け放ったドアの前に突つっ立っているのもおかしいので、部屋に入らないわけにはゆかなくなり、部屋に入ってしまうと、ドアを開けっぱなしにしておくのも変だから、閉めるしかなかった。

　二人きりだ。

　密室だ。

空気が重くて、ちょっとだけ甘い。

窒ちつ息そくしそうなくらい息苦しいけれど、耐たえられる。

大だい丈じよう夫ぶ。

わたしはやれる。

「ところで」

トマトクンがぼんやりとサフィニアを見て顎あごを撫なでた。

「あっちってのは何なんだ」

サフィニアはすぐには答えず、というか答えられず、壁かべに杖を立てかけて、ベッドのそばまで引きずっていった椅い子すに腰こしを下ろした。

「……さ、さあ。な、何か……あるみたいです……よ？　みんなで……でも、風か邪ぜを引いている人は……そ、そんなことよりも、まず……治さないと……」

「平気なんだがな。これくらい……」

「へ、へっ平気……そうには、見えないです……」

「そうか？」

「え、ええ。だ、だって、熱……そうだ、ね、熱……」

今まで一度として思ったことはないけれど、わたしは天才かもしれない。どう考えてもこの閃ひらめきは天才級だ。サフィニアは自分が逡しゆん巡じゆんしはじめる前に椅子から腰を浮うかせた。たぶん、誰だれがどこからどう見てもさりげない動作以外の何ものでもなかったはずだ。あたりまえだ。風邪を引いていて、いかにも熱がありそうな人の額に手でふれて、確かめる。人間として当然の行こう為いだ。サフィニアはただ単に何気なくそれを実行に移しただけなのだ。

ああ──、

熱い。

とっても、熱い。



「……熱い……ですね……すごく……」

「みたいだな」

「……熱い……です……」

「なんだかお前も熱そうだぞ。顔が赤くないか」

「……ええ……少し……」

「大丈夫か。うつったんじゃないのか」

「そんな……すぐには、うつりませんよ……」

「そういうものか」

「……はい……」

　この手を離はなしたくない。ずっとふれていたい。もっと近づきたい。ダメだ。できない。そんなことをしたら、抑おさえられなくなってしまう。

　サフィニアは思いきって手を離し、椅子に座りなおした。

　静かに深呼吸をしながら、暴走しかけていた気持ちに手た綱づなを締しめて、冷静に、冷静になろうと自分に言い聞かせた。

　看病だ。それが先決だ。すべてはそこからだ。焦あせってはいけない。この先は未知の領域だ。もう引き返すことはできない。引き返さない。進むと決心したからには、ゆっくり、じっくりと、一歩一歩地面を踏ふみしめるようにして前進してゆかないといけない。行く手に立ち塞ふさがるのは壁か、山か、あるいは罠わなか。それでもわたしは魔ま術じゆつ士しだ。限界を超こえてみせる。

　お姉様は呆あきれていらっしゃるかもしれない。わたくしは何もそんな限界を超えさせるためにあなたを魔術士として育ててあげたわけではなくてよ、とお叱しかりになるかもしれない。

　それがどうした。

　サフィニアはこれからするべきことのリストを頭の中で作成しながら、不退転の決意をもって胸中で師に告げた。

　これがわたしの魔道です。

Omenage 897 12th revolution 4th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区・第二王立銀行内

“動物園事務所(ズー・オフィス)”

chapter.II

そのままの意味で

大円卓の上にばらまかれているたくさんの紙切れは、一枚として同じ形のものはなかったけれど、だいたい同じくらいの大きさで、そのすべてに黒い字が書かれていて、それらはぜんぶ上ハ古イ高ロ位メ語ンで、ベティによると正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルらしい。その、正しい、という部分が何を意味するのかについても説明を受けた。ようするに、現在、上ハ古イ高ロ位メ語ンの中でもかなり簡単な部類に入る普遍ジエネラル口語体コロキアルとして知られている言語は、魔導王時代の終末期に書かれた文ぶん献けんなどに見られるものか、あるいはもっと古い時代に書かれた書物の写本に見られるもので、ずっと昔、普遍ジエネラル口語体コロキアルがよく使われていたころに書かれていたものとは若じやつ干かん形式が違ちがうというのだ。ちなみに、現存している魔導王時代の文献は、大半どころか九割以上が写本で、実物はほとんど残っていないらしい。おかげで、正しい普遍ジエネラル口語体コロキアルというものの存在を知る者さえ少ないのだという。まあ、そんなことはとりあえずどうでもよくて、問題はその事実が意味するところは何か、だろう。いや、それよりも文面を読み解くことのほうが先か。

u-d'on'hafto-luk'abaufor-me.

わたしを捜さがし回る必要はありません。

u-d'idn-ran'awey,ai-let'u-go.

あなたは逃にげたのではない、わたしが逃がしたのだ。

u-mey'nat-wory'abau-enithin.

何も心配しなくていい。

whu-besaid-me-wud'sey-tha.

わたし以外の誰がそんなことを言うのでしょう。

wheaever'u-go, ir'isnat-significan.

どこ行ったって意味ないっスよ。

ai-shud'hav-tout-u-tha-meenin'ob'tha-warld.

おれがおまえに世界の意味ってやつを教えたはずだぜ。

ai'm-stil-enbreicin-u-in'mai'arms.

わたし、今でもあなたのことをこの腕うでに抱だいてるのよ。

u-seemto'be-wishin'only'to-go'awey, hawever, it-rivars.

あんたぁ遠くに行くことばかり願っているようだが、そいつぁ逆効果だ。

u-a'stil'a-baby.

おまえはまだ赤ん坊ぼうだよ。

it'nee'nat-be'feard-to'be'cout.

とらわれることを怖こわがる必要なんかねえんだぜ。

ai'hav'auready-parmitid-u.

わたくし、とっくにあなたを許しておりますことよ。

u-now-tha'pleice'wiz-tha'tenpteition.

きみは誘ゆう惑わくがある場所を知っている（？）。

u-mey'nat-taok, thearis-samthin'to-meik'u'taok.

あなたは語らなくてよろしい。あなたを語らせるものがいるのです。

sacrifaice, d'unat-fear'it.

生いけ贄にえよ、びびるんじゃねえ。

ask'me-a'gud'metho.

いい方法をわたしに尋たずねなさい。

sit-wizau-muvin.

動かないで座ってなさい。

ai-nevar-told'u-to-ger'aut.

出て行けなんて一回も言わなかったっスよ。

……………………。

…………。

意味はわかる。一つ一つの文章の意味は。ベティやヨグが訳してくれたおかげで。

ただ、それぞれの文章の関連性は見えてこない。見たところ、わたし、つまり一人称しよう、あなた、つまり二人称は出てくるが、彼や彼女といった三人称は出てこないので、そのわたしがあなたに向けて何か言っているのかな、と推測できる程度だ。失しつ踪そう者と文面の関連性については、昼飯時ランチタイムのベティやヨグがああでもないこうでもないと頭をひねっているところだけれど、現時点では何も浮うかんできていない。とりあえず、二人暮らしの部屋から紙切れが一枚しか見つからなかったりもしているので、一文が一人に対応しているわけではないようだ。

他ほかにも、たとえば、すべての文章を正しく並べることによって何かがわかるようになっているとか、それぞれの文から文字か単語を抜ぬきだして、あんなふうにしてこんなふうにすると何かが判明するとか、考えられることはいろいろあるような気がする。

あくまでそんな気がするだけだ。

正直、ちんぷんかんぷんだ。

誰だれがついたのだろう。

ため息が聞こえた。

これが何度めだろう。

数えるのも馬ば鹿からしい。

マリアローズは我が慢まんしているけれど、気持ちはわかる。

わかりすぎるほどわかる。

昨夜、手分けして紙切れ探しをした成果は二十五枚だった。昼飯時ランチタイムの現メンバーの総数が三十八名で、失踪したと思われているのはそのうちの三十五名、二人暮らしをしていた者が三組いて、捜そう索さくした住居は三十二箇か所しよだから、まずまずの結果だろう。残りの七箇所もあとでもう一度調べなおさなければならないが、その前に集まった紙切れ自体やそれらに書かれた文章から失踪者の発見に繫つながる手がかりをえられないか検討してみよう、ということになり、動物園事務所名物大円卓を囲んでＺＯＯ昼飯時ランチタイム連合会議が行われている最中なのだけれども、議論が白熱するどころかさっきから誰も口を開かない。ベティは顎あごをつまんで熟じゆく慮りよを重ねているようだし、アジアンも眉まゆをひそめて何か考えているみたいだし、ヨグも一応、思案げだが、対するＺＯＯの面々は、マリアローズをふくめて、彼らの邪じや魔まをしないように黙だまってじっとしているといったかんじだ。しょうがないことではあると思う。ユリカは医術式の施式者としては優ゆう秀しゆうだし、鵺ヌエ流古式戦闘術の才能も髭ひげに認められているものの、パズルやクイズみたいなものは苦手としている。それも、多少ではない。かなりだ。ピンパーネルにいたっては、日常生活に支障がない程度に字を読むことはできるけれど、書くほうはそうとうおぼつかない。共通語も若じやつ干かんあやしいのに、普遍ジエネラル口語体コロキアルとはいえ上ハ古イ高ロ位メ語ンの意味を理解して、さらにその奥に隠かくされた何かを探さぐりあてろなんて言われても、どうしたらいいかわからないだろう。マリアローズも、自分にできる範はん囲いで考えてはみたものの、早々に万ばん策さく尽つきてしまった。サフィニアがいれば、魔ま術じゆつ士しだし、マリアローズたちよりは足しになっただろうか。でも、仕方ない。事情が事情だ。マリアローズがその場にいても、そうすることをすすめたかもしれないし。

それにしても、風か邪ぜ、か。

あのトマトクンが、という思いはあるけれど、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの〝サー・ジューダス〟アロンズ・ニードルスピアと言うべきか、それともロシュと言うべきか、団長だか預言者だか神だか何だか知らないが、いずれにしてもあの腐くされ超最低ＳＵＣＫ野や郎ろうとの決戦以後、明らかに調子が悪そうではあった。よく寝ねるのはいつものこととはいえ、朝でも昼でも晩でも、とにかく暇ひまさえあればどこでもぐーすか眠ねむりこけるというのは、いくらなんでも度が過ぎていた。そんなふうに感じつつも、まあ、トマトクンだし、大だい丈じよう夫ぶだろう、と軽く考

えていた部分がなかったとは言えない。そういえば、泉セン里リでＳＩＸとやりあったあとも、しばらくの間、寝てばかりいたけれど、そのうち元気になったし、きっと今回も同じだろう。はっきりとではないにしても、そういう認にん識しきは間ま違ちがいなく頭のどこかにあった。

　トマトクンは、力を出すときはガーッと出して、それ以外のときはじっとためているかのようだ。とくに訓練をしている様子もない。信じがたいことに、トマトクンの原動力は、たらふく食べて、ぐっすり眠ること、あとは気合い、それだけとしか思えないのだ。

　まるで野や獣じゆうみたいだ。少なくとも、常識が通用しない人であることはたしかだ。

　だから、腕うでをもがれても、壁かべに叩たたきつけられて血みどろになっても、腕が互たがい違いの変なやつがいきなり現れて友人を名乗っても、その力なのか何なのか、大剣がボワァァグワァァとふくれあがっても、神をぶっ倒たおしても、驚おどろくに値あたいしないし、激戦で普ふ通つうの人間なら絶対死んでいるだろう重傷を負っても、それくらいへっちゃらだ、ぜんぜんなんでもない──、

　わけがないじゃないか。

　トマトクンが風邪なんか引いたのは、その証しよう拠こじゃないのか。

　だいたい、ただの風邪かどうかもわからない。熱があって、身体からだがだるかったり、節々が痛かったりして、起きられないときたら、一見よくある風邪の諸しよ症しよう状じようだけれど、他の病気でも似たような症状を呈ていすることはある。今後、悪化するかもしれないし、もっと別の異常をきたす可能性だってあるだろう。そう考えると、看病しながら経過を見守ることは決して無意味じゃない。それどころか、重要だし、必要な措そ置ちだ。

　サフィニアなら、一生懸けん命めいというか、むしろ必死に、トマトクンから片時も目を離はなさない覚かく悟ごで完全看護するに違いないから、他の誰よりも適任だろう。こっちに何か進展があったらサフィニアに知らせればいいわけだし、その際、トマトクンの病状を確認することもできる。一度、ユリカにも診みてもらったほうがいいかもしれない。この件についてはあとで相談しないと。う

ん。そうしよう。

　進展なんて、そう簡単にはしそうにないけれど。

　じつのところ、この見通しの立たなさも、サフィニアがこなくてもあまり問題なさそうだとマリアローズが考えている原因の一つだった。

　この場にサフィニアがいたとしても、状じよう況きようが劇的に変わるとは思えない。

　もちろん、あの半魚人が時間どおりにちゃんときていたとしても、事態が好転するどころか、やかましくてうざくて邪魔になるのが関の山だろう。

　だとしても、やっぱり約束は守るべきだ。

　あのド腐れ半魚め。寝ね坊ぼうか。寝過ごしたのか。クソお寝坊さんか。それとも、まあええやろ、時間なんてなあ、たいしたこっちゃないで、おおらかに生きようや、おおらかぁーに、あんまり細かいこと気にしとったら禿はげるでホンマ、人生ゆとりが大事やで、余よ裕ゆうがなあ、人間をでっかくするんや、でっかくなあ、せやろ、ほな、わしはゆっくり旨うまいメシでも食ってから行くわ、みたいな感覚なのか。だとしたら、きみってやつはまったくなんでそんなにテキトーなんだよ。いいかげんにしてよ。そんなんだからよく死ぬんだよ。バカ。この死にマニア。それでみんなに迷めい惑わくかけまくってさ。どうして反省しないのかな。反省もできないのかな。それじゃあ猿さる以下じゃないか。そりゃそうだよね。半分魚だし。でも魚だからって許されると思ったら大間違いだから。全間違いだから。てゆうか、せめて時間くらいは守ってよ。そこは人間としてきっちりきちきちしてもらわないと困るんだよ。だから半魚人なんだよ。半分魚なんだよ。何考えてるんだよ、もう。あのバカ腐ふ乱らん魚。

　なんだか、だんだんあの半魚人が諸悪の根源なんじゃないかと思えてきた。

　事務所のドアが開いて、あの不足脳腐敗魚が頭を掻かきながら、いやあ、まいったで、ははは、とか言いながら入ってきた瞬しゆん間かん、確信した。

　あいつは本当にダメ魚だ。

　いつもいつも余計なことばっかりしてくれる。

　そうして、さんざん引っかき回して、めちゃくちゃにして、ややこしくするんだ。

「……一応、ゆうとくけどな？　これは言い訳やなくて説明なんやけどな？　ここ向こてる途と中ちゆうで出くわしてもうてな？　わしは逃にげたんやで？　ついてこられたらたまらん思てな？　そらそうやろ？　そんくらいわしかてわかるっちゅうねん、ナンボなんでもな？　せやけど、こんガキものごっつ足が速うてな……？」

「だーれがガキだよカジカ！　オレァテメーより年上だっつーの！」

「あだっ！　な、殴なぐんなや……！　い、痛いやろ……ちゅうか、ホンマに痛いがな。ツッコむんでも手加減くらいせえや。アホか、ボケ」

「あァ？　なーにがツッコミだよバーカ。そんなん知ったこっちゃねェーよ。オレァテメーがむかついたからボコッただけだよ」

「……あかん。こいつはあかん。よう合わんわ。ノリが違いすぎや」

「だってカジカだもんなァ。オレァ人間だからハナから無理だろそりゃ。つーか話できるだけでもアレじゃね？　奇き跡せき的じゃね？」

「あー……せやな……そう思うわ、実際……」

　すんまへん、えろうすんまへん、ホンマすんまへん、と何度も頭を下げながらピンパーネルの隣となりの椅い子すに腰こしかけるなり大円卓に突つっ伏ぷしたカタリはいい気味だが、あの小猿に見つかって追いかけ回されたのだとしたら、ちょっとだけ気の毒のような気もしないではない。とはいえ、振ふり切れずに結局、ここまで連れてきてしまったのだから、最悪だ。挽ばん回かい不能の大失敗だ。てゆうか、何しにきたの？　なんできみがここにくるわけ……？

　そんなの見ればわかるけどさ。

誤解しようがないくらい一目瞭然だけどね。

コートのフードを目ま深ぶかにかぶった飛燕フエイヤンは、他ほかのものには目もくれずにユリカの後ろまで一直線に突っ走ってゆくと、飛びかかるようにして椅子の背もたれにのしかかった。

「よォッ！　元気してっかよ、ユリィ！」

「……げ、元気も何も、昨日会ったばかりじゃない。あのあとも、勝手にちゅいてきて……」

多少の紆う余よ曲きよく折せつはあったものの、昨夜の紙切れ探しの組み分けは、最終的にマリアローズとピンパーネルとアジアン、カタリとユリカとヨグ、サフィニアとベティという形に落ちついた。不気味なことに昼飯時ランチタイムの全メンバーの全ねぐらを把は握あくしているヨグが簡単な地図を作り、各組が地域ごとに受け持ちを決め、それぞれ捜そう索さくして終しゆう了りようし次し第だい、解散して、翌日集合という流れだったので、成果やその間何があったかなどは、さっき事務所についてからユリカやヨグ、ベティに聞いた。どうやらユリカの組は大変だったみたいだ。紙切れの捜索自体は着々と進んでつつがなく終わったらしいが、飛燕フエイヤンがつきまとってきてものすごくわずらわしかったらしい。かく言うマリアローズも、移動の間にふと薄うす気き味みの悪い視線を感じて、いやな気分になったりもしたけれど、さいわい実害はなかった。まあ、飛燕フエイヤンについては、ユリカが昨日着ていたシリアルキラーの服はどうしたのかとか、二人はいったい何をしていたのかとか、そもそもどういう関係なのかとか、そのあたりを考えると、単純に目め障ざわり・厄やつ介かい者・邪じや魔ま者・小猿扱あつかいすることもできないのだが、やっぱりうざい。

「ンだよォ。ンなことゆーなや。昨日も今日も会えたっつーのは悪いことじゃねーだろ。しばらく会えなかったんだしよォ」

なんか、やたらと馴なれ馴れしいし。

その声がうざい。

背もたれのてっぺんにお腹なかをのせて、床ゆかに届かない足をぶらぶらさせながら器用にバランスをとり、ユリカの髪かみの毛をさわろうとして手を振り払はらわれ、それでも懲こりずにまたふれようとするあたりもうざい。

　そこまでされて、迷惑がりながらも、突き放そうとはしないユリカもどうかと思う。

「べちゅに、悪いとか……しょういうふうに思ってるわけじゃないけど……わたしだって、いろいろ忙いしよがしいの。やらないといけないことだって、あるんだから」

「オレだってあるよ？　だってオレ、ボスだもん」

「しょれだったら、昼間からこんなとこにきてるほど暇ひまじゃないんじゃないの」

「いっやー実際手下がガッタガタうっせェーんだけど、抜ぬけだしてきちった」

「きちった、じゃないでしょう！　しょういういいかげんな人、好しゆきじゃないわ！」

「えっ……」

　飛燕フエイヤンの動きがぴたりと止まった。

　ふん、ざまあみろ。

　カタリもマリアローズと同じ気持ちだったようで、ぷっ、と小さく吹ふきだした。

　飛燕フエイヤンは床に下りて椅子のすぐ脇わきにしゃがみこみ、フードをどけてユリカを見上げた。

「……ユリィ、オレのこと嫌きらいなん？」

「あ……あなたが嫌いとか、しょんなこと、わたしは──」

　ユリカはあからさまに狼ろう狽ばいしている。嘘うそでしょ？　もしかして、そうなの？　ユリカがあんな小こ猿ざるを。いやいや、そんなはずがない。いや、いいんだけど。それならそれで、ユリカの自由なわけで。ユリカだって人を好きになったりすることくらいあるだろうし。心は二十三歳の大人の女性なわけだし。でも、よりにもよって相手があの小猿だなんて。まあ、一応、飛燕フエイヤンもユリカと同い年だったはずだけど。それにしても、飛燕フエイヤンはない。いや、ないとかあるとか、マリアローズが決めるこ

とではないのだが、仮にその権利が自分にあったとしたら、絶対に認めない。だって、ユリカだよ？　僕の仲間のユリカだよ？　僕の友だちのユリカだよ？　僕にとってはお姉さん的な存在でもあるユリカだよ？　てゆうか、僕らのユリカだよ？　強いユリカを守ってあげられるくらい逞たくましくて、絶世の美少女といっても過言じゃないユリカと釣つり合うくらいかっこよくて、ユリカが背負っている大変な過去とか苦しみとか、そのあたりをちゃんと理解したうえで支えてあげられる、つつみこんであげられるくらい人格的に完成されていて、とにかくすばらしく素す敵てきな人ならともかく、飛燕フエイヤンなんて冗じよう談だんじゃない。マリアローズの勝手な思いではあるが、たとえばカタリだって賛同してくれるだろうし、ユリカとは親友同士と言ってもいいサフィニアだってうなずいてくれるに違ちがいないし、髭ひげがこの場にいたら今ごろ飛燕フエイヤンに筋肉決けつ闘とうを挑いどんでいるだろう。ユリカにはもっとふさわしい相手がいるはずだ。

　それなのに、どうしてユリカは飛燕フエイヤンに甘いのか。

「──しょうじゃなくて……ただ、責しえき任にん感かんがない、いいかげんな人は嫌いだから、しょのことを言っただけで」

「ンじゃァオレが嫌いってわけじゃねーの？」

「違うって言ってるじゃないの」

「なーんだ。よかった」

　飛燕フエイヤンはぴょんと立ちあがって、何を考えているのかユリカの隣の椅子に腰を下ろした。

「一いつ瞬しゅんユリィに嫌われてンのかと思っちったよオレ。あー焦あせった。よーかったァ」

「ええことあるかあァッ……！」

　カタリが大円卓の上をドタバタ駆かけていって飛燕フエイヤンの胸むな倉ぐらを引っつかんだ。行ぎよう儀ぎ悪いことこの上ないが、カタリがそうしなければマリアローズが一言もの申そうとしていたところだったし、今回ばかりは大目に見てやってもいい。

「ちゅうかお前じぶんなんでしたり顔でそこに座っとんねや！　関係ないやろ！　無関係やろが！　部外者やで！　まるっきり！　だ

いたいここにおることがおっかしいやろ！　わしらはな、べつに遊んどるわけちゃうんや！　いろいろあってな、真ま面じ目めにやで、深刻な問題抱かかえとってやな、わしらは必ずしも当事者っちゅうわけやないけど、それ解決したろ思てここに集まっとんのや！　お前じぶんは何やねん！　何しにきたんや！　うっさいしな！　ぴょんぴょこぽこぴょん飛び回りよってうざくてかなわんしな！　はっきしゆうて邪魔やねん！　帰れやお前じぶん！」

　途と中ちゆうで逆ギレするのではないかと予想していたが、意外にも飛燕フエイヤンはカタリの手を振ふり払うこともせずに最後までおとなしく聞いていた。

「──でェ？　テメーは何が言いてェーの？」

「なっ、何がやないやろ！　聞いとらんかったんかい！　帰れっちゅうたやんか！」

「やァ～だ、よ──ッと」

　飛燕フエイヤンが手て袋ぶくろをはめたままの右手でカタリの手をつかんだところまでは見えたが、そこから先は目にもとまらぬ早はや業わざというやつだった。気がつくと、カタリはフライパン上の魚の切り身のごとく見事にひっくり返されて、大円卓の上で仰あお向むけになっていた。飛燕フエイヤンの右手はまだカタリの手をつかまえている。それほど力を入れているようには見えないが、どうやらカタリの手首と肘ひじ、肩かたの関節はがっちり極きめられているみたいだ。あれでは身動きがとれないだろう。実際、カタリは、うごっ、げっ、ぶぐっ、と呻うめきながら必死に身体からだを動かそうとしているけれど、無む駄だなあがきをしているようにしか見えない。

「オレァ帰らねェ。なんでかっつーと帰りたくねェーから。それに、オレだってテメーらが何しやがってるのかくらいわかってっしな」

　飛燕フエイヤンはアジアンをちらりと見て唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせた。

「よーするに、昼飯時ランチタイム崩ほう壊かいの危機ってやつだろ？　テメーらのことァまったく知らねェーってわけじゃァねーしさ。なーんでＺＯＯと昼飯時ランチタイムがつるんでんのかっつー

あたりも、なァーんとなァーく想像はつくよ」

　悪戯いたずら小こ僧ぞうのような、いや、悪戯小僧を百倍小こ憎にくたらしくしたような飛燕フエイヤンのくりくり眼まなこがこっちを向いたので、いやな予感がした。

「テメーがアレだろ。虐殺人形カーネイジドールとつきあってて、そンで──」

「ち、ちがっ」

「フッ」

　あまりにもひどすぎる事実誤ご認にんに人が絶句している間に、アジアンのクソバカたわけが椅い子すから立ちあがって胸に手をあてた。

「ばれてしまってはしょうがないネ。やはり、見る人が見るとわかってしまうものなのかな。ただ、正確に言えば、これはマリアの名めい誉よのためにきちんと説明しておくけれど、ボクらはまだ一いつ般ぱん的につきあっていると言われるような関係じゃない。まだネ。あくまで、まだ、だヨ。マリアはそんじょそこらのふしだらで不純な者たちとは違うんだ。純じゆん粋すいで清純で純潔で、そのせいでちょっぴり奥手というかシャイなのサ。でも、大だい丈じよう夫ぶ。ボクはちゃんとすべてわかっているからネ」

　自分の言葉に陶とう然ぜんとしているらしいアホそのものも怖こわいけれど、ベティのつめたい、つめたすぎる眼まな差ざしも怖い。怖すぎる。てゆうか、理り不ふ尽じんじゃないか。なんで僕がベティに睨にらまれないといけないんだ。アホなことをのたまっているのはあのアホそのものであって、僕じゃない。僕はむしろ被ひ害がい者だ。ベティも昼飯時ランチタイムなわけだから、僕を氷の視線で射い貫ぬく前にアホな頭領マスターを諫いさめるべきだし、そうしてくれると僕としてもすごく助かるんで、どうかお願いします。

　どうもダメだ。こういうときはビシッと締しめて本題に立ち戻もどらせるのが、本来、マリアローズの役目だったりすることが多いのだが、調子が出ないなんてものじゃない。何しろ、おかしなことばかり起こったし、現在進行形で起こっているし、おかげで頭がやや混乱気味で、ツッコまないといけない相手も多すぎる。それに、

ベティが恐おそろしい。マジで怖い。そのうち殺されるんじゃないだろうか。なんで僕がこんな目に。いつもならここで、ふざけないでよ、というかんじで開きなおることができるのに、今は無理だ。ため息しか出てこなくて、いっそのこと何もかも放ほうりだしてしまいたい。さすがにそれはできないけれど。

「それでは、ここは僕が一つ」

　首筋の後ろあたりがぞわりとした。

　ヨグが右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直しながらマリアローズを見て、唇を笑う形にゆがめてみせた。

　昨日のコップの件といい、アジアンにさえ気づかれないストーキングの技術といい、得体の知れない男だ。それでは、ここは僕が一つ、という今の台詞せりふも、まるでマリアローズの思考を読みとったうえで、あとを受けて言ったかのようだった。考えすぎかもしれないが、薄うす気き味みの悪さはぬぐい去れない。

「──話をまとめさせていただきましょう。飛燕フエイヤンさん。少なくとも現時点では、我々昼飯時ランチタイムとあなたの＊シリアル・キラーズ、それとも龍州連合と言うべきでしょうか、ともかくあなたがたとの間に直接の利害関係はない。僕はそう認識しているのですが、間ま違ちがっていますか」

「いーや。間違っちゃねェーと思うぜ。──こらカジカ、暴れんじゃねーよ」

「ぶべっ」

「そうですか。それはよかった」

「たまァーにニアミスしたり譲ゆずりあいしたりはしてたみてェーだけどよォ。ＳｍＣの残党狩がりとかでな。テメーらもやってやがっただろ」

　そういえば、昨日、荊王ジンワンもそれらしきことを言っていた。たしか、ＳｍＣの生き残りを捜さがしだして殺しているとか、自分たちと同じことを考えている者もいるようだとか。つまり、その同じことを考えている者たちというのが昼飯時ランチタイムだったのか。

マリアローズはアジアンを見た。アジアンはそっぽを向いて、そのことにはふれたくない、ふれられたくないという態度だ。そう━━僕だって、できればふれたくない。なかったことにして、忘れてしまいたいけれど、跡あと形かたもなく消し去ってしまえるのでなければ意味がない。アジアンと顔をあわせるたびに、気になって気になって仕方なくて、でも、問い質ただすことがどうしてもできなくて、そんな状態がいつまでもつづくなんて、我が慢まんできない。

だから、いっそのこと、さよならしてしまおう。

蓋ふたをされている過去があることに、僕は気づいてしまった。蓋を外して中をのぞいたら、とんでもないことになるに違いないから、見たくなかった。無視したかった。僕にはもう仲間がいる。友だちだっている。あえてつらい思いなんかしなくても、楽しく生きてゆける。それでいいじゃないか。何が悪い。悪くない。ぜんぜん、ちっとも悪くないはずだ。

もしこんなことになっていなくて、普ふ通つうにアジアンと再会していたら、僕はちゃんとさよならを言えただろうか。

「昼飯時ランチタイム、かァ」

飛燕フエイヤンの声が妙みように大人びて聞こえた。

年ねん齢れい的には大人なので、何もおかしいことはないのだが。

「テメーらってケッコー変なクランだよなァ？　頭数はめっちゃ多いっつーわけじゃねェーけどそれなりにいる。クランの頭ァ張っててもおかしくねェーよォーな人材もゴロゴロしてやがる。そォーかと思えば、落書き野や郎ろうだのゲイバーの店長だのもいたりする。侵入者クラッカー系ってわけでもねェーよな？　それなのに、所帯の規模のわりに特定の縄なわ張ばりもねェー。これでもいろいろ調査っつの？　したんだけどよォ。ＳｍＣと何やかんやあったのも、クァラナドの店がらみだって話だろ。それも、べつにテメーらの息がかかってる店ってわけじゃァねェー。行きつけってだけだ。ソコをＳＩＸが潰つぶそうとした。当時のヤツらが本気になったら、そりゃァー店一つ潰すくらいわけねェーよなァ？　力ずくで守ろうとしたらしたで店としてはやってけねェー。ただ、ＳＩＸもそンときは本気じゃなかったんだろ。脅おどしだよな。テメーらと正面きってやりあう気もなかった。テメーらと手ェー組みたがってた

んだよな。同盟っつの？　そーれがなんでまた、テメーらがヤツらの下につくよォーなかんじになっちまったのか、そのあたりはわっかんねェーけど、オレァ思うんだよね。テメーらがマジクソでＳｍＣとぶつかってたら、どうなってたかなってな。タブンさァ、惨ざん敗ぱいっつーことはなかったんじゃねーの？」

「そうかもしれませんね」

　ヨグは大円卓の上に肘ひじをついて両手を組みあわせた。

「ですが、無傷ではすまないでしょう。あなたはずいぶん僕たちのことを調べてらっしゃるようなので正直に言いますが、昼飯時うちには戦せん闘とうに向かない人も大勢いますから」

「バトルに犠ぎ牲せいはツキモンだろ？」

「僕たちはべつに戦いたくて集まっているわけではありませんので」

「わっかんねェーなァ。バトりたくなくったってバトらなきゃなんねェーときってのはあンだろ。ここはエルデンだぜ？　オレらを守ってくれンのはオレらの力だけじゃん。ソレがオレァ気にいってんだけどよォ。ぶん殴なぐられンのがやなら、先にぶん殴ってふん縛じばるっきゃねェーわけじゃん。なァカジカ、そォーだよなァ？」

「そんな単純な──づげっ」

「だーかーらッ、暴れんなっつーの」

「たしかに、ここはエルデンだわ」

　答えたのはヨグではなくベティだった。

「いろいろな理由で、こんな街でしか生きられない者がたくさんいる。たとえ、そのための力がなくてもね。あなたは変って言ったけど、ようするにあたしたちは単なるあぶれ者の集まりよ。他ほかに行き場がなくて、居場所もない、寂さびしい連中が身を寄せあってるのって、そんなにおかしい？」

「おかしかねェーけどよォ。そんなんでまとまれるモンかねェー。何ッかヤッパある程度は必要じゃん？　共通の利害とか目的とか」

「それと同じようなことを言ってたやつもいるけどね。あいにくここにはいないけど、そのわりに抜ぬけるわけでもなく、最初から今までずっと昼飯時うちにいるわよ」

「ふぅ~ん」

　飛燕フエイヤンは新しい玩具おもちやを与あたえられた子供のように目を輝かがやかせて唇くちびるをぺろりと舐なめると、古い玩具には興味を失ったのか、カタリの手を放した。

　カタリは「ほよ？」と不思議そうに半魚眼を見開いてあたりを見回し、ようやく自由になったことを理解したのだろう、大円卓の上をゴロンゴロン転がって飛燕フエイヤンから距きょ離りをとり、ぱっと飛び起きて身構えた。

「──よ、よくもやってくれよったのうワレェ！　せやけどなあ、ホンマの勝負はこっからやでえ！　漢おとこカタリ大逆ぎやく襲しゆう劇の開幕や！　しゃあこらぁっ！　かかってこいやボケェッ！」

「ヤッパ変だわ、テメーら」

　飛燕フエイヤンは半魚人には目もくれずにアジアン、ベティ、ヨグを順々に見てニンマリ笑った。

「サミスィー連中の集まりってわりにゃーよォ。ワッサリー目置かれまくってンしな。昼飯時ランチタイムの虐殺人形カーネイジドールっつったら知らねーヤツのほォーが珍スィーぜ？　垂れ目のベティ。テメーもワリと有名だよなァ。鬼スッゲー魔ま術じゆつ士しらしーじゃん。つーか魔導士ウイザードっつの？　そんなん名乗れる魔術士はあんまいねェーんだろ。オレも欲スィーんだけどよォ。強ェー魔術士の手下」

「力のある魔術士は、弟で子しをとることはあっても、誰だれかとつるむのは好まない傾けい向こうが強いから、なかなか難しいかもしれないわね。それこそ、利害が一いつ致ちしてれば、共通の利益のために手を組むっていうのは十分ありうるでしょうけど」

「そォーんな魔術士とかよォ。その昔クラン率いてたヤツとかな。〝百本フアントム・塚のオブ・ハンドレ怨霊ツドグレイヴ〟とかよォ。元カジノオーナーのビル持ちとかな。名うての殺し屋兄妹とかよォ。その筋じゃァ名が知れてるっつーか悪名高い高利貸し女と

かな。なァーんで一つの昼ク飯ラ時ンっつー器うつわにおとなしく収まってやがンのかわからねェー。テメーら実際ムチャクチャだよ」

「ほんとによく調べてるのね」

「情報は金よりか貴重だかンな。金が欲しけりゃァ持ってるヤツ見っけてフルボッコして奪うばっちまやーいーけど情報は必ずしもそォーはいかねェ。金にもなるしな。軽視はしねェーよ」

　そんなことを言ったあとに、キャハハハ、なんて笑うものだから拍ひよう子し抜ぬけしてしまいそうになるが、この飛燕フエイヤンという男、ただのやかましい腕わん力りよく自じ慢まんの小こ猿ざるだと思ったら足あし下もとをすくわれるかもしれない。荊王ジンワンと闇やみ市いちをとりしきっているのは伊だ達てじゃないということか。智ち者しやと呼びうるかどうかは微び妙みようなところだけれど、少なくとも見た目どおりの単純バカではないようだ。

「オレんとこはよォ。頭数はケッコー揃そろってンぜ。実数は言えねェーけどな。動かせる兵隊の数はまァーまァーっつーとこじゃねェーの？　オレの指一本でよォ。出入りってなるとまた違ちがうけどな。そォーじゃなけりゃァー百や二百は余よ裕ゆうだよ。龍州人の流れ者ってワリに多いんだよなァ。食いつめてるヤツ、バッツバツ手下にしてやってっからよォ」

「キミは何が言いたいんだ」

　口を開いたアジアンは、マリアローズが見たことのない表情をしていた。いや、顔つきは普ふ通つうというか、平静というか、無表情ではないが、それなりに落ちついているといったかんじで、とりたてて何がどうと言うほどのものではなかった。にもかかわらず、ものすごい迫はく力りよくだった。マリアローズは思わず身み震ぶるいした。そんなことが起こるはずはないけれど、事務所の中の空気が瞬しゆん時じに凍こおりついてしまったかのようだった。この威い圧あつ感かんにさらされて、まったく臆おくする様子もなく平然としている飛燕フエイヤンは、とてつもなく鈍にぶいのか、よほど肝きもが太いのか。

「この機会に、テメーらに手ェー貸して恩売っとくってのも悪くねーかもしンねェーな、とか思ってよォ」

「ボクらに恩を売ったところで、キミらが得をすることはないと思うけどネ」

「ンなこたァーねェーよ。共通の敵になりそォーなヤツらもいるわけだしよォ」

「こちらとしては積極的に敵対するつもりはないヨ」

「テメーらの都合は関係ねェーだろ。ヤツらにはよォ。ンなこたァーテメーらだってわかってやがンじゃねェーのか。あの銀ピカ軍団ときたら融ゆう通ずうってモンがマルッキシききゃーしねェーかンな。テメーらもオレらも目の仇かたきにしてやがる。今はまだ冷戦っつーカンジだけどよォ。いつかやりあわねェーとなンねェートキがきそォーな予感がビシバシすンぜ」

「そうしたらボクらは尻尾しつぽを巻いて逃にげるサ」

「どこ逃げンだよ。つーかこの街にしか居場所がねェーんじゃなかったっけ？」

「キミに心配してもらうことじゃない。ボクらのことはボクらがどうにかする。キミらもそうだろう」

「手を組むことはできンじゃねェーの。利害が一致してりゃァーな」

「利用する、の間違いじゃないのか」

「だ、か、らァ。ココでテメーらに貸し作っときゃァーよォ。いざってトキ返してくれって話になンだろ。ソイツァ利用でも何でもねェー。仁義の問題だよ」

「ずいぶんざっくばらんに物を言うネ」

「回りくでェー言い方は嫌きらいなんだよ。言葉ァ飾かざったって腹ン中が一いつ緒しよなら意味ナシオだろ。テメーらにとっても悪かねェー話だと思うけどなァ」

「せっかくだが──」

「いいかげんにして」

飛燕フエイヤンの申し出を断ろうとしたのだろうアジアンが、口を閉とざしてビクッと身体からだを震ふるわせた。アジアンだけではない。飛燕フエイヤンも、それから、今の話とはまったく無関係のピンパーネルまで全身を強こわ張ばらせている。ユリカの声こわ音ねは、まったく怒おこっていないわけではないけれど、怒ど髪はつ天てんを衝ついているというほどではない、冷静といえば冷静な、静かにたしなめるような調子だったのだが、それでも彼らにとっては昨夜の出来事を思い出させるのに十分だったのだろう。

ユリカ・〝最強ストロンゲスト〟・白雪スノーホワイトは大円卓に両手をついて立ちあがり、真しん剣けんというよりも真しん摯しで純じゅん粋すいで美しい、清せい冽れつなまでに澄すんだ目で全員を見回した。

「恩を売るとか、利害とか、仁義とか、しょんなことを言ってる場合じゃないでしょう？　わたしは直接しえちゆは面識がないに等しいけど、昼飯時ランチタイムの人たちにとっては大切しえちゆな仲間が大勢いなくなって、今、どこにいるのか、どうなっているのかもわからない、しょんなときに、あなたたちはいったい何をやってるの？　しょんなことを話してる暇ひまがあるなら、考えないといけないことは、やるべきことは、他ほかにたくしゃんあるはじゅよ。しょれから、カタリ、いちゅまで円えん卓たくの上にいるの。下りなしゃい。お行ぎよう儀ぎ悪い」

「……へ、へい。すんまへん」

「アジアンしゃん。あなたもあなたよ。しゃっきから黙だまってばかりいて、喋しやべりだしたと思ったら、飛燕フエイヤンのくだらない話にちゅきあったりして。昼飯時ランチタイムはあなたのクランでしょう？　頭領マしゆターのあなたが率しよつ先しえんして動かないでどうしゅるの？　わたしの言ってることはおかしい？　何か反論はある？　あれば聞くけど？」

「……い、いや。ないヨ。まったくもって、キミの言うとおりだ」

「わかればいいわ。しょれと、飛燕フエイヤン。他人の弱みにちゅけこもうとしゅるような人、わたしは大だい嫌きらいなの。あなたにはあなたの立場があるし、きれい事ばかり言っていられないのかもしれないけど、しょんなのわたしの知ったことじゃないわ。困っている人に手をしゃしのべる以外の魂こん胆たんがあってここにいるなら、今しゅぐ帰りなしゃい」

「……えェー。だってさァ、オレ……」

「ぐじゅぐじゅ言い訳して自分を正しえい当とう化かしようとしゅる人も嫌い」

「わ、わァーたよォ。しねェーよォ。言い訳なんか。わァーかァーりましたッ。ユリィと遊びてェーし、純粋なキモチでキチキチ手伝わしてもらいまァーすッ」

「遊びじゃなくて、いなくなった人たちを捜さがしゅの！」

「はァーい、イッショケンメー捜しまァーすッ」

「もう……」

　ユリカは不満げだが、はっきり言ってかなり見事な手並みだったとマリアローズは思う。よくよく考えてみれば、あまりそうは見えないものの、相手は今や闇市のボスの片割れである男と、その筋では知らない者はまずいないという虐殺人形カーネイジドールなのだ。その二人にあっさりと非を認めさせ、はっきりと謝らせて、おとなしく従わせるなんて、並なみ大たい抵ていじゃない。さすが最強。そんな離れ業わざを演じてみせられるのはユリカくらいのものだろう。これで伝説がまた一つ増えたわけだが、とにもかくにも、飛燕フエイヤンのせいでしっちゃかめっちゃかになりかけていた状じよう況きようが落ちついてよかった。アジアンのバカも、ユリカのおかげでようやく自分の責任や義務を思い出したようだ。

「ところで、さっきも言おうとしたんだが──せっかくやる気になってくれているところ、申し訳ないんだけどネ」

　アジアンの指が大円卓の上の紙切れを弾はじいた。

「ボクなりに、あの男が残した文面の意味についていろいろと考えてみたんだ」

「あの男ォ？」

　首をひねった飛燕フエイヤンは、今回の事件の首しゆ謀ぼう者しやらしい男のことだとベティに説明されてもピンとこないようで、まだ口を尖とがらせている。

「ルヴィー・ブルーム。気のきいた魔ま術じゆつ士しの間では〝魔

人アモン〟って呼ばれてるわね。憑ひよう依い魔術っていう魔術を生みだしたとか、合成獣キマイラ使いだとか、言われていることはたくさんあるけど、あたしが知ってるかぎりでは正体不明。姿を見たって話も聞いたことがない。存在を証明する証しよう拠こもない。でも、魔術士の間ではメジャー。その力を疑う者もいないわ。変に思うかもしれないけど、魔術士の感覚ではべつにおかしくないのよ。だって、本当に力のある魔術士なら、自分がいたという痕こん跡せきを消すくらいわけないもの」

　ぞっとする話だ。その話をしているのが、あの閃せん光こうの魔女マチルダの弟で子しで、少なくとも見た目は若いのに堂々と魔導士ウイザードを名乗っていて、しかもどうやらマリアローズにはいい感情を持っていないらしいベティなので、余計に恐おそろしい。

「──まあ、そんなとんでもないやつがどうしてこの件に関かかわってるのかなんて、あたしにはさっぱりだけど」

　ベティは肩かたをすくめて癖くせのある髪かみの毛を揺ゆらし、横目でちらりとアジアンを見た。

「ちょっとした知りあいでネ」

　アジアンはベティの視線を遮さえぎるように薄うす青あお色の目を伏ふせた。

「できれば二度と会いたくなかったけど、そうもいかないみたいだ」

「やっぱりいたのね。魔人アモンは」

「その名についてはよく知らないし、キミが思っている男と絶対に同一人物だと断言はできない。ただ、あの筆ひつ跡せきはボクが知っているルヴィー・ブルームのものだ。それは間ま違ちがいない。そして、たぶん、あの文章はすべてあの男がボクに向けて書いたものだ」

「なるほど。ルヴィー・ブルームからあなた宛あてのラヴレターというわけですか」

　ふざけているのか真ま面じ目めなのかよくわからない口調でそんなたわけたことをぬかしたヨグを、アジアンは完全に無視した。

「深い意味なんてない。もちろん暗号でもない。おそらく、あれは全部そのままの意味だ。思わせぶりで、いかにも何かがひそんでいるように見えるけど、実際は何もない。わざとそういう文章を残すことでボクらを振ふり回して愉たのしんでいるんだ。あの男が考えそうなことだヨ」

「性格悪っ……」

　思わず呟つぶやいてしまった。

　アジアンはマリアローズに顔を向けて少しだけ笑った。苦い笑いだった。むしろ、苦しそうですらあった。

「そう。あの男は最低だ」

　エルデン流に超最低ＳＵＣＫとかクモソウ野フ郎オとか、普ふ通つうに屑くずとか塵ごみとかボケとか死に腐ぐされとか、吐はき捨てるように言うよりも重みを感じた。いったいルヴィー・ブルームという男とアジアンの間に何があったのか。最低という言葉だけではうかがい知るすべがないけれど、よほどのことがなければあんな表情であんな言い方はしないだろう。

「……でも、さ。そのままの意味ってことは—」

　u-d'on'hafto-luk'abaufor-me.

　わたしを捜し回る必要はありません。

　sit-wizau-muvin.

　動かないで座ってなさい。

　ask'me-a'gud'metho.

　いい方法をわたしに尋たずねなさい。

「こっちからは何もしなくていい……？」

「そういうことになるネ」

　アジアンは顎あごを引くようにうなずいた。

「ボクらが何かしなくても、あの男はじきに動く。それまでじっと

待っていろと言いたいんだろう。ボクを赤子扱あつかいしている文章もある。どうせ何もできまいと高をくくっているんだヨ。ボクを卑いやしめて喜んでいるのサ。そういう男だ。すべて自分の思いどおりになると信じて疑わず、自分の掌てのひらの上に収まらないものなどないと勘かん違ちがいしている。こぼれ落ちるものがあれば、それは自分があえて捨てたのだとあの男は言い張るだろう。おまえは逃にげたのではなく、自分が逃がしてやったんだとネ。傲ごう慢まんで、尊大で、不ふ遜そんで、驕きよう慢まんで、詭き弁べんを弄ろうするのが得意で、他者を玩もてあそぶためだけに生きているような男だ。あの男以外の全存在にとって、あの男は災さい厄やく以外の何ものでもない。最悪な男だ」

刺とげ々とげしく並べられた言葉とは裏腹に、口調は淡たん々たんとしていた。単なる客観的な事実の羅ら列れつにすぎないようにさえ聞こえるほどだった。そこまで無理やり抑よく制せいしなければ、爆ばく発はつしてしまいそうな感情がアジアンの中にあるのかもしれない。それは、だが、果たして怒いかりだけなのか。違うのではないか。

マリアローズの目には、アジアンが怯おびえているように見えて仕方ないのだ。アジアンは、ルヴィー・ブルームという男を憎にくんでいる以上に恐れているのではないか。憎ぞう悪おしていることは認められても、恐きよう怖ふしていることは認められない、もしくは認めたくないのではないか。さらには、憎しみや恐れだけではない、もっといろいろな思いが複雑に入り組んでいて、アジアン自身それを持てあましているのではないか。

根こん拠きよと言えるような根拠はない。

気のせいかもしれない。

でも、あのバカ、どうしてあんなに心細そうにしてるんだろう。

マリアローズ以外、そんなふうに感じているような様子はないので、やっぱり思いすごしだろうか。

なんで自分がそう思うのかも、よくわからないし。

――てゆうか、僕、何あのバカのことじっと見つめたりしてるんだ。

マリアローズは目をつぶって首を振った。

気持ちが落ちつく前にドアを叩たたく音がした。

もちろん事務所のドアだ。誰だれだろう。とりあえず仲間ではない。仲間なら、ノックなんかせずに入ってくる。それに、トマトクンは風か邪ぜを引いて家で寝ねているはずだし、サフィニアは付きっきりでその看病をしているはずだ。きゅーが家から出ることはめったにないから、それもまず考えられない。とはいえ、ここは魔ま導どう兵へいたちに守られている王立銀行の中だ。マリアローズが知っているかぎりでは、今までＺＯＯのメンバーの随ずい伴はん者か客人としてではなく事務所にたどりついた者は一人しかいない。まさか、あのちんまりいんちき魔術士がまた迷いこんできたんじゃ。いや、それはない。ないと思いたい。じゃあ、いったい誰が。

カタリが椅い子すから立ちあがってドアに近づいていった。

「出るで」

ノブに手をかけて振り返ったカタリに、うなずいていいものかどうか、マリアローズには判断がつかなかった。迷っている間に、ユリカが大円卓に立てかけてあった極限クライマツクス九手棍ナインボールをつかみ、ピンパーネルは腰こしを浮うかして短たん剣けんの柄つかに手をのばした。飛燕フエイヤンも、椅子に腰かけたままだが、いつでも飛びだせそうな体勢だ。ベティはただドアを見つめている。ヨグも同じだ。事務所にいる全員を見回してから、アジアンがゆっくりと首を縦に振った。

「鬼おにが出るか、蛇じやァが出よるか──」

カタリはノブを少し回したところでいったん手を止めて、鼻を鳴らした。

「まるっきり予想もできへんモンが出るかもわからんわけやし、考えても無む駄だやな」

ドアが開かれた。

たしかに、予想外だった。

正直、どう反応していいかわからない。

　何だろう。

　それはどうやら生き物らしい。大きさは人間くらいで、服を着ている。黒いスーツを身につけ、ネクタイを締しめているけれど、人間の服のようで、絶対にそうではない。だって、体型、とは言えない、身体からだの構造がそもそも違うからだ。あの身体に合う人間の服は、世界中どこを探しても見つからないだろう。

　そいつの胴どう体たいは卵のような形をしている。

　脚あしは三本だ。どの足にもぴかぴかの革かわ靴ぐつを履はいているけれど、爪つま先さきが不自然に大きく広がっている。

　卵の両りよう脇わきから垂れ下がっているかのような細長い腕うでは二本だが、箱形の鞄かばんのようなものを抱かかえている右腕を見ると、人間のようなちゃんとした関節を備えているとは思えない。ホースみたいにぐねぐねしたあの腕を腕と呼んでいいのかどうか。腕の先に手らしきものはついているものの、掌が妙みように
のっぺりしていて平べったく、指はやはりホースのようだ。

　やつのやけにつるんとしていて真っ白い頭的な部分は、スーツの襟えりぐりから突つきだすというより盛りあがっている。その真ん中で大きな目が、しかも一つだけの目が見開かれていて、そのすぐ下に裂さけ目があった。横なら、なんとなく口かな、と思うところだが、縦の裂け目だ。その裂け目がぱくぱく動いて声を発する様子は、結構不快かもしれない。

　実際、かなり気持ち悪かった。

「どもー。初めまステー」

　しかも、わりと渋しぶい声だし。それなのに、ノリは軽いし。だいたい、普ふ通つうに人間の言葉喋しやべっちゃってるし。ちょっと訛なまってるけど。

「わたくス、アンナクロマルベルラスゼルフォンスと申スます。
ちょっくら長いで、アクゼルと呼んでくだスァい。あぅッ、紹しよう介かいが遅おくれまスた。そんな遅れてもねッスけど。うスろに連れのモンがおります。ほれ、自己紹介スろ」

　アクゼルはそう言うなり左に移動した。三本の脚がしゃかしゃか動くさまは、想像以上に奇き怪かいでおぞましかった。アクゼルの

後ろに隠かくれていた連中も、なかなかに奇々怪々だった。そいつらはいずれもアクゼルより小さくて、なかには掌てのひらにのりそうなサイズのものもいたが、皆みな、アクゼルと似たような黒い服を着て、ネクタイを締めていた。身体の形もてんでんばらばらで、服を着ること自体が大きな挑ちよう戦せんじゃないかと思えてしょうがないやつもいた。一つ目のやつもいれば、二つの目が縦に並んでいるやつもいたし、三つ以上の目を持つやつもいて、目らしきものが見あたらないやつもいた。毛むくじゃらのやつは、あの黒い生き物を連想させた。無毛でつるんとした肌はだを持つやつがいれば、鱗うろこのような肌をしたやつもいた。そんなやつらが一いつ斉せいではなく微び妙みように時間差で各自の名前らしきものを言った。マロビエギスタトンダートベルゲスパルソキアヒンデルビーミジョスタンカールヤイナンクレイツトムクレイストビエールアンジルルシュトラムト──って、聞き分けられるわけないじゃないか。

　アクゼルがもとの位置に戻もどって一礼してみせた。

「全員ひっくるめてアクゼル・アンド・アンダーリングスと申スます。ＡＡＡつーことなンで、トリプルエー、エースリー、またはトリプルエースとかって略スてもらってもわたくスとしてはかまいません。今考えたんスけど。すンません。そんで早さつ速そくなんスけど、準備していいスか。いいスね。はい。通スてもらいます。そこ邪じや魔まっス」

「──お、のわっ……！」

　アクゼルの手に押しのけられて尻しり餅もちをつきかけたカタリが、なんとか踏ふんばって腰から愛用の変形斧おのハノサンとホノゴを抜ぬいた。

「ま、待て待て待てえええい！　待たんかああいっ……！　いきなり何やねんお前じぶん！　ちゅうかな、何やねんっちゅうかまず何なんやっちゅう話や！　ナニモンやねん！」

「わたくスは、アクゼルと申スますが」

「名前なんかどうでもええねん！　もう聞いたからわかっとるし！　ナニモンっちゅうのんはそんなんちゃうくてな、つまり、なんちゅうんか、ほれ、あるやろ！　人間とかな！　半魚人とか！　そのあたりからして不明すぎやろがお前じぶん！」

「そんなんわいかてアクゼルでおまとしかゆえまへんがな」

「な、訛りが変わっとる……！　しかも、イズルハ訛りやない……！　そ、それはまさかああああ！　ケメック訛ァァァーりィィ……！」

「どうでもええがな、そんなん。なあ、せやろ。時間の無駄や。通してもらいまっせ」

　アクゼルがカタリを無視して事務所の中に入ってくると、他ほかの連中も列をなしてぞろぞろついてきた。これは、でも、総力を挙げて食い止めるべきではないのか。そう思わないでもなかったが、猛もう然ぜんと席を立ってやつらに襲おそいかかる気にはどうもなれなかった。一つには、連中からは敵意かそれに類するものが微み塵じんも感じられなかった。どこからどう見てもあやしいし、まさしく正体不明だが、あいつらが危険だとは思えない。街角でいかにも人ひと馴なれしていそうな猫ねこを見かけたとき、警けい戒かい心をあらわにして身構える者はあまりいないだろう。とはいえ、おとなしそうな猫に見えてじつは凶きよう暴ぼうきわまりないボス猫かもしれないし、猫の皮を被かぶった猫以外の何かかもしれない。というか、そもそもあいつらは猫じゃない。気を許してはダメだ。いや、許してはないけど。やっぱり、追いだしちゃったほうがいいような。でも、連中、結構な数がいる。もし本当は危険な生物たちだったら、やばいかもしれない。少なくとも、マリアローズ以外が排はい除じよに動いたほうがいいのではないか。

「よい壁かべですな」

　マリアローズがぐずぐずしている間に、アクゼルは事務所の壁をぺたっとさわって立ち止まり、窓のほうを見て眩まぶしそうに一つ目を細めた。

　てゆうか、訛りがきれいさっぱりなくなってるんですけど。

「ベルゲスパルソキアヒンデルビーミジョスタンカールヤイナンクレイツトム、暗くしておくれ。こう明るいと上映には不都合ですからな」

「……上映……」

　呟つぶやいたのはアジアンだった。

　でも、おかしい。アジアンはジョウエイとかいう耳慣れない言葉の意味を尋たずねようとしたわけではないようだった。そういう口調ではなかった。アジアンは知っているみたいだった。ただ、その言葉をここで耳にするのが意外で、驚おどろいているというかんじだった。だいたい、アジアンが今まで無言でアクゼルをじっと凝ぎよう視ししていたのも変だ。もしかしたら、アジアンはアクゼルの正体について何か心当たりでもあるのではないか。きけなかった。それより早く、アクゼルの連れたちが動きだした。というよりも、彼らはえらく素す早ばやくて、気がついたときにはもう、事務所の中は真っ暗になっていた。は？　真っ暗？　なんで……？

　窓を見て、種と仕し掛かけがわかった。窓に何かが貼はりついているのだ。ただ、外の明かりが少し透すけている箇か所しよがそこかしこにある。目を凝こらすと、それは──彼らだった。例の生き物たちの一部が、こう、自分の皮を薄うすく広くのばして、ぺたっと窓に貼りついているのだった。おそらくマリアローズと同じことに気づいたのだろう、カタリがウッヒィィッと奇き声せいを発した。ユリカが息をのむ音も聞こえた。飛燕フエイヤンは、暗ェーなァヲイ、とひねりのないことを言っていた。それから間もなくだった。ブツ、プツ、と何かが切れるような音がして、さっきアクゼルがさわった壁に白い横長の長方形が出現した。それは光だった。いつの間にか壁と大円卓の間くらいの位置に椅い子すが置かれていて、座面の上に四角い物体がのっていた。光はアクゼルがさわって何かしているその物体から発せられているようだった。しかも、ただの光ではなかった。またブツッと音がして光の長方形が揺ゆれた。一いつ瞬しゆん、真っ暗になったあと、それは現れた。

　どこか、としか言えない。ピンク色とも赤とも紫むらさき色いろともつかない、生き物の臓物めいたものが敷しき詰つめられ、そこらじゅうに塗ぬりたくられたような、それは部屋なのか。わからないが、その床ゆかには丸みを帯びた円えん筒とう形の物体がたくさん生えていた。それらは半はん透とう明めいで、全面に血管のようなものが網あみ目め状に走っていて、そのてっぺんには見覚えのある黒くて丸い毛むくじゃらの生き物がうずくまっている。すべてに、だ。たしか、ナジだったか。あの生き物は一匹ぴきではなく、数匹でもなく、十匹、いや、それ以上いる。

　それにしても、あの円筒形の物体は何なのか。

　まるで疑問に答えるように、近づいてゆく。

　どんどん接近してゆく。

　もうすぐそこだ。

　ほとんど目の前にある。

　もしかしたらそれは、黄色っぽい、濁にごった、半透明の液体、そう、何らかの液体に満たされた、透明の容器のようなものなのか。

　その中に何かある。

　液体以外のものが。

　いや──、

　ある、というよりも、いる、と言うべきだろう。

「カイ……？」

　ベティの声だった。

　円筒形の物体の中で、膝ひざを抱かかえて丸まっているのは女のようだ。黒い髪かみは結構短めだが、タンクトップとショーツしか身につけていない。筋肉質ではあるけれど、体形は間ま違ちがいなく女性のそれだ。

　液体が濁っているのではっきりとは見えないが、女は目を閉じている。

　眠ねむっているのか。

　あのときのアジアンみたいに。

「──ひょっとして、いなくなった人……？」

「そうみたいね。断定はできないけど。でも、これって──」

「映写機だ」

　アジアンの声は微かすかに震ふるえていた。

「昔、よく見せられた。仕組みは知らないけどネ。現実にあるもの

を撮さつ影えいして、こんなふうに映すことができる装置らしい」

『──というわけだよ』

　また真っ暗になって、次の瞬間、別の景色が映しだされた。高い場所に住んでいるマリアローズには、それが何かすぐにわかった。エルデンだ。エルデンの夜景だ。どこかの建物の屋上なのか。いや、違う。そうではない。その男は瞬またたく星々よりもきらびやかな夜のエルデンを見下ろして、どこかに立っているのではなく、天と地の間に浮ういていた。

　男は夜目にも鮮あざやかな真っ白い服を身にまとっている。

　髪の毛も白く、肌はだも月明かりを照り返してぼんやりと青白く輝かがやいていた。

　逆光で、顔はよくわからない。

『アジアン。おまえは聡さとい子だから、もう理解しているだろうね。私がくどくどと説明する必要はおそらくないだろうね。そう期待しているよ。アジアン。おまえは決して私の期待を裏切らない子だからね。そんなおまえのことが、私は愛いとおしくて愛おしくてたまらないのだよ』

「迷めい惑わくな話だ」

『そんなに迷惑がらないでおくれ』

「──くっ……！」

　アジアンがこらえかねたように大円卓を叩たたいた。

　白い男はその反応まで見み越こしているかのように唇くちびるの両りよう端たんをつりあげた。

『おまえはいい子だ。素直で、従順で、憐あわれで、愛らしい、本当にいい子だ。私にこんなことを言われて、さぞかし腹を立てているだろう』

「立てていない……！」

『立てていない？　おまえの声が聞こえるようだよ。おまえは意

地っぱりだからね。知っているかい。おまえを意のままに操あやつるのはじつにたやすい。心配なところだ。誰だれかに騙だまされてしまうのではないかとね。気が気でないよ』

「……キサマが言うのか。それを、キサマが」

『私はいつもおまえのことを気にかけている。当然だろう？　おまえを逃にがしてあげたのは私なのだからね。私にも責任があるだろう？』

「ボクは、自分の意志で──」

『映写機で外を見せてあげただろう？　何度も。何度もね。おまえは外に憧あこがれていたね。口には出さなかったが、外へ行きたいといつも思っていただろう？』

「……ボクは……」

『そう仕向けた私にも、責任があるからね』

「……ボク、は……」

『どうすれば外に出られるか、これ見よがしに実演してみせたこともあっただろう？　あの道をおまえが通り抜ぬけられないなんて私は思わなかったよ。実際、おまえはできただろう？　おまえは私の期待を裏切らなかったね。外に出て、立派に生き抜いてきたね。成長したのだね。私は心配していたのだよ。やはりあんな場所にいてはね。おまえにはもっと広い世界を見せてあげたいと考えていたのだよ。私がおまえを連れだしてあげてもよかったのだがね。おまえには是ぜ非ひとも達成感というものを味わって欲しかった。自分自身で成し遂とげたのだというね。そうした体験がおまえには必要なのではないかと考えたのだよ。おまえなら大だい丈じよう夫ぶだと信じていた。そのとおりだったね。おまえはさまざまな経験を糧かてとして成長したね。それらは私一人では与あたえてあげられなかったものだ。おまえを逃がしてあげてよかったよ。期待どおりだよ。今のおまえには仲間までいる。大勢の仲間がね。私の目論見どおりだよ』

「──黙だまれ……！」

　アジアンは立ちあがって映写機をのせている椅い子すに駆かけよった。行く手を遮さえぎろうとするのかと思いきや、アクゼルは

何もしないどころかさっと身を退いた。アジアンを制止したのは白い男だった。

『壊こわさないでおくれよ。アジアン。映写機は貴重だからね』

「それが――」

　アジアンは何か言いかけて首を振ふった。

　映写機に手をのばして、それから、どうするのか。

　白い男は黙っている。

　しばらくの間、映写機から発せられているらしい風の音だけが聞こえていた。

　やがてアジアンが小さく息を吐はいてうつむいた。

　肩かたから力が抜けたように見えたので、壊すのはやめにしたらしい。

　その直後だった。

『偉えらいね。アジアン。我が慢まんすることを覚えたのだね。本当に、おまえは私の期待を裏切らない、いい子だよ』

　アジアンは顔を上げて白い男を睨にらみつけた。

「虫むし酸ずが走る……！」

『じゃあ、外で会おう。待っているよ。アジアン』

　ブツッ、と音がして光が失うせ、真っ暗になって、間を置かずにアクゼルの舎しゃ弟てい連中が次々と窓から剝はがれるようにして離はなれていった。

　事務所はまた昼間の明るさを取り戻もどしたが、妙みように日ひ射ざしが弱い。理由は明白だった。さっきまで晴れ渡わたっていた空が、どんよりと曇くもっている。風もかなりあるようだ。

「それでは外でわたくしどものご主人様がお待ちしておりますので」

アクゼルが箱形の物体を椅子の下に置いてあったやはり箱形の鞄かばんに収めて、事務所のドアを示してみせた。

「ちなみに、アジアン様、あなたがご主人様からの要よう請せいを拒きょ否ひなさいました場合、お仲間のお命は保証できかねますので悪あしからず」

「……ようするに、おとなしく言うことを聞けということだろう」

「平たく申しあげればそのようになりますな」

アクゼルはいやみたらしくホッホッホッと笑いながら舎弟連中を引き連れて事務所から出ていった。まだくわしいことまではわからないが、昼飯時ランチタイムの人たちはあの白い男、たぶんルヴィー・ブルームに生せい殺さつ与よ奪だつの権を握にぎられていて、こちらとしてはあちらの要求を一いつ切さい拒きょ絶ぜつできないという状じょう況きょうのようだ。でも、それってよく考えるまでもなく絶望的じゃないか。あの男とアジアンがどういう関係なのか、やっぱりまだわからないけれど、極きょく端たんな話、おまえの首を差しだせば仲間を返してやる、とでも言われたらもう終わりだ。拒こばめば仲間が殺される。受け容いれたら死ななければならない。しかも、あの男が約束を守りそうな人間だとも思えない。

知らないけどさ。

なんか長々と喋しゃべりまくってたけど、何しろ事情がわからないから、ああ、なるほど、そういうことね、みたいにうなずけるはずがないし、ルヴィー・ブルームがどういう男か、あれだけで判断するのは無理だけど。

でも、間ま違ちがいなくやなやつだ。

もしかしたら、マリアローズが今まで会った中でも一、二を争うくらい、ものすごくイヤなやつかもしれない。

今、気がついた。手が震ふるえている。鳥とり肌はだも立っていた。自分では確かく認にんできないけれど、顔が青ざめているかもしれない。くらくらする。何だ、あいつ。何なんだ、あの超最低ＳＵＣＫ野や郎ろう。くそ。最悪だ。マジで最悪じゃないか。よりにもよって、あんなやつが相手だなんて。あんなやつの言うとおりにしないといけないなんて。しかも、あの男はたぶん、それもこれも

ぜんぶひっくるめて、ざまあみろと嘲わ笑らっている。こっちが苛いらつけば苛つくほど、むかつけばむかつくほど、憤いきどおれば憤るほど、きっとあの男は、期待どおりだよ、とか言って喜ぶんだ。わかっていても、こっちとしては我慢なんかできないんだ。そうすると、我慢できないだろう、目論見どおりだよ、とあの男は嬉うれしがるんだ。あの男はおそらくそういうやつだ。死ぬべきだ。あんな男は今すぐ雷かみなりに打たれて死んでしまえばいい。いや、それよりもっといい死に方がある。道のど真ん中で、公衆の面前で、思いっきりバナナの皮を踏ふんで滑すべって転んで、地面に頭をボッコリぶつけて死んじゃえばいいんだ。あんないやらしい男にはそれくらいがお似合いだ。

　わかっている。そんな都合よくバナナの皮なんて落ちていない。もし落ちていたとしても、うっかり踏んでしまう人は少ない。踏んだとしても、目に焼きついて離れなくなるような転び方をする可能性なんて万に一つどころか億に一つもない。ただ、雷はどうだろうか。バナナの皮よりはありうるかもしれない。アクゼルを追いかける恰かつ好こうで、アジアンを先頭にして銀行の外へ出ると、そんな望みを抱いだいてしまうくらい、とんでもない空模様だった。ちょっと前まで雲一つない青空が広がっていたのにここまで荒あれに荒れまくるなんて、いくらなんでも変じゃないか。すさまじい風だ。暴風といっても過言じゃない。降りしきる雨は横よこ殴なぐりどころかほとんど渦うずを巻いている。第二王立銀行は第一王立銀行みたいに周りに市場があるわけでもないし、利用者自体も少なめなので、もともと人通りはさほど多くないのだが、今はもう人っ子一人いない。あまりのひどさに、思わず玄げん関かんのひさしから出るのをためらってしまったほどだ。

　そんな暴風雨の中を、アクゼルたちは黙もく々もくと行進してゆく。

　アジアンがひさしから出て、ベティが、ヨグがつづいた。

　しょうがない。

　マリアローズはカタリやピンパーネル、ユリカと目を見み交かわし、嵐あらしに向かって突とつ撃げきした。

「──い、いだだづぉっ……！」

　半魚人の叫さけびが雨音を切り裂さいた。たしかに、雨あま粒つ

ぶが顔にあたってかなり痛い。ちゃんと目を開けていられない。飛燕フエイヤンはキャハハハ笑っている。アホだからしょうがないか。何かが光った。すごい光だった。ほぼ同時に、轟ごう音おん。ユリカの悲鳴が聞こえた。雷か。

　不意に雨がやんだ。

　違う。

　雨はまだ猛もう烈れつに降っている。

「れ……？」

　見上げると、黒い傘かさがあった。折りたたみ傘か。まあ、折りたたみ傘だろうと蛇じやの目傘だろうとビーチパラソルだろうと、そんなことはどうでもいいのだが、とにかく誰だれかがすぐ隣となりにいて、傘を差してくれているようだ。

　そいつの顔は見えなかった。

　なぜなら、そいつはマリアローズよりずいぶん背が高かったし、傘は小さかった。べつにありがたくも何ともないけれど、そいつは自分が差している傘にマリアローズを入れてくれたのではなく、マリアローズのためだけに傘を差してくれたようだった。マリアローズには傘を持っているそいつの右手や腰こしから下しか見えなかった。それでも、そいつが誰かはすぐにわかった。なんでここにいるわけ……？

　猛烈に頭が痛くなってきたが、とりあえず我が慢まんしてぬれそぼった顔を手でぬぐい、アジアンたちを捜さがした。昼飯時ランチタイムの三人は十メーテルくらい前方にいた。振ふり返ると、ユリカが飛燕フエイヤンに手を握られていて、カタリがそれについて何か言い、ピンパーネルはこっちをじっと見つめている。また稲いな光びかりと雷らい鳴めい。今のはめちゃくちゃ近かった。アジアンたちが向かっているほうだ。視界の上半分を遮さえぎっている傘が邪じや魔まなので、手でどけた。なぜか途と端たんに風雨が弱まった。

　通りに面したその建物は、かつて懇こん切せつ丁てい寧ねいで格安の蘇そ生せい式が売りの新興宗教団体の寺院として建てられたらしいが、商売敵がたきの台頭を恐おそれた高層寺院の坊ぼう主ずど

もが大勢の悪党バスターを雇やとって押し入らせ、数十人の僧そう侶りよたちを皆みな殺ごろしにしてしまったという、いわくつきの物件だ。建築には名の知れたモトローリィの石工が関かかわったという話だし、大きさはさほどでもないけれど、なかなか金がかかっていそうで、それなりに格調高い、それでいてモダンなデザインの建物なのだが、夜な夜などころか昼間でも、やれ変な声が聞こえるとか、やれ妙みような人ひと影かげを見るとか、やれ殺された僧侶たちの血の跡あとが消えずに残っているとか、怪かい談だん的な噂うわさには事欠かない。おかげで基本的には空き家で、たまに怖こわいもの知らずが住みつくものの、本当か嘘うそか知らないが非ひ業ごうの死を遂とげてはまた無人になり、現在はどうなのだろうか、わからないけれど、あの男はその屋根の縁ふちに腰かけていた。

男は白い服を着ている。

びっしょりとぬれた髪かみの毛も真っ白だ。

肌はだも蠟ろうのように白い。

男は両手を屋根につけて天を仰あおいでいた。

ちょうどその頭上あたりで黒い雲がとぐろを巻いている。

男が右手を空に向かってのばした瞬しゆん間かんだった。

雷が男のすぐそばに落ちた。

まるでそれがきっかけだったかのように、風が完全にやんで小雨になった。

「私は、雨が好きでね」

男の声はやけにはっきりと聞こえた。あんなに遠くにいるのに、それも、四方八方から聞こえたような気がする。なんだかひずんでいたし、変だ、と思ってあたりを見回したら、ラッパ型の物体を抱かかえている黒スーツ姿の珍ちん妙みような生き物たちがそこかしこにいた。よく見れば、男がいる建物の屋根やら壁へき面めんの出っぱりやらにも、数匹ひきではない、数十匹か、それ以上の生き物がへばりついたりしがみついたり立ったりしている。例のアクゼル・アンド・アンダーリングスも建物の玄関前に整列していた。どいつもこいつも、アクゼルたちと同様、殺気がないというか、危険

性を感じないが、もしあいつらが全員戦せん闘とう能力を有していたとしたら、たとえそれがそこそこでも、かなりやばいことになる。少なくとも、マリアローズにとっては。

　荊王ジンワンが傘をたたんでマリアローズの左斜ななめ前に移動した。

　右斜め後ろにはユリカと飛燕フエイヤンがいて、そのそばにはカタリとピンパーネルがいる。

「ジン、テメー今日もバキバキ変態してンのなァ。つーか傘持ってンのすごくね？」

「備えあれば憂うれいなしだ。こういうこともある」

　変態してる、という部分については反論しないのか。認めるのか。いっそ潔いさぎよいというか、完かん璧ぺきに開きなおっているみたいなので、むしろかなり怖い。てゆうかさ。ぜんぜんどうでもいいことではあるんだけど、龍州連合って大だい丈じよう夫ぶなの？　頭二人がこんなやつらで。マリアローズはこめかみのあたりを拳げん骨こつで二、三度叩たたいている間も、だが、前にいるアジアンの背中から目を離はなさなかった。

　アジアンは右後方にベティ、左後方にヨグを従えて、屋根の縁に腰かけているあの白い男を、ルヴィー・ブルームを睨にらみつけているようだ。

　たかだか十メーテルくらいの距きょ離りなのに、アジアンの背中がずいぶん遠くにあるように感じられる。

　マリアローズは下した唇くちびるを軽く嚙かんで、すぐにやめた。

　なんで僕が唇なんか嚙まないといけないんだよ。

「雨に打たれるのが、私は好きでね」

　また声が聞こえた。

　あのラッパ型の物体から聞こえてきているのか。

　マリアローズはゆっくりと前に進みはじめた。止まろうとも思っ

たけれど、足が勝手に動きつづけた。荊王ジンワンやユリカ、飛燕フエイヤンやカタリ、ピンパーネルたちも少し遅おくれてついてきた。なんでだろう。どうして僕は。だって、遠いから。離れすぎていると、不安だし。そうだ。戦力は分散させるべきじゃない。集中させて運用するべきだ。できるだけ固まっていたほうが安全だ。とくに、僕は。おそらく、この中で一番弱いわけだし。たぶん、ほとんど役に立たないし。だから、何もできなくて。こんなんじゃいけないって、いつも思うけど。思ってるけど。このままじゃダメなんじゃないかって。

　ベティが顔だけ振り向かせて目をすぼめた。

　アジアンの背中はもうすぐそばにある。

　あと一歩踏ふみだして手をのばせば届く距離だ。

　舗ほ装そうされた道を細かい雨あま粒つぶが叩く音は途と切ぎれることがなかった。

　吐はく息が白い。

　顔を上げると、建物の上にいるルヴィー・ブルームと目があった。

　遠目にもわかる黒い目だった。

　黒目が、ではない、白目が黒いなんて。

　虹こう彩さいは鮮せん血けつのような真しん紅くで、虹彩と黒い瞳どう孔こうの境目が禍まが々まがしく金色に輝かがやいている。

　おぞましいとしか言いようがない目だ。

「アジアン。おまえはどこまでも私の期待にこたえてくれる、本当に、本当にいい子だ」

「キサマの期待などボクの知ったことか」

　アジアンの声はつめたすぎるほどつめたくて、落ちつきはらっているように聞こえた。

　ただ、ほんの少しだけ肩かたが震ふるえている。

　その震えが、止まった。

「ボクはキサマの人形じゃない」

「それなら、証明してみせるといい」

「証明だと」

「そう。私と勝負をしよう。アジアン。おまえが勝ったら、自由にしてあげるよ。今度こそね。おまえはついに私から解き放たれる。それがおまえの望みなのだろう？」

「勝負？　自由に？　解き放つだって……？　そんな条件を、キサマが言うことを、この期ごに及およんでボクが信じると思うか」

「勘かん違ちがいしてはいけないよ。アジアン。おまえに選せん択たくの余地はない。まさか、忘れたわけではないだろう？　そこまで私に言わせるのかい。それは無ぶ粋すいというものだよ。アジアン。おまえは私と勝負をするのだよ。そして勝たなければいけない。そうだろう？」

「だったら、そこから下りてこい。キサマに勝って、今すぐ仲間を返してもらう」

「それは最後にとっておこうと思っているのだよ」

　ルヴィー・ブルームは唇の両りよう端たんをつりあげて喉のどを不気味に鳴らした。

「食事でも順序というものがあるだろう？　オードブル。スープ。魚料理。アントレ。ソルベ。ロースト。サラダ。デザート。順々に愉たのしまなければね。アジアン。おまえは私をぞんぶんに愉しませなければいけないよ。私を満足させなければいけない。もちろん、そうしてくれるだろう？　おまえは決して私の期待を裏切らない。そうだろう？」

「……何をしろと言うんだ」

「私はおまえを知りたいのだ。おまえのすべてを私の前にさらけだして欲しい。そして私を大いに愉しませておくれ。アジアン。勝負だよ。勝負をしよう」

「だから、何を──」

「おまえは昼飯時ランチタイムというクランの頭領マスターなのだろう？　私もね。おまえの真ま似ねをして、クランを作ってみたのだよ」

　ルヴィー・ブルームは両手を広げてみせた。

「偉大なるセブン・ソウルズ・七つの魂マジエステイ。少し長いかな。７Ｓセブンス、とでも呼んでくれるといい。私がつくったものたちと、私に力を貸してくれるものたちが手メン駒バーで、盟マスターは私だ。アジアン。私と勝負をしよう。７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムを。わざわざルールを考えたよ。舞ぶ台たいも用意した。愉しめるといいね。おまえが私を愉しませてくれることを願っているよ。アジアン。おまえもそうだろう？」

　アジアンにしてみれば、ぐうの音も出ないに違いない。それはそうだ。仲間を人ひと質じちにとられているのだ。たとえ足の裏を舐なめろと要求されても、従うしかない。ひどい男だ。とんでもないやつだ。稀まれにも見ないクモソウ野フ郎オだ。さっきの雷かみなり、どうせならあの男の頭にドッカーンと炸さく裂れつしちゃえばよかったのに。空から槍やりでも降ってきて、あの男のドタマにグッサリ突つき刺さっさってしまえばいいのに。

　降ってきたのは別のものだった。

　というか、ルヴィー・ブルームがやおら立ちあがって、どこからかとりだしたそれを、いや、それらを、ばらまくように投げたのだ。

　黒い物体だった。

　掌大か、それより少し大きいくらいだろうか。

　ひょっとして、花か。でも、真っ黒い花なんて。

　落下の速度はやけに遅おそい。

　落ちてくるというより、ゆっくりと降下してくる。そんなふうにも見える。

　それだけにじっくりと観察することができたし、逆に遅すぎたせ

いで目が釘くぎ付づけになってしまったとも言えるのだが、やはり形は花そのものだ。

　八本の薔ば薇らだ。

　花びらから萼がくから茎くきに至るまで黒い薔薇だった。

　ただ、あくまで形だけだ。

　その証しよう拠こは萼のすぐ下にあった。

　かなり高速で動いているみたいなので、どういう形状をしているのかはよくわからないが、それによって小雨が弾はじかれ、ごくごく細かい水すい滴てきが飛び散っている。

　羽、なのか。

　あからさまに不自然なほどゆったりとした落ち方をしているのは、そのおかげか。

　羽のある黒い薔薇の群れは、マリアローズたちの頭上五メーテルくらいの地点で散開した。

　三本は前方へ。

　五本はマリアローズたちのほうへ。

　そうしてまるで襲おそいかかってくるかのように羽のある黒い薔薇どもが急に速度を上げた途端、小こ猿ざるが叫さけんだ。

「もーらいッ……！」

「──づわだっ」

　半魚人の無様な悲鳴がつづいた。振ふり返ると、カタリは頭を押さえてうずくまっていた。

　飛燕フエイヤンは……？

　上だ。

　カタリの頭を踏ふみ台にして跳とびあがった飛燕フエイヤンは、こっちめがけて落ちてこようとしていた五本の黒い薔薇のうち四本

をキャッチしていた。一本は逃のがしたようだ。飛燕フエイヤンは空中で猫ねこのように一回転してから着地すると、マリアローズの手て許もとを見て悔くやしそうに舌打ちをした。なぜかというと、残りの一本はマリアローズが持っているからだ。飛燕フエイヤンの手をすり抜ぬけ、落ちてきたというよりは飛んできて、マリアローズの目の前で停止したものだから、思わず手にとってしまった。見れば、アジアン、ベティ、ヨグのすぐそばにも黒い薔薇が一本ずつ浮うかいている。彼らは警けい戒かいしているのか、まだふれることもしていない。そっか。そうだ。あの男が投げたものなんだ。何も考えずに手づかみするなんて迂う闊かつだ。捨てたほうがいいだろうか。逡しゅん巡じゅんしている間に、飛燕フエイヤンがユリカに四本の薔薇を差しだした。

「やるよ、ユリィ。珍しィーぜこれ。だって真っ黒くろっけだしよォ」

「……い、いらないわよ、しょんなもの。黒いお花なんて、なんだか変だし……」

「ンだよォ。せっかくゲットしたのによォ。もらっとけよォ。一本くらい」

「じゃあ、一本だけなら……しぇっかくだから」

　ユリカはおずおずと黒い薔薇を受けとった。残り三本。飛燕フエイヤンは物欲しそうな顔をしているカタリを無視して、一本を荊王ジンワンに向かってひょいと投げ、それからもう一本をピンパーネルに押しつけた。どうやら最後の一本は自分で持っておくことにしたらしい——じゃなくて。

「す、捨てないと……！」

　マリアローズは黒い薔薇を地面に叩たたきつけようとした。できなかった。そうならなかった、と言ったほうが正しいか。黒い薔薇は間ま違ちがいなくマリアローズの手から離はなれたのだが、やつはまた萼の下の羽を動かして抵てい抗こうした。飛んできた。それだけではすまなかった。マリアローズの鼻先で、やつはとうとう正体を現した。やつはただの黒い薔薇でも、羽のある黒い薔薇でもない、まったく別の何かだった。

　一いっ瞬しゅんでほどけてしまった。

　さながらもともと一本の黒い糸でできていたかのようだった。

　黒い糸となったやつは、あっという間にマリアローズの首に絡からみついた。

　死ぬ、かもしれない、と思った。

　大だい丈じよう夫ぶだった。

　苦しくはない。

　おそるおそる首をさわると、だが、たしかに何かが首に巻きついている。かなり硬かたそうだ。ちょうど顎あごの下あたりに、小さな硬こう貨かのような手て応ごたえがある。これは何だろう。なんだかもうよくわからないが、それはマリアローズだけではなかった。ユリカも、ピンパーネルも、荊王ジンワンも、飛燕フエイヤンも、さらにはベティも、ヨグも、アジアンさえも同じだった。皆みなの首に黒いものが巻きついていた。幅はばはせいぜい一サンチか二サンチだろうか。真ん中に丸い部分がある。首輪だ。黒い首輪をつけられてしまった。



「……わし、もしかして、ラッキーやったん……？」

　なぜか残念そうにそんなことを呟つぶやいている半魚人以外は。

「７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムだ、アジアン」

　振り仰あおぐと、ルヴィー・ブルームの手に黒い薔薇が握にぎられていた。

「私が用意した勝負ゲイムは七つ。参加者プレイヤは杖エル、双剣サイアル、大剣ハイアル、目カル、竜ラル、玉ナル、星フルの七名と、鍵アトルの一名。鍵アトルは文字どおりキープレイヤーだ。相手の鍵アトルを奪うばった瞬しゆん間かん、勝敗が決する。鍵アトルは私とおまえだよ、アジアン。七つ目の勝負ゲイムは私とおまえだけのものだ。最後の最後で私を斃たおせばおまえの勝ちだよ。仲間も返してあげよう。それから、７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムの参加者プレイヤは、せっかくだから、全員必ず最低一度は私の遊戯ゲイムにつきあってもらうよ。そこは考えてあるし、各勝負ゲイムごとの勝利条件やルールについては、その都度ちゃんと教えてあげるから、心配しなくていい。ただ、ルールを破ったら、私を興ざめさせるようなことをしたら、どうなるか、アジアン、おまえは賢かしこい子だから、言わなくてもわかるね？」

「……待て」

　アジアンは首輪をさわりながら皆を見回した。

　マリアローズとは最後に目があった。

　アジアンは目を見開いていた。ひどく顔色が悪い。唇くちびるが震ふるえている。マリアローズはどうだろう。よくわからない。まだ状じよう況きようが把は握あくできていない。なんだかまずいことになってしまっているような気はする。それは他ひ人と事ごとじゃなくて、たぶん自分にも関係があって。

　アジアンは一度うつむいてから、拳こぶしを握りしめてルヴィー・ブルームを見上げた。

「七人……七人ってどういうことだ。今の昼飯時ランチタイムにはボクをふくめて三人しかいない。それなのに、七人なんて──」

「そこにいるじゃないか。おまえをのぞいて、七名だ。鍵アトルは特別扱あつかいなのだよ。この勝負ゲイムではね。すでに参加者プレイヤは決まっている。証あかしの首飾りチヨーカーも渡わたしただろう？」

「百歩譲ゆずってベティやヨグは無関係とは言えないとしても、他

ほかの者たちは関係ない！」

「じゃあ、頼たのむといい」

「何……？」

「頼みこむといいよ。頭を下げて。土下座でも何でもしてね。仲間が大切ならば、そうすればいい。どうしてもと言うのなら、そうだな、首飾りチヨーカーを他の者につけかえてもかまわないよ。頭数が揃そろいさえすればね。勝負ゲイムはできる。私が死ぬか、私がそうすることを望まないかぎり、そう簡単には外せないと思うがね。首を切ってしまえば外せるかもしれないな。そんなことをしたら、当然、死んでしまうだろうがね。さいわい今は蘇そ生せい式という便利なものがある。それが可能ならば参加者プレイヤの交代は認めよう」

ルヴィー・ブルームはにおいでも嗅かぐように黒い薔ば薇らを目の前に持っていった。

ほどけた。

黒い薔薇は瞬時にルヴィー・ブルームの真っ白い首に巻きついて首飾りチヨーカーと化した。

「明後日の十時、Ｄ８の出入口前にアクゼルを行かせる。遅おくれないことだ」

アジアンが歯は軋ぎしりをする音が聞こえた。

ルヴィー・ブルームは唇の両りよう端たんをつりあげて禍まが々まがしい目を細めた。

「いい顔だね。アジアン。もっといろいろなおまえの顔を私に見せておくれ。私はおまえの苦しむ顔が見たい。おまえの美しい顔が醜みにくくゆがむその瞬間をね。傷ついたおまえの顔が見たい。すべての希望を失ってうちひしがれたおまえの顔はどんなにかわいらしいだろうね。私の期待を決して裏切らず、私を大いに愉たのしませてくれるおまえのことが、私は大好きだよ。愛しているよ。おまえのことを。アジアン。我が愛mai-し子よdear」

Omenage 897 12th revolution 4th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

〝トマトクン邸〟

chapter.12

特別な感情

「──ってゆうわけでさ……」

　だいたいの事情を話し終えると、今はこの部屋にいないユリカが淹いれてくれた蜂はち蜜みつ入りのローズヒップティーも完全に冷めていたし、なんだかもう疲つかれてしまって、やってられないとしか言いようのない気分だった。

「まいったよ、ほんと。エルデンに帰ってきた早々こんなことになっちゃって」

「むう……」

　寝しん台だいの上のトマトクンが身体からだを起こそうとして、だ、だめですよ、とサフィニアに止められた。たしかに、目は腫はれぼったいし、頬ほおのあたりは微かすかに赤らんでいるし、見るからに熱がありそうで、安静にしていなければならない状態だということはわかるのだが、子供みたいに肩かたの上までしっかり布団をかけられて、トマトクンはちょっと窮きゆう屈くつそうだ。そんなことを言ったら、サフィニアは怒おこるだろうけど。何しろ、かなり真しん剣けんに看病してるみたいだし。

「……それで、マリア、お前は参加することにしたのか。その、なんとかゲームとやらに」

「あー、まあ……うーん……」

　マリアローズはうつむいて首飾りチヨーカーをさわった。あのあと皆みなでそれぞれの首飾りチヨーカーを確かく認にんしてみたのだが、真ん中にある小さな硬こう貨かみたいな部分には、杖、双剣、大剣、目、竜、玉、星、そして鍵を象かたどっているとおぼしき紋もん章しようのようなものが浮うき彫ぼりされていた。アジアンは鍵。ベティは杖。ヨグは玉。ピンパーネルは双剣。ユリカは竜。飛燕フエイヤンが大剣。荊王ジンワンが星。そして、マリアローズが目。鍵は特別扱いらしいが、とにかく総勢八名。参加者プレイヤの全員が明後日の十時にＤ８出入口前まで行かなければ、昼飯時ランチタイムの人たちは無事ではすまないだろう。まったくもって腹立たしいことに、ルヴィー・ブルームが言っていたとおり、アジアンには選せん択たくの余地はなかった。仲間を見捨てるのでなければ、是ぜが非でも参加者プレイヤをそろえるしかない。

首飾りチヨーカーは元が元だけに無機物かどうかも定かではない、物知りなベティですら見たことのない素材でできていて、少なくともちょっとやそっとでは外せそうになかった。またもやルヴィー・ブルームの言葉どおり、首を切断するという方法はあるにしても、ほんならええわ、スパッとやったってくれや、みたいに思いきってしまえるのは、死にマニアの半魚人くらいのものだろう。その半魚人は幸か不幸かあの場所に居あわせながら参加者プレイヤには選ばれなかったのだから、皮肉なものだ。

　いずれにしても、首飾りチヨーカーはそう簡単には外せない。もし非常の手段でもって首飾りチヨーカーを外すことができたとしても、また別の参加者プレイヤを見つけなければならない。結局、アジアンとしてはああするしかなかったのだ。おそらく、ルヴィー・ブルームが目もく論ろんだとおりに。

　キミたちには関係のないことだし、そんな義理もないということは承知している。そのうえで頼たのむ。何ができるかはわからないが、可能なかぎりの礼はする。それは約束する。

　ユリカとピンパーネル、飛燕フエイヤン、それに荊王ジンワン、そしてマリアローズを前にして、アジアンは、あのアジアンが、深々と頭を下げた。

　ボクに力を貸してくれ。

　頼む。

　いや—、

　お願いだ。

　正直、すぐにやめさせたかった。だって、ルヴィー・ブルームが見ていた。あの男はじつに愉しそうにアジアンが懇こん願がんというよりも哀あい願がんする姿を屋根の上から見物していた。こうなったらもう、恥はじも外聞もなく頼みこむのはしょうがないとしても、何もあの男を喜ばせることはないじゃないか。

　でも、そうせざるをえないほど、アジアンは追いこまれていたのかもしれない。

　今から振ふり返ってみると、マリアローズは自分でも不思議なくらいあっさりと、何の抵てい抗こうもなく腹を決めていた。

　ただ、なかなか言いだせなかった。

　誰だれか先に、わかった、仕方ない、それじゃあ、みたいなかんじで答えてくれないかな、とか、そんなことをぼんやりと考えていた。

　もともと気が長いとはいえない、どちらかと言えばせっかちなもので、つい痺しびれを切らしてしまった。

　いいよ。

　アジアンが顔を上げてマリアローズを凝ぎよう視しした。ベティとヨグの視線も感じた。頰のあたりが痛いほどだった。失しつ笑しようしてしまいたくなった。よりにもよって、僕がね。いいよ、とか。なんかさ、偉えらそうじゃない？　どうせたいして役に立たないのにさ。数あわせにしかならないだろうけど。そんなやつが、一番乗りで、いいよ、とか。バカみたいだよね。かっこわる。

　ワタシ・も。

　つきあわせてしまったみたいで悪かった。ピンパーネルが手をあげてくれた。

　わたしも参しやん加かしゃしぇてもらうわ。どれだけ力になれるかわからないけど。

　そうなると、当然、ユリカが黙だまっているわけがなかった。それにしても謙けん虚きよすぎる。どれだけ力になれるかわからないなんて、最強伝説の持ち主が言うことじゃない。医術式も使えるし、ユリカはものすごく力になる。それからこれはあくまでおまけだが、ユリカも、ということになると、あの小こ猿ざるがしゃしゃり出てくるに決まっていた。

　ンじゃ、オレもやっかなァ。ユリィと遊べるっぽいしよォ。強ェーヤツとか出てきたらバトバトできて楽しそォーだし。つーか出てくンだろタブン。鬼おに強ェーヤツ。ウッハッ。なんッか楽しみになってきたかも。

　そこまではよくても、最後の一人が問題だろうとマリアローズは睨にらんでいた。

　荊王ジンワンは淡たん々たんとした口調で、俺は命が大事だ、と

切りだしたので、やっぱりかと思った。

　それから、身体からだを張らなくていいなら、手を貸してやってもいい、とつづいたのは結構意外だった。

　先のことを考えると、お前たちに貸しを作っておくのも悪くはなさそうだしな。飛燕フエイヤンのお守もりもしないとならない。勝負ゲイムとやらの足しになるかどうかはわからないが、参加するだけならしてやる。

　ああ、だけど、そんなことよりも、荊王ジンワンがそう言った直後、あいつが見せた表情、あれは、どう言ったらいいか、おそらく誰も彼もが思ったというか、感じたことだろうけれど、言葉にするのはすごく難しい。とりあえず、初めて目にしたことはたしかだった。

　単純に、笑え顔がお、と表現することはできない。泣きだす寸前の顔、と言えないこともないが、やっぱりそれも違ちがう。苦しくて、つらくて、こらえきれないほどで、でも、今にも噴ふきだしてきそうな苦く渋じゆう、苦く悶もんといったものを無理やりねじ伏ふせて、心から、精せいーいつ杯ぱいの、できうるかぎりの感謝、誠意をこめて、真しん摯しに、ひたむきに、どうにかこうにか笑ってみせた、とでもいうような──そんな顔をされたら、こっちはどうすればいいのか、その気持ちに釣つり合うだけの反応って、いったい何だろう、そんなものはどこを探しても存在しないんじゃないか、とさえ思ってしまうような──おかげで、あの表情と、アジアンの、ありがとう、と言った声の調子と響ひびき、それから、ひどくうろたえて、たぶん赤面して、心臓が痛くて、だけれど、どうしても目を離はなせなかった自分、マリアローズが覚えていることといえば、それだけだ。

　しょうがないよね。

　あんな顔をされたら、しょうがない。

　実際、ユリカもちょっと顔が赤かったし。ピンパーネルもびっくりしてたし。飛燕フエイヤンも、お、おう、ま、まァ、任せろよ、みたいなかんじで、様子がおかしかったし。荊王ジンワンは無言だったけど、しきりと色眼鏡サングラスをいじくってたし。とりあえず今日はトマトクンの家にでも、ということになって、その帰り道の途と中ちゆう、部外者のカタリもうるさかった。アレは、せや

けど、卑ひ怯きようやな。マジでやばいで。もともと顔はむっちゃええからなあ。たとえばな。あないな顔してやで。お願い、とかゆわれて何か頼まれでもしたらな。もう断りきれへんやろ。男とか女とかな。そのあたり超ちよう越えつしとるで実際。反則やろ。ホンマ得やなあ。顔ええのってなあ。アレはまあ別格やろけどなあ。マリアローズも、ユリカも、ピンパーネルも、結局、トマトクンの家の前までついてきた飛燕フエイヤンも、反論できなかった。それくらいあの破は壊かい力はすさまじかった。気がついたら、アクゼル以下黒スーツの生き物たちもろとも姿を消していたルヴィー・ブルームは、果たしてあれを見たのだろうか。見み逃のがしていればいい、と思う。あの下げ劣れつなくそったれ野や郎ろうにはもったいない。あんな顔を見せてやることはない。いいんだけどね。どうでも。僕がどうこう思ったり言ったりするようなことでもないし。

　ともあれ、もう決めてしまった。

　僕は７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムに参加する。

　正直、血迷ったかな、と思わないでもない。

　でも、じゃあ、他ほかに道があっただろうか。

　なかった。

　いろいろ考えてみたけれど、さんざん迷っても、思いっきり渋しぶっても、結局、僕は参加することにしただろう。

　だって、そうしないと、昼飯時ランチタイムの人たちが殺されてしまう。彼らはたしかに友だちじゃない。知人ですらない。赤の他人と言ってもいい。でも、彼らにも友がいて、仲間がいて、いろいろな思いを抱かかえながら毎日を生きている。むげに見捨てることはできない、なんて考えているわけじゃない。そんなのは嘘うそだ。僕は博愛主義者じゃないし、そうじゃなくて、認めたくないけれど、殺されてしまうかもしれない人たちは、アジアンの仲間だからだ。だから、放ほうってはおけない。知らんぷりはできない。あんなふうに、頭を下げて、お願いだ、なんてためらいもなく言うくらい、その人たちはアジアンにとって大切なんだ。その人たちを失うことは、アジアンにとって、とてつもない痛手なんだ。僕も想像することはできるんだ。そのつらさを。痛みを。絶望を。本当は、ききたい。ねえ、きみはさ、もしかして、ひょっとしたらさ、もうそれを知ってるんじゃないの……？　僕はさいわい結果的にそうな

らなかったけど、きみは違うんじゃないの？　あんなつらさを二度味わうのはいやだと思ってるんじゃないの？　そんな気がするんだ。確かめたいんだ。でも、怖こわいんだ。僕は罪つみ滅ほろぼしをしようとしてるのかもしれない。これで帳消しになるんじゃないかって。そういう気持ちも、たぶんあるんだ。汚きたないんだ。僕は卑怯だ。でも、あんなふうに泣くきみをもう見たくない、それも本当で──、

　わからないけど。

　それをどう呼んだらいいのか、僕にはわからないけど。

　僕にとってきみは、突とつ然ぜんいなくなっても気にならない、どこかですれ違ちがっても無視してしまえる、ぜんぜんどうでもいい、少なくとも、そういう存在じゃない。

「──まあ、成り行きでね。断りづらい雰ふん囲い気きだったし。僕が参加しなかったせいで、人が殺されちゃうかもしれないとか、そうなると、さ。やっぱりね。それにほら、なんていうか、僕だって……そこまで人でなしじゃないし」

「お前が人でなしだなんて、誰だれも思ってないんじゃないか」

　トマトクンがサフィニアを見上げて、なあ、と同意を求めた。たったそれだけで頰ほおを染めているサフィニアが、よく看病なんてしようと決意したものだ。すごいね。てゆうか、偉えらい。がんばったんだね。

「……も、も、もっもちろん、です。マリアが、人でなしだなんて……最初のころは、ちょっとだけ、怖いっていうか……とっつきづらい、みたいな……印象はあったけど……」

「うっ。そ、そお？」

「……だって……いきなり、何も言わないで……帰っちゃったりとか……あったでしょう。言葉遣づかいも……わりと、きつかったりして……」

「そぉ……かな？　あーでも、そうだったかも。や、そうだったねぇ。考えてみたら」

「すぐに……違うって、わかったけど」

「違う？」

「うん……ただ、素す直なおじゃないっていうか……他人のことを、考えてないんじゃなくて……関かかわりあいになることで、傷つけたり、いやな思いをさせたくなくて……わざと、好かれないように……どこかで、壁かべを作ろうとしてる……っていうか……」

「えっ、えー？　そうかな？　そんなふうに見えた……？」

「……わたしも、同じようなところが……ないとは言えないから……」

「あ」

　そうだ。最近はあの不幸オーラもめっきり薄うすれてきて、つい忘れてしまいそうになるけれど、サフィニアは身近な人の死をたくさん見てきた。その薄い背中に背負わされた運命は、マリアローズのそれなんかよりもずっと過か酷こくなものだったのだ。そんなサフィニアに、同じようなところがある、なんて言われると、少し心苦しいし、恥はずかしい。だからといって、いや、だからこそ、ごまかしたり否定したりできるはずがなかった。

「……うん。そうだね。あったかも。そういう部分も」

「おかげで……ちょっとずつでも、自分の足でわたしたちに近づいてきてくれて……少しずつ、みんなと打ちとけていって……そういうマリアを、近くで見ているうちに……わたしも、すごく、勇気づけられたし……」

「や、それは逆でしょ。僕のほうこそ、サフィニア見てると、がんばらないとなっていっつも思うよ。今も、かなりがんばってるし」

　やばいくらい顔を赤らめたサフィニアが駆かけよってきて、ほとんど声になっていない声で、バカ、バカ、バカ、と言いながら、椅い子すに座っているマリアローズの肩かたを両手でぽんぽん叩たたいた。てゆうか、サフィニア、それ、かわいすぎ。それでも、ぼけーっとした半眼でこっちを見て首をひねっているトマトクンは鈍にぶすぎ。こんなにがんばってるのに、まだ努力が足りないっていうのか。あらためて、茨いばらの道だよね、と思わざるをえない。サフィニアはかわいいし、料理も上手だし、やさしいし、一生懸けん命めいだし、もっと手て頃ごろというか、テキトーじゃなくて適

当というか、いい相手はいくらでもいるはずなのに。当のサフィニアが、とにかくトマトクンがいい、トマトクン以外、眼中にない、といった様子だから、しょうがないけれど。

「……でも……」

　サフィニアが叩くのをやめて、マリアローズの肩をそっとつかんだ。

「その……７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムっていうのが……どういうものか、わからないし……わからないから、余計に……心配……」

「ルヴィー・ブルーム、か」

　トマトクンが顔をしかめてため息をついた。気になる言い方だった。

「──まさか、トマトクン、あの男のこと知ってたりする……？」

「卦けつ体た糞くそが悪いやつだってことだけはな」

「……相変わらず、顔が広いね。むやみに」

「そうか？　そうでもないと思うが」

「や、だって、僕はよく知らないけど、有名な魔ま術じゆつ士しなんでしょ。あの男って」

「……その名よりも、魔人アモンのほうが……むしろ、魔術士の間では、通りがいいかも……ただ、方々で名を聞くわりには……情報が少なくて……少なくとも、百年とか、二百年とか……もしかしたらそれより前から、魔人アモンと呼ばれる魔術士は、いたみたいで……」

「……ずいぶん長生きしてるんだね。魔術士の間じゃそんなに驚おどろくようなことでもないのかもしれないけど。てゆうか、でも、なんでそんな男と、あいつが……」

「あいつ、って……昼飯時ランチタイムの、アジアン……さん？」

「や、そんな、さん、とかつけなくていいと思うんだけど。まあ、

うん。そう。アジアンと、なんか因いん縁ねんありげだったからさ。何もなかったら、もちろんこんなことになってないはずだし、あるに決まってるけどね。それも、よっぽどのことが──」

「きけばいいじゃないか」

　トマトクンが片かた眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげてみせた。

「アジアンに、直接。マリア、お前、あいつとは仲がいいんだろう」

「そういう冗じよう談だんはおもしろくもなんともないからやめてくれる？」

「冗談を言ったつもりはないが」

「本気ならなおさらやめて」

「しかし、仲がよくないなら、なんでそのハンブンゲノムとやらにお前がつきあう羽目になったんだ」

「だから、それは言ったでしょ。成り行きだって。あと、ハンブンゲノムじゃなくて、セブンス・ゲイムだから」

「成り行きでそのセツブン・ゲームだかに参加するにしては、負わなきゃならんリスクが大きすぎる気もするんだがな」

「……じゃあ、やめとけばよかったって、トマトクンは思うわけ？　僕が参加しないで、そのせいで昼飯時ランチタイムの人たちが殺されちゃったとしても、しょうがないって？　それから、しつこいようだけど、セブンス・ゲイムね」

「そうは言ってない。お前が決めたことだ。ユリカも、ピンパーネルも、それぞれ自分自身で決断したんだろう。それについて、ダメだとか、よく思わんとか、そんなことを俺が言ったところで始まらん。お前たちがそのことに正面から向きあって、腹を据すえてやろうとしてるんならな。本当は俺も手を貸したいところだが、人ひと質じちもとられていることだし、今回のそのスッポン・ゲームとやらにはルールだか何だかがあって、そうもいかんらしい。ただ、お前が中ちゆう途と半はん端ぱな気持ちで臨もうとしてるなら、心配だ」

「中途半端、かな……」

「お前が口にした理由だけでやるつもりなら、そんなかんじはするな。それ以外に何かあるなら、話は別だが」

「ないです。まったく。ぜんぜん。さっぱり。あるわけないでしょ？　あと、セブンス・ゲイムだって何回言ったらわかるの？」

「……何か、あるみたい……？」

　サフィニアがくすりと笑った。何ですか、それは。こんなに明確にきっぱり否定してるのに、どこにそんな根こん拠きよが？　サフィニアといえども許さないよ？　とはいえ、あまりむきになると、かえってあやしまれそうだ。ここは冷静に。ぬるいというか、もう室温と同じくらいまで温度が下がっているローズヒップティーを一口飲んで、気を静めて。うん。大だい丈じよう夫ぶだ。

「ないよ。特別な理由はね。でも、やるからには集中して、最善をつくすつもりだし。不安はあるけどね。怖こわくないって言ったら嘘うそになるよ。でも、いろいろ考えてみたんだけどさ。七つの勝負ゲイムなのに、参加者プレイヤは八人でしょ。で、参加者プレイヤには絶対一回は勝負ゲイムにつきあってもらうって話だったわけじゃない。てことはだよ。最低一回は、二人以上が参加する勝負ゲイムがあるはずだよね。一対一ならお終しまいだけど、誰だれかと一いつ緒しよなら、まだなんとかなるかもしれないし」

「うむ。お前の他人を顎あごで使う能力はなかなかのものだからな」

「……それ、褒ほめてるつもり？」

「ああ。それに、お前もだいぶいろんな経験を積んできたからな。多少のことでは慌あわてないはずだ。勝負ってのは、強いやつが勝つわけじゃない。極きよく端たんな話、非力な子供が不意を衝ついて怪かい力りきの大男を崖がけから突つき落としたって、それが勝負なら勝ちは勝ちだ」

「弱くても、強い人に勝てる方法はあるってことだよね」

「そのあたりはお前の得意分野だろう。たとえば俺なんかには欠けてる部分だ」

「自覚はあるんだ」

「どうしても力押しに偏かたよりがちだってことはな。お前がＺＯＯうちに入ってから、気づかされた。剣けんでぶった斬ぎったり魔術をぶっ放すだけが能じゃないってことだろうな。実際、お前個人の戦せん闘とう能力はたしかに並かもしれんが、俺たちがお前に助けられたことは何度もあるんだぞ」

「あるかなあ、そんなこと……？」

「あるさ。よく考えてみればわかるはずだ。とにかく、お前は無力じゃない。俺たちにはない長所が、取り柄えが、お前にはある。それだけは覚えておけ。どうやら動機はちゃんとあって、気持ちの面では大丈夫みたいだしな」

「だーかーらーっ！　なーんにもないってば！」

「……と、いうことに……一応、しておいて……」

「サフィニアまで！　何なんだよ、もう！」

　不覚にも顔が赤くなってしまい、つい声を荒あららげてしまったけれど、二人のおかげで少し楽になった。当然といえば当然のことだが、かなり緊きん張ちようしていたし、気が重くもあったのだ。参加することについては、自分で決めたことなので後こう悔かいはしていない。結果的にユリカとピンパーネルを巻きこむことになってしまったのは悪いと思っているし、責任を感じているけれど、そんなことを言ったら、水くさい、と笑われるだけだろう。むしろ、トマトクンやサフィニア、それからカタリに対して申し訳ない気持ちがあった。彼らのことだから、ひたすら心配していることしかできないくらいなら、いっそ自分も７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムとやらに参加したい、と考えるに違ちがいないからだ。そういう連中だ。

　きっと、トマトクンとサフィニアは、今も内心ではそう思っているだろう。

　にもかかわらず、不本意さや未練や無念さを表に出さずにマリアローズを励はげまして、笑わせてくれ、リラックスさせてくれた。

　その気き遣づかいがありがたくて、嬉うれしかった。

絶対、無む駄だにはしたくないと思う。

やるからには勝ってやる。

──自信はないけど。

「ところでさ」

準備だけはしておこう。打てるかぎりの手は打っておかないと。僕は弱いんだから。

「トマトクン、ルヴィー・ブルームのこと知ってるんでしょ。どういうやつか、教えてくれない？　何か参考になるかもしれないし」

「うむ。あいつは、そうだな──」

トマトクンは、うーん、と低く唸うなりながらまた上半身を起こそうとして、サフィニアに押し返され、首の下まで布団を引っぱりあげられた。何度も抵てい抗こうを試みながらも、結局はおとなしく従っているところを見ると、やはりそうとう体調が悪いのだろう。さっき一度、ユリカが診しん察さつしたところによれば、まごうことなき正真正しよう銘めいの風か邪ぜで、薬を飲んで身体からだを休める以外、治す方法はないとのことだし、しばらく安静にしていてもらうしかない。トマトクンは、まいったな、とでも言いたげな表情でサフィニアを一いち瞥べつしてから、天てん井じようを見上げて顔をしかめた。

「とにかく性格が悪い。最悪だ」

「うん。それはわかってる。なんとなく」

「まあ」

トマトクンはマリアローズを見て、黄玉トパーズの瞳ひとみに少し物ぶつ騒そうな輝かがやきを宿らせた。

「やつの好きにはさせんさ」

「……そんな状態で言っても、あんまり説得力ないような気もするんだけどね」

「それもそうか」

「足……出さないで、ください……布団から……」

「む。ばれたか」

「ばれたか、じゃないよ。子供じゃあるまいし」

「……そうですよ……ほんとに……目を離はなすと、すぐ、ばふばふして……」

「ん？　何だ、そのばふばふってのは」

「え……？　布団を……蹴け飛とばしたり、まくろうとしたり……すること、なんですが……言いませんか……？　ばふばふ……」

「言わんな。聞いたことがあるか、マリア」

「やー、どうだろ……ないかな？」

「そ、そ、そっそんなこと、どうでもいいですから……ちゃんと……寝ねてください……！」

「わかった、わかった。じっとしてればいいんだろう。さっさと治らんと俺も困るしな」

　トマトクンはふてくされたように口をへの字に曲げて目をつぶった。そろそろ潮時だろう。マリアローズは椅い子すを立って、サフィニアの肩かたをそっと叩たたいた。サフィニアは無言で微笑ほほえんでくれた。すっきりした笑え顔がおではなかった。サフィニアが何を言いたいかはわかった。マリアローズはうなずいて、トマトクンの部屋を出た。まだ丸一日以上あると考えるか、あとたった一日しかないと考えるか。いずれにせよ、与あたえられた時間の中で何ができるだろう。まずはそこからだ。

　何にしても、僕は無力じゃない。

　今はトマトクンのその言葉を信じたいし、信じるしかなかった。

　信じることで、自分の中に小さな勇気とちょっとの強さを見つけられそうな気がした。

　気のせいじゃなきゃいいんだけど。

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区
〝D8怪虫の坩堝ガンズゲイル出入口前〟

chapter.13

抱きしめるように

—OP of 7S'S GAME—

でも、まさかそうくるとは思わなかった。

まったく、ぜんぜん、予想だにしていなかった。

まあ、とはいえ、よくよく考えてみれば少々変ではあった。

ちょっと買い物をしてくるとか、散歩してくるとか、小こ遣づかい稼かせぎをしてくるとか、そういうのとはわけが違ちがう。７ＳとセブンのСの七つのス・ゲ勝負イムとやらの詳しよう細さいについてはまだわからないので何とも言えないし、今ひとつ実感がわかない部分もあるのだが、相手は大勢の人ひと質じちまでとっている。たとえばカードゲームで勝敗を決しようとか、ジャンケンの三回勝負とか、かくれんぼをしようとか、そんなぬるい勝負が待っているとは思えない。考えたくないけれど、考えなくてはいけないだろう。マリアローズをふくめた参加者プレイヤたちは皆みな、殺やるか殺られるかの真しん剣けん勝負を強しいられるかもしれないのだ。それくらい我らが園長マスターもわかっていたはずだ。それなのに、わりと軽かった。やるからには覚かく悟ごを決めてがんばれよ、みたいなかんじだった。

最終的には背中を押してくれるだろうと考えてはいた。ただ、ものすごく心配されるだろうし、止められる可能性もなきにしもあらずだと思っていた。ＺＯＯうちの園長マスターは、過保護とまでは言えないけれど、仲間のことになると目の色を変えるところがある。そのわりには、あっさり認めてくれてよかった、というのがマリアローズの感想だった。たとえ認められなくても、一度決めたことはやりとおすつもりだし、園長マスターもそこまで反対はしないだろうけれど、わだかまりがないに越こしたことはない。それにしても、ややさっぱりしすぎのような気がしたし、やつの好きにはさせん、とか、さっさと治らんと俺も困る、とか、多少引っかからないでもなかった言葉の意味は、つまりこういうことだったのか。

ピンパーネルとユリカとは、Ｄ８出入口にほど近いＥＭＵエルデン支部の黒いビルの向かいにある「タイトロープ」という二十四時間営業の喫きつ茶さ店てんで九時半に待ち合わせをしていた。

マリアローズが約束の五分前に店に到とう着ちやくしたときにはもう、二人は店の中にいた。

おまけつきで。

しかも、おまけにしてはでかくて、複数だった。

なかでも一番でかいおまけは、赤らんだ顔にマスクをつけて、額には冷れい却きやくシートを貼はりつけていた。

次にでかいおまけは、朝っぱらからやたらと元気そうで、見るからにうざったかった。

一番小さいおまけは、もっともでかいおまけの隣となりにぴったりと寄り添そって、片時も離れまいという構えだった。

「──って、なんで勢せい揃ぞろいしちゃってるんだよ……！」

トマトクンが鼻をぐずぐずさせながら、勢揃いはしてないぞ、ジョーカーも、クローディアも、ロム・フォウも、髭ひげもいないしな、あとは、アルファときゅーもか、みたいなことを言ったけれど、きゅーはともかく、いつの間にかアルファまで勘かん定じように入れちゃってるのってどうなの、と思わないでもなかったし、だいたいそんなことはどうでもいい。問題はトマトクンとカタリとサフィニアがここにいることだ。関係ないのに何をしにきた、とまでは思わないが、昨日の夜、みんなでご飯を食べてからトマトクンの家を出る前に、じゃあがんばってくるね的なことを言って、ちょっとしみじみしてしまった自分は何だったのか。くるつもりなら言ってよ。最初から言っといてよ。そういうことはさ。てゆうか、きてどうするわけ？　トマトクンなんて、明らかに風か邪ぜ治ってないくせに。むしろ、悪化してるっぽいのに。

まあ、そのあたりは任せておけ、考えがある──とか鼻をすすりながら言っても、どうせたいした考えじゃないんでしょ、としか思えないから。見るからにぼうっとしてるし、まともに頭働きそうにないかんじだし。せやで、なあんも気にせんでええ、大だい丈じよう夫ぶや、大船に乗ったつもりでな、ガハハハと笑った半魚人なんて、そもそも魚並みの思考能力しかないわけだし。サフィニアは看病に精を出しすぎてほとんど寝ねてないっぽいし、実際かなり顔色が悪いし、とにかくなかなか風邪が抜ぬけないトマトクンが心配で心配でならなくて、もうどっちが先に倒たおれるか、こっちはこっちで違う勝負してます、みたいな有様だし。ユリカとピンパーネルもこのことは聞かされていなかったみたいで、戸と惑まどい気味だし。てゆうか、戸惑いまくりだし。



　九時四十五分、六人連れでＤ８出入口前に到着すると、先着していた昼飯時ランチタイムの三人のつめたい視線が猛もう烈れつに痛かった。

「……何事？」

　ベティの声が絶対零れい度どの冷気というより凍気を帯びていたのも、むべなるかな。姉弟で子しの前で申し訳なさそうに首をすくめているサフィニアは、魔ま術じゅつ士しでありながら人としての常識や良識を持ちあわせているということだろう。ただ、何から何まで規格外である当園ＺＯＯの園長マスターや、人間の枠わく内ないからさえはみだしている半魚人に、そんなものを持てと言ったところでどだい無理な話だ。わかってはいるのだが、常識人を自任しているマリアローズとしては、少しくらい努力してくれてもいいのに、とつい思ってしまう。

「一つ、きいてもいいかな」

　アジアンが薄うす青あお色の双そう眼がんをすうっとすぼめてトマトクンを見た。

「何をしにきた」

「見物」

　だっくしゅん。

　トマトクンはくしゃみをして、マスクの上から鼻をこすった。

「──べつにお前たちの邪じや魔まをするつもりはない。とりあえずはな」

「いるだけで十分邪魔だヨ」

「そうか。そこは我が慢まんしてもらうしかない」

　なっくしゅん。

　トマトクンがまたくしゃみをして鼻をすすると、すかさずサフィニアがティッシュを手て渡わたしした。箱ティッシュ持参なんだ。いいけど。もっとも、目の前でチーンと鼻をかまれたアジアンにしてみれば、もともと折りあいがよくない、というかはっきり悪いわけだし、怒いかり心しん頭とうに発するといったところだろう。

「相変わらずふざけた男だな。今すぐいつぞやの決着をつけてやってもいいんだけどネ。あいにく今日はそんな暇ひまがない。キミも体調が思わしくなさそうじゃないか。家に帰っておとなしく寝ていたらどうだ」

「そうもいかん」

「見世物じゃない。帰ってもらおう」

「遊びにきたわけじゃないぞ」

「あたりまえだ」

「アジアン──」

「キミに名を呼ばれる筋合いはない」

「じゃあ、どう呼べばいいんだ」

「どうとも呼ばれたくないネ。正直、キミとは口をききたくない。顔を見るのもごめんだ」

「そうか。それはそれで仕方ないが、俺は帰らん」

「いったい何を考えているんだ、キミは」

「お前こそ何を考えてる」

　トマトクンはどんな表情をしているのだろう。マスクのせいでよくわからないが、とくに眉まゆを動かしたり目を細めたりはしていない。無表情と言ってもいいくらいだ。

「話は聞いた。状じよう況きようはわかってるつもりだ。お前も仲間を救いたいんだろう。なりふりなんぞにはかまっていられない。それはわかる。俺だって園長マスターだしな。お前の立場に置かれたら、似たような様ざまをさらすかもしれんしな。だが、言ったとおり、俺はＺＯＯの園長マスターだ。俺が最優先で考えるべきなのは、お前の気持ちじゃない。俺の仲間のことだ。マリアやピンパーネル、ユリカが自分たちの判断でお前に手を貸すことにした。それはいいさ。ただ、こいつらが命を失いそうにでもなったら、俺としては黙だまってられん。たとえ、その結果、お前の仲間がどうなっても、だ。俺はためらわんぞ。絶対にな。俺は俺の仲間を救う。それが俺の考えだ」

「……ボクだって、考えている。キミに言われるまでもない。マリアを危険にさらしたりはしない」

「マリアだけじゃあ困るんでな。俺にとっては、ピンパーネルとユリカも同じくらい大事だ。はっきり言うが、こいつらのことをお前に任せても大丈夫だとはとうてい思えん。何と言われようと、最後まで見届けさせてもらうぞ」

「仮にボクが勝手にしろと言ったところで、あの男が受け容いれるとは──」

「そのあたりは任せろ。考えがある」

「考え、だと……？」

　アジアンが眉をひそめ、トマトクンはずっと我慢していたのだろう、マスクが吹ふっ飛びかけるほど勢いのいいくしゃみを三回連続でした。サフィニアがまるで長年連れ添そって空気のごとき自然で不可欠な存在となった奥さんのように、これ以外ないというすばらしいタイミングでトマトクンにティッシュをさしだした。トマトクンはそれを無言で受けとり、マスクをずらして鼻をかんだ。アジアンが何か言おうとしたが、口をつぐんだ。

　アンダーグラウンドの出入口は、古代九頭竜の呪のろいの触しよく媒ばいになっているという九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インの下、地表から十メーテル以上低い場所にある。だいたいは大骨格をよけるようにして、あるいは縫ぬうようにしてつくられた坂道や階段を下りきると、さあ、ここが出入口ですよ、というかんじの穴が空いていて、Ｄ８もまた例外ではない。

　その坂道のてっぺんで何者かが叫さけんだ。

「しゃあああああああああああああああああああああァァァァァァァァァァッ……！」

　きたよ。

　うっさいのが。

　いや、こなきゃ困るんだけどね？

「──オレ参上ッ！　朝だぜ朝ァァッ！　うりゃあああああああァァァァァァァッ……！」

　必要以上に元気で陽気でやかましくて邪魔くさい小こ猿ざるが坂

道を一気に駆かけ降りてきた。

　本当にくるのかどうか、やや気がかりだったのっぽの変態野や郎ろうも、何やら黒い大きなバッグをかついで、小猿の後ろからゆっくりと大おお股またで歩いてくる。

　小猿はユリカに向かって突とつ進しんしてゆき、その手前で急停止して、ホイッ、とか言いながら両手をあげてみせた。ユリカは、え、え、と目を白黒させてしばらくうろたえてはいたが、結局、つられて両手をあげた。二人の両手が打ちあわされた。小猿が無理やり押しつけた、やらせた感はなきにしもあらずだが、一応、ハイタッチらしい形になった。小猿はコートのフードをはねあげて、満面に笑えみをたたえた。

「よォーユリィ元気かよオハヨーだなヲイどォーよ調子ちなみにオレァサイッコーのゼッコーチョーだけどね！　キャハハハハハ！」

「……お、おはよう。わたしもふちゅうに元気だけど、あなたには負けるわ」

「ンだよォ。負ッけんなよォ。そこはよォ。大事だぜ。テンションはさァ。高いほォーがいーぜヤッパ。力も出るしよォ。ンじゃァーユリィに分けてやっかァ？　オレの元気勇気本気」

「はいはい。分けられるものならね」

「ほンじゃァーオレとまた手ェー繋つなごーぜっ」

「な、え、なんで……？」

「コラァァァァ！　何さらしとんねんガキィッ！　あかんで！　あかん！　手ぇ繋ぐなんてなあ、億千万年早いわダァホ！　ちゅうかまたって何やー！　どういうこっちゃぁぁー！」

「ほろ？　なんでここにカジカがいんの？　つーか、ミスター・トメイトゥもいンじゃん。なんでなんで？」

「しょれは──」

「オッホンッ！」

　咳せき払ばらいではなかった。

今のは間ま違ちがいなく、オッホンと発音したのだ。

ぜんぜん気づかなかった。やつはいつからアンダーグラウンドの出入口というよりもトンネルと天然の洞ほら穴あなの中間みたいなＤ８出入口の前に立っていたのか。

今日のアクゼルは、わざわざその妙みようちきりんな身体からだにあうようにあつらえたのだろう純白の燕えん尾び服ふくを身につけ、首に巻いた紐ひもに赤い蝶ちようネクタイをぶら下げて、頭の上には白いシルクハットをのせていた。

ホースのような右みぎ腕うでで抱かかえているやはり白いバッグは、糞くそ生意気なことに、ひょっとして鰐わに皮がわ製か。

それにしても、一つ目も、縦に割れている口も、のっぺりした白い肌はだも、見れば見るほど気色悪い。こんなやつが平気な顔をして、まあ、表情というものがあるのかどうかさえ定かではないのだが、とにかくさもあたりまえみたいな態度で地上を闊かつ歩ぽしているなんて、それだけで異常事態なのではないか。ＺＯＯに入る前なら腰こしを抜ぬかしていたかもしれないけれど、慣れって恐おそろしい。たしかに、トマトクンが言っていたとおり、多少のことでは驚おどろきはしても取り乱したり思考停止に陥おちいったりはしなくなった。何だかよくわからない生き物だし、相変わらず敵意らしいものは感じないが、そんなことは関係ない。こいつは敵だ。それ以上でもそれ以下でもないのだ。

「まだ十時までいくらか時間はございますが、参加者プレイヤの皆みなさんはすでにおそろいのようですな。念のため、あらためて自己紹しよう介かいさせていただきます。わたくし、アンナクロマルベルラスゼルフォンスと申します。少々長いので、是ぜ非ひアクゼルとお呼びください。それでは、さっそく本日、ご主人様主しゆ催さいの７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムについて、わたくしアクゼルより何点かご説明申しあげようかと存じますが、その前に、参加者プレイヤ以外の方々におかれましてはただちにお帰りいただけますでしょうか」

「断る」

トマトクンは誤解しようのない短く明確な言葉で拒きょ否ひして、使用済みのティッシュをサフィニアに渡わたした。あー。そっか。渡してたんだ。サフィニアも普ふ通つうに受けとるんだ。ちゃ

んとそれ用の袋ふくろまで用意してあるんだ。すごいね。素すで感心しちゃうよ。ほんと。いつものこととはいえ、風か邪ぜを引いて鼻ずるずるのくせに、やたらと自信ありげで堂々としているトマトクンもすごいけど。

「俺たちはただ見物するだけだ。参加はしない。問題はなかろう」

「と、申されましても、もとよりどなたかにお見せするといったような趣しゆ旨しではございませんので。わたくしとしては、どうかお帰りを、と重ねて申しあげるより他ほかにございません」

「だったら、今すぐやつに言ってこい。観戦希望者が三人いて、放ほうっておくと何もかもぶち壊こわされちまいそうだってな」

「やつ、とは、ご主人様を指しておっしゃっておられますか」

「名指ししないとわからんか。ネクス・アークだ」

「……なぜ、その名を」

「くだらんことをぬかすな。知っているからに決まってるだろう」

「お待ちください」

　アクゼルは一歩下がって、鞄かばんの中からバナナを思わせる形の黒い物体をとりだした。真ん中あたりに何かボタンらしきものがいくつもついているようだ。アクゼルはそれらを何度か押して、バナナを頭の側面にあてた。ふざけているわけではなさそうだが、何をやっているのかさっぱりわからない。しかも、少しするとひとりごとが始まった。とうとうイッちゃったのか。外見は最初からかなりイッちゃっているので、驚くほどのことでもないが。

「──はい、わたくしでございます。アクゼルです。はい。はい。左様でございます。いえ。そうではございませんで。はい。観戦を希望される方が。はい。その──ご主人様のご尊名を。はい。いいえ。そうではございませんで。はい。はい。左様でございます。はい。えっ。ご主人様が直接でございますか。はい。いいえ。とんでもないことでございます。はい。もちろんでございます。はい。かしこまりました。ただ今。はい。お待ちください」

　アクゼルはぺこりと頭を下げてトマトクンにバナナを差しだした。

「ご主人様がお話になられます」

「よこせ」

　トマトクンは躊ちゆう躇ちよするそぶりも見せずにバナナを受けとり、耳にあてた。

　あのう。何やってるの？　きみまで。

「──ああ。俺だ。そうだ。黙だまれ。その名を口にするなと言ったはずだ。不ふ可か抗こう力りよくだと。ふざけるな。俺が貴様の言うことを信じると思うか。簡単なことだ。貴様の好きなようにはさせん。何か勘かん違ちがいしてるようだな。貴様の悪あく趣しゆ味みな愉たのしみとやらをぶち壊す方法なんぞいくらでもある。ああ。そうだ。わかればいい。ああ。いいだろう。ルヴィー・ブルーム。そういうことにしておくさ。俺が譲じよう歩ほするのはそこまでだ。ああ。じゃあな」

　ひょっとして、ひとりごとではないのか。あのバナナを通して、バナナの中にいる何かと、いや、ここにはいない誰だれかと会話しているのかもしれない。マリアローズの思いつきにすぎないし、果たしてそんなことが可能なのかどうか。現実離ばなれしているように感じられるが、絶対に不可能だとは言いきれない。

　アクゼルはトマトクンに突つっ返されたバナナをもう一度、頭の側面にあてた。

「はい。はい。かしこまりました。はい。それでは、その他は予定どおりということで。はい。それでは失礼いたします」

「というわけで、解決だ」

　トマトクンはバナナをバッグに戻もどしているアクゼルをしり目に、アジアンに向きなおって首を傾かたむけてみせた。

「これで文句はあるまい」

「途中で倒たおれてしまわないように、せいぜい気をつけることだネ」

「何だ。心配してくれてるのか」

「そんなはずがないだろう」

「まあ、大だい丈じよう夫ぶなんじゃないか。俺が出張る必要なんか、そもそもないのかもしれんしな」

　トマトクンはユリカとピンパーネル、それからマリアローズを順々に見た。顔の下半分を覆おおっているマスクが動いた。唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせたのかもしれない。その笑えみが何を意味するのか。なんとなくだが伝わってきた。俺はお前たちを信じてるぞ。お前らなら、きっとやれる。もしどうしてもダメなら、俺が絶対になんとかしてやる。実際、トマトクンは参加者プレイヤでもないのに、看病担当のサフィニアとおまけ兼けん邪じや魔まにされ役の半魚人を引き連れて、その気になれば７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムに干かん渉しようしうる観戦者という立場をしっかり確保してしまった。トマトクンとルヴィー・ブルームの間にどんな経けい緯いがあるのか、昔の知りあいだということしか知らないが、何か弱みでも握にぎっているのかもしれない。それにしても、離はなれ業わざだ。仲間のためなら、それくらいのことはやってのけるのがＺＯＯうちの園長マスターなんだ。

　正直、心強い。

　思わずうるっとしてしまいそうになった。

　や、でも、どうだろ。そうでもないか。

　ぐしゅん。ばくしゅん。げふん。ごふん。がほん。ふくしゅっ。どくしゅん。

　立てつづけにくしゃみやら咳せきやらをして、サフィニアからティッシュを受けとっては鼻をかんでいる今のトマトクンが、どれだけ頼たよりになるか。あまりあてにはならないかもしれない。

「──それでは、観戦希望の方々につきましては、７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムに一いつ切さい関かん与よしないという条件で認めさせていただくということで」

　アクゼルはアジアンに一つ目を向けた。

「もとより、参加者プレイヤ以外が７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムに参加することは許されません。そのような行こう為いが認められた場合は相応の処置をとらせていただきます。よろしいです

な」

「いいも悪いもないんだろう」

「左様でございます。ともあれ、間もなく７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムが始まろうとしているわけでございますが、その前に、重要にして基本的なルール及および注意事じ項こうだけ、まずはわたくしからこの場でご説明申しあげておきます」

　いよいよだ。

　マリアローズは胸に手をあてて深呼吸した。

　鼻をぐずぐずさせているトマトクンをのぞけば、皆みな、黙ってアクゼルの声に耳を傾けている。いろいろ問題のある連中が集まっているけれど、集中力はさすがだ。

「わたくしどものご主人様主しゅ催さいの７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムにおきましては、杖エル、双剣サイアル、大剣ハイアル、目カル、竜ラル、玉ナル、星フルの七名、それから鍵アトルの一名、計八名の参加者プレイヤの皆みな様さまには、これから七つの勝負ゲイムに挑いどんでいただきます。勝敗の条件及びルールにつきましては、各勝負ゲイムによって若じゃっ干かんあるいは大きく異なっておりまして、これは折々にご説明申しあげます。ただし、前もって皆様にお配りしております首飾りチヨーカー、これにつきましては紛ふん失しつなさいませんようお願い申しあげます」

「……どうやってなくすんだよ。首にはまっちゃってるのに」

「今のはわたくしなりのジョークでございます。申し訳ございません。首飾りチヨーカーについてですが、わたくしどもの参加者プレイヤも同様の首飾りチヨーカーを装着してございまして、７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムを一口に申しあげますれば、首飾りチヨーカーの争そう奪だつ戦ということになります。なお、鍵アトルの首飾りチヨーカーについては特別扱あつかいでございまして、これを失いますと、ただちに完全なる敗北が決定いたします。鍵アトルはご主人様とアジアン様でございます。仮にアジアン様が第一勝負フアーストゲイムにて首飾りチヨーカーを奪うばわれてしまいますと、そこで７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムは終しゅう了りようでございます。それから、最終の第七勝負セブンスゲイムにつきましては、鍵アルト同士、禁じ手無し降参無し、殺やるか殺られ

るかのデスマッチとなります。また、参加者プレイヤ各位におかれましては、当方の取り計らいにより、必ず最低一度、一つの勝負ゲイムには参加していただくことになりますので、お心の準備を怠おこたりなきようお願いいたします。なお、今後当方から提示させていただくルールに皆様が違い反はんなさいました場合、誠に遺い憾かんではございますが、相応の処置をとらせていただきますので、ご注意を。以上はすでに先だってご主人様からご説明がありました事項ではありますが、きわめて重要ですので、僭せん越えつながらわたくしアクゼルから重ねてご説明申しあげさせていただきました。何とぞお含ふくみおきくださいませ」

「質問」

　手をあげたベティにアクゼルが一つ目を向けた。

「何でございましょう」

「相応の処置って何。だいたい想像はつくけど、一応ちゃんと説明して」

「これは大変申し訳ございません。わたくしどもがとらせていただく処置の詳しよう細さいということでございますね。少々お待ちください。ただ今お調べいたします」

　アクゼルはバッグからファイルのようなものを出して、ぺらぺらめくった。

「──ございました。はい。はい。処置。処置。これですな。わたくし、相応の処置と申しあげましたが、じつはひと種類しかございませんでした。ルール違反が確かく認にんされた場合、即そつ刻こく、こちらでお預かりさせていただいている方全員のお命を頂ちよう戴だいいたします」

　一人、二人、といった形ではなく、いきなり全員か。数の問題ではないだろうが、容よう赦しやがない。予想していたことではあるけれど、何か大きな異物でも飲みこんでしまったかのように胃のあたりが重くなった。軽口の一つでもたたかないと、怖おじ気づいてしまいそうだった。

「それで、こっちが勝ったら賞金とか賞品とか、何か出るわけ？　まさか、何も用意してないなんてケチくさいこと言わないよね」

「こちらでお預かりさせていただいている方全員をお返しいたします」

　一つ目と縦割れの口しかないのだから、顔つきに変化を求めても無む駄だかもしれないが、アクゼルはしれっとした顔で即答した。

「ああ、わたくしとしたことが、それからもう一つ、大事なルールを失念していました。鍵アトルを奪われてはならない。つまり、アジアン様が敗北なされた場合も、ただちに罰ばつが下されます。もちろん、先ほども申しあげましたとおり、この場合はその時点で７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イム自体が終了ということになってしまいますが」

「……ようするに、昼飯時ランチタイムの人たちを助けだすには、そっちが勝手に決めたルールの中でどうにかして勝たなきゃいけないってことだよね」

「平たく申しあげれば左様でございます。さて、その他ほか、何かございませんか。ございませんね。それでは──」

「待て」

　アジアンが前に出た。

　無表情だが、つめたい声こわ音ねだ。聞く者の肝きもを瞬しゆん時じに凍こおりつかせる、途と方ほうもなく冷え冷えとした声だった。

「先にみんなの無事を確かめさせろ。ボクはあの男の人形じゃないし、道どう化けを演じるつもりもない」

「なんやワレ、おどれの立場っちゅうモンなんッもわかっとれへんみたいやなあ？」

　今の今までクソむかつく馬ば鹿か丁てい寧ねいな敬語だったのに、豹ひよう変へんした。アクゼルのそれは、カタリ曰いわく、イズルハ訛なまりではなくケメック訛りらしい。そんな些さ細さいな差はどうでもいいのだが。

「なんでわいがワレ安心させるためにわざーざそないなことしてやらなあかんのや。冗じよう談だんポイやで。アホかワレ。少しは考えぇ。わいらはな。ジブンらのツレぎょうさん預かっとんのやで。

煮にるんも焼くんも自由っちゅうわけや。ほんだのに、まだ煮ても焼いてもおらへんっちゅうとんのやろが。そんだけでもありがたい思え。わいが紳しん士し的やからって、なめとったらあかんで。たいがいにしとかんと、いてこましたるど、ドアホ。ちゅうわけで、や」

　あまりの急変ぶりに半ば呆ぼう然ぜんとしているマリアローズたちの前で、アクゼルはぴょこんと礼をして、頭の上から落ちてしまいそうになったシルクハットを左手で押さえた。

「わたくしは第一勝負フアーストゲイムの会場前にて皆様をお待ち申しあげております。会場はこの先でございます。一本道ですから迷われることはないでしょう。それでは、のちほど」

「へ？　会場──って……」

　アクゼルはマリアローズの問いには答えず、すっ、とＤ８出入口の向こうへ消えた。三本足がものすごい速さで気持ち悪い動き方をしていたが、足音らしき音はほとんど聞こえなかった。そういえば、今日のアクゼルは、似え非せ燕えん尾び服ふくでビシッと決めていたわりには、この前と違ちがって革かわ靴ぐつではなく白い運うん動どう靴ぐつを履はいていた。それにしても、速かった。速すぎだった。三本足であんなに速く動けるものなのか。というか、二足歩行だろうが四足歩行だろうが、あんなに足が速い生き物にはそうそうお目にかかれないだろう。

　置き去りにされた恰かつ好こうのマリアローズたちは、数秒間、ぽかんとしていた。

「行かなくていいのか」

　他ひ人とを小こ馬ば鹿かにしているのではないかと勘かんぐりたくなるような、冷静というより平板で無感情な声音だった。

　のっぽの変態野や郎ろうがかついでいるやたらとでかいあのバッグには、いったい何が入っているのだろう。だいたい、黒くて丸い色眼鏡サングラスのせいもあって、何を考えているのかよくわからない。はっきりしているのは、この男が重度の変態だということだけだ。

　アジアンが参加者全員を順番に見回して、最後にマリアローズと

目があうと苦しげに眉まゆをひそめ、こらえかねたように目をそらした。

「ベティ。ヨグ。それからＺＯＯのユリカくん。ピンパーネルくん。＊シリアル・キラーズの飛燕フエイヤン。王龍の荊王ジンワン。そして━マリア。とくに昼飯時ウチと関係のない五人には、本来背負う理由のない荷物を背負わせてしまうことになる。いくら感謝してもしたりない。きてくれてありがとう」

「あたしからも」

　ベティが癖くせのある髪かみの毛を揺ゆらして頭を下げた。

「お礼を言わせてもらうわ。ありがとう」

「どうやらこれは、僕もお礼を言っておいたほうがよさそうな流れですね」

　ヨグが腰こしをかがめると、背中に荒あら縄なわでくくりつけてあった人間が扱あつかうには明らかに巨きょ大だいすぎる斧おのが前に倒たおれかかってきて、地面にガツンと突つき立った。

「━おっと。危ない危ない。ちょっと大きすぎたかな。適当に買ってきたのですが、ふだん武器なんて使わないから、よくわからなくて。まあ、いいや。ありがとうございます」

「困ったときはお互たがい様しやまよ」

　ユリカはまったく動じてもいなければ、迷いもない様子だった。ヨグの言葉はツッコミどころ満まん載さいだったはずだが、さすが最強だ。

　冗じよう談だん抜ぬきで、ユリカは強いと思う。おそらくそれは、医術式のおかげでも、鵺ヌエ流古式戦闘術のおかげでも、極限クライマツクス九手棍ナインボールのおかげでもない。特筆すべきは心の強さだ。

　ユリカはきっと、強くなければ生きてこられなかった。吹ふき飛ばされてしまいそうな嵐あらしの中で、前を向いて今日まで生き抜ぬいてきたからこそ、もっと強くなれた。

　誰だれよりも強くて、とてつもなくかわいくて、少し不器用なと

ころもあるユリカ・白雪スノーホワイトという一人の女性を、マリアローズは尊敬せざるをえない。同時に大好きだ。

「まッ、なァーんかおもろそォーだしな。荷物とかよっくわっかんねーけど、強ェーヤツとバトれンならオレとしちゃーワリと文句ねェーっつーか。最近アンマ本マ気ジバトしてねェーし。ユリィもいるしよォ」

　だからこそ、あんな蠅はえというか小こ猿ざるがつくのは許せないというか、認めがたいというか。カタリも同感のようで、微び妙みような魚顔をしているが、なぜかサフィニアはそうでもない。もっと不可解なのは、小猿につきまとわれている当のユリカも、満まん更ざらでもなさそうとまでは言えないし、言いたくないけれど、そんなにいやがっているかんじではないことだ。まあ、そうは見えないが同い年らしくて、いろいろと共感できる部分もあるのかもしれないが、やっぱりどうも納なつ得とくできない。だいたい、バトりたいだとかバトバトしたいだとか強ェーヤツと戦いたいだとか、そういう動機もマリアローズにしてみれば理解不能だ。その意味では、のっぽの変態野郎の言うことのほうがまだわかりやすかった。

「貸しはいつか返してもらう。でかい貸しになりそうだ」

「必ず返すヨ。できることとできないことがあるけどネ」

「心配は無用だ。お前のものでもないものをよこせと言ったりはしない」

　変態二名のねちっこい視線を感じる。

　ちょっと帰りたくなった。

　こんなときに、寡か黙もくだがやることはきっちりやってみせるピンパーネルの存在は一服の清せい涼りよう剤ざいだ。見るといい。マリアローズの視線に気づいて、こちらを見たピンパーネルの表情を。何とも言えない穏おだやかでゆったりした微び笑しようだ。最初のころは、ピンパーネルに微笑ほほえまれて、マリアローズも微笑んで、それ以上どうしていいかわからなくて、困り果てることもあったけれど、今はもう十分でも二十分でも微笑みあっていられる。いや、さすがにそれは厳しいかもしれないが、ピンパーネルの微笑の癒いやし効果は尋じん常じようじゃない。おかげで、

思っていたよりもずっと落ちついた気分でアンダーグラウンドＤ８怪虫の坩堝るつぼガンズゲイルへと足を踏ふみ入れることができそうだ。

「行こう」

　アジアンが先頭を切って歩きだした。

　ヨグ、ベティが並んでつづき、その後ろにユリカと小猿、ピンパーネルとマリアローズ、それから荊王ジンワン、トマトクンとサフィニアと半魚人の観戦者組はひとかたまりになって最さい後こう尾びにつく恰好になった。

　大だい丈じよう夫ぶだ。

　平気だ。

　何でもない。

　マリアローズは口の中で唱えてからＤ８に入った。

　ベティが要素魔ま術じゆつで空中に光球を浮うかべた瞬しゆん間かんは思わず身構えてしまった。

　ため息が出た。

　どうやら何もいないようだ。

　じつを言うと、怪虫ガウンドと呼ばれる節足動物のような異界生物フリークスどもの巣そう窟くつであるこの怪虫の坩堝ガンズゲイルには、あまりいい思い出がない。一度しかきたことがないのだが、そのたった一度が強きよう烈れつだった。マリアローズは振ふり返って半魚人を一いち瞥べつした。あの半魚人バカは忘れちゃってるのかな。魚脳だから忘れててもおかしくないけど。あいにくマリアローズの記き憶おく力は人間並みなので、忘れようにも忘れられない。口にすると余計にたまらなくなりそうなので誰だれにも言っていないけれど、本当はルヴィー・ブルームが「明後日の十時、Ｄ８の出入口前に」とかのたまったときにも、うげっ、と思った。Ｄ８はいやだ。正直、Ｄ８だけは。べつに、Ｄ８を忌き避ひしているのはマリアローズだけではなく、今日もこの一帯にはひとけがないが、いつもこうだ。それだけの理由があるのだ。マリアローズは身を以もつて体験して思い知らされた。ああ、でも、ダメだ。

思い出したくない。あれ以上、というよりも、あれ以下のひどい経験を挙げるとしたら、ジェードリ地下の洞どう窟くつでの一件くらいか。あれも最悪だったけれど、そんなことを言っていられる状じよう況きようではなかったので、たえられたというより、たえるしかなかった。今回だって同じだ。忘れろ。忘れるんだ。けど、なんでよりにもよってＤ８なんだ。もしかして、これもルヴィー・ブルームのいやがらせなんじゃないの……？

「せやけど、Ｄ８とは考えよったな」

　カタリが腐ふっ腐っ腐っと低く笑った。半魚人が腐った笑い声を出すときはろくなことがない。縁えん起ぎでもないんだから、黙だまっていればいいのに。腐れ魚め。

「会場っちゅうのんがどないなモンかわからんけど、ここやったら何かしとっても噂うわさにもならへんやろ。他ほかンとこなら侵入者クラッカーの間でぱあっと情報が広がってまうやろけどな」

「どういうところなの？」

　ユリカは無む邪じや気きだ。もともと侵入者クラッカーの仕事やアンダーグラウンドに興味があるわけではなく、どちらかといえば疎うといと言ってもいいくらいなので、Ｄ８のおぞましさについて聞き及およんだことすらないのかもしれない。マリアローズは放ほうっておけば得意げに詳しよう細さいな解説を始めるだろうカタリの機先を制して、できるだけ明るい声で言い切った。

「超最低ＳＵＣＫなとこだよ」

「ふゥーん。強ェーヤツいたらいーなァ」

「もしそういうのがいたらぜんぶきみに任せるから。せいぜいがんばってね。遥はるか遠くから応おう援えんだけはしてあげるから」

「まァ、マリオレーズだっけ？　テメーは役に立ちそォーもねェーしなァ」

「マリアローズ、だけどね」

「キャハハハ。たいして変わンねェーじゃん」

「いや。ずいぶん違ちがう」

「何、ジン、本人じゃなくてテメーがオレに反論かよォ。マジクソ変態だなァ、コンニャロ。いーけどよォ。べつに」

「ええんかい」

「だってオレにゃー関係ねェーしよォ。実害はねェーもん」

「こっちはありまくりなんですけど……」

「マリアも大変ねえ」

「なァー」

「なーじゃないよもう。ユリカまで他ひ人と事ごとみたいに……」

　ぐっしゅん。ぶぐしゅん。げふん。ぎっしゅん。

「だ……だ、だっ大丈夫……ですか……」

「──む。ああ。それなりにな」

「……うるさいわね」

　ベティが歩きながら呆あきれ顔で振り返った。相変わらず、マリアローズを見る目はとくに厳しい。考えすぎかもしれないけれど、あたしは忘れてないわよ、とでも言いたげだ。どさくさに紛まぎれてうやむやになってしまえばいい、なんてあなたは思ってるのかもしれないけど、そうはいかないから。でも、僕はそんなこと思ってないし。とりあえず、すべては今回の件が片づいてからだろうけど。今はそれよりも大事なことがあって、それどころじゃないから、棚たな上あげしても許されるはずだ。

　本当に、それどころじゃないんだ。

　アジアンが足を止めた。

　ほぼ同時にピンパーネルも立ち止まり、静かにするよう手をあげて合図をした。

　マリアローズには一行の呼吸音や衣きぬ擦ずれの音しか聞こえないが、ピンパーネルは目がいいだけでなく、耳もいい。その鋭えい敏びんな聴ちよう覚かくが何かを察知したのか。どうやらアジアン

もそれを感じているらしい。Ｄ８に入ってから、もう百メーテル以上進んだはずだ。だいたい百五十メーテルほどか。アクゼルが言っていたとおり一本道なので、道を違たがえた可能性はないはずだ。会場とやらについては想像もつかないが、見たかんじ、このあたりはいくらか人の手が入った半天然のトンネルといった様子で、幅はばは十メーテルくらい、高さは五メーテルほど、ゆるやかな下り勾こう配ばいで、気をつけて歩かないとつまずいてしまいそうな程度にはでこぼこしている。

　前にカタリと二人できたときは、だいたいこのへんかもう少し手前で、人間の子供ほどもある巨きょ大だいな蠅はえに襲おそわれて、慌あわてて逃にげたんだっけ。うっ。思い出しちゃった。鳥とり肌はだが。

　でも、羽音らしきものは聞こえない。ベティが要素魔ま術じゆつで出した光球はかなり明るいが、それでも十メーテルか十五メーテル先まで見えるかどうかといったところだ。行く手の闇やみは深い。その向こうに何があるのか。何がいるのか。

「照らすわよ」

　ベティが魔術士衣のポケットから何やらとりだした。魔術の触しょく媒ばいだろう。

「燦Ｊｙｎ拝眼Ｌｏｗ」

　よくわからないが、光霊と気霊あたりの力による要素魔術なのか。ベティが右手をのばした先、二十メーテルくらい前方の中空にまばゆいばかりの真っ白い光の渦うずが生まれて、やつらがひそんでいた濃のう厚こうで濃密な闇を簡単に切り裂さいてしまった。

　いきなり隠かくれ蓑みのを引っ剝ぱがされて、さぞかし吃驚びつくり仰ぎよう天てんしたのだろう。やつらは一いつ斉せいにシャアともシィッともギャッとも言いがたい声のようなものをあげて、あとずさったり身をすくめたりした。

　ものすごい、尋じん常じようではない、やめて欲しいほどの数だった。

　頭がくらくらするくらい、吐はき気がするくらい、恐おそろしく多種多様でもあった。

ついでに、この距きょ離りであれだけの大きさに見えるということは、どいつもこいつもそうとうでかい。

天てん井じょうやら壁かべやらに張りついているやつもいる。ぴょんぴょん跳はねているやつもいる。ベティが生みだした光の渦に向かって突とつ進しんしてゆき、その周りを飛んでいるやつもいる。胸むな糞くそが悪いなんてものじゃない。だいたい、黒かったり茶色だったりして脂あぶらっぽくてたまに飛んだりもするアレにかぎらず、マリアローズは虫全ぜん般ぱんに対してどうしても好感というものが持てない。たまに、なんであんなやつらが存在しているんだろう、と考えてしまうことさえある。いなくてもいいのに。いや、彼らにだって、存在意義やら存在理由やら成立過程やらがあるのだろうし、いくらマリアローズが、いなくてもいい、いなくなれ、と思ったところで、実際、彼らはいて、これからもいつづけるのだろうが、好きになれないんだから仕方ないじゃないか。

茶色い甲こう虫ちゆうがいる。黒い甲虫もいる。緑色に輝かがやく甲虫もいる。極ごく彩さい色しきでやたらとヒゲが長い甲虫もいる。なんかふぁさふぁさした毛にまみれた白っぽい甲虫もいる。椿象かめむしみたいなやつもいる。蝗虫ばつたっぽいやつがいる。蟋蟀こおろぎっぽいやつもいる。螻け蛄らっぽいのもいる。蜘く蛛もがいる。脚あしが長いやつ。短いやつ。毛だらけのやつ。ぜんぶでかいけど。団子虫みたいなやつが地面で蠢うごめいていたりもする。蟻ありとしか思えないやつもいる。どっちにしても、やたらとでかいけど。それから、光の周りを飛んでいるのは色とりどりの蛾がだ。間ま違ちがいない。いやになるくらいでかいけど。他ほかにも、学者が見たら、新種発見、とか叫さけびそうな奇き怪かいな姿形のやつがたくさんいる。とにかくでかいけど。でかすぎるんですけど。

悲鳴は出てこなかった。

息ができない。

悪いけど、無理だ。

絶対、無理。

無理って言ったら無理。

あそこはどうやっても突とつ破ぱできない。

あの虫、というか、怪虫ガウンドか、怪虫ガウンドゾーンは、何なん人ぴとの侵しん入にゆうも許さない、高さ数千メーテルの絶ぜつ壁ぺきにも匹ひつ敵てきする、いや、それより遥はるかに険しく厳しい、きっと気温も零れい下か百度くらいで、人間が生存できる環かん境きようではなくて、怪虫ガウンドだけの楽園で、だから、そっとしておいたほうがいい、決して立ち入るべきじゃない、そういう場所だ。永遠に人じん跡せき未み踏とうであるべき最後の秘境だ。

「……まァ」

飛燕フエイヤンが鼻をこすってヒャハと短く笑った。こころなしか、さしもの小こ猿ざるもやや元気がない。

「大ゴ脂ツ羽キ蟲ーはいねェーっぽいしギリで平気かなァ。オレ、アレはちょっとなァ。デッケーんだもん。フツーの脂羽蟲ゴキと比べっと。やたらと」

「あいつらもでっかいよ！　フツーの虫と比べたら！　めちゃくちゃ！」

思わず涙なみだ声ごえになってしまった。しょうがないじゃないか。そりゃ泣きそうにもなるって。あれはないって。やばいって。何これ。どういうこと？　まだ７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムは始まってないんですけど？　その前段階なんですけど？　始まるところまで行けないような気がしてならないんですけど？　てゆうか、ごめんなさい。ほんとにごめんなさい。行けないっていうか、行きたくないです。本気で、真しん剣けんに、どうしても行きたくないです。

身体からだが震ふるえてきた。いけない。ダメだ。がんばれ。こらえろ。踏ふみとどまれ。でも、あれはちょっと、ダメかも。さすがに限界超こえちゃってるかも。軽く超えてるかも。

「泣かないでくれ、マリア。ここは、ボクが――」

アジアンが泣き叫ぶスクリーミング・短剣ダガーを抜ぬいて駆かけだそうとしたが、その足が止まった。きっと、何の打開策も頭に浮うかんでいないくせに、とりあえずどうにかしないと、という考えだけで突つっ走ろうとして、やっぱりやめたのだろう。この根こん性じようなし。キミは当事者だろ。責任者だろ。頭領マスターな

んだろ。どうにかして見せろ。てゆうか、もうお願いだから、どうにかしてください。この際、誰だれでもいいから。どなたでもよろしいですから。

「焼くしかないわね」

　ベティ様！

　僕への視線がやたらとつめたかったりとか、無理やり寄せてあげているところなんかもふくめて、あなたは最高です。もう正真正しよう銘めいの巨きよ乳にゆうです。ダイナマイトな女め神がみ様さまです。

　ベティはまた魔術士衣のポケットから触しよく媒ばいらしきものをとりだした。マリアローズはその姿に惚ほれ惚ぼれと見入っていた。魔術のための特殊なチヤネ精神集中リングなしで呪じゆ文もんの詠えい唱しように入ろうとするなんて、どれだけすごいのだろう。さすが巨乳の女神といったところだが、不意に何者かがマリアローズの目の前を横切っていった。ベティが詠唱をやめた。マリアローズたちを追い越こしてベティの横に並んだのはサフィニアだった。

「……ベティは、先があるので……今日、わたしにできることは、あまり……ありそうに、ないですから……せめて、これくらいは……やらせてください……」

「じゃあ、せっかくだし、お願いしようかしら」

「……はい……任せて、ください……」

　姉弟で子しに向かって微笑ほほえんでみせたサフィニアは、もう触媒を用意していたようだ。両手でつかんだ杖つえの先で地面を突いた途と端たん、あたりの空気が変わった。そういえば、帰りの馬車の中でも一日のうちの何時間かは一人で何かの訓練にいそしんでいたようだが、以前のサフィニアとは少し違う。うまく説明できないけれど、魔術に入るまでの一連の挙動に、マリアローズの目で見てもわかるくらいのすごみがあるような気がする。

「術式アムラル……連鎖アコルド──」

　いや、たぶん、気のせいなんかじゃない。

　ベティがはっとしたようにサフィニアを見た。

　サフィニアは杖を握にぎったまま、両手の指を絡からみあわせ、ほどいて、すぐにまた違う形で組みあわせた。

　耳鳴りがした。

　大きな魔術がくる。

　呪文の詠唱が始まった。

「太崑閤貘羅宝眩苦ＲｅｕＬａｕＭａｕＬａｕ詩湛Ｌｅｕ歓楽Ｄｕｅｄ一切訣贋晧潔斎ＭｏｕＲｅｕＬａｕｄ韻吟至極氷監獄」

　サフィニアが得意としている縛氷獄や縛氷殺に少し似た呪文だった。案の定だった。怪虫ガウンドどもがたむろしているというか、ほとんど密集しているといっても過言ではない二十メーテルくらい前方の一帯が、瞬しゅん時じに極北の真冬のごとき光景になった。空気中の水分はすべて氷と化してきらきら輝かがやき、怪虫ガウンドどもの体表や天てん井じようや壁かべや地面が白い霜しもで覆おおわれて、跳はねていた蝗虫ばつただの蟋蟀こおろぎだのはぐったりし、蛾がは地面に落ちて、時間自体が停止したかのように、とにかく何もかもが動きを止めた。縛氷獄やその上位版の縛氷殺よりも洗練されていて、しかも威い力りよくも範はん囲いも向上しているように見えた。マリアローズは思わず、わ、すごっ、と呟つぶやいてしまったが、驚おどろいたり感心したりするのはまだ早かった。

「ＤｅｌｇＤｏｌｇＤａｌｇＶｅｌ摩宇理天悪摩路堂ＧｕｌｅｎＧｉｅｎＡｉｅｎＳｉｅｎ刀紗乃屠爬流琉慧問答ＡｉＮａｋｉＣｉ臥ＭｉＤａＲｉＮｉＡＬＴ那未堕永久厨ＧａｌＥＮＤ」

　そんなバカな。魔術を、それもかなり強力な魔術をぶっ放したばかりなのに、間かん髪はつを入れず次の魔術がくるなんて。マリアローズは魔術士ではないけれど、魔術の知識は多少ある。魔術の作法というか、手順も一応知っている。ごくごく初歩的な魔術なら使えないこともない。だからこそ、余計にこれには仰ぎよう天てんした。一つ目の魔術はともかく、二つ目の魔術については、間ま違ちがいなく特殊なチヤネ精神集中リングを経ずに呪文が詠唱され、発動した。以前、ベティが集中なしに魔術を発動する場面を目もく撃げきしたことがあるけれど、あのときも現代魔術士の水準を超ちよう越えつしていると思った。サフィニアは自分の姉弟子であり魔導

士ウイザードである〝垂れ目のベテイ・ザ・ドウベティルーピングアイズ〟と同じ境地に達しつつあるのか。

炎ほのおが虚こ空くうに生じた。

目にも鮮あざやかな緋ひ色いろの猛もう火かだった。

炎は飽あくことを知らぬ貪どん欲よくで凶きよう暴ぼうで巨きよ大だいな蛇へびのようにどこまでも餓うえていた。

のたうった。

炎にのみこまれた怪虫ガウンドどもは先を争うように次々と破は裂れつして四散しながら炎えん上じようした。

破は壊かいだ。

瞬間冷れい却きやくと炎と熱による破壊だ。

恐きよう怖ふよりも畏い怖ふを喚かん起きするほどの徹てつ底てい的な破壊だ。

しかも、マリアローズが呆あつ気けにとられている間に、サフィニアはまた次の魔ま術じゆつを用意していた。もはや芸術と呼んでも大おお袈げ裟さではないだろう。サフィニアの作品はマリアローズの知らない大きな魔術の二連続で始まり、お馴な染じみの魔術で完成しようとしていた。

「寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

縛氷獄だ。

吹ふき荒あれる緋炎の嵐あらしを水霊Ｈｙｄと時霊Ｘｅｏが力をあわせて鎮しずめると、耳が痛くなるくらいの静せい寂じやくが訪おとずれた。

サフィニアがそっと息を吐はいた。

呆あきれたように肩かたをすくめてみせたベティは、口くち許もとに微び笑しようを浮かべてはいたが、目はまったく笑っていなかった。

「恐おそろしい子ね。あなたって」

「……いいえ……まだまだ、です……課題ばかりで……」

「ここ一番の集中力は相変わらずたいしたものだわ。連続呪法セリエスマグデル。あなたにはあってるんじゃないの」

「はい……自分でも……そう、思っています……」

「うかうかしてると、追い越こされちゃいかねないわね。あたしも」

　本気か冗じよう談だんかよくわからないようなベティの口調だった。サフィニアもほんの少し笑えみをのぞかせただけで、何も言わなかった。

　ともあれ、サフィニアのおかげで、人類に残された最後の秘境は、散乱しているというよりも堆たい積せきしている黒こげの残ざん骸がいが多少邪じや魔まくさそうだけれど、鼻歌をうたいながらでも通り抜ぬけられそうな単なる通り道と化した。マリアローズにしてみれば、後列へ戻もどる途と中ちゆうのサフィニアをぎゅっと抱だきしめて感謝の意を表したい気分だったが、笑顔で肩を叩たたくだけにとどめておいた。ベティが最初に出した光球はまだ健在だ。アジアンは皆みなを見回してから、だが、数歩進んだだけで、また足を止めた。

　マリアローズはピンパーネルを見た。

　ピンパーネルも止まっていた。

　微かすかに眉まゆをひそめている。

　浮うかれ気分が一瞬で沈しずんでしまった。

　何だよ、今度は。

　まだ何かあるわけ……？

「—どうやら今度は大物らしい」

　なっくしゅん。

　トマトクンはくしゃみをしつつ大剣の柄つかに手をかけたが、ぜんぜん恰かつ好こうがついていなかった。そうは言っても、トマトクンの嗅きゅう覚かくは無視できない。風か邪ぜで鼻がつまっているとか、そんなことは無関係だ、と思う。たぶん。サフィニアはまた前に出ようか出るまいか迷っているようだ。大物とは何なのか。見当もつかない。マリアローズは唇くちびるを舐なめた。唇は乾かわいていた。

「下がって。ゆっくり」

　アジアンが低い声でそう言って、左手を後ろに押しつけるような仕し種ぐさをしてみせた。ベティもヨグもすぐにじりじりと後退しはじめたが、アジアンはそのままだ。飛燕フエイヤンは前に飛びだそうとして、ユリカに襟えり首くびを引っつかまれた。マリアローズとピンパーネルは黙だまって下がった。いちいち振ふり返って確かく認にんしていないが、ぶつからないということは、荊王ジンワンや観戦者組も同じだけ退いているはずだ。

　一人、アジアンだけが前に残っている。

　そうか。

　そういうことか。

　何かあれば、まず自分の身を危険にさらす。自分でどうにかできそうなら、片づけてしまう。一人ではどうにも手に負えないとき、ようやく仲間に出番が回ってくる。おそらく、それが昼飯時ランチタイムの頭領マスターとしてのあいつのやり方なんだ。

　でも、その後ろ姿を見せられているあいつの仲間たちは、どういう気持ちでいるのだろう。やきもきしないのだろうか。もっと自分たちを信じてくれてもいいのに、と不満に思うことはないのか。それとも、仲間たちは皆、そんなあいつのことをよく理解していて、しょうがないな、とあきらめているのか。

　あいつが大勢の仲間に囲まれているところなんて想像もつかないから、わからない。

　よくわからないけれど、不器用で、意地っぱりで、ちょっとだけ哀かなしい背中だ。

「──ピンパーネル、前に出て。ユリカはこっち。飛燕フエイヤンも

前。荊王ジンワンは僕らの近くに」

　ベティが顔を半分振り向かせて睨にらみつけてきたけれど、かまわなかった。たしかにベティはおっかない。たぶん、その気になれば、マリアローズをこんがりローストにすることも、氷の棺ひつぎに閉じこめることも、ビリビリ感電させまくって血液だけでなく脳みそまで沸ふつ騰とうさせて消し炭みたいな死体にすることも、ベティは簡単にやってのけるだろう。ベティがマリアローズを快く思わない理由もあるのだろう。それはおそらく、少なくともある程度までは正当な理由なのだろう。ただ、それはそれだ。僕だって、遊びにきたわけじゃない。トマトクンが心配してついてきてしまうくらいには危ない橋を渡わたろうとしているという自覚はある。わりと、結構、命いのち懸がけなんだ。卑ひ屈くつになる必要なんかない。これっぽっちもない。だいたい、何かあるのなら、はっきり言ってくれればいいんだ。ちゃんと言葉にしてくれないと、わからない。なんとなく察しろ、とか、そんなの無理だから。知ったこっちゃないから。言われたら、言われたときに考えるし。今はそんなことをやってる場合じゃないんだ。ベティみたいな人はすこぶる頭がよさそうだから、いろんなことを並行して考えたり進めたりできるのかもしれないけど、凡ぼん人じんの僕にはそんな器用な芸当できっこない。だから、切りかえるんだ。今、この瞬しゅん間かん、この状じよう況きように照準を合わせる。そこで、僕に何ができるか。何をすべきか。

　思うにあいつは、頭領マスターとしてどうかは知らないけど、指揮者としての適性には欠けている。はっきり言って、私見では、そこに関しては僕のほうがまだマシだ。園長マスターのお墨すみ付つきだ。これでも、僕の他人を顎あごで使う能力はなかなかのものなんだ。

「トマトクンとカタリはサフィニアを」

「まかしとき」

「う」

　むぐしゅん。げほげほ。

「あと、サフィニアはさっきので疲つかれてるだろうから、無理はしないで。どうしても必要なら言うから、そのときはお願い」

「……わたしは、まだ……大だい丈じよう夫ぶ。遠えん慮りよは、しないで……」

「了りよう解かい。じゃ、いざとなったらこき使うかも。そのつもりで」

　マリアローズはＤ８の洞ほら穴あな全体を視界に収めたまま、後ろにいる観戦者組をのぞく全員の位置どりを素す早ばやく確認した。七、八メーテル前方にいるアジアンの右に飛燕フエイヤン、左にピンパーネルがいて、その五メーテルほど後方にヨグとベティ、そこから二、三メーテル離はなれてマリアローズ、ユリカ、荊王ジンワンがかたまっている。飛燕フエイヤンと荊王ジンワンについては、おとなしく指示に従ってくれるかどうか少し不安だったが、杞き憂ゆうだったようだ。まあ、飛燕フエイヤンはバトルバカ野や郎ろうの小こ猿ざるだけに、前に出るぶんには不満はないだろうし、荊王ジンワンは抜ばつ歯しフェチの変態だけに、認めたくないのだが、マリアローズのそばにいろと言えば拒きよ否ひはしないだろう。そのあたりは計算していた。

　問題はベティとヨグだ。どうする。どうもしない。言い方は悪いけれど、ベティはかなり扱あつかいづらそうだし、ヨグはよくわからない。まず勝手に動いてもらって、こちらとしては、できればそれをうまく利用する。現時点ではその程度に考えておいたほうがいいだろう。

　それにしても、いったい何なんだ。

　この雰ふん囲い気き。

　この空気。

　皆みな、息をひそめている。

　物音はしない。

　聞こえるのは自分の心臓の音だけだ。

　何か、動いた。

　──ような気がした。

　十五メーテルほど前方、光球の明かりがぎりぎり届くあたりだ。

影かげのようにしか見えなかった。

速い。

アジアンとピンパーネルが重心を低くした。

飛燕フエイヤンは突つっ立ったままだ。

掌てのひらが汗あせばんでいる。

暑いわけでもないのに、額に汗がにじんでいた。

くる、と思った。

はっきりした根こん拠きよはないけれど、ある大きさの容器に少しずつ液体をそそいでいって、一いつ杯ぱいになり、今、あふれた、そんな感覚があった。

実際、それは闇やみの向こうからあふれだしてきたかのようだった。

オレンジ色だが、マリアローズの瞳ひとみの色とはだいぶ違ちがう。妙みような光こう沢たくがあって、いやらしくて、汚きたならしいかんじがした。それは細長い形をしていた。多数だった。とてつもない数の汚いオレンジ色の物体が、闇の奥の天てん井じようから、あるいは壁かべのあたりから、もしくは床ゆかから、こちらめがけてほとんど水平方向に、もしくは斜ななめにピュンピュンピュンピュン押しよせてきた。何あれ。何なんだ、いったい。どうも狙ねらわれているのは前列のアジアンたちのようで、こちらには的を外した物体が流れ矢のようにぽつぽつ飛んでくるだけだったが、あからさまに食くらうとやばそうだった。それなのに前の三人は、下がるのでも横っ跳とびするのでもなく、あえて突っこんでゆくことにしたようだ。マリアローズは、散開して、と叫さけびながら、凡人らしく無難にひょいひょい身をかわした。危なかった、というほどでもなかった。わりと余よ裕ゆうはあったけれど、物体が顔の脇わきを通りすぎてゆく際に異い臭しゆうを感じた。なまぐさい刺し激げき臭しゆうだった。見ると、それがびちゃっと命中した地面には、何かこう、あらためてにおいを確かめるのは遠慮したい、ぶよぶよねばねばしていそうで、いかにもさわるべきではなさそうなかたまりが付着していた。迂う闊かつにもカタリがそのうちの一つを踏ふんでしまったようで、足をとられて転びかけた。

「──魚ぎよっ……！　ぬ、抜ぬけん！」

「む……！」

　すかさずトマトクンとサフィニアが二人がかりで引っぱってくれて、なんとかすぐに脱だつ出しゆつできたからよかったものの、あのバカ半魚人、注意しろっての、ほんとに。

　ただ、半魚人のおかげであの物体の正体がだいたいわかった。ようするにあれはかなり粘ねん性せいの強い粘液で、トリモチのようなものなのだろう。闇の向こうにいる何ものかが、その汚いオレンジ色のネバ槍やりを投げつけてきているのか、もしくは唾つばを吐はくような要領で飛ばしているのか。考えている場合じゃない。ネバ槍はまだビュンビュン飛んでくる。マリアローズはネバ槍をよけながら右の壁かべ際ぎわに退たい避ひした。荊王ジンワンはすぐそばにいる。ユリカは逆側の壁際だ。ベティとヨグも左右に分かれていた。前の三人は。ダメだ。見えない。

　いきなり何も見えなくなった。

　真っ暗闇だ。

　光球だ。

　ネバ槍が光球に命中したらしい。

　やばい。見えない。暗い。落ちつけ。パニクるな。ただ見えないだけじゃないか。たいしたことはない。や、あるけど。大ありだけど。大だい丈じよう夫ぶだ。間もなくだった。ベティか。また光球が出現した。わきあがってきた安あん堵どを切って捨てて、マリアローズは叫んだ。

「みんな前へ……！」

　アジアンとピンパーネル、飛燕フエイヤンの三人は、すでに前方の闇に突とつ入にゆうしていた。ネバ槍は彼ら三人に狙いを定めているようで、もうこっちには飛んでこない。三人をサポートするには、この位置では低くすぎる。もっと最前線と後方との距きよ離りをつめないと。マリアローズはねばねばしたかたまりを飛び越こえながら走った。前にヨグがいる。斧おのが重そうだ。追い抜いた。

　進むごとに、おそらくベティの動きにあわせて光球も前進して、

やつらの姿が少しずつあらわになっていった。

　慄りつ然ぜんとせざるをえなかった。

　何なんだ、あいつは。

　ぱっと見て思いついたのは、蜈蚣ムカデだ。黒地に黄色やら橙だいだい色いろやら赤色やら緑色やらの派手な斑まだら模様入りの、身体からだと呼んでいいのか、そう呼ぶしかないだろう、細長い、といってもーひと抱かかえ以上ありそうなその身体は、無数の環かん節せつが連なっているようで、じつに自由自在にのたくっていた。身体の両りよう脇わきに脚あしみたいなものも生えていた。先せん端たんは瘤こぶ状に盛りあがっていて、ノコギリのような牙きばを備えた口らしきものが見えた。今はもうやめたらしいが、もしかしたらあの口からネバ槍を放っていたのかもしれない。

　アジアンとピンパーネルと飛燕フエイヤンの三人は、そんな蜈蚣めいたやつの大群にほとんど包囲されていた。

　何しろ、やつらはたくさんいた。しかも、やつらの身体はやたらと長かった。頭らしき部分は見かけても、尻尾しつぽとおぼしきものは見あたらないほどだった。やつらはその長い長い身体を荒あら々あらしくしなわせて、上下左右から間断なく三人に襲おそいかかっていた。洞ほら穴あなは荒あれ狂くるう蜈蚣の群れに占せん領りようされかけているようにしか見えなかった。三人はほとんど蜈蚣風ぶ呂ろの中にいた。溺おぼれないように息いき継つぎをするだけで精せいーいつ杯ぱいといった様子だった。というか、よく溺でき死ししないでいられるものだ。マリアローズは気が遠くなりかけて、思わず立ち止まってしまった。

　だって、脂羽蟲ゴキとか大ゴ脂ツ羽キ蟲ーの次に苦手ってゆうか大だい嫌きらいってゆうか超ちよう嫌いな虫が、何を隠かくそう、よりにもよって蜈蚣なんだもん。

　エルデンには、とくに大きいやつはほとんどいないみたいだから、忘れかけてたのに。

　なんてことをしてくれるんだ。思い出しちゃったじゃないか。

　ちっちゃいころだ。やつはあろうことか布団の中に入りこんできて、人のことを噛かみくさりやがった。思いっきり腫はれて、医術

士に手当てしてもらう羽目になった。

　大ゴ脂ツ羽キ蟲ーに対して抱いだいているのは生理的な嫌けん悪お感かんだが、蜈蚣に対しては違う。

　気持ち悪いというよりも、とにかく怖こわい。

　少しだけでいいので、泣いてもいいですか。

　ダメだ。泣いたって何も解決しない。そうだ。考え方を変えればいい。あれだけ大きいと、蜈蚣も逆にかわいいよね？　ない。それはない。ありえない。かわいいもんか。そんなはずないでしょ？　バカ。僕のバカ。アホなこと考えてないで、しっかりしろ。歯を食いしばれ。マリアローズは自分の両頬を強めに叩たたいた。蜈蚣風呂までは十メーテルといったところか。アジアンやピンパーネルは襲いくる蜈蚣どもの間をすり抜けながら、たまに短たん剣けんで斬きりつけているが、相手の図ずう体たいがでかいだけに、すっぱり両断というわけにはなかなかゆかない。うまい具合に頭部を斬り落としても、動きが止まるわけではないようだ。飛燕フエイヤンは何のつもりなのか暴れ回る蜈蚣にしがみついてキャハハハ笑っている。小こ猿ざるめ。いずれにしても、三人が蜈蚣どもの注意を引きつけてくれていることは間ま違ちがいないが、何か打つ手はないか。何か━、

「サフィニア、爆ばく雷らい索さくを！　二人でやるわよ！　あいつらに当てないように……！」

　ベティがそう叫さけぶなり魔ま術じゆつ士し衣のポケットから何かとりだした。止める余裕がまったくなかったわけではないが、制止するべき明確な理由が見つからなかった。でも、何か違うような気がする。これで片がつくとはどうも思えない。どうして？　僕はなんでそんなふうに感じてるんだろう？　単なる勘かんか。だったら、たいしてあてにはならない。

　振ふり返ると、すでにサフィニアも魔術の準備に入っていた。

「━飛燕フエイヤン、離はなれなしゃい……！」

　ユリカが叫んだ。

　最強伝説の持ち主の声に反応したのは小猿だけではなかった。ピンパーネルも、アジアンまでも、蜈蚣から距離をとろうとした。

　ベティが先に呪じゅ文もんの詠えい唱しようを始め、サフィニアがそれを追って、間かん隔かくが短すぎる輪唱のような恰かつ好こうになった。

「爆条爆条ＭｅｘｅｓＭｅｘｅｓ雷來雷來礼礼」

　ベティが前に差しむけた右手の指の先から、少し遅おくれてサフィニアの杖つえの先から、それぞれ幾条もの稲いな妻ずまが放たれた。二人とも魔術の制せい御ぎよは完かん璧ぺきだった。あわせて十か二十かそれ以上か、あれだけの数の標的を、それも静止しているのではない、動く的をばっちりとらえ、しかも飛びすさったアジアンたちにはかすらせもしないなんて。雷かみなりに打たれた蜈蚣どもは激しく痙けい攣れんした。電流そのものによる損傷と火花による火傷やけどは、やつらをひどく痛めつけたようだった。

　爆雷索の餌え食じきになった蜈蚣どもが、ばたばたと地面に崩くずれ落ちた。

　ぜんぶどころか半分までもゆかないが、少なくとも三分の一程度は蹴け散ちらされたのではないかと思う。

「──スッゲ。やッベェーな魔術……！」

　飛燕フエイヤンがギャハッと笑って、もう一度残った蜈蚣どもに挑いどみかかってゆこうとした。ユリカも極限九手棍を構えた。ピンパーネルはすでに駆かけだしていた。荊王ジンワンはマリアローズのそばから離れる気はないようだ。アジアンがちらりとこっちを見て顔をしかめ、だが、すぐに前へと向きなおって走りだそうとした。そのときだった。

　ベティが苛いら立だたしげに髪かみを揺ゆすって後ろへ跳とんだ。

　ネバ槍やりだ。

　またあの汚きたないオレンジ色のネバ槍がバラバラ飛んできたのだ。

　それはまあ、とくに驚おどろくようなことでもないのだが、ネバ槍の軌き道どうを見きわめて後退しながら、幸か不幸かマリアローズは、自分の目でばっちり見てしまった。やつらは爆雷索で焼け焦こげた蜈蚣どもの残ざん骸がいを押しのけるようにして、あるい

は、雷にやられた蜈蚣どもの空白を埋うめるようにして、闇やみの奥から続々と出てきた。あとからあとから出てきた。わいてきた。ぞわっとした。この際、相手は誰だれでもいいから、罵ののしりたくてたまらなかった。罵ば声せいの一つや二つや十や百くらい吐はきださないと、とても自分を保てない。だから、マリアローズは胸のうちで呟つぶやいた。冗じよう談だんじゃないよもう。やめてよ。お願いだからさ。なんでだよ。バカ。畜生シツト。超最低ＳＵＣＫ。

　蜈蚣ムカデだ。

　せっかく減ったのに、同じだけの、もしかしたらそれを上回る数の蜈蚣が出てきた。

　あっという間に補ほ充じゆうされて、それどころか増強されてしまった。

「際き限りがなさそうだな」

　荊王ジンワンがひとりごとを言うようにもらした。や、そうだけどね。たしかにそうみたいなんだけどさ。そんな冷静に言われてもね。てゆうか、きみは何もしてないし。する気もなさそうだし。でも、実際、小猿やアジアンやピンパーネルみたいにただ蜈蚣風呂に突つっこんでいっても、あまり意味はなさそうだ。じゃあ、どうすれば……？　マリアローズは舌打ちをした。飛んでくるネバ槍が邪じや魔まだ。考え事に集中できない。さっきより数が増えたからなのか、蜈蚣どもは懐ふところに飛びこんできた三人を相手にしつつ、こっちにもネバ槍を飛ばしてくることにしたようだ。いや、それだけじゃない。蜈蚣どもの一部がじわじわと前進しつつある。何だろう。あいつら、わりと頭がいいのか。頭をぶった斬っても死なないのに。というか、一匹一匹の状じよう況きよう判断であんな動きができるのか。だいたい、いくら大きいといっても、蜈蚣にそんな判断力が備わっているものなのか。何か変だ。おかしい。じっくり考えたいのに、そうさせてもらえない。ネバ槍をかわしながら下がらないといけない。ねばねばのかたまりもよけないといけない。くそ。僕に頭が二つあれば。頭が──、

　二つ、あれば。

　頭が一つだから、一つのことしか考えられないわけで。

頭が一つだから、一つのことを考えられる。

そっか。

察しがついた。閃ひらめいたというよりは、いろいろな情報が絡からみあって、この瞬しゅん間かんにぱっと一つの結論を形づくった、というかんじだった。独り合が点てんかもしれないけれど、マリアローズの中ではもう確信に近かった。それが油断に繋つながった。

気がつくと、目の前にネバ槍が迫せまっていた。

自分が足を止めていたという自覚さえなかった。

「あ──」

間が抜ぬけている。

僕ってば、ほんとにもう、どうしてこうなんだろう。

こういうところをなくさないかぎり、一人前にはなれない。

ネバ槍ごときなら、たぶん命取りにはならないだろうからいいけど、この、いいけど、という気持ちもきっとよくないんだ。

まあ、しょうがない。これを教訓にしよう。今回は罰ばつだと思おう。どうせ無理だ。このタイミングだと、もうかわせない。あきらめて、ネバ槍を食くらってねばねばになろう。そのつもりだった。

手を引かれた。

強い力だった。

「わっ……！」

おかげでネバ槍にはあたらずにすんだけれど、引っぱられた先で待っていたのはのっぽの変態野や郎ろうの胸むな板いただった。変態は変態なりに、とっさにマリアローズを抱だきよせてくれた──や、待て、なんで僕が、くれた、なんて言わないといけないんだ、そうじゃなくて、不届きなことに抱きよせやがったんだろうけど、もちろん、当然、まっぴらごめんだった。マリアローズは間かん髪

はつ入れずに変態野郎の胸を突いて離はなれ、とっさに前を向いてアジアンの姿を探した。アジアンはこっちを見ていなかった。あたりまえだ。蜈蚣の相手をしていて、それどころじゃない。どうでもいいけど。マジでどうでもいいんだけど。マリアローズは横に跳んで飛んできたネバ槍をよけた。動どう揺ようなんてしていない。僕は落ちついている。荊王ジンワンが首をひょいと曲げただけでネバ槍を回かい避ひして、色眼鏡サングラスの位置を直した。

「何か考えているなら、その間、俺が盾たてになるが」

「いらないよ。もう終わったから。考え事は」

「そうか」

　とくに残念そうでもないあたりが、またかわいげがない。変態にかわいげなんてこれっぽっちも求めていないから、本当にまったくどうでもいいんだけどね。とにかく、考えはまとまった。あとは作戦をどう実行に移すか。その前に、この状況でみんなにどうやって伝えるか。僕を信じて、僕の言うとおりにして。全員ＺＯＯならそれだけですむけれど、この混成チームだとそんなやり方は通用しないかもしれない。

　とりあえず、サフィニアだ。サフィニアにもう一がんばりしてもらわないといけない。観戦者組はユリカと一いつ緒しよに反対側の壁かべ際ぎわ付近にいる。距きよ離りにして十二、三メーテルくらいか。マリアローズはためらいや恐おそれを置き捨てて駆かけだした。まっすぐ走った。ネバ槍やりなんか気にしなかった。僕には当たらない。当たってたまるか。十三メーテルなんてあっという間だった。カタリがしんがりになって、その前にユリカがつき、トマトクンがサフィニアをかばうような恰かつ好こうで後退している観戦者＋最強組に合流するなり、マリアローズは叫さけんだ。

「──サフィニア！　さっきの魔術！　あれ、もっかいやって！」

「え……？　あ……！」

　びっくりしたのか、地面の出っぱりにつまずきそうになったサフィニアの身体からだを、トマトクンが腕うで一本ですくいあげるようにして支えた。そうしている間にも、ネバ槍は降りそそいでくる。サフィニアが、はゃっ、とおかしな声をもらした。トマトクンが鼻をすすりながらサフィニアのおなかのあたりを無造作に抱かか

えて一っ飛びしたのだ。図ずう体たいがでかいだけあって、助走なしでも大きな跳ちよう躍やくだった。マリアローズは足を速めて追いすがった。

「魔術！　できる？　できるなら、やって欲しいんだけど！」

「……え、あ、連続呪法セリエスマグデル……？　きゃっ――」

「や、あの、最初にやった縛氷殺のすごい版みたいなやつだけでよくて！　動きを止めるためなんだけど！」

「あ……そっ、それは、でき、いっ――できる、けど……ふゅっ――」

　トマトクンがサフィニアを抱えたまま右に左に後ろに移動するものだから、返事は途と切ぎれ途切れになってしまったが、なんとか大だい丈じよう夫ぶそうだ。カタリが、何や何や、としつこくきいてきたので、マリアローズは動き回ってネバ槍をかわしながらごくごく簡単に説明した。要点は、あの蜈蚣ムカデどもをいくら凍こおらせようが焼き払はらおうが感電させようが斬きり刻もうが、ほとんど意味がないということだった。マリアローズの考えでは、あの蜈蚣は蜈蚣のような怪虫ガウンドではないのだ。やつらの頭部とおぼしき部分は、じつは頭部ではない。ただの末端にすぎない。そもそも、やつら、という呼び方が適切ではない。やつらは怪虫ガウンドの群れではない。そう見えなくもないが、違ちがう。マリアローズは今もってやつらの尻尾しつぽらしきものを一度も見ていない。おそらく、そんなものは存在しないのだ。やつらの身体はいずれもやたらと長い。闇やみの向こうにまでのびている。のびているだけではなく、マリアローズの推測では、その先に繋がっている。少し大おお袈げ裟さかもしれないが、やつらはまるで軍隊のように統率されている。あたかも一つの生き物であるかのように、その手足のように、それぞれが動いている。たぶん、それがやつらの正体だ。やつらは個別の怪虫ガウンドではない。それぞれはある怪虫ガウンドの一部分でしかない。ちなみに、めんどくさいので、カタリにはこれらの事こと柄がらを要約して一言で伝えた。

「やつらの頭をぶっ潰つぶす……！」

「腐ふっ、そういうことかい！」

　カタリは不敵に笑ってみせてから半魚首を傾かしげた。

「──って、どういうことや……？」

　ちょうど半魚面めがけて飛んできたネバ槍を思わずヌオオォッとハノサンで払ってしまい、その結果ねばねばぐちゃぐちゃになった愛用の変形斧おのを情けない半魚顔で見つめている半魚人なんて放ほうっておくことにした。マリアローズはざっと周囲を見回して、よさそうな位置にあたりをつけた。アジアン、ピンパーネル、飛燕フエイヤンの三人は蜈蚣風ぶ呂ろの真っ直ただ中なかで、外側の蜈蚣はネバ槍をビシュンビシュン発射しながらどんどん押してきている。その鼻先だ。マリアローズはサフィニアをまだ抱えているトマトクンに、きて、と目で合図をしてから、目当ての場所めがけて走りだした。後ろは見なかった。確かく認にんするまでもなく、トマトクンはちゃんとついてきてくれているはずだ。うざったいことに、荊王ジンワンもすぐ横にいる。半魚人も、ユリカがいるので大丈夫だろう。ヨグやベティも、こちらの動きを見て何か感じたのか、マリアローズに近づいてこようとしている。うまくゆくだろうか。何か勘かん違ちがいしてはいないか。大おお雑ざつ把ぱすぎる作戦のようにも思う。正直、不安だらけだ。僕の心はすぐに折れそうになる。でも、何度も、何度も、数えきれないほど折れかけたけれど、僕はまだ、どうにかこうにか立っている。僕は弱いけれど、へなちょこだけれど、あからさまに小物だけれど、それでもなんとか生きている。

　少しだけ、信じてあげてもいいんじゃないかという気がしている。

　ちょっとだけ、僕も、みんなを信じているように、僕のことも信じてあげたっていい。

　僕が一人きりだったら、こんな気持ちにはなれなかった。

　ああ──、

　あの日から僕は、どれだけたくさんのものを手に入れてきたんだろう。

「全員集合……！」

　マリアローズは洞ほら穴あなのほぼ真ん中で足を止め、仁に王おう立だちして叫んだ。

蜈蚣風呂の中にいる三人のうち、ピンパーネルはすぐに反応してくれた。

アジアンは少ししてからピンパーネルにつづいて退いた。

こっちを見もしなかった飛燕フエイヤンには、ユリカからきついお叱しかりの言葉が飛んだ。

ベティとヨグも、もうすぐやってくる。

マリアローズはサフィニアを下ろそうとしたトマトクンに、そのままで、と短く指示を出した。トマトクンはマリアローズの意図を了りよう解かいしてくれたようで、サフィニアを両腕でがっちり抱えなおした。サフィニアは顔を真っ赤に染めながらも、トマトクンの胸の中で魔術の準備に入った。前の三人が後退しはじめるのと同時に、ネバ槍がやんで、蜈蚣がどっと押しよせてこようとしている。荊王ジンワンがバッグを地面に放って腰こしの後ろから十字棍と双節棍を抜ぬいた。変態のくせに、なかなか察しがいい。ヨグも巨きょ大だい斧おのを両手持ちして構えたが、使い物になるのか。かなり疑問だ。マリアローズをあやしんでいるような、探さぐっているような顔つきのベティはあえて無視した。ユリカはもちろん、カタリもすでに戦せん闘とう態勢が整っている。一いち陣じんの風のように駆かけ戻もどってきたピンパーネルが、マリアローズの真ん前で雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを振ふるい、蹴け飛とばして、襲おそいかかってきた蜈蚣を追い返した。アジアンは襲いかかってきた蜈蚣を踏ふみ台にして跳躍し、マリアローズと荊王ジンワンの間に着地した。飛燕フエイヤンも蜈蚣をぶん殴なぐったり蹴ったりしながら、間もなく到とう着ちやくしそうだ。マリアローズは息を吸って、吐はいた。

「──サフィニアの魔術が発動するまで、ここで食い止めて！　そのあと僕が合図したら、全員で突とつ撃げき！　問答無用で作戦開始……！」

返事はなかった。誰だれにもそんな余よ裕ゆうはなかった。蜈蚣台風が上陸した。直ちよく撃げきだった。後ろと下以外、どこを見ても蜈蚣だらけだった。襲いくる蜈蚣によってまた光球が消えてしまったが、すぐにベティが、今度はマリアローズの足あし許もとに新しい光球を出した。ヨグが意外にも軽々と巨大斧を振って蜈蚣をぶった斬った。ユリカの極限九手棍は素す早ばやく的確に蜈蚣を弾はじき返した。カタリもハノサンとホノゴを振り回して、ちょっと

無む駄だに振り回しすぎのきらいはあったものの、半魚人にしては奮ふん闘とうしていた。ひたむきさはひしひしと伝わってくるがそうとう不ぶ恰かつ好こうなカタリとは違い、飛燕フエイヤンの体術は華か麗れいといっても過言ではないほど洗練されていた。小こ猿ざるのくせに、ただの喧けん嘩かバカじゃない。技わざの多た彩さいさや切れもすごいが、あの小さな身体からだで、よくあれだけでかい蜈蚣をドッカンドッカン殴り飛ばしたり蹴飛ばしたりできるものだ。その飛燕フエイヤンよりも無駄がない、といっても決して地味ではない、流りゆう麗れいにして苛か烈れつ、凄せい絶ぜつな短たん剣けん捌さばきで、ピンパーネルはサフィニアを抱かかえているトマトクンをカバーしていた。元アッサシンの獅し子し奮ふん迅じんの働きのおかげで、トマトクンはたまに身体を捌いて立ち位置を変えるくらいですんでいる。これなら、サフィニアをだっこしたままでいてもらう必要はなかったか。いや、万が一ということもあるし。サフィニアとしてもおいしいだろうし──などということを悠ゆう長ちように考えていられるのは、べつに頼たのんでいないし、嬉うれしくもなんともないし、余計なお世話なのだが、変態二人が競きそうようにマリアローズを守ろうとしているからだった。

　しかし、この二人は見れば見るほど対照的だ。アジアンは、大おお柄がらとは言えないその身体に秘ひめている絶大な力を持てあましているかのように、とにかく派手に大きく動く。逆に、かなり上背があって手足も長い荊王ジンワンは、常に必要と思われる最低限の運動しか自分に許していないかのようだ。アジアンは見るからに速くて、身体を回転させて泣き叫ぶスクーリミング・短剣ダガーで蜈蚣ムカデを輪切りにしたり、環かん節せつと環節の合間を狙ねらって剝はぐように斬きったりなど、それどうやるの、みたいな芸当を軽々とやってのける。荊王ジンワンは十字棍で蜈蚣をからめとるように止めたり、双節棍でぶっ叩たたいて下がらせたり、長い足で蹴飛ばしたりなど、やっていることは普ふ通つうだ。アジアンが人並み外れて強いことはすぐにわかる。荊王ジンワンは正直言ってよくわからないが、こんな蜈蚣の嵐あらしに正面からぶつかってびくともしないのだから、それなりなのだろう。たとえば、マリアローズには無理だ。どう考えても逃にげ回るだけで精せい一いつ杯ぱいだ。ここでほとんど身動きすることもなく突つっ立っていられるのは、変態二人のおかげだ。

　恩に着たりはしないけどね。

　あいつらが勝手にやってることだし。

　僕は僕で、自分にできることを全力でやるだけだし、やっているつもりでもある。

　マリアローズはちらりと横を見た。

　サフィニアの目つきが変わっていた。あの感覚だ。さっきの連続呪法セリエスマグデルの前にも感じた、鳥とり肌はだが立つような、総毛立つような、何とも名状しがたい気配がした。サフィニアが口を開いた。呪じゅ文もんの詠えい唱しようが始まった。

「太崑闍貘羅宝眩苦ＲｅｕＬａｕＭａｕＬａｕ詩湛Ｌｅｕ歓楽Ｄｕｅｄ一切訣贋皓潔斎ＭｏｕＲｅｕＬａｕｄ韻吟至極氷監獄」

　前回とは違って至近距きよ離りだったので、顔の皮ひ膚ふが痛いほどの冷気が吹ふきつけてきた。汗あせは瞬しゆん時じに凍こおった。変な話だけれど、とてつもなくきれいだった。蜈蚣どもは見る間に真っ白い霜しもで覆おおわれてゆき、だんだんと動きが鈍にぶくなっていって、ついには静止して無数の氷柱つららと化し、凍りついた空中の水分が粉こな微み塵じんに打ち砕くだいた宝石の粒りゆう子しをばらまいたようにきらきらと輝かがやいた。その光景はどんどん奥のほうへ奥のほうへと広がっていった。光球の明かりが蜈蚣の氷柱とダイヤモンドダストに反射して闇やみを侵しん食しよくしてゆき、まるできらめく光が行く先を示しているかのようだった。

　マリアローズたちの近くではまだ蜈蚣が動いているが、何しろ根元のほうが凍っているので元気がない。

　いや、根元ではないのだ。

　それはもっと向こうにある。

　あの光の先に。

「□□ＧＯ……！」

　マリアローズは叫びながら走りだした。ついてきてくれない人がいたらどうしよう、なんて考えなかった。もうそんな段階じゃない。ここが勝負時だ。それがわからないなら、ここで座って黙だまって待っていればいい。

　マリアローズを抜き去って先頭に立とうとしたカタリが、凍った

蜈蚣を飛び越こえようとして失敗して見事にすっ転んですぐに立ちあがり、魚うおおおおおおおおおおれえええええええい、とかいう妙みような雄お叫たけびを上げた直後にまたこけた。そのあとにすっとマリアローズを追い越していったピンパーネルは、すぐに背中が小さくなった。鼻をぐずぐずさせながら、ほとんど惰だ性せいのようにサフィニアを抱えたままでいるトマトクンは、マリアローズのすぐ横だ。サフィニアが目をつぶっているのは、魔ま術じゅつの使いすぎなのか、それとも寝ねたふりか。荊王ジンワンはちゃんとあの黒いバッグを拾って、それでもさほど遅おくれずについてきている。ベティとヨグがその後ろあたりか。さっき振り返ったとき、かなり走りづらそうにしていたユリカに駆けよってゆく飛燕フエイヤンの姿をちらっと見た。

　あいつは前にいる。その気になれば、ピンパーネルと競争することだってできるだろうに、マリアローズの何歩か前を走るというよりも早歩きしている。ずいぶん余よ裕ゆうだ。あいつが何のつもりでそんなことをしているのか、それくらい、マリアローズにもわかっている。僕だってバカじゃないんだ。気づかないはずがないじゃないか。

　そっちじゃなくてこっちのほうが走りやすい。

　そこじゃない。

　ここのほうが安全だ。

　遠回りに見えるかもしれないけれど、こっちのほうが速い。

　ここだ。ここを通ればいい。

　振ふり向くわけじゃない。声に出して何か言うわけでもない。それでも、わかる。抵てい抗こうはある。反発もある。子供じゃないんだ。手取り足取りそんなことまで教えてくれなくたって、自力でなんとかできる。あえて違ちがう場所に足を踏ふみ入れてみようか。あいつに従う必要なんてないんだ。でも、悔くやしいけれど、たしかに走りやすい。危なげなく前へ前へと進んでゆける。あいつはそういう道を選んでいる。

　二十メーテルほども前進すると、そろそろ魔術の範はん囲いの終しゅう端たんに近づいてきていた。

おそらくベティが魔術を使ったのだろう、さらに二十メーテル以上先に真っ白い光の渦うずが出現して、一気に闇を引きちぎった。

「──いた……！」

案の定だった。安あん堵どはしなかった。それどころじゃない。目測で約三十メーテル前方といったところか。だが、やたらとでかいので、遠近感が狂くるう。ひょっとしたら、もっと遠いかもしれない。

先行していたピンパーネルが、光の渦のすぐそばで横っ跳とびして、猛もう襲しゅうしてきた蜈蚣をかわした。

あのあたりの蜈蚣はぴんぴんしている。

いや、蜈蚣なんかじゃない。

蜈蚣みたいな、それは腕だ。

無数の腕だ。

やつは、とてつもなく巨きょ大だいな、黒に原色を散らした花びらを洞ほら穴あな一いっ杯ぱいに広げている、はなはだ毒々しい花のような姿をしていた。

花びらにあたる部分が何なのかはよくわからないが、それらに囲まれている真ん中の、花であればめしべがあるところに、全体の大きさと比べれば小さすぎるほどの、目や鼻や口らしきものがあって昆こん虫ちゅうというよりも人面を思わせる頭部がある。

やつの無数の腕は花びらの後ろからのびていた。

「頭を……！」

マリアローズが声を張りあげると、アジアンが急加速しようとした。

その直後だった。

花びらが羽ばたいた。

それほど速くはなくて、むしろゆったりとした動きだったが、何

せあの大きさだ。

「──う、わっ……」

　身体からだが浮ういた。嘘うそ？　飛ばされる？　マジ？　マジだ。やばい。やばいって。何、この風圧。てゆうか、空中じゃ──どうしようもない。いくらもがいても、上下左右どこにも移動できやしない。みんなは。みんなは大だい丈じよう夫ぶだろうか。僕みたいに、とっさに踏んばれなかった間ま抜ぬけが他ほかにいないといいんだけど。確かく認にんしたかった。そんなことをしている場合なのかどうか、何か間違っているような気もするけれど、とにかく確認しないといけないという思いに駆かられて、周りを見回そうとした。声が聞こえた。僕の名を呼ぶ声だった。

「マリア……！」

　手をつかまれて、引っぱられて、きつく抱だきしめられた。

　目の前が真っ暗というよりも真っ黒になって、何も見えなくなった。

　それでも身体がくるくる回転していることはわかった。

　低い、小さな呻うめき声がした。

　地面に落ちたときの衝しよう撃げきはやわらかかった。

　あたりまえだ。

　僕はどこも打ってないんだから。

　僕をかばって背中から地面に落ちたあいつは、でも、すぐに僕を先に立たせて、それから自分も立ちあがった。あいつは痛がるそぶりも見せないどころか、無む駄だに僕の無事を確認したりもしなかった。僕が大丈夫だということは、あいつが一番わかっているはずだし、それどころじゃないことは明白だった。

「花びらが──」

　もう羽ばたいてはいない。ただ、閉じようとしている。アジアンが、そうか、頭を、と呟つぶやいて走りだした。マリアローズも追った。そうだ。花びらを閉じてしまえば、あの人面みたいな気色

の悪い頭をすっぽり覆おおって隠かくしてしまえる。でも、いかに足が速いアジアンでも間に合わないかもしれない。花びらはもう閉じてしまいそうなのに、マリアローズが吹ふっ飛ばされたせいもあって、やつまでの距きょ離りはまだ三十メーテルほどもあるのだ。

「──させないわよ……！」

　そんなときに響ひびき渡わたったベティの声は、嘲ちよう笑しょうさえふくんでいるように聞こえた。

　ベティはマリアローズのような間抜けではなかったようで、さっきの場所から五メーテルくらい前進して、腰こしから抜いた剣けんを頭上に高々とかかげ、その刀身に左手の人差し指と中指を添そえていた。

「威鶩虞Ｇａｘｉｓ滅崇Ｄｅｕｘ嵐怒」

　剣先から放たれた稲いな光びかりの束は、洞どう穴けつ中を青白く染め抜いて、やつの頭部や花びらを直ちよく撃げきした。轟とどろいた雷らい鳴めいのせいで、一いつ瞬しゅん耳がきかなくなった。爆ばく雷らい索さくなんてものではなかった。あれはもう本物の雷かみなりだ。間違いなく正真正しよう銘めいの雷に匹ひつ敵てきする雷撃だった。あんなものに打たれたら、無事ですむはずがない。げんに、やつも二、三度、身じろぎしてから前のめりになって、それきり動かなくなった。花びらは結局閉じきることができず、しおれた花のようにぐったりとして、無数の腕も力を失った。マリアローズは目を見開いてため息をついた。身体から力が抜けかけた。その途と中ちゆうで、ひっ、と妙みような具合に息を吸いこんでしまった。

　気のせいか。いや、違ちがう。そうじゃない。

　今、ぴくっと動いた、と思った次の瞬間、すべての花びらが躍おどるようにめくれあがった。

　マリアローズは棒立ちになっていた。アジアンも少し前で立ち止まっていた。ベティも魔ま術じゆつを発動させたときの位置から移動していなかった。ヨグはそのそばにいた。ピンパーネルは退たい避ひして壁かべ際ぎわにいた。ユリカたちはたぶん後ろだ。荊王ジンワンはやや離はなれた場所でこっちを見ていた。

一人だけだった。

炎ほのおが奔はしった。

ピンパーネルがいるのとは、逆の壁際だった。

駆け抜けた炎は、跳びあがって回転し、野や獣じゆうのごとき咆ほう哮こうをあげて剣身波打つ琥こ珀はく色いろの尋じん常じようならざる大剣をやつの頭部に叩たたきつけた。

「ぬうううううおおおおおおおおおおおおおおおおおおああああああああああ……！」

それは斬ざん撃げきでは決してなかった。

炸さく裂れつした。

やつの頭部は木こっ端ぱ微み塵じんに砕くだけ散った。

正体不明のさまざまなものがぶちまけられ、片かた膝ひざをつく体勢で着地したトマトクンはそれらをまともにひっかぶって、なんだかもうよくわからない有様になった。

知らない間に下ろされていたらしいサフィニアが、マリアローズを追い越こしていった。

今度こそ降参したかのように花びらがうなだれ、無数の腕うでが次々と折り重なるように倒たおれ伏ふしてゆく。

「──大怪虫メガガウンデロスナルキスの最さい期ご、っちゅうわけやな……」

振ふり返ると、訳知り半魚顔をしたカタリが感かん慨がい深げに、ひゅう、と息を吐はいていた。

「いやあ、難敵やった。本番前からこんなんに出くわしよるとは、７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イム、こら何が起こるかわからんのう。参加者プレイヤの諸君は心してかからなあかんで」

「……ちょっと待って。何、そのロスナルなんとかって」

「ほえ？　何て。あれやろ。ロスナルキス」

「知らないんだけど。初めて聞いたんだけど。知ってたんなら、さっさと教えて欲しかったんだけど」

「い、いや、わしかてな？　最初っからわかってたわけやないで？　途中からな。なんとなあくやで。もしかしてアレちゃうかなあ、みたいなかんじでな。わしかてこの目で見たことあるわけやないしな？　話には聞いたことがあるっちゅう程度でな？」

「へー」

「ホンマやて。嘘やないがな。わしの目ぇを見てみい。嘘うそつきの目ぇやないやろ。ほれ」

「なんか死んだ魚みたいな目だね」

「あっははは。それはアレや。わしが魚によお似とるっちゅうだけでな。嘘つきかどうかはな。そこやないやろ。判断ポイントはな。ちゃうやろ？　そもそもな？　誰だれの目ぇが魚やねん？　しかもなんで死後数日経過しとんねん？」

「あれ？　何？　逆ギレ？」

「正当なブチギレや！　だいたいな！　ロスナルキスっちゅうたら怪虫ガウンドの中でもそうとうでかくてごっつくてやばいヤツなんやで！　まさかこないなとこにおるとは思わんやろが！」

「本当は、ずっと奥のほうにいるはずよね」

「せや！　そのとーりっ！　そらもうガンズゲイルの奥の奥っちゅうたら、って──」

　カタリはマリアローズの後ろに目をやった。マリアローズもカタリの視線を追った。ベティは剣を鞘さやに収めてから、ぷっくりした唇くちびるを舌先で舐なめた。

「どうやったか知らないけど、ルヴィー・ブルームはだいぶガンズゲイルに手を加えてると考えたほうがよさそうね。それで、奥のほうにいたロスナルキスがここまで追い立てられたのか、無理やり連れてこられたのか」

「……もしかして、知ってたの。あれが、ああいう生き物だって」

「さあ。どうかしら」

　ベティは肩かたをすくめながら嫣えん然ぜんと微笑ほほえんでみせた。

「何の役にも立たない、ただこぎれいなだけの子供ってわけじゃなさそうだけど。詰つめが甘いわね」

　自分のことを言われているのだと気づくのに、少し時間がかかった。

「ベティ」

　咎とがめるようなアジアンの声こわ音ねだった。

　ベティは微かすかに眉まゆをひそめているアジアンの顔を見まいとするかのように背を向けた。

「そこの魚クンと同じよ。ロスナルキスのことを思い出したのはついさっき。あたしも人並みに虫は嫌きらいだから、怪虫ガウンドになんか興味がないし、そこまでくわしいわけじゃないわ」

　それが本当かどうか確かめるすべはない。ただ、少なくとも、人並みに虫が嫌い、という部分はかなり疑わしい。人並みなんてよく言えるものだ。そういうのは、僕みたいな──、

　そう、僕みたいな、虫全ぜん般ぱんが好きじゃなくて、大ゴ脂ツ羽キ蟲ーや脂羽蟲ゴキはとくに大嫌いで、その次くらいに蜈蚣ムカデが苦手な人間が言うことで、だから、蜈蚣じゃないにしても蜈蚣っぽい生き物の死し骸がいに囲まれているこの状じよう況きようは、考えるまでもなくたえがたい。というか、なんで今までわりと平気だったのか、自分でも不思議なくらいだ。麻ま痺ひしていたのか。そうかもしれない。緊きん急きゆう事態だったし、とにかく危機に対処しないといけなかったし、けれど、今はもうそうじゃなくて、すっかり気がゆるんでしまっていて、や、ダメだ、これからなんだし、ここから先だって何があるかわからないし、引きしめなおさないと、とは思うけれど、やっぱりそう簡単にはゆかない。生理的な嫌けん悪お感かんや恐きよう怖ふやいまわしい思い出は一いっ瞬しゆんの隙すきをついて襲おそいかかってきて、マリアローズは立っているのもつらくなった。腰こしが抜ぬけそうだ。ここにいるようで、ここにはいないような気がする。どこ？　僕はどこにいる

んだっけ？　そうか。心が身体からだを置き去りにして逃にげようとしてるんだ。逃がすもんか。てゆうか、逃げないで。お願い。ここでふらついたりでもしたら、きっと大変なことになるんだから。変態が二人もいるんだから。そうだ。冗じよう談だんじゃない。しゃきっとしろ。しゃきっと。

「い、い、い、い、行こ先に。さささささっさと。ねね、ね？」

　ちゃんと喋しやべれなかった。歩きだすと、右手と右足、それから左手と左足が一いつ緒しよに、しかもぎこちなく動いて変な歩き方になった。一刻も早くここを立ち去りたい。もはや一秒たりともここにはいたくない。マリアローズは走りたかった。でも、とうてい走れそうになかった。せめて一生懸けん命めい歩くしかなかった。

　サフィニアの手によってマスクと冷れい却きやくシートを交こう換かんされ、頭やら顔やらをタオルでぬぐわれているトマトクンとすれ違ちがう間ま際ぎわ、前を行くアジアンが足を止めた。

「おいしいところをさらっていってくれて、どうもありがとう」

「どういたしまして、と言うべきなの」

　かっくしゅん。

　しかし、本当に大だい丈じよう夫ぶなのか。くしゃみをしてからもさかんに鼻をすすっているトマトクンは、熱に浮うかされているような目をしている。

「せいぜいお大事に」

　アジアンは感情をうかがわせない声でそんなことを言うなり歩きだした。マリアローズもトマトクンに何か声をかけたほうがいいのではないかと思った。うまく言葉が見つからずに黙だまっていると、トマトクンは大おお仰ぎように片眉をつりあげてみせた。

「俺なら大丈夫だぞ。そんなにヤワじゃない」

「……それは、わかってるけど」

「わたしも……看みてるから……」

「うん。それもわかってる。てゆうか、付きっきりの完全看護なのは見ればわかるし」

「すまんな、サフィニア。風か邪ぜってやつには縁えんがなくて、どうも勝手がわからん。いろいろ面めん倒どうをかけてるだろう。お前には何か礼をしないといかんな」

「え……お、お礼……ですか……そ、そ、そっそれは……ええと……はい……いえ……」

　赤面してもじもじしているサフィニアを見ていると、ちょっとだけ気の毒に思えてこないでもない。結局のところ、トマトクンはぜんぜん意識していなくて、サフィニアの独り相撲ずもうなんだろうし。

　だからといって、あきらめてしまったら、サフィニアの恋こいは終わりだ。トマトクンがせっかく礼をすると言っているんだから、買い物につきあってもらうとか、二人でおいしいものでも食べに行くとか、それ以上とか、ずばっと要求すればいいんだ。そのあたりはあとでこっそりアドバイスするとして、図はからずも、心の中でサフィニアを応おう援えんしているうちに、僕もしっかりやらないと、という気持ちになってきた。それでもロスナルキスの死骸の脇わきを通り抜けるのはかなりの試練だったが、なんとか正気を失わずに乗り越こえることができた。その先の百メーテルは、傾けい斜しやが少しきつくなり、左右にカーブしてもいたので、見通しはあまりよくなかったものの、一匹ぴきの怪虫ガウンドも見あたらない平へい坦たんな道のりだった。最初のうちこそ、小こ猿ざるや半魚人あたりが何やかんやとうるさかったが、すぐに誰だれも口をきかなくなった。静けさが逆に緊きん張ちよう感かんを高めていった。おそらく皆みなが感じていた。いよいよだ。もう間もなく始まるに違いない。行く手の闇やみがさほど色いろ濃こくないことにマリアローズは気づいていた。実際に遠くの光をマリアローズの中の何かが感知していたのか、あるいは第六感的なものがそう訴うつたえたのか。わからないが、ベティが光球を手で払はらって消した瞬間、闇の向こうからさしこむ微かすかな光がはっきりと見てとれるようになった。誰かが、はあ、と大きく息をついた。マリアローズは下した唇くちびるを軽く噛かみ、よし、と口の中で呟つぶやいた。一行は光に向かって進んだ。警けい戒かいして、無言で、着実に進んだ。

　その手前までくると、光が炎ほのおによるものだということがわ

かった。

　洞ほら穴あなは幅はば一・五メーテル、高さ二・五メーテルくらいのきれいな長方形の穴以外は行き詰づまりになっていて、その穴から光がもれている。

　アジアンが先頭に立って全員を見回した。

　マリアローズにも目をとめたけれど、すぐに顔をそむけてしまった。

　じつは、少しだけ気になっている。なんだか、アジアンの態度がよそよそしいというか。いつもと比べると、ぶっきらぼうというか。それでも十分うざったいのだが、違い和わ感かんはぬぐい去れない。昼飯時ランチタイムの仲間の手前、ひかえているのか。ヨグはともかくとしても、ベティはマリアローズに敵意さえ抱いだいているようだし。アジアンとベティを見ていると、べつにことさら親しげにしているわけではないのだが、つきあいの長さや深さを感じる。互たがいに理解しあっていて、踏ふみこむべきところも、退くべきところも知っている、今さら言葉で確かく認にんしあう必要はない、そういう間あいだ柄がらなのではないか。あいつのそばにそんな人がいて、しかもそれが女の人で、もっと言えば、中身は別としても見た目はかわいいというか美人というか、魅み力りよく的な女性だなんて、ちょっと意外だし、不思議だ。あらためて思う。僕は知らない。あいつのことを何も知らない。僕に見せるあいつの顔しか知らない。知ろうと思ったこともない。あいつも見せたがらなかった。たぶん、だから昼飯時ランチタイムに入れてくれなかった。結果的にはよかった。ＺＯＯのみんなと出会えた。大切な仲間ができた。大事な友だちができた。大変な目にも遭あったけれど、それ以上にいいことがたくさんあった。あいつも言ってくれた。キミはＺＯＯにいるべきだ。

　僕は知らないんだ。

　きみは、本当はどういう気持ちであんなことを言ったんだろう。

　今、きみがどういう気持ちでいるのかも、はっきりとわかるわけじゃない。

　昼飯時ランチタイムの人たちにとってのきみはどういう存在で、きみにとって仲間たちはどういう存在なんだろう。

　きみはどうして泣いていたの？

　何があったの？

　結局、僕は知らないんだ。

　知ろうとしなかったし、これからもするつもりはないんだ。

　知ってしまうのが、怖こわいから。

　アジアンが先頭を切って穴に入っていった。

　ベティ、ヨグがつづいて、その次に飛燕フエイヤンとユリカ、ピンパーネル、マリアローズ、荊王ジンワン、それから観戦者組が最後だった。

　穴の中は両側に篝火かがりびを並べた幅四メーテルほどの細長い部屋だった。

　壁かべや床ゆか、天てん井じようは磨みがいたように平らで滑なめらかだ。

　奥の壁には真新しい木製の扉とびらがあった。

　その向こうが会場とやらか。

　アクゼルは扉の前に立っていた。

「思いのほか遅おそいお着きでございましたな。当方の不ふ手て際ぎわでお手間をとらせてしまいましたようで、申し訳ありません」

「不手際、ね」

　ベティが静かに笑ってみせると、アクゼルも縦に割れた唇くちびるを笑う形にゆがめてみせた。

　なんか、わりと、かなり気持ち悪いんですけど。

「━ともあれ、この先が第一勝負フアーストゲイムの会場でございます。ただ今から参加者プレイヤ並びに観戦者の皆みな様さまをご案内させていただくわけでございますが、その前にルールのご説明を、わたくしアクゼルことアンナクロマルベルラスゼルフォンスのほうからさせていただきます。その後、参加者プレイヤの皆様の間

で、第一勝負フアーストゲイムということもございますし、何かご相談の必要などあればぞんぶんにしていただきまして、ご納なつ得とくいただいたうえで会場にお入りいただき、まずは本勝負ゲイムにおける当方の参加者プレイヤをご覧になっていただきます。どなたが挑いどまれるかは是ぜ非ひその折にお決めください。むろん、現時点で決定なさいましても結構ではございますが、必ずしも賢けん明めいな方法とは申せませんでしょうな」

「キミの長広舌は聞き飽あきた。早くルールとやらを言え」

　アジアンのつめたい声にうながされると、アクゼルは一礼して扉の前からどいた。

　今までアクゼルの身体からだに隠かくれて見えなかったが、扉に鈍にぶい光こう沢たくのある灰色の金属製とおぼしき四角いプレートが打ちつけてあった。

　プレートには上ハ古イ高ロ位メ語ンの文章が刻まれていた。

　chalenge-all'alone.

　to-win-dis-geim, man-to-man-duel,

　kil-apounent-en-plandar'ob'its-chorkar.

　tha winar'ob'farst-geim-can't-chalenge-secand-en-thard-geim.

　u-shud'chalenge-secand-geim-rigardles'ob'win-oa-difeet.

　ivun'if-u-lurz-samwan.

「コホン」

　アクゼルが口くち許もとに手をやって咳せき払ばらいのような声を出した。

「僭せん越えつながら、わたくしアクゼルが共通語に訳させていただきます。すなわち、この第一勝負フアーストゲイムにはお一人様

で挑んでいただきます。勝利条件は、対戦者を殺害し、首飾りチヨーカーを奪うばうこと。なお、第一勝負フアーストゲイムに挑まれた方は第二勝負セカンドゲイム、第三勝負サードゲイムに挑むことができません。また、第一勝負フアーストゲイムの勝敗に拘かかわらず、皆様には第二勝負セカンドゲイムに進んでいただきます。たとえ第一勝負フアーストゲイムにおいて欠員が生じたとしても、平たく申しあげれば、皆様の中のどなたかが死亡なされても、ということでございますな」

「……何だよ、それ」

　思わず口に出して言ってしまった。

　だって、勝っても負けても次に進むなんて、もしこの先もそんな規定が適用されるとしたら、こちら側がルール違い反はんを犯おかすか、鍵アトルであるアジアンが首飾りチヨーカーを奪われないかぎり、第一から第六までの勝負ゲイムでどんな結果が出ようと、仮に誰だれかが死のうと、何人死のうと、第七勝負セブンスゲイムは行われるということにならないか。

　ルヴィー・ブルームとアジアンとの間に何か因いん縁ねんがあって、それが７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムのきっかけになっていることは間ま違ちがいないし、最後は鍵アトル同士、アジアンとルヴィー・ブルームの直接対決だということはすでに言い渡わたされている。アジアンと雌し雄ゆうを決することがルヴィー・ブルームの目的なのだろう。

　じゃあ、六つの勝負ゲイムは何なんだ。いったい何の意味があるんだ。無む駄だじゃないか。人ひと質じちをとられていて、どうせアジアンは断れないのだから、こんな七しち面めん倒どうなことなんかしないで、一対一で果たし合いでもどつきあいでも何でもすればいいじゃないか。

　いや、それじゃあ意味がないのか。

　あの男はアジアンに向かって言っていた。おまえは私をぞんぶんに愉たのしませなければいけないよ、と。私はおまえを知りたいのだ。おまえのすべてを私の前にさらけだして欲しい。そして私を大いに愉しませてくれ、と。

　アジアンは、あの男は最低だ、と吐はき捨てた。

トマトクンは、とにかく性格が悪い、最悪だ、と評した。

マリアローズは理解した。

これは勝負なんかじゃない。

遊びなんだ。

ルヴィー・ブルームは僕らを７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムで痛めつけて、あわよくば殺して、その結果、アジアンがどんな反応を見せるか、どうなるか、見物して、愉しもうとしている。

鍵アトル以外の僕らは参加者プレイヤなんかじゃない。

遊びの道具なんだ。

生いけ贄にえなんだ。

冗じよう談だんじゃない。

本当に、冗談じゃない。

たしかに軽く見られてもしょうがないくらい、とるにたらない、ちっぽけな存在かもしれない。でも、僕だって僕なりに、一生懸けん命めいやってるんだ。たまに欲ばりすぎて、落っことしそうになったり、取り落としてしまったりしながらも、いろんなものを抱かかえて、他人から見たら、みっともないよたよた歩きかもしれないけれど、少しずつ前に進んでいる。バカにするのはべつにいい。好きにすればいい。ただ、こっちにだって腹を立てる権利はある。抵てい抗こうする力だって、微び々びたるものかもしれないけれど、ないわけじゃない。魔人アモンとやらがどれだけすごいのか知らないが、何でも目もく論ろ見みどおりになると思ったら大間違いだ。絶対に一ひと泡あわ吹ふかせてやる。

そのためには、何がなんでも勝たないといけない。全勝だ。一敗も許されない。

七つの勝負すべてで勝利を収める。それが僕らの７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムだ。

「man-to-man-duelって謳うたってるくらいだから、とりあえずこの第一勝負フアーストゲイムは一対一サシで殺しあいをするだけみ

たいね」

　ベティが少しだけ首を傾かたむけて唇くちびるを舐なめた。

「それから、この勝負ゲイムに出た者は、少なくとも次とその次の勝負ゲイムには出られない。負けた者は死んじゃうからもちろん無理だけど、あとの者たちは勝ち負けに関係なく次に進む。このあたりは、これから先も同じようなルールになってたとしてもおかしくないわ」

「一回出たら二回休みっていうのは、人数と勝負ゲイムの回数を考えたら、複数人が参加する勝負ゲイムが必ずあるはずだから、強い人が何度も出られないようにするため、かな」

「そう単純だといいけど」

　むかっときたが、ベティは魔ま術じゅつ士しだ。相手のルヴィー・ブルームも魔術士らしいから、思考の形態は似ているかもしれない。参考にするべきだろう。

「相手はこっちを知っている。こっちは相手を知らない。相手にしてみれば、どういう勝負ゲイムを用意したら誰が出るか、予想することはできるでしょう。その予想をもとに、第一勝負フアーストゲイムにたとえばＡが出そうだったら、Ａが出られない次と次に、Ａとは相あい性しようが悪いけど他ほかには強みを発揮できそうな相手を配置して勝率を高める。そんなことも考えられるはずよ」

「こちらは最初から相手の掌てのひらの上ですからね」

　ヨグが右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直しながら小さく笑った。いまいちというか、結構真しん剣けん味みがない男だ。

「ルールには逆らえませんし、あちらの企たくらみにも乗らざるをえない。そこはもう、あまり考えても仕方ない気がします。相手を見た上で勝てそうな人が最善をつくすしかありませんよ」

「ボクは」

　アジアンの声が乱れかけて、途と切ぎれた。

　薄うす青あお色の瞳ひとみがマリアローズを映した。

アジアンは小さく息を吐いて、一度唇をきゅっと締しめた。

「──すまないが、ここぞというとき以外は出ないつもりだ」

ベティがわずかに顔をしかめて、マリアローズを横目で睨にらんだ。

アジアンはマリアローズの肩かたに手を置きかけて、逡しゅん巡じゅんしたように視線を揺ゆらし、結局、思いとどまったようだ。

「マリア。キミは役立たずなんかじゃない。キミはずば抜ぬけた身体能力を持ちあわせているわけじゃないし、武術の達人でもないが、キミにはしっかりと状じよう況きようを把は握あくして適切な行動をとることができる判断力や、いざとなればリスクをとれる決断力があるし、危あやういところでもあきらめずに踏ふみとどまれる勇気がある。キミは気づいていないかもしれないけど、キミのおかげで周りの人たちが救われていることはたくさんあるはずだヨ。キミにはその力がある。ボクが保証する」

いきなり面と向かってそんなことを言われたものだから、恥はずかしくなって顔をそむけると、ちょうどそっちにいたピンパーネルに微笑ほほえみながらうなずかれた。

それがまた気恥ずかしくて、逆側に顔を向けたら、今度はユリカと目があった。ユリカも力強く首を縦に振ふってくれた。てゆうか、後ろから背中をつっついてるのは誰だれだよ？　振り返ると、半魚人のバカタレだった。トマトクンはマスクの奥でそっと笑い、サフィニアはじっとマリアローズを見つめていた。や、そりゃあさ。嬉うれしいことは嬉しいんだけどね？　でも、やめてくれない？　マジで恥ずかしいし……。

「ただ」

アジアンの声こわ音ねが変わった。厳しい声だった。前に向きなおると、表情も引き締まっていた。えらく真剣で、深刻な顔だった。

「ボクが言うまでもないだろうが、自分自身の力で相手をねじ伏ふせたり、身につけた技わざで翻ほん弄ろうしたりすることはキミ向きじゃない。たとえばキミを一対一の決けつ闘とうに送りだすなんて、ボクにはできない。それはあまりにも無む謀ぼうだ」

「……そんなの僕だってわかってるし。そういうのを僕に求められてもね」

「だからボクは、最低一度はあるはずの複数人参加の勝負ゲイムに、キミと一いつ緒しよに出る」

　アジアンはマリアローズの目を見すえて、有無を言わさぬ口調でそう言い切ったあとに、視線をすっと斜ななめ上にずらした。

「マリアはボクが守る。そういうことだ」

　肩かた越ごしに、後ろにいるトマトクンを見ているのか。

　トマトクンはどう思っているだろう。他のみんなは。僕は──、

　そんなことだろうと予想はしていたけど。二回休みルールさえなければ、アジアンはすべての勝負ゲイムに出て全員をかばうくらいのつもりでいたかもしれないが、それが不可能となった今、次に考えることは、誰を優先して守るか、だろう。そうなると、こっちとしては非常に不本意だけれど、マリアローズ、ということになる。結局、こいつの思考ってこうなんだ。自分がいかに泥どろをかぶるか。最大限の泥をかぶるためにはどうすればいいか。それだけに終始してしまう。さっき一人で前に出たあたりからしてそうだった。一人で何でもやろうとして、できなかったらごめんなさい。後こう悔かいして、反省して、でも、それでどうなるんだよ。トマトクンの言うとおりだ。こいつには安心して任せられない。だいたい、こいつは忘れている。僕らの目的は何だ。７Ｓとセブンの七つのス・ゲ勝負イムに勝って、昼飯時ランチタイムの人たちを取り返すことだ。それが大目的だ。動機はさまざまかもしれないけれど、僕らはそのためにここにいる。僕らのリーダーが考えるべきことは、僕らの中の誰かを守ることじゃない。いかにして僕らの目的を達成するか、だ。

「バーカ」

　マリアローズは朗ほがらかに罵ののしりながら笑え顔がおを浮うかべてみせた。

　同時に、アジアンの足の甲こうを思いっきり踵かかとで踏んづけた。

　アジアンは声にならない悲鳴をもらして、それでもマリアローズ

を凝ぎよう視ししていた。いったい何が起こったのかわからない、といった様子だった。ベティやヨグもぽかんとしていた。てゆうか、きみたちも、たぶん甘やかしすぎなんだよ。こいつを。僕は甘くない。一緒に物事をやるからには、厳しくいかせてもらう。そうしないと、最後に泣くのはこいつなんだから。

「あのね。言っとくけどさ。僕はきみに守ってもらいたくなんかないし、むざむざやられるつもりはないからそんな必要ないし、結構毛だらけ猫灰だらけってやつだから。だいたいおかしいんだよ。僕らの目的って何？　昼飯時ランチタイムの人たちを助けることでしょ？　いい？　僕らの、だよ？　きみのとか、きみたちのとかじゃないんだよ？　僕らはそのためにここにいるんだよ？　そのために僕らはどうすればいいの？　この勝負ゲイムの肝きもは？　きみが最後にあの男をやっつけることだよね？　そうしないと、僕らは目的を達成できないわけだよね？　だったら、他ほかはぜんぶ僕らに任せて、きみは体力なり何なり温存して、最後のことだけ考えてればいいんだよ。僕らがいくらがんばっても、きみが最後でこけたら水の泡あわなんだしさ。それなのに、きみは何言ってるわけ？　僕を守る？　バカ？　バカだよね？　バカでしょ？　やめてくれないかな。そういうの。ちゃんとしてよ。考えてよ。きみは一応リーダーでしょ。それとも違ちがうの？　僕がやる？　いいよ？　きみよりはマシかもしれないよ？　僕はわかってるもん。たしかに僕は弱いからさ。余計に、身にしみて、わかってるんだよ。一人じゃ何もできない。背負えるものも少ない。だからみんなに少しずつ肩かた代がわりしてもらわないといけない。仲間を信じて、任せるときは任せないといけない。僕の考えだからさ。間違ってるなら間違ってるって言って欲しいんだけど、結局、きみは信じてないよね。僕らを信じてないでしょ。信じてよ。もっと信じろ。だって、急ごしらえだけど、みんな仲よしってわけじゃないし、そうなるのは無理かもしれないし、今だけかもしれないけど、僕らは仲間なんだよ？　だったらきみは、僕に、僕らに言うべきなんじゃないの？　守るじゃなくて、頼たのむ、がんばれって。それが仲間でしょ？」

　打てば響ひびくような反応を期待していたわけではないけれど、それにしてもアジアンが目を見開いて口を半開きにしたまま固まっていた時間は長かった。長すぎた。いいかげん痺しびれが切れてきて、ほっぺたの一つでもぶって気合いを入れてやったほうがいいのではないかと思いはじめたころ、ようやくアジアンは目をしばたたいて、かくん、かくん、とうなずいた。

「……う、うん。頼む。がんばれ」

「わかればいいんだよ。わかれば。その調子でお願い」

　僕もわかってる。言いすぎた。言い方もよくなかった。しかも、まるで頼たより甲が斐いのない僕ごときがよくも偉えらそうにあんなことを。恥ずかしい。猛もう烈れつに恥ずかしい。アジアンはまだぼんやりしている。なんだかちょっと気の毒だ。たぶんアジアンだって必死なんだ。きっとギリギリなんだ。本当のところはわからないけど。おしはかることしか、僕にはできないけど。

「……まあ、そういう状じよう況きようがあればさ。たまたま条件が整えば、きみと一緒に出るっていうのも、選せん択たく肢しとしては絶対ないとは言いきれないから、そのときはね。そのときってことで。てゆうか、ないと思うけどね！　そんなことは！　絶対！　九百パーセント！　と、とにかくもう行っちゃお、会場！　いつまでもここにいたってしょうがないし！」

　マリアローズはまだぼんやりしているアジアンを押しのけて、前に出た。アクゼルの一つ目は、白目の端はしのほうが少しだけ充じゆう血けつしているあたりが、かえって嘘うそくさくて作り物めいている。変に饒じよう舌ぜつだし、やたらと素す早ばやかったし、どうにも得体の知れない生き物だが、怯ひるんだりはしなかった。マリアローズはアクゼルの真ん前で胸を張り、顎あごをしゃくってみせた。

「開けて。その先が第一勝負フアーストゲイムの会場なんでしょ」

「かしこまりました」

　アクゼルは頭を下げて一礼し、落ちかけたシルクハットを手で押さえて戻もどしてから、扉とびらのノブに手をかけた。

　木製の扉は軋きしむような音を立てて開いた。

　扉の向こうはここよりずっと広々としていた。

　どうやら円形の、部屋というよりは広間のようだ。

　鑿のみか何かで削けずったような岩がん壁ぺきに沿って篝火かがりびが焚たかれていて、その内側に幅はば二、三メーテルくらい、深さは不明の壕ごうがやはり円を描えがいて掘ほられている。その

壕の底か側面にも篝火が焚かれているらしい。おかげでかなり明るいが、部屋全体が火に包まれているような異様な雰ふん囲い気きがあって、なまぬるい空気のせいか、酸素が薄うすいせいか、まだ扉を開けただけで広間の中には足を踏ふみ入れていないのに、妙みような息苦しさを覚えた。

「当方の参加者プレイヤでございます」

　アクゼルが左手をのばして壕の向こう、広間の中央あたりを示した。

　正直、意外だった。

　もっととんでもない見た目の、たとえばアクゼルのような、そしてアクゼルよりも凶きよう暴ぼうそうで、凶悪そうな、化物、怪かい物ぶつのたぐいが待ちかまえているのではないかと予想していたのに、そいつはまるで普ふ通つうの人間みたいだった。



　背中を丸めて地べたに座っているので、背せ丈たけはよくわからないが、さして大おお柄がらではないだろう。上半身裸はだかで、ちょっと異様で不気味なほど筋肉が盛りあがっているわりに、腹には脂し肪ぼうがついている。サスペンダーをつけて、ボロボロのワークパンツを穿はいているが、裸足はだしだ。奇き妙みような点

といえば、目の部分に穴を空けた茶色い紙かみ袋ぶくろを頭にかぶって、顔を隠かくしているところくらいだろうか。

　得物は地面に突つき刺さしている四口のモトロール刀か。

　長さは短いものから長いものまでばらばらだが、どれも分厚く、頑がん丈じようそうで、拵こしらえは質素というよりも地味だ。

「まァー、よっくわっかんねェーけども、まずはオレあたりがいっとくか？　つーかできンならゼーンブやりてェーっつーかウズーズしててもォー我が慢まんできねェーっつーか」

　飛燕フエイヤンがウヒャヒャと笑って前に出てこようとした。隣となりでユリカが渋しぶい顔をしているけれど、もう、と言うだけで止めるつもりはなさそうだ。マリアローズとしても、とくに飛燕フエイヤンを制止する理由は見つからなかった。少なくとも人間相手なら、飛燕フエイヤンもそうとうやるだろうし、とにかく元気だけはやたらといいので、勢いをつける意味でも一番手になってもらうのは悪くない手かもしれない。とはいえ、話しあいくらいはしたほうがいいだろう。

　そう思って口を開きかけたマリアローズの横を、アジアンがすり抜ぬけていった。

　おそらく、誰だれも予想していなかったのだろう。

　時間が止まったかのようだった。

　アジアンは静止した時を足音も立てずに引き裂さいてゆき、壕の前で振ふり返って、やけに青白い顔で、炎ほのおに照らされているのに青ざめているとわかる、凄せい艶えんなまでに美しい、表情とは無む縁えんな、それでいて何らかの感情を象しよう徴ちようしているかのような顔で、ごめん、と言った。

「ここはボクが出る。ボクじゃないとダメなんだ。勝手を言って、すまない」

　アジアンは壕を軽々と跳とび越こえた。

　紙袋を被かぶった男が、どこか生活に疲つかれた中年男を思わせる身のこなしでゆっくりと立ちあがり、一番長いモトロール刀を右手で、もっとも短いモトロール刀を左手で引き抜いた。

　ベティが息をのむ音がした。

　ヨグは右手の人差し指で眼鏡めがねのブリッジにふれたが、位置を直すわけでもなく、指を離はなしもしなかった。

　僕は何も知らない。

　あいつのことを、本当に何も知らない。

　知ろうとしなかった。

　知りたくもなかった。

　知るのが怖こわかった。

　あいつの涙なみだの意味なんて、あいつが今、何をしようとしているのか、誰と対たい峙じしているのかなんて、これっぽっちも知りたくない。

「よくわかったね」

　紙袋越しの声はくぐもっていた。

　ベティが口を押さえた。ヨグはまだ人差し指を眼鏡から離していない。

　あいつは、わからないはずがないだろう、と奇妙なほど親しげな、友人に語りかけるような声こわ音ねで答えて、そんなものはとったらどうだい、と向かいあっている男にうながした。

　男は、そうだね、と右手のモトロール刀をまた地面に突き刺して、紙袋に手をかけ、それを脱ぬぎ捨てた。

　男は街中でたまに見かける人のよさそうな中年男といった顔をしていた。

　だいぶ薄くなっている頭頂部の髪かみの毛を、男の右手がいとおしむようになでた。

　久しぶり、というほどでもないかな。

　男はそう言って相好を崩くずした。

　会いたかったよ、アジアン。

　ボクもだヨ。

　あいつは微かすかにうなずいて、やさしく抱だきしめるような声で男の名を呼んだ。

　ローガン、と。

『薔薇のマリア　Ⅸ．さよならの行き着く場所』了

あとがき

　僕はもう何度あとがきを書いたのでしょうか。これから何度書くことになるでしょうか。

　最初はいやでいやで仕方なかったあとがきですが、今ではすっかり慣れました。

　嘘うそです。僕は今、大嘘をつきました。僕はとんでもない嘘つきです。

　やっぱりダメです。あとがきは苦手です。これからもずっと苦手なのではないかと思います。だいたい、あとがきなんて不要なのではないでしょうか。僕が書きたいこと、書くべきことは、すべて原げん稿こうにそそぎこんでいるはずです。書き残したことがないとは言えませんが、それは次の原稿で書けばよいのです。というよりも、書くでしょう。僕は問いたいのです。声を大にして問いたい。あとがきとはいったい何を書くべきスペースなのでしょうか。きっと誰だれも教えてくれないのです。他ほかの方々が書かれているあとがきなどを見て、まあ、それらしいことを書いて、みたいな返事がおそらく関の山なのです。ようするに、自分で考えろということでしょう。いいでしょう。ここらできっちり考えてみるのも悪くないと思います。僕はあとがきにいったい何を書くべきなのか。このあとがきというものを通して、皆みなさんに何を伝えたいか。伝えるべきなのか。ひとつ、考えてみようではありませんか。

　僕はここで皆さんに愛を伝えればいいでしょうか。愛。大事です。愛がない人生は寂さびしいものです。もっとも寂しい人生が悪いとはかぎりません。寂しい人生が、何らかの豊かさを生むことだってあるのではないでしょうか。少しややこしい話になってきました。やめましょう。難しいことを考えるのは苦手です。あとがきと同じくらい苦手です。簡単にいきましょう。でも、簡単ではない。世界はちっとも簡単でも単純でもないのです。僕たちは今も世界中で起きている人間同士の殺しあいを止めることすらできないのです。もしかしたら、生きていることでそれを助長しているかもしれないのです。複雑な世の中です。平和になればいいと思います。

心から思います。それでは僕はここで平和を訴うつたえるべきでしょうか。悪くない考えです。世界中のみんなが平和を願えば世界はおのずと平和になるでしょう。それは愛のある世界です。愛にあふれた世界です。愛と平和。そう。ラブアンドピースです。ですが、その前に、僕は大事なことを忘れていました。これは『薔薇のマリア』という小説のあとがきなのです。何ということでしょう。大切なことを忘れているうちに、枚数が尽つきてしまいました。

　この「セブンス編」とでもいうべきシリーズは、今のところＸで終わる予定です。

　あとがきはこの一文でいいような気もしないではありませんが、ともかく、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆様へ、太陽に負けないくらい熱い愛と感謝をこめつつ、今日のところは筆を置きます。そのうちどこかでお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

IX．さよならの行いき着つく場ば所しよ

十じゆう文もん字じ　青あお



平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　IX．さよならの行き着く場所』平成20年2月1日初版発行

平成20年12月10日4版発行

